

秋田県文化財調査報告書第105集

東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII

——柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡——

1984・3

秋田県教育委員会

東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII

——柏木森遺跡・中の崎遺跡・明堂長根遺跡——

秋田県教育委員会

序

東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は、秋田県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて記録保存を目的に実施しているものであります。昭和54年度から昭和56年度までは鹿角市が対象でしたが、昭和57年度からは小坂町を対象として発掘調査を行っております。

鹿角市ではこれまで34ヶ所の遺跡、発掘総面積154,435 m²におよぶ調査を行いましたが、この報告書は昭和56年度に実施した柏木森、中ノ崎、明堂長根の3遺跡の調査結果を収録したものです。本報告書が鹿角地方の歴史解明と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後にこの調査にご協力いただきました顧問、専門指導員日本道路公団、鹿角市、同教育委員会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

秋田県教育委員会

教育長 齋藤 長

例 言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道路線内に位置する昭和56年度発掘調査を行った10遺跡のうち、柏木森遺跡（遺跡番号No15）、中ノ崎遺跡（遺跡番号No16）、明堂長根遺跡（遺跡番号No31）の発掘調査報告書である。

2. 遺跡については機会をみて発表してきたが、本報告書を正式のものとする。

3. 発掘調査遺跡の記載は遺跡番号順による。

4. 発掘調査に関して、下記の諸氏から御指導、御教示を賜わった。記して感謝の意を表する。
(敬称略、順不同)

青森県埋蔵文化財調査センター主任 遠藤 正大

青森県埋蔵文化財調査センター主任 成田 游彦

秋田県鹿角市教育委員会主事 秋元 信夫

5. 本報告書の執筆と編集は下記の調査員と補佐員が協議して行った。

Iの1 小玉準 Iの2 桜田隆 IIの2 小林克

柏木森遺跡 岩見誠夫 小林克 松岡忠仁 藤井安正 関直 高橋学 花田孝夫
阿部義行

中ノ崎遺跡 橋本高史 山崎文幸 米村博美 佐藤幸夫 安保徹 鈴木秋良
鈴木功 福本雅治

明堂長根遺跡 小玉準 岛山圭 高橋修 米田哲 阿部明人 佐藤雅子

6. 本報告書のIIの1「地形と地質」は秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆である。

7. 石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏の指導を仰いだ。

8. 報告書に使用した地図は建設省国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1及び日本道路公团作成の千分の1の地形図である。

9. 遺跡の土層及び遺物の色調の記載は「新版 標準土色帖」(日本色彩研究所)を使用した。

10. 遺物の実測には、画像工学研究所のスケッチグラフ卓上型を活用した。

11. 遺跡の写真撮影は主に次の者があたった。

柏木森遺跡 関直 松岡忠仁 高橋学 花田孝夫 阿部義行

中ノ崎遺跡 橋本高史 鈴木功 安保徹 鈴木秋良 橋本雅治

明堂長根遺跡 小玉準

12. 遺物の写真撮影は主に次の者があたった。

高橋学 橋本高史 鈴木功 安保徹 渋谷志 熊谷安 高橋れい子

13. 遺物の実測、採拓、トレス、整埋等は上記調査員、補佐員の他に次の者があつた。

柏木森遺跡 津島満子 安保幸子 池田邦子 浅石悦子 田中春美 熊谷恵子

松本良子 加藤正子 小松睦子

中ノ崎遺跡 柳沢照子 奈良栄子 奈良美栄子 大野甲子 高橋チエ子 松本幸子

岡本龍子 山田喜美子 土堀ひさ子 加藤正子

明堂長根遺跡 金沢美津子 中村陽子 熊谷裕子 越後谷栄子 岡本龍子

14. 本報告書に記載した遺物の実測図、拓影の縮尺は原則として1%, 2%, および35%とした。

その他のものは任意である。

目 次

序	
例 言	
I はじめに.....	1
1 発掘調査に至るまで.....	1
2 調査の組織と構成.....	2
II 遺跡の立地と環境.....	3
1 地形と地質.....	3
2 環境と周辺の遺跡.....	9

柏木森遺跡

1 遺跡の概観.....	19
2 調査の方法.....	19
3 調査の経過.....	21
4 遺跡の基本層位.....	21
5 遺構と遺物.....	27
6 まとめ.....	65

中の崎遺跡

1 遺跡の概観.....	103
2 調査の方法.....	105
3 調査経過.....	107
4 遺跡の層位.....	113
5 遺構と遺物.....	114
6 まとめ.....	248
付1 土壌の燃焼分測定について.....	249
付2 ^{14}C 年代測定結果	250

明堂長根遺跡

1 遺跡の概観	337
2 調査の方法	337
3 調査の経過	337
4 遺跡の層序	339
5 遺構と遺物	339
6 まとめ	361

挿 図 目 次

第1図 段丘地形図.....	4
第2図 露頭柱状図.....	6
第3図 東北縦貫自動車道関係及び周辺道路.....	13

柏木森遺跡

第1図 柏木森遺跡グリッド配図.....	20
第2図 柏木森遺跡基本層序.....	22
第3図 柏木森遺跡遺構配置図.....	25
第4図 溝跡実測図.....	28
第5図 握立柱建物跡実測図.....	29
第6図 上墻実測図(1).....	30
第7図 土壌実測図(2).....	31
第8図 土壌実測図(3).....	32
第9図 土壌実測図(4).....	33
第10図 土壌実測図(5).....	34
第11図 土壌実測図(6).....	35
第12図 土壌実測図(7).....	36
第13図 土壌実測図(8).....	37
第14図 土壌実測図(9).....	38
第15図 土壌実測図(10).....	39
第16図 土壌実測図(11).....	40
第17図 土壌実測図(12).....	41
第18図 出土遺物・第I群上器(1).....	43
第19図 出土遺物・第I群上器(2).....	45
第20図 出土遺物・第I群土器(3).....	47
第21図 出土遺物・第I群土器(4).....	48
第22図 出土遺物・第I群土器(5).....	49
第23図 出土遺物・第I群土器(6).....	50
第24図 出土遺物・第II群、第III群、第IV群土器.....	53
第25図 出土遺物・第IV群土器.....	54
第26図 出土遺物・第II群、第IV群土器.....	55
第27図 出土遺物・第IV群土器.....	56
第28図 出土遺物・第IV群土器.....	57
第29図 出土遺物・第IV群土器.....	58
第30図 出土遺物・第V群土器.....	60
第31図 出土遺物・石器(1).....	63
第32図 出土遺物・石器(2).....	64
第33図 鹿島地域内早期末~前期初頭出土土器.....	68

中の崎遺跡

第1図 遺跡位置図.....	104
第2図 グリッド配置図.....	106
第3図 遺構配置図.....	109
第4図 Sライン断面図.....	111
第5図 S I 001堅穴住居跡.....	115
第6図 S I 001堅穴住居跡カマド.....	117
第7図 S I 001堅穴住居跡、SD 006構.....	119
第8図 S I 001堅穴住居跡出土遺物(1).....	121
第9図 S I 001堅穴住居跡出土遺物(2).....	122
第10図 S I 002堅穴住居跡.....	123
第11図 S I 002堅穴住居跡カマド.....	124
第12図 S I 002堅穴住居跡出土遺物.....	125
第13図 S I 003堅穴住居跡.....	126
第14図 S I 003堅穴住居跡カマド.....	128
第15図 S I 003堅穴住居跡、SD 004構.....	129
第16図 S I 003堅穴住居跡出土遺物(1).....	131
第17図 S I 003堅穴住居跡出土遺物(2).....	132
第18図 S I 008堅穴住居跡.....	133
第19図 S I 008堅穴住居跡カマド.....	134
第20図 S I 008堅穴住居跡出土遺物.....	135

第21回	S I 1009堅穴住居跡	137	第63回	S I 103堅穴住居跡	176
第22回	S I 1009堅穴住居跡カマド	138	第64回	S I 103堅穴住居跡出土遺物	177
第23回	S I 1009堅穴住居跡、S D 005溝	139	第65回	S I 104堅穴住居跡	179
第24回	S I 1009堅穴住居跡出土遺物	141	第66回	S I 104堅穴住居跡カマド	180
第25回	S D 005溝出土遺物	142	第67回	S I 104堅穴住居跡出土遺物(1)	181
第26回	S I 1012堅穴住居跡	143	第68回	S I 104堅穴住居跡出土遺物(2)	182
第27回	S I 1012堅穴住居跡カマド	146	第69回	S I 104堅穴住居跡出土遺物(3)	183
第28回	S I 1012堅穴住居跡出土遺物(1)	147	第70回	S I 104堅穴住居跡出土遺物(4)	184
第29回	S I 1012堅穴住居跡出土遺物(2)	148	第71回	S I 104堅穴住居跡出土遺物(5)	185
第30回	S I 1012堅穴住居跡出土遺物(3)	149	第72回	S I 106堅穴住居跡	187
第31回	S I 1014堅穴住居跡	150	第73回	S I 106堅穴住居跡出土遺物	188
第32回	S I 1018堅穴住居跡	150	第74回	S I 107堅穴住居跡	189
第33回	S I 1018堅穴住居跡出土遺物	151	第75回	S I 107堅穴住居跡丸土遺物(1)	191
第34回	S I 1034堅穴住居跡	152	第76回	S I 107堅穴住居跡出土遺物(2)	192
第35回	S K010土壤	153	第77回	S I 107堅穴住居跡出土遺物(3)	193
第36回	S K016土壤	154	第78回	S I 107堅穴住居跡出土遺物(4)	194
第37回	S K017土壤	154	第79回	S I 108堅穴住居跡	195
第38回	S K021土壤	155	第80回	S I 108堅穴住居跡出土遺物(1)	196
第39回	S K024土壤	156	第81回	S I 108堅穴住居跡出土遺物(2)	197
第40回	S K025土壤	156	第82回	S I 108堅穴住居跡出土遺物(3)	198
第41回	S K026土壤	157	第83回	S I 112堅穴住居跡	199
第42回	S K027土壤	157	第84回	S I 112堅穴住居跡カマド	201
第43回	S K027+土壌出土遺物	158	第85回	S I 112堅穴住居跡出土遺物(1)	203
第44回	S K028土壤	159	第86回	S I 112堅穴住居跡出土遺物(2)	204
第45回	S K029、S K030土壤	160	第87回	S I 112堅穴住居跡出土遺物(3)	205
第46回	S K031土壤	161	第88回	S I 113堅穴住居跡	206
第47回	S K032土壤	162	第89回	S I 113堅穴住居跡カマド	207
第48回	S K032+土壌出土遺物	162	第90回	S I 113堅穴住居跡出土遺物(1)	208
第49回	S K033土壤	163	第91回	S I 113堅穴住居跡出土遺物(2)	209
第50回	S K033土壤出土遺物	163	第92回	S I 117、117'堅穴住居跡	211
第51回	S X011合口窓枠	165	第93回	S I 117、117'堅穴住居跡出土遺物	212
第52回	合口窓枠実測図(1)	166	第94回	S K105土壤	213
第53回	合口窓枠実測図(2)	167	第95回	S K110土壤	213
第54回	S X F035施土遺構	168	第96回	S K114土壤	214
第55回	S X F036施土遺構	168	第97回	S K115土壤	214
第56回	S I 101堅穴住居跡	169	第98回	S K116土壤	214
第57回	S I 101堅穴住居跡出土遺物(1)	170	第99回	S K118土壤	215
第58回	S I 101堅穴住居跡出土遺物(2)	171	第100回	S K118土壤出土遺物	215
第59回	S I 102堅穴住居跡	172	第101回	S K119土壤出土遺物	216
第60回	S I 102堅穴住居跡出土遺物(1)	173	第102回	S K128土壤	216
第61回	S I 102堅穴住居跡出土遺物(2)	174	第103回	S K131土壤	216
第62回	S I 102堅穴住居跡出土遺物(3)	175	第104回	S K132土壤	217

第105図	S K133土壤	217
第106図	S K134土壤	218
第107図	S K135土壤	218
第108図	S K131, 135±層出土遺物	219
第109図	S K140土壤	219
第110図	S K141土壤	220
第111図	S K143土壤	220
第112図	S K146土壤	221
第113図	S K147土壤	221
第114図	S B111掘立柱建物跡	223
第115図	S B120掘立柱建物跡	224
第116図	S B136掘立柱建物跡	225
第117図	S B149掘立柱建物跡	226
第118図	S D148講跡	227
第119図	S I 301堅穴住居跡	228
第120図	S I 301堅穴住居跡出土遺物(1)	229
第121図	S I 301堅穴住居跡出土遺物(2)	230
第122図	S I 301堅穴住居跡出土遺物(2)	231
第123図	遺構外出土土器実測図(1)	233
第124図	遺構外出土土器実測図(2)	234
第125図	遺構外出土土器実測図(3)	235
第126図	遺構外出土土器実測図(4)	236
第127図	遺構外出土土器実測図(5)	237
第128図	遺構外出土土器実測図(6)	238
第129図	遺構外出土土器実測図(7)	239
第130図	遺構外出土土器実測図(8)	240
第131図	遺構外出土土器実測図(1)	241
第132図	遺構外出土土器実測図(2)	242
第133図	遺構外出土土器実測図(3)	243
第134図	鉄器実測図(1)	244
第135図	鉄器実測図(2)	245
第136図	鉄器実測図(3)	246
第137図	鉄器実測図(4)	247

明堂長根遺跡

第1図	グリッド配置図	338
第2図	土着柱状図	339
第3図	遺構配置図	340
第4図	S K001・002土壤	341
第5図	S K003・004・037土壤	342
第6図	S K005～007土壤	343
第7図	S K008～011土壤	344
第8図	S K012・013・015土壤	345
第9図	S K016・018土壤	346
第10図	S K019～021土壤	347
第11図	S K022～024土壤	348
第12図	S K025～027土壤	349
第13図	S K029～031土壤	350
第14図	S K032～034土壤	351
第15図	S K035～037土壤	352
第16図	S K038～040土壤	353
第17図	S D001～003構実測図	355
第18図	S D004構実測図	356
第19図	S D005～008構実測図	357
第20図	S B001掘立柱建物跡実測図	358
第21図	S X001・002その他の遺構実測図	359
第22図	S X003～005その他の遺構実測図	360
第23図	遺構内出土遺物(1)	362
第24図	遺構内出土遺物(2)	363
第25図	遺構内出土遺物(3)	364
第26図	遺構内出土遺物(4)	365
第27図	遺構内・遺構外出土遺物	366

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表 10

柏木森遺跡

第1表 石器石質・出土地点一覧表 62

第2表 銅文時代早期～前期初頭土器編年 67

(青森県内)

中の崎遺跡

第1表 S I 001堅穴住居跡観察表 114

第13表 S I 106堅穴住居跡観察表 186

第2表 S I 002堅穴住居跡観察表 118

第14表 S I 107堅穴住居跡観察表 186

第3表 S I 003堅穴住居跡観察表 127

第15表 S I 108堅穴住居跡観察表 194

第4表 S I 008堅穴住居跡観察表 135

第16表 S I 112堅穴住居跡観察表 198

第5表 S I 009堅穴住居跡観察表 136

第17表 S I 113堅穴住居跡観察表 205

第6表 S I 012堅穴住居跡観察表 145

第18表 S I 117堅穴住居跡観察表 210

第7表 S I 018堅穴住居跡観察表 151

第19表 S I 117堅穴住居跡観察表 210

第8表 S I 034堅穴住居跡観察表 153

第20表 S B111掘立柱建物跡観察表 223

第9表 S I 101堅穴住居跡観察表 168

第21表 S B120掘立柱建物跡観察表 224

第10表 S I 102堅穴住居跡観察表 171

第22表 S B136掘立柱建物跡観察表 225

第11表 S I 103堅穴住居跡観察表 178

第23表 S B149掘立柱建物跡観察表 226

第12表 S I 104堅穴住居跡観察表 179

第24表 S I 301堅穴住居跡観察表 228

明堂長根遺跡

第1表 遺物観察表(1) 367

第3表 遺物観察表(3) 369

第2表 遺物観察表(2) 368

図版目次

柏木森遺跡

図版 1 柏木森遺跡航空写真	図版13 第 I 群土器(1)
図版 2 柏木森遺跡調査所	図版14 第 I 群土器(2)
柏木森遺跡風景	図版15 第 I 群土器(3)
図版 3 柏木森遺跡北端調査区	図版16 第 I 群土器(4)
柏木森遺跡南端調査区	図版17 第 I 群土器(5)
図版 4 遺跡基本層序	図版18 第 I 群土器(6)
縄文時代末期末楽器底部出土状態	図版19 第 II 群、第三群、第四群、第五群七器
図版 5 VI S K(T)840 T ピット	図版20 第 IV 群土器
II S K064北端土器出土状態	図版21 第 I 群土器陽面
図版 6 II S K001北端土器出土状態	図版22 第 II 群、第 IV 群土器
III S K011上端土器出土状態	図版23 第 IV 群土器(1)
図版 7 調査区中央部土器群・III S K001土壤	図版24 第 IV 群土器(2)
図版 8 III S K002土壤・III S K003土壤	図版25 第 IV 群土器(3)
図版 9 III S K005土壤・III S K006土壤	図版26 第 V 群土器
図版10 III S K008土壤・III S K009土壤	図版27 石器(1)
図版11 III S K012土壤・III S K024土壤	図版28 石器(2)
図版12 III S K031土壤・III S K043土壤	

中の崎遺跡

図版 1 中の崎遺跡航空写真	図版 6 S I 001堅穴住居跡 (左下) RM 1
図版 2 遺跡遠景 (上) 発掘前 (西▶東)	(右下) RM 2
..... (下) 発掘後 (東▶西)	
図版 3 (上) I 区近景 (西▶東)	図版 7 S I 001堅穴住居跡 (左上) RM 4
(下) II 区近景 (東▶西)	(右上) RW 2
図版 4 (上) I 区機械耕土状況 (北東▶南西)	(左下) RW 1
(下) I 区土層状態 (西▶東)	(右下) RX 1
図版 5 S I 001堅穴住居跡 (上) 完掘状態	
..... (南▶北)	図版 8 S I 002堅穴住居跡 (上) 発掘中
(下) S D 006付属溝	(南▶北)
..... (西▶東)	(下) 完掘状態
図版 6 S I 001堅穴住居跡 (左上) カマド内土器	(北▶南)
出土状態	
(右上) カマド完掘状態	図版 9 (上) S I 002堅穴住居跡カマド (北▶南)
(北▶南)	(下) S I 003堅穴住居跡 (南▶北)
図版 10 S I 003堅穴住居跡 (上) 完掘状態	
..... (南▶北)	図版 11 (下) S D 004付属溝

図版10 S I 003堅穴住居跡 (下) S D 004付溝溝 (西▶東)	図版23 (下) S D 015溝跡 (北▶南)
図版11 S I 003堅穴住居跡カマド (左上) 光澤中 (北▶南) (右上) 完損状態 (南▶北) (左下) 土器出土状態 (右下) 土器出土状態	図版24 I 区遺構外遺物出土状態 (左上) 6-S (右上) 13-Y (左下) 14-W (右下) 15-W
図版12 S I 008堅穴住居跡 (上) 発掘中 (東▶西) (下) 完損状態 (西▶東)	図版25 S I 101堅穴住居跡 (上) 完損状態 (東▶西) (左下) R P 1 (右下) R P 2
図版13 (上) S I 008堅穴住居跡カマド (左) (西▶東) (右) 完損状態 (南▶北) (下) S I 009堅穴住居跡 (南▶北)	図版26 S I 102堅穴住居跡 (上) 完損状態 (東▶西) (左下) R P 1 (右下) R P 2
図版14 S I 009堅穴住居跡, S D 005付溝溝 (上) 完損状態 (南▶北) (下) 構内遺物出土状態	図版27 S I 102堅穴住居跡 (左上) R P 3 (右上) R P 4 (左下) R M 1, 2, 3 (右下) 土器出土状態
図版15 (上) S I 009堅穴住居跡カマド (北▶南) (中) S D 005付溝溝断面 (北▶南) (下) S D 005, 006付溝溝断面 (南▶北)	図版28 S I 103堅穴住居跡 (上) 完損状態 (東▶西) (左下) R P 1 (右下) R P 2
図版16 S I 1012堅穴住居跡 (上) 炭化土出土状態 (北▶南) (下) 床面検出状態 (北▶南)	図版29 (上) S I 103堅穴住居跡 (左) R P 3 (右) R P 5 (下) S I 104堅穴住居跡 (東▶西)
図版17 S I 1012堅穴住居跡 (上) 完損状態 (北▶南) (左下) カマド発掘中 (北▶南) (右下) カマド光澤後 (北▶南)	図版30 S I 104堅穴住居跡 (上) 遺物出土状態 (左下) R P 1 (右下) R P 2
図版18 (上) S K 016, 017土壤 (北▶南) (下) S K 021土壤 (北▶南)	図版31 S I 104堅穴住居跡 (左上) R P 4 (右上) R P 5 (左下) R P 6 (右下) R P 7
図版19 (上) S K 024土壤 (北▶南) (下) S K 025, 026土壤 (北▶南)	図版32 S I 104堅穴住居跡 (左上) R P 8 (右上) R P 15 (左下) R P 16, 17, 18, 19 (右下) R P 20
図版20 S K 027土壤 (上) 完損状態 (北▶南) (中) 断面 (南▶北) (下) 断面 (西▶東)	図版33 S I 106堅穴住居跡 (上) 完損後 (北▶南) (左下) R P 1 (右下) R P 2
図版21 (上) S K 029, 030土壤 (北▶南) (下) S K 032土壤 (北▶南)	図版34 S I 107堅穴住居跡 (上) 炭化土出土状態 (東▶西) (下) 完損後 (東▶西)
図版22 S X 011合口甕棺 (上) 確認面 (下) 半截状態	図版35 S I 107堅穴住居跡 (上) R P 1
図版23 (上) S X F 035焼土遺構 (南▶北)	

図版35	S I 107堅穴住居跡	(中)	R P 2
		(下)	RW 1
図版36	S I 108堅穴住居跡	(上)	光撮状態(西▶東)
		(左下)	R P 1
		(右下)	R P 2
図版37	S I 112堅穴住居跡	(上)	炭化物出土状態 (西▶東)
		(下)	光撮状態(西▶東)
図版38	S I 112堅穴住居跡	(左上)	第1カマド (北▶南)
		(右上)	第2カマド(北▶南)
		(下)	R P 3
図版39	S I 113堅穴住居跡	(上)	炭化物出土状態 (南▶北)
		(下)	光撮状態(北▶南)
図版40	S I 113堅穴住居跡	(左上)	カマド (北▶南)
		(右上)	カマド光撮状態(北▶南)
		(左下)	R P 1
		(右下)	R P 62, 63
図版41	S I 117, 117'堅穴住居跡	(上)	確認状態 (南▶北)
		(下)	光撮状態(東▶西)
図版42	(上)	S K110土壤	(北京▶南)
		(下)	S K114, 115土壤(西▶東)
図版43	(上)	S K116土壤	(東▶西)
		(下)	S K119土壤(西▶東)
図版44	(上)	S K131土壤	(西▶東)
		(下)	S K132土壤(西▶東)
図版45	(上)	S K133土壤	(北▶南)
		(下)	S K134土壤(北▶南)
図版46	(上)	S K140土壤	(北▶南)
		(下)	S K141土壤(北西▶南)
図版47	(上)	S K147土壤	(南▶北)
		(下)	II区ピット跡(北▶南)
図版48	(上)	S B111掘立柱建物跡	(南▶北)
		(下)	S B136掘立柱建物跡(北▶南)
図版49	II区遺構外遺物出土状態	(左上)	25-F
		(右上)	27-F
		(左下)	33-F
		(右下)	石斧
図版50	S I 301堅穴住居跡	(上)	光撮状態

図版50	S I 301堅穴住居跡	(上)	(北▶南)
		(左下)	カマド(北▶南)
		(右下)	カマド内土器出土状態
図版51	S 1001堅穴住居跡出土遺物(1)		
図版52	S 1001堅穴住居跡出土遺物(2)		
図版53	S 1002堅穴住居跡出土遺物		
図版54	S 1003堅穴住居跡出土遺物(1)		
図版55	S 1003堅穴住居跡出土遺物(2)		
図版56	(上) S 1008堅穴住居跡出土遺物 (下) S 1009堅穴住居跡出土遺物		
図版57	(上) S D005講跡出土遺物 (中) S 1012堅穴住居跡出土遺物(1) (下) S 1012堅穴住居跡出土遺物(2)		
図版58	(上) S 1012堅穴住居跡出土遺物(3) (中) S 1018堅穴住居跡出土遺物 (下) S K027土壤出土遺物		
図版59	(上) S K032土壤出土遺物 (右中) S K033土壤出土遺物 (下) 合口製棺		
図版60	(上) S I 101堅穴住居跡出土遺物(1) (中) S I 101堅穴住居跡出土遺物(2) (下) S I 102堅穴住居跡出土遺物(1)		
図版61	(上) S I 102堅穴住居跡出土遺物(2) (下) S I 102堅穴住居跡出土遺物(3)		
図版62	(上) S I 103堅穴住居跡出土遺物 (下) S I 104堅穴住居跡出土遺物(1)		
図版63	S I 104堅穴住居跡出土遺物(2)		
図版64	S I 104堅穴住居跡出土遺物(3)		
図版65	S I 104堅穴住居跡出土遺物(4)		
図版66	(上) S I 104堅穴住居跡出土遺物(5) (下) S I 106堅穴住居跡出土遺物		
図版67	(上) S I 107堅穴住居跡出土遺物(1) (下) S I 107堅穴住居跡出土遺物(2)		
図版68	(上) S I 107堅穴住居跡出土遺物(3) (下) S I 107堅穴住居跡出土遺物(4)		
図版69	(上) S I 108堅穴住居跡出土遺物(1) (中) S I 108堅穴住居跡出土遺物(2) (下) S I 108堅穴住居跡出土遺物(3)		
図版70	(上) S I 112堅穴住居跡出土遺物(1) (下) S I 112堅穴住居跡出土遺物(2)		
図版71	(上) S I 112堅穴住居跡出土遺物(3) (下) S I 113堅穴住居跡出土遺物(1)		

- 圖版72 (上) S I 113鑿穴住居跡出土遺物(2)
 (下) S I 117, 117' 鑿穴住居跡出土遺物
- 圖版73 (上) S K 118土壤出土遺物
 (下) S K 131, 135土壤出土遺物
- 圖版74 S I 301鑿穴住居跡出土遺物(1)
- 圖版75 (上) S I 301鑿穴住居跡出土遺物(2)
 (下) 遺構外出土土器(1)
- 圖版76 遺構外出土土器(2)
- 圖版77 遺構外出土土器(3)
- 圖版78 (上) 遺構外出土土器(4)
 (下) 遺構外出土土器(5)
- 圖版79 (上) 遺構外出土土器(6)

- 圖版79 (下) 遺構外出土土器(7)
- 圖版80 遺構外出土土器(8)
- 圖版81 (上) 遺構外出土土器(1)
 (下) 遺構外出土土器(2)
- 圖版82 (上) 遺構外出土土器(3)
 (下) 出土鐵器(1)
- 圖版83 (上) 出土鐵器(2)
 (中) 出土鐵器(3)
 (下) 出土鐵器(4)
- 圖版84 發掘調查風景 (上) I 区
 (下) II 区

明堂長根遺跡

圖版 1 遺 路 1	遺跡邊景	圖版14 遺 路 1	S K023土壤
	2 遺跡全景		2 S K023土壤
圖版 2 遺 路 1	S K001, 002土壤	圖版15 遺 路 1	S K023, 024土壤
	2 S K002土壤		2 S K024土壤
圖版 3 遺 路 1	S K003土壤	圖版16 遺 路 1	S K026土壤
	2 S K003土壤		2 S K026土壤
圖版 4 遺 路 1	S K004土壤	圖版17 遺 路 1	S K026土壤
	2 S K004土壤		2 S K026土壤
圖版 5 遺 路 1	S K005土壤	圖版18 遺 路 1	S K027土壤
	2 S K006土壤		2 S K027土壤
圖版 6 遺 路 1	S K007土壤	圖版19 遺 路 1	S K029土壤
	2 S K008土壤		2 S K029土壤
圖版 7 遺 路 1	S K009, 010土壤	圖版20 遺 路 1	S K030土壤
	2 S K011土壤		2 S K031土壤
圖版 8 遺 路 1	S K012土壤	圖版21 遺 路 1	S K032土壤
	2 S K013土壤		2 S K030~032土壤
圖版 9 遺 路 1	S K013土壤	圖版22 遺 路 1	S K030~032土壤
	2 S K015土壤		2 S K033土壤
圖版10 遺 路 1	S K015土壤	圖版23 遺 路 1	S K034土壤
	2 S K016土壤		2 S K034土壤
圖版11 遺 路 1	S K018土壤	圖版24 遺 路 1	S K035土壤
	2 S K018土壤		2 S K036土壤
圖版12 遺 路 1	S K019土壤	圖版25 遺 路 1	S K037土壤
	2 S K020土壤		2 S K038土壤
圖版13 遺 路 1	S K021土壤	圖版26 遺 路 1	S K039土壤
	2 S K022土壤		2 S K040土壤

图版27	道 路	1 S D 001溝 2 S D 001溝 3 S D 002溝 4 S D 001, 002溝	图版31	道 路	1 S X 003 2 S X 004
图版28	道 路	1 S D 001溝 2 S D 002, 003溝 3 S D 003溝 4 S D 004溝	图版32	道 路	1 S X 005 2 S X 005 3 S X 005 4 S B 001獨立柱建物跡
图版29	道 路	1 S D 004溝 2 S D 004溝 3 S D 005, 006溝 4 S D 007, 008溝	图版33	道 路	1 S K 015, 018~020土壤, S D 001獨立柱建物跡 2 作物風景
图版30	道 路	1 S X 001 2 S X 002	图版34	道 物	1 S K 001, 005, 012, 015, 018土壤
			图版35	道 物	1 S K 018, 021, 023土壤
			图版36	道 物	1 S K 023, 029土壤, S D 002溝, 遺構外

I はじめに

1. 発掘調査に至るまで

秋田県の北東部、鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画の魁は、昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間、同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画である。次いで昭和43年4月の鹿角市・青森市間約81kmの第2次施行命令と同46年6月の岩手県二戸郡安代町、鹿角市間約37kmの第5次施行命令によって、その通過予定区域が知られ、これを受け同47年11月27日に、鹿角市十和田錦木・小坂町間の路線発表があつて、ようやくその具体的な姿を県民に現わしたのである。

このため、秋田県教育委員会では、文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき、昭和44年8月、鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで、幅4km、延長25kmにわたって遺跡の分布調査を行い、67遺跡を確認し、その成果を公表した。昭和48年8月には、鹿角市八幡平、尾去沢、花輪地区で、幅4km、延長20kmの遺跡分布調査と試掘を実施して、46ヵ所の遺跡を確認した。^(註1)

昭和51年2月12日になると、昭和48年8月実施の鹿角山内遺跡分布調査結果をふまえて、日本道路公団より鹿角市八幡平から同市十和田錦木に至る延長約21.1kmの路線の発表があり、測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により、昭和52年10月にこの路線上の遺跡分布調査を行い31遺跡の存在を確認した。昭和55年に新たに2遺跡が発見追加され、現在総計33遺跡となっている。^(註2)

その後、遺跡の処遇や調査方針について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会の間に協議が持たれ、最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年2月に遺跡の発掘調査依頼があり、秋田県教育委員会では昭和54年度八幡平地区7遺跡の発掘調査を行った。昭和55年度は追加委託契約をも含めて八幡平、花輪地区19遺跡の調査を行い、昭和56年度に8遺跡の調査を行い、3か年に及ぶ鹿角市内の路線内遺跡調査を全て完了している。

註1 秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書 第20集 1970年

註2 秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書 第24集 1972年

註3 秋田県教育委員会 「東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書(八幡平-十和田錦木)」秋田県文化財調査報告書 第56集 1978年

2. 調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会	
調査顧問	坪井 清足	奈良国立文化財研究所所長
	芦沢 長介	東北大文学部教授
専門指導員	小林 達雄	国学院大学文学部助教授
	林 謙作	北海道大学文学部助教授
	須藤 隆	東北大文学部助教授
	藤沼 邦彦	東北歴史資料館考古研究科長
	進藤 秋輝	宮城県多賀城跡調査研究所研究第一科長
調査担当者	岩見 誠夫	秋田県埋蔵文化財センター副所長 (猿ヶ平Ⅱ、柏木森遺跡担当)
	桜田 隆	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (妻の神田、一本杉遺跡担当)
	小玉 実準	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (乳牛平、明堂長根遺跡担当)
	橋本 高史	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (妻の神Ⅰ、中の崎遺跡担当)
	小林 克	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 (窪田、案内Ⅲ、柏木森遺跡担当)
調査補佐員	藤井 安正、松岡 忠仁、児玉 悅郎、高橋 学、奈良 義博 (以上岩見班)	
	神田 公男、児玉 昭彦、安保 廣、池田 洋一 (以上桜田班)	
	島山 圭、阿部 明人、米田 哲、高橋 修 (以上小玉班)	
	安保 徹、橋本 雅治、鈴木 功、鈴木 秋良 (以上橋本班)	
	間 直、阿部 義行、花田 孝夫 (以上小林班)	
事務補助員	佐藤 順子、金沢万理子	
調査協力機関	日本道路公団鹿角工事事務所 秋田県東北縦貫自動車道対策事務所 鹿角市建設部建設課高速道路対策室 鹿角市教育委員会	

II 遺跡の立地と環境

1. 地形と地質

(1) 地形と地質の概要

本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区分される。これらについて秋田県(1973)、内藤(1966, 1970)および日本道路公団の東北自動車道土性継続図表(日本道路公団仙台建設局:昭和53年)等を参考にしてまとめると次のようになる。

山地: 東側は花輪越以北で800~700mと北にゆくほど高度を下げるが、以南では1000m以上 の標高で満壯年期のけわしい地形を示し、特に皮抜岳(1122.4m)、五の宮嶽(1115.0m)など起伏量の大きい山塊が連なっている。

地質は主として新第三紀中新世の火山碎屑岩よりなるが、それらを貫ぬいて石英安山岩や安山岩も分布している。また、福士川上流には南部の谷内、湯瀬と同様に粘板岩を主とする古生層の露出も知られている。これらの東側山地の山列は南部では南北に連なっているが、花輪越以北では北東方向にのびている。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか、貫入岩類や断層系の方向ともほぼ一致している。

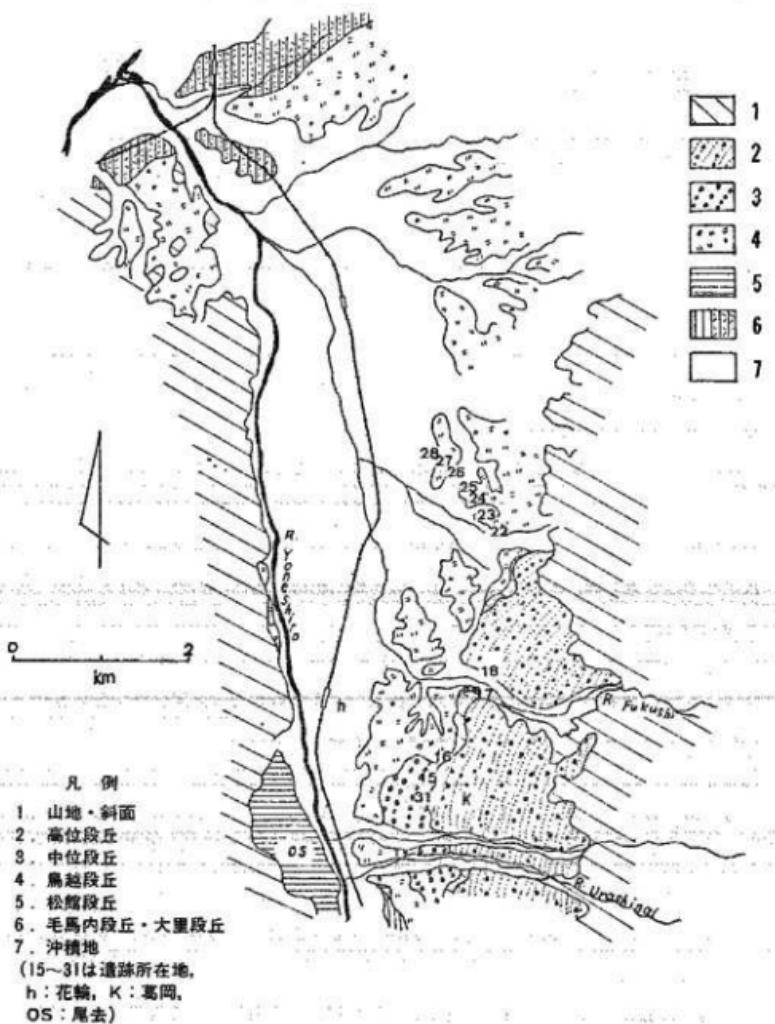
一方、西側山地は南部で400~600m、北部で250~300mで山容も東側山地ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地と同様に新第三紀中新世の火山碎屑岩を主とするが、大葛層、大滝層などでは砂岩、泥岩などの碎屑岩が広く発達している。

段丘地形: 花輪盆地南部の段丘面は、花輪高位段丘、花輪中位段丘(内藤, 1970)、鳥越段丘(秋田県, 1973)、松館段丘、大里段丘の5段に区別できる。このうち、鳥越段丘は秋田県(1973)では鳥越段丘、関上段丘の二つに区別されたものであるが、後者は火碎流堆積物からなる前者の二次堆積物の上面であり、両者を区別する段丘崖の発達も局所的であって連續性に乏しいことから一括して使用する。また、松館、大里の各段丘は内藤(1970)*の花輪低位段丘群とされたものである。

一方、花輪盆地の中北部の段丘面は、高位段丘、鳥越段丘、毛馬内段丘、中間段丘などが見られる。次にそれぞれについて簡単に記載する。

高位段丘は、南部では東側山地の末端部からならかに斜面をもって扇状地帯に広く分布する。かなり開析されているものの明らかに平坦面を残している。標高は1/2.5万地形図から、

*以下、高位段丘、中位段丘と略称する。



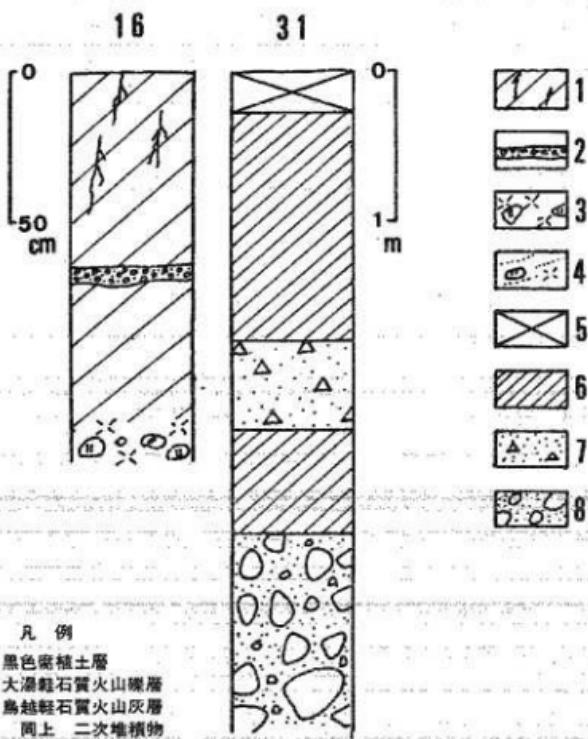
第1図 段丘地形図

浦志内川左岸の扇頂部で350m、葛岡北東の末端部で240mであり、平均こう配は約7.2% (4.1°) となる。また、歌内川流域でも320mから250mまでの高度差をもつ。一方、福士川左岸では350m～250mであるが、右岸では花輪スキーフィールド北東の300mから女森西方の200mまでと明らかに低い。また、平均こう配も福士川以北では約4.4% (2.5°) と小さくなる。盆地の中～北部では南部ほど分布は広くなく、散在的で面の高度も230～240mと低い。構成層は数cmから50cm前後までの亜角礫が雜然と混入した下淘汰礫層であり、地表面に近い部分は数mにわたって風化が進み、礫はくさってマトリックスと大して変わらないかたさになることが多い。段丘面の分布範囲のはかに、葛岡西方では火碎流堆積物の下位に見られたりする。全体的に扇状地堆積物としての層相をよく残している。また、上部は数mが赤褐色の粘土質土になっており、中に未風化の亜角礫もしばしばみられる。最上部には粘土質になった火山灰層がみられることがある。

中位段丘は上田 (1965) および内藤 (1970) の產土神断層以南にやや広く分布し、浦志内川下流で標高230～180m、歌内川下流で270～200mである。產土神断層以北ではまだ確認していない。末端部は鳥越軽石質火山灰層におおわれるが、明瞭に扇状地状の地形面を残しており、平均こう配は柏木森の西方で約6.0% (3.5°) である。構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に数cmから30cm以上の角礫ないし亜角礫が雜然と混入する礫層で、全体的に層理は不明瞭で塊状であるが、末端部では厚さ数cmの連續性のわるいシルトないし砂の薄層を含むこともある。葛岡南方ではN値が70以上の高位段丘礫層の上に、最大6mの厚さで泥炭質粘土層が発達する。この付近は浦志内川と歌内川の扇状地にはさまれた湖沼的な堆積環境にあったものであろう。なお、この粘土層の上位に5～6mの厚さで重なる中位段丘構成層はすでに記載したように不良淘汰の亜角礫からなる礫層であるが、全体的にマトリックスは灰緑色を呈する。同様の色調の構成層は花輪東方の鳥越段丘の下部にもみられる。

鳥越段丘は鳥越軽石質火山灰層 (内藤, 1966) の堆積面であり、太湯環状列石など多くの遺跡をのせて盆地内に最も広く分布する。特に太湯川の西岸および小坂川の左岸、米代川右岸によく発達する。高度は、花輪東方で170～180m、柴内から根市戸付近で150m前後、腰廻から一本木にかけて180m前後と盆地の周辺部にむかって高度をあげるが、特に太湯川沿いでは風張付近を扇頂部とする扇状地様の形態を示す。全城にわたって灰白色～乳白色の火山灰中に白色の軽石が多量に含まれる層相を示すが、太湯川と小坂川の合流点に近いほど層理の明瞭な二次堆積物が発達する傾向がみられる。火碎流台地としての形態をよく示しており、段丘面は平坦で段丘崖は急崖をなすことが多い。なお、小枝指から申ヶ野にかけては部分的に古い高市軽石質火山灰層が見られることがあり、埋没段丘面の存在が指摘されている (内藤, 1966)。

* このことから藤原 (1960) は本段丘面を遺跡面と呼んだ。



第2図 露頭柱状図

松館段丘は南部で米代川左岸に沿い尾去から松館、荒町にかけて広く分布している。標高は、160～170mで、夜明島川、黒沢川等の扇状地の開拓された段丘とみられる。構成層は未確認である。盆地中部の東側に、草木川、佐比内沢、間瀬川等による扇状地が発達するが、これらは松館段丘と同時期の可能性がある。大里段丘は南部で米代川右岸沿いに大里付近まで分布する。標高は150～155mと低く、構成層は上部はくずれやすい河床性の疊層を主として、田泥質の砂疊層が重なっている。河床性の疊層の上には大湯軽石質火山疊層があり、さらに部分的に軽石質の二次堆積物がその上に見られたりすることから北部の毛馬内段丘に対比できるものと思われる。

毛馬内段丘は大湯川両岸と松の木以西の米代川沿いに発達する最も低位の段丘で東能代付近まで連続して分布する。標高は毛馬内付近で110～120m、松の木では112mである。構成層は大湯川沿いでは下部から大湯軽石質火山疊層、毛馬内軽石質火山灰層、不淘汰砂疊層の順に重なるが、米代川沿いでは毛馬内軽石質火山灰層が主となる。毛馬内軽石質火山灰層は米代川沿いでいくつかの遺跡を埋没させており、特に鷹巣盆地における胡桃館埋没遺跡（平安時代中～末期）はよく知られている（秋田県教委、1968、1969、1970、平山、市川、1966）。

ところで、この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火山碎屑物層があげられる。

花輪断層はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており、東西の山地の起伏量、山容のちがい、段丘の非対称的分布等は、断層の東側の山地が第四紀を通じて上昇傾向がより強かったことを物語っており、注目に値する。一方、火山碎屑物層については内藤（1966、1970）、中川、はか（1972）等によりくわしく知られており、古い方から小坂軽石質火山灰層、高市軽石質火山灰層（ ^{14}C 年代で25,850±1,360年前）、鳥越軽石質火山灰層（12,000±250年前）、中ヶ野軽石質火山灰層（8,600±250年前）、大湯軽石質火山疊層（3,680±130年前）、毛馬内軽石質火山灰層（1,280±90年前）に区分されている。このうち大湯軽石質火山疊層の ^{14}C 年代値は同層の下位の炭質物についての値があり、同層の降下時期より古い年代値と考えられる。また、毛馬内軽石質火山灰層は前述のように埋没遺跡との関係から平安時代中～末期とみられており、大湯軽石質火山疊層の降下に引きついて流下した同一火山活動にともなう火砕流堆積物であるとの指摘もなされている（大池、1974、藤本、1980）。

(2) 地 質

No.15 柏木森遺跡

標高195～205mで中位段丘上にある。高位段丘の段丘崖に近いことから中位段丘疊層は1

~2mとうすく、その下に高位段丘疊層がくるものとみられる。最上部は黒色腐植土層が20~40cmでみられるが中に大湯軽石質火山疊層をうすくはさんでいる。

No.16 中の崎遺跡

標高180~183mで鳥越段丘上にある。中位段丘とは異なり平坦な地形で、構成層は上部から120cmで黒色腐植土層があり、地上から65cmほどのところに径0.2~1.5cmの軽石を含む大湯軽石質火山疊層が約7~10cmの厚さでみられる。黒色腐植土層の下位は部分的に黄褐色の軽石と安山岩の角礫を含む火山灰層が見られることもある。この火山灰層は下位の鳥越軽石質火山灰層とは層相がやや異なっており、同質のものは中位段丘・高位段丘上でもみられる。鳥越軽石質火山灰層は径5~10cmの軽石を不規則に含んでおり、二次堆積物はみられない。

No.31 明堂長根遺跡

標高205~207mの中位段丘上にあり、試錐資料によれば地表から表土が30cm、粘土層が約1.5m、角礫を含む砂層が60cm、粘土層が60cmのそれぞれの厚さでみられ、さらに下位は約3.5mの厚さで中位段丘疊層となっており、高位段丘疊層もその下にみられるとしている。これらのうち、粘土層にはさまれる疊まじり砂層は火山灰層とみられる。

参考文献

- 秋田県教育委員会 (1968, 1969, 1970) 「切株館埋設遺跡発掘調査報告」(報報, 第2次, 第3次)
- 秋田県文化財調査報告書 14, 19, 22
- 秋田県 (1973) 「秋田縣総合地質図」、「花輪」
- 藤本秀雄 (1980) 「十和田火山起源の火山灰層の重複組成(その1) 大輪、花輪盆地における火山灰層」、「大館工業高等研究紀要」
- 森原健藏 (1960) 「米代川流域の河岸段丘と十和田火山噴出物との関係」『東北地理』12, 2, P.34~41
- 内藤博夫 (1966) 「秋田県米代川流域の第四紀火山疊層と段丘地形」『地理学評論』第39巻第7号 P.13~34
- 内藤博夫 (1970) 「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』第43巻 P.594~606
- 中川久夫ほか (1972) 「十和田火山発達史概要」『東北大地質古生物研究報』第73号 P.7 ~18
- 大池昭一 (1972) 「十和田火山は生きている」『国土と教育』第26号 P.2~7
- 上田良一 (1965) 「秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について」『秋田地下資源開発研究報告』第32号 P.1~71

2. 環境と周辺の遺跡

秋田県の北東隅に位置する鹿角は、東に八幡平を介して岩手県と境を接し、北には青森県八甲田山系を控え、年間平均気温花輪9.4°C、年間平均降水量月168mmを測り、積雪量にして少なく、年間を通して昼夜の温度隔差の大きい内陸型気候を示す地である。

奥羽山脈中に形成された地溝盆地である鹿角盆地は、八幡平から北流する米代川、十和田から南流する大湯川、小坂川の三本の河川流域に開けた沖積地と、複合扇状地及び東部、西部の両山岳地帯からなっている。盆地中央を流れる米代川、大湯川、小坂川の三本の河川には、東西の両山岳地帯から多くの小侵蝕谷を伝わって小河川が流れ込み、沖積面よりも70~80m程高位にある標高200m前後の山岳地帯の段丘を開析している。そして、こうした小河川の間は、さらに細かな沢筋によって区切られる場合が多く、それらの沢筋によって分断された舌状の台地が、群となって開析谷と開析谷の間にいくつか連なって存在する。

鹿角盆地は多くの遺跡をその中に抱えている。それらの遺跡は前述の標高200m前後の段丘間に立地し、その段丘が多く的小侵蝕谷によって開析されているため、遺跡は多くの小河川によって分断された個々の段丘に群在する。盆地内で特に遺跡の集中する箇所をあげれば、熊沢川と米代川の合流地点南東の長瀬地区、米代川に西流して注ぎ込む歌内川が開析する大里地区、同じく米代川支流である福士川周辺の産土神地区、米代川、大湯川、小坂川の合流地点南側の神田地区、同じく北側の瀬田石地区、小坂川に注ぎ込む荒川の周辺等がある。また、盆地中央部東側の風張台地も広範囲に遺跡が点在する。

鹿角では旧石器時代の遺跡は確認されておらず、歴史が行なわれたり遺物が採集されたりして確認されているのは、全て縄文時代以降の遺跡である。

縄文時代早期の様相は、未だ明確に把握されている状態とは言い難い。三ヵ年にわたる東北総貫自動車道関係遺跡の調査で、大地平遺跡⁴、上葛岡IV遺跡¹³、柏木森遺跡等から、青森県八戸市是川や岩手県二戸市等で出土例があり赤御堂式と呼称される表裏縄文の土器が破片で確認されている。同様の土器は大湯付近からも採集されている。また、上葛岡IV遺跡¹²、猿ヶ平II遺跡²¹、柏木森遺跡¹⁵からは、胎土に多量の纖維を含み複節の羽状縄文の施された所謂砲弾形の深鉢が出土しており、早期末~前期初頭に位置づけられている。上記の遺跡からは、縄文時代早期東北地方北部に通有のトランシェ様の石器も併せて出土している。他に極く少暈ではあるが一本杉遺跡³³からは貝殻文土器の破片、飛鳥平遺跡⁸からは青森県八戸市でも出土し、草創期の可能性も指摘されている爪形文類似の土器も破片で出土している。

縄文時代前期の遺跡としては、八幡平玉内にある清水向遺跡があげられる。この遺跡は昭和29年武藤鉄城氏等によって調査され、県内で初めて縄文時代竪穴住居跡2棟を確認した遺跡と

*数字は第3回の遺跡番号と一致する。

第1表 周辺遺跡一覧表 (第3回参照)

1 <東北縦貫自動車道路線上的遺跡>

番号	遺跡名	時代時期	遺 跡 類 別	遺 物	備 考
1	勝 熊 井	縄文(後期)		縄文堅穴住居跡, 土壙, 上部捨場, 縄文土器	東北縦貫自動車道発掘調査報告書 I
2	湯 漱 館	縄文	中世	縄文土器, 桁立柱建物跡, 砥石配列建物跡	II
3	上 山 田	縄文(前期)		縄文土器	III
4	大 地 平	縄文	弥生	縄文土器, 弥生土器	IV
5	空 の 上	縄文(前期~晚期)		縄文土器	V
6	歌 内	平安		縄文堅穴住居跡, 土壙, 縄文土器, 平安堅穴住居跡	VI
7	鳥 居 平	縄文		縄文堅穴住居跡, 縄文土器	VII
8	飛 鳥 平	縄文(早期, 後期) 平安		縄文堅穴住居跡, 縄文土器, 平安堅穴住居跡	VIII
9	北 の 林 I	縄文(中期, 後期)	平安	縄文堅穴住居跡, 土壙, 平安堅穴住居跡, 桁立柱建物跡	IX
10	北 の 林 II	縄文(中期, 後期)	平安	縄文堅穴住居跡, 土壙, 縄文土器, 平安堅穴住居跡	X
11	上 菊 四 丁	縄文		縄文堅穴住居跡, 縄文土器	XI
12	上 菊 四 田	縄文		縄文土器	XII
13	上 菊 四 釋	縄文		縄文土器, 平安堅穴住居跡, 土壙器, 砥石器	XIII
14	駒 林	縄文	平安	縄文土器, 平安堅穴住居跡	XIV
15	柏 木 岩	縄文	平安	土壙, フラスコ状ビット, 縄文土器(早期, 後期, 或期), 土師器	XV
16	中 の 崎	縄文	平安	縄文土器(後期, 晚期), 平安堅穴住居跡, 桁立柱建物跡, 砥石器, 土壙器	XVI
17	孫右エ門館	縄文	平安	屋外炉, 縄文土器, 平安堅穴住居跡, 土師器	XVII
18	案 内 I	縄文	平安	縄文堅穴住居跡, 縄文土器, 平安堅穴住居跡, 土師器	XVIII
19	案 内 II	縄文		縄文堅穴住居跡, 土壙, 配石遺構, 縄文土器	XIX
20	猿 ケ 平 I	縄文(中期~晚期, 弥生)		縄文堅穴住居跡, フラスコ状ビット, 縄文土器, 弥生土器	XX
21	猿 ケ 平 II	縄文(早期~中期)		縄文堅穴住居跡, フラスコ状ビット, 縄文土器	XXI
22	妻 の 神 I	縄文	平安	フ拉斯コ状ビット, 縄文土器, 平安堅穴住居跡, 土師器	XXII
23	妻 の 神 II	縄文	平安	縄文堅穴住居跡, 平安堅穴住居跡, 中世建物跡	XXIII
24	妻 の 神 III	縄文	中世	縄文堅穴住居跡, 中世堅穴住居跡, 桁立柱建物跡, 土壙器, 棚列跡	XXIV
25	乳 牛 平	縄文	平安	縄文土器, 平安堅穴住居跡	XXV
26	下 乳 牛	縄文	平安	フ拉斯コ状ビット, 縄文土器, 平安堅穴住居跡, 上部器, 砥石器	XXVI
27	西 町 I	縄文	弥生	縄文土器, 弥生土器	XXVII
28	西 町 II	縄文		縄文土器	XXVIII
29	毛 田	中世?		なし	XXIX
30	明 當 長 棍	縄文		土壙, フラスコ状ビット, 縄文土器, 滝状遺構	XXX
31	上 菊 四 田	縄文		縄文堅穴住居跡, 縄文土器	XXXI
32	一 本 杉	縄文	平安	縄文土器, 平安堅穴住居跡, 桁立柱建物跡, 土師器, 清志器, 中世, 陶磁器	XXXII
33	案 内 III	縄文	平安	縄文土器, 平安堅穴住居跡, フラスコ状ビット, 縄文土器, 平安堅穴住居跡, 土師器, 清志器	XXXIII
34	小 豊 沢	縄文	中世	縄文堅穴住居跡, フラスコ状ビット, 平安堅穴住居跡, 中世堅穴住居跡, 中世堅穴土器, 砥跡	XXXIV

2 <鹿角の中世城館>

記号	城館名	残存状況	城主(仮)	記号	城館名	残存状況	城主(仮)	記号	城館名	残存状況	城主(仮)
A	谷内高館	やや良		S	尾去館	やや良	尾土神中(安保)	2L	柴内館		
B	谷内館	不 良	谷内二郎(成田)・戸隠正左衛門(武田)	T	F 塔	不 良		2M	万谷野館	不 良	
C	谷内館	不 良		V	長内館	不 良	玉内大炊頭(安保)	2N	高市館	不 良	高市玄蕃(成田)
D	長牛館	不 良	伏見屋源定(御前)・芦原信定(義姫)・越後守友義・長牛舟田	W	上山館	不 良		2P	上古館		
E	白堀館	やや良	白堀勘解由	X	茶臼館	不 良		2Q	新牛糞館	不 良	新牛糞左近(奈良)
F	長内小館			Y	花輪館	不 良		2R			
G	三ヶ里館	やや良	三ヶ里左近(阿部)	2A	かいぬま館	やや良		2S	小平館	やや良	小平彦次郎(奈良)
H	長内館	やや良	長内下総(成田)	2B	高瀬館	やや良	高瀬土佐(秋元)	2T	小枝指館	不 良	小枝指左馬之助(奈良)
I	兵内古館	やや良		2C	猿石工門館	不 良		2U	一ツ森館	やや良	
J	長内館	やや良	長内刑部(成田)	2D	花輪古館	不 良	(伝)花輪次郎(安保)	2W	丸館	やや良	春良越後
K	下相志賀館	不 良		2E	黒土館	やや良	黒土上総(秋元)	2X	高麗館	やや良	高麗筑前(秋元)
L	印中館			2F	(無名館)			2Y	折石館	不 良	神折十郎(成田)
M	湯瀬館	満 漢	湯瀬中務(成田)・安倍宮内	2G	(無名館)			3A	中草木館	不 良	
N	豆豆沢館	不 良	豆豆沢御前(秋元)	2H	妻の神館			3B	鶴上館	不 良	鶴神安房(成田)
O	石鳥井館	やや良	石鳥谷九郎(安保)・南部九郎正友	2I	乳牛館	不 良	乳牛六郎(安保)	3C	毛馬内館		
P	大里館	不 良	成田小次郎左衛門(御前)・大里上総(安保)	2J	柴内館	不 良	柴内弥次郎(安保)	3D	酒田石館	やや良	酒田石太郎左衛門(奈良)
Q	松 館	やや良	松籠地前(安作)	2K	西町館						

3 <鹿角の周辺遺跡>

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
36	大 館	50	下森酒A	64	東 山A	78	野日	92	板 繩I	106	小 板 野
37	三 テ 田	51	尾 去	65	東 山C	79	長 野	93	上 / 野Ⅲ	107	中 野 袋B
38	長 峰	52	東 在 家	66	赤 叛A	80	野	94	上 / 野Ⅳ	108	白 坂
39	新城15, 17, 18番地	53	尾 去	67	日 向 里 敷I	81	花 轮C	95	上 / 野Ⅴ	109	漸 田 石 A, B
40	新城26, 27番地	54	酒 水 向	68	御 休 堂	82	花 轮B	96	石 野 吉 墓	110	風 平
41	長 墓	55	三 光塚 1号	69	天 戸 穂	83	花 轮A	97	曲 谷 地B	111	柏 峠
42	天 痘 墓	56	三 光塚 2号	70	大 通	84	板 繩II, III	98	枯 草 坂	112	寺 / 上B
43	二 ツ 墓	57	六 角 平	71	陣 場	85	戸 尾 の 沢	99	曲 谷 地A	113	蟹 沢
44	下モ和志賀	58	五 内	72	天 戸 穂I	86	上 / 野Ⅵ	100	冠 田	114	大湯環狀列石
45	下 鶴 の 墓	59	甘 薩	73	用 野 日	87	上 / 野 頭	101	平 元 範I	115	一本木 平
46	後 口 出	60	下 毛 平	74	熊 野V	88	上 / 野 頭	102	平 元 範II	116	八 雜 草
47	有 鳥 谷	61	鹿土神A, B, C	75	万 登 野	89	上 / 野 VI	103	烏 野		
48	岩 清	62	赤 叛B	76	野	90	上 / 野 V	104	中 ケ 野		
49	中 / 訓	63	東 山C	77	野 I	91	上 / 野 IV	105	草 木C		

して注目された。出土した土器は、前期後葉円筒下肩口式を中心として、円筒下肩a式、円筒下肩b式等であり、また円筒下肩d式土器に伴って、山形県吹浦遺跡等に類似の求められる大木6式土器も出土している。また、東北縦貫自動車道関係の調査では、居熊井遺跡¹、上山田遺跡²、京の上遺跡³、小立沢館遺跡⁴等から主に円筒下肩d式を中心とした前期後葉の土器の出土をみている。

縄文時代中期の遺跡は東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で数箇所調査されている。飛鳥平遺跡⁵、北ノ林I遺跡⁶、北ノ林II遺跡⁷では石組の複式炉をもつ竪穴住居跡が検出され、大木9～10式土器を出土している。また歌内遺跡では、フラスコ状土壙の壙底から中ノ平式土器を出土している。

後期は、鹿角における縄文時代各期を通じて、調査、発見例の最も多い時期である。東北縦貫自動車道関係の遺跡では、後期中葉の捨場と竪穴住居跡を確認した居熊井遺跡¹、後期初頭の埋設土器を検出した飛鳥平遺跡⁸、後期中葉の石組の炉をもつ竪穴住居跡を検出した案内I遺跡⁹、案内III遺跡¹⁰、猿ヶ平I遺跡¹¹、猿ヶ平II遺跡¹²、後期後葉の竪穴住居跡を検出した案内II遺跡¹³等がある。さらに昭和43年には奥山潤氏によって、上和田大湯の黒森山麓竪穴群遺跡が調査され、後期前葉の土器を作った石組をもつ竪穴住居跡の検出が報告されている。

また、昭和26年、27年の両年に調査が行われ史跡指定された大湯環状列石¹⁴は、その後数回にわたって周辺の分布調査がなされ、現在の方座、野中堂の圓列石の他にも付近数箇所に配石群の存在が確認されている。

晩期では、清水向遺跡と同じ台地に立地する玉内遺跡¹⁵が知られ、晩期中葉の遺物とともに所謂日時計形の列石が確認されている。¹⁶また、この玉内遺跡の立地する台地とちょうど木代川を挟んでの対岸には東在家遺跡¹⁷があり、晩期中葉までの遺物を多く出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、柏木森遺跡¹⁸、明堂長根遺跡¹⁹から袋状土壙群が検出され、晩期初頭の遺物を多く出土している。

秋田県内における弥生時代の遺跡は今までのところ縄文時代のそれと較べると、知られている遺跡数、その内容とも少なく且つ不明確な点が多い。鹿角はその中にあっては比較的該期様相の理解がすんでいる地域である。

鹿角盆地北端の小坂町周辺では、奥山潤、安保彰尚氏の活動により、内ノ岱遺跡、団岱遺跡等から、天王山式類似の土器、後北C式土器が採集され報告されている。また鹿角市尾去沢からは田舎館式類似の土器が出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、大地平遺跡²⁰、駒林遺跡²¹から縄繩の格縄体の回転施文された土器片、奥山潤氏等命名によるところの小坂X式土器が出土し、さらに猿ヶ平I遺跡²²からは天王山式類似の土器が出土している。しかし、これらの弥生時代の土器は今のところ断片的な出土に限られており、伴出する遺跡や遺構等、未だ不



第3図 東北縦貫自動車道路線と周辺遺跡

1:50,000

明な点が多く残されている。

奈良、平安期の古代の遺跡も近年調査例を増して来ている。古くは昭和初年に木村善吉氏等によって調査され、その後、後藤守一氏等によって調査された菩提野堅穴群遺跡がある。この遺跡は計12ヶ所の堅穴群からなると想定されたが、その調査当初から覆土中に入る火山灰層が注目され、以来鹿角における該期の遺跡調査は、この火山灰層との関係解明を大きな視点の一つとして据えることになる。近年では大湯環状列石周辺の分布調査、鳥野遺跡、源田平遺跡、¹⁰³ 小平遺跡²⁵ 等の調査で、該期堅穴住居跡が検出され、また、東北縦貫自動車道関係の調査では、歌内遺跡⁶、飛鳥平遺跡⁸、北ノ林Ⅰ遺跡⁹、北ノ林Ⅱ遺跡¹⁰、上萬岡Ⅳ遺跡¹³、駒林遺跡¹⁴、一本杉遺跡²³、中ノ崎遺跡¹⁶、案内Ⅰ遺跡¹⁸、案内Ⅲ遺跡²⁴、妻ノ神Ⅰ遺跡²⁷、妻ノ神Ⅱ遺跡²³、下乳牛遺跡などで堅穴住居跡が検出されている。さらに御休堂遺跡²⁸、高山向館遺跡でも同様の住居跡が検出されている。菩提野堅穴群から現在まで確認されている該期住居跡の総数は、144棟という膨大な数にのぼる。

他に、奈良、平安期の遺跡としては、十和田錦木字曲谷地にある枯草坂古墳、尾去沢字東在²⁶ 家にある三光塚古墳群²⁷ があげられる。いずれも終末期の小円墳であり、玉類、刀装具等を出土している。また十和田字室田にも古墳群があったと伝えられている。

中世鹿角は、鎌倉時代にこの地に移住したと伝えられる成田氏、安保氏、秋元氏、奈良氏の所謂鹿角四氏の支配する地域であった。これら四氏から出自する各々の庶流は、盆地内に所領を得て『鹿角由来集』『鹿角由来記』などに伝えられる鹿角四十二館にそれぞれ居を構えて割拠する。この状態は近世鹿角が南部領となるまで続く。

鹿角には、鹿角四十二館あるいは四十八館に該当するものを含めて計58ヶ所に及ぶ「館」跡が確認されている。これらの「館」跡は、舌状に張り出した台地を、1~数本の掘切をおこなって造りあげている多郭連続式のものが多い。すなわち、1ヶ所の「館」跡は数個の郭が連っている。また、郭自体が元來舌状台地であったため、「館」として使用される以前にも人間の居住域として選定される事が多く、郭上面の調査では時として縄文時代、平安時代の堅穴住居跡等が中世の遺構、遺物等とともに検出される。

現在までに発掘調査の行われているのは、小枝指七ツ館、長牛館²⁹、御休堂遺跡³⁰等があり、東北縦貫自動車道関係では、湯瀬館遺跡³¹と乳牛館の一部と考えられている妻ノ神Ⅰ²⁷、同Ⅱ²³、同Ⅲ²⁴、乳牛平遺跡³²が調査終了している。

柏木森遺跡

遺跡番号 No.15
所在地 鹿角市花輪字柏木森44番地他
調査期間 昭和56年7月20日～11月4日
発掘調査面積 13,500m²

1. 遺跡の概観

遺跡は、国鉄花輪線陸中花輪駅南東1km、標高200m前後の段丘上に位置する。

遺跡の位置する花輪盆地は、南北に大きく伸びた盆地であるが、ほぼその中央部で東西の両山岳地帯がせり出して、盆地が南北2つに分断された形態を呈する。南側の盆地は、八幡平から北流する熊沢川と岩手県側から西流する米代川との合流地点に開けた盆地であり、北側の盆地は、盆地内を北流する米代川と上和田から南流する大湯川、青森県側から南流する小坂川との合流地点に開けた盆地である。

遺跡は、2つの盆地のうち北側の盆地内に位置する。東側山岳地帯の裾野は標高200m前後の段丘地帯となって南北に広がっており、遺跡はこの段丘上、南端にある。遺跡のある段丘の西側には花輪町の市街地が広がり、米代川は西側の山岳地帯に沿って流れている。

遺跡は東側山岳地帯の際にあり、調査区は路線に沿って南北に長い形で設定した。調査区部分にかかる遺跡の現況は、水田、畠地等の耕作地とアカシア等の雑木の生える荒地となっている。

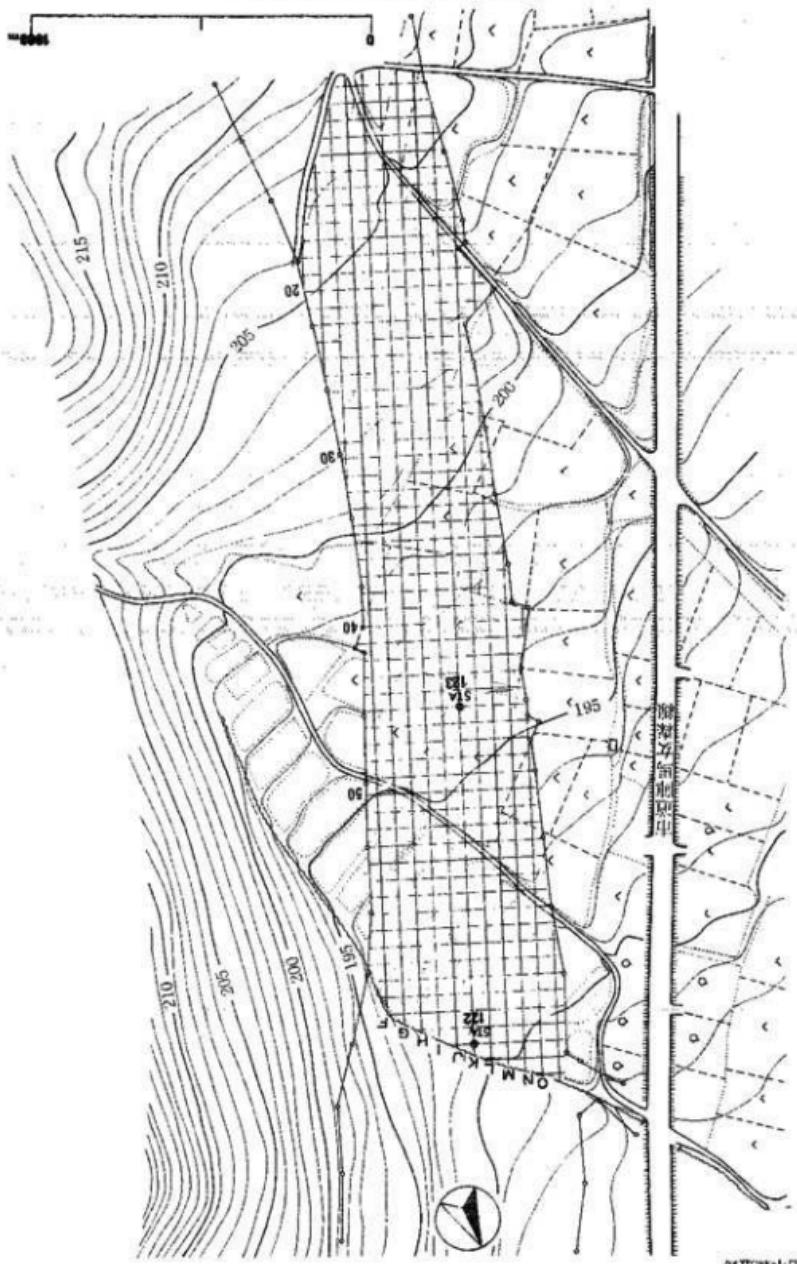
遺跡の南側には隣接して、同じ東北縦貫自動車道路線内に位置する明堂長根遺跡（遺跡番号No31、昭和56年度調査）があり、本遺跡とほぼ同様の性格をもつ遺跡として確認されている。また、路線内北側には、中ノ崎遺跡（遺跡番号No16、昭和55、56年度調査）があり、平安時代の住居跡群を中心とした遺構が多く検出されている。

2. 調査の方法

遺跡の調査区は、東側の山地が小さな沢によって僅かに開折される箇所を中心に選定された。すなわち南側は約5mの比高差のある明堂長根遺跡と接し、北側は東の山岳地帯から流れる沢を境とした内側約13,500m²の区域である。調査区の幅は、日本道路公团設置の道路幅杭の間とした。本遺跡内においては、道路は比較的低い盛土工法によって作られている為、その幅は40~55m程度である。

調査区内には、5m×5mのグリッドを設定した。グリッドの基準となるラインは、日本道路公团の設置した道路中心杭STA123とSTA122を結ぶ線を南北の基線とし、基線に対して直交するように東西のラインをSTA123を起点として設定した。また、東西のラインには南からアラビア数字、南北のラインには東からアルファベットを付し、その組合せて各グリッド東南隅の杭を、グリッド呼称に用いた。

第1圖 拼水溝鐵礦石之剖面圖



拍水溝鐵礦

調査面積が13,500m²と広大なものになる為、表土除去は重機を用いて行い、その後人力による根掘作業を遺構確認面近くまで行うことを予定した。また調査中に出る堆土は、調査区内の東側に沿って帶状に残し、重機により調査区外へ随時除去することにした。

調査区が、南北に300mと長く設定された為、遺跡の基本層位が調査区内で異なることも予想され、層位の観察は重機による表土除去作業の前に、調査区を縦断するトレンチ壁面によって行った。

造構等の実測にあたっては、各グリットの隅の杭を利用しての簡易造り方測量により実測した。また、造構の写真撮影は35mmのカメラを用い、モノクロ、リバーサルとも造構確認時の状態、断面の状態、完掘の状態と同一の造構について3回の撮影を原則とした。また、最終的に遺跡全体を航空写真測量し、造構配置図を含めての地形図を作成している。

3. 調査の経過

調査は、昭和56年7月20日から人員を導入しての継続的な調査を開始し、同年11月4日までの108日間を費して行っている。また、この継続的な調査の開始以前に、写真撮影、トレンチ試掘等の作業を行っている。調査経過の概略は以下の通りである。

6月16日	調査前遺跡全景写真撮影
26日	土層被察用トレンチ試掘
7月9日～18日	重機による表土除去作業
20日	粗掘作業開始
8月17日～	造構精査開始
10月22日	航空写真撮影、航空測量
11月4日	調査区全景写真撮影、調査完了

4. 遺跡の基本層位

本遺跡は調査区面積が13,500m²と広大であるため、人力による粗掘作業以前に重機を用いての表土の除去が必要であった。したがって表土除去作業以前に遺跡地の基本層位を確認し、作業上の目安としている。

基本層位の観察には、調査区の中央を南北に縦断するトレンチを設けその断面によって行った。(第2図) 基本層位は以下に述べる通りである。

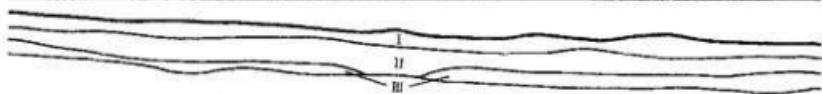
柏木森遺跡

 $H = 205.500$

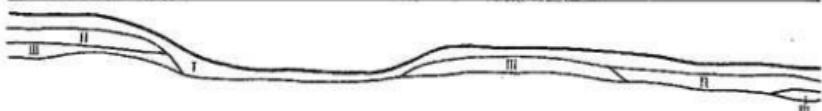
13sec

 $H = 205.000$

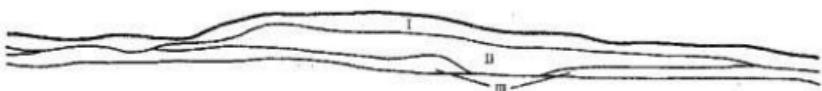
15sec

 $H = 204.500$

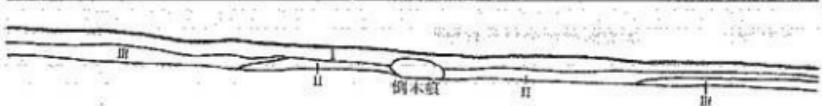
17sec

 $H = 204.000$

19sec

 $H = 203.500$

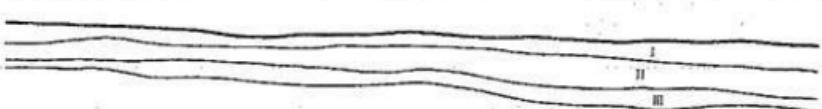
21sec

 $H = 203.000$

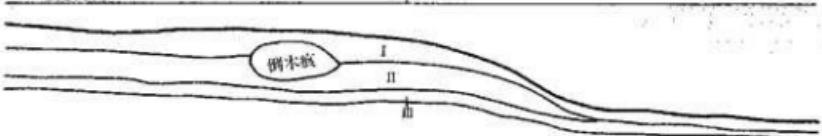
23sec

 $H = 202.500$

25sec

 $H = 202.000$

27sec



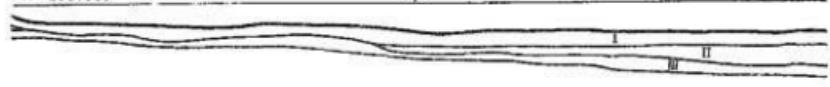
第2図 柏木森遺跡基本層序(1)

$H = 201.000$

29sec

 $H = 200.500$

31sec

 $H = 200.500$

33sec

 $H = 199.500$

35sec

 $H = 199.000$

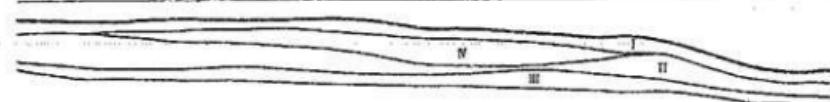
37sec

 $H = 198.500$

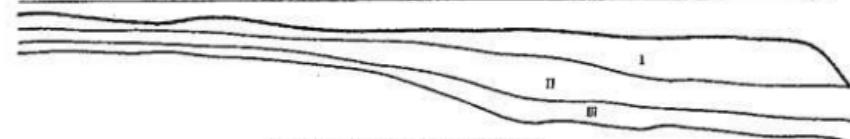
39sec

 $H = 198.000$

41sec

 $H = 197.500$

43sec



第2図 柏木森遺跡基本層序(2)

- 第Ⅰ層； 10YR 4/2 黒色土、硬度強、粘性弱、小礫（5mm前後）1%含む。
植物根多い、耕作土である。
- 第Ⅱ層； 7.5YR 4/2 黑色土、硬度強、粘性強、浮石1%程含む。
遺物を多く包含する。
- 第Ⅲ層； 10YR 4/2 暗褐色土、硬度強、粘性中、黄褐色土粒1%程含む。
小礫（2cm前後）1%程含む。
- 第Ⅳ層； 10YR 4/2 黑色土、硬度強、粘性中、浮石5%混入、黄褐色土粒2%程混入
逆転層と思われる。
- 第Ⅴ層； 10YR 4/2 黄褐色土、硬度強、粘性弱、逆転層と思われる。
- 第Ⅵ層； 7.5YR 4/2 黑色土中に多量の浮石粒を混入する。
- 第Ⅶ層； 10YR 4/2 黑色土、硬度やや強、粘性中、浮石5%程含む。
黄褐色土ブロック状に2%程含む。

トレンチの断面によって観察できた層は以上のⅦ層である。このうち、遺跡全体を通して認められ、最も基本的な層準を成すのは第Ⅰ層～第Ⅲ層までである。第Ⅳ層、第Ⅴ層は調査区内全体に亘って多く見られる倒木痕の擾乱による逆転層が断面として観察されたものである。第Ⅶ層は遺跡全体ではごく部分的にしか認められないが、第Ⅰ層と第Ⅱ層の中間にあって浮石を多く含んでいる。おそらく第Ⅰ層の耕作が行われた際に擾乱されたものと思われるが、大湯浮石層と認められる。第Ⅵ層は現在調査区の北端にある沢端が以前通っていたと思われる隙所に堆積した層であり、水流によってかなり擾乱をうけ、第Ⅶ層下には夥しい量の拳大的礫が堆積している。

遺物は第Ⅱ層～第Ⅲ層に包含される。第Ⅱ層中からは縄文時代晩期の遺物を多く出土し、第Ⅲ層下部からは早期の遺物を出土している。重機による表土除去は第Ⅰ層の剥離を目的として行い、人力による粗掘作業は第Ⅲ層下部まで行っている。最終的な造構の確認は第Ⅲ層下の地山面で行った。



第3図 柏木森遺跡遺構配置図

5. 遺構と遺物

遺構

調査区内で検出された遺構は、溝跡、道路跡、円形の土壙60基、Tピット1基、擲立柱建物跡1棟である。

溝跡は調査区の北側を横断している道路に沿った個所に検出されている。最大幅5m、最も深い個所で深さ0.7mである。東側から西側にかけて傾斜している。調査区北端には現在灌漑用の水路があるが、この溝跡も古くは水路として利用されたものと思われる。(第4図)また調査区南端にも幅およそ0.8m、深さ0.2mの小さな溝跡があるが、これも同様水路として用いられたものであろう。

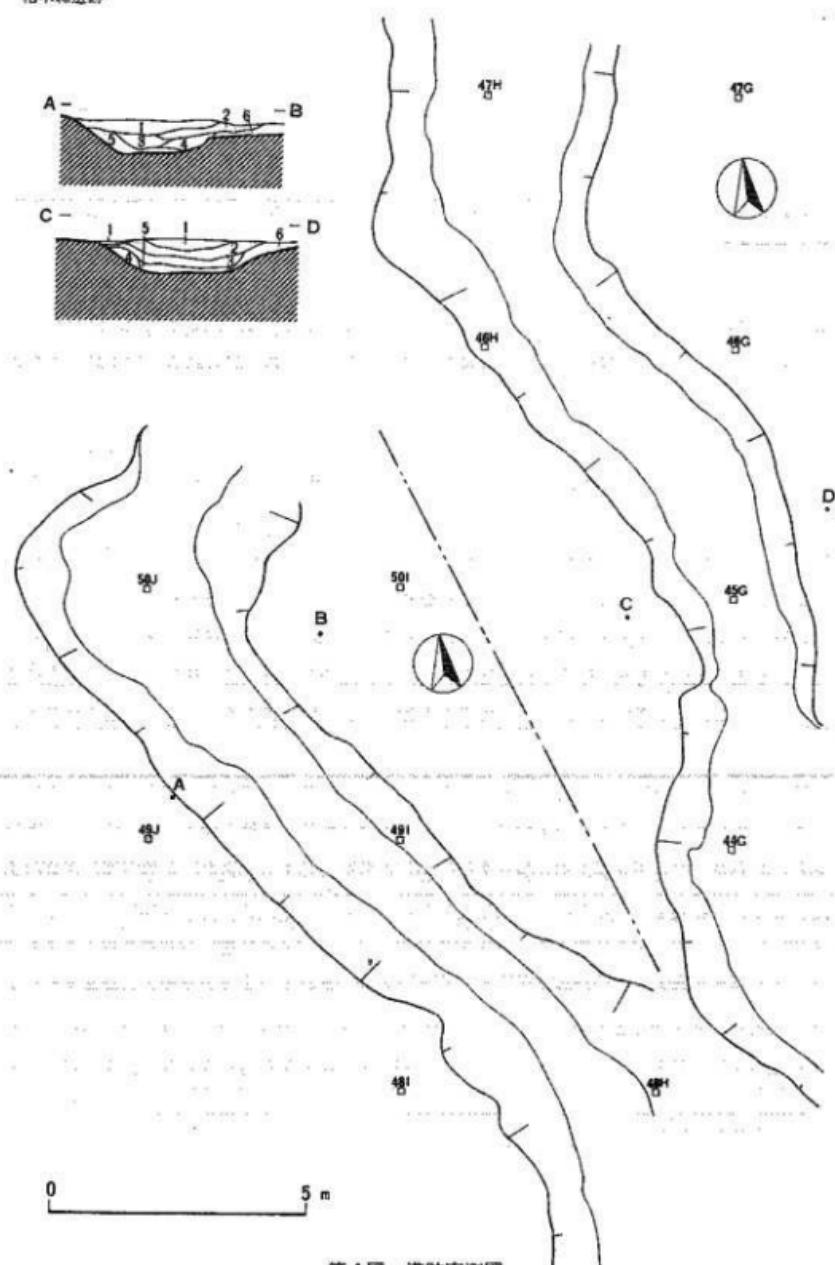
道路跡は、調査区の南側を南東—北西に斜めに走る形で検出された。調査以前に現在では使用されなくなった市道沢口甘露線がその痕跡を残していたが、今回検出された道路跡はその東側を併行して走るより古い時期のものである。幅はおよそ3~4m、径5~10cm程の礫が夥しい量散かれている。またところどころに車の轍跡と思われる浅い溝が認められる。

溝跡、道路跡とも伴出する遺物がなく時期決定するに至らないが、溝跡は現在の水田近くを走り、水流の流れた方向には今も堤が存在すること、道路跡は近年まで使用されていた市道に併行して走ることを考慮に入れると、両者とも頗る新しい時代のものではないかとの推測ができる。

円形の土壙は、断面形では袋状ともいえる末広がりの形状を呈するものが含まれる。末広がりの形状を呈さないような形の土壙であっても、実際の構造面は検出面よりも上にあったと思われ。したがって本末断面形態が袋状を呈していた可能性はある。また、この断面形が袋状を呈する土壙が密接する区域では、土壙覆土の断面にフロート状に黄褐色土の堆積層を観察できる例がある。これは新たに構築された土壙の排土が古い土壙の中に捨てられたと思われるもので、土壙の使用時期の新旧関係を教えてくれている。土壙はその覆土の状況から廢棄されたあと自然堆積にまかせたと思われるもので、埋め戻したような例はない。土壙の覆土には縄文時代晩期の土器を包含するものがあり、時期をその近くに限定できると思われる。(第6図~第16図)

Tピットは長径160cm程、深さが80cm程の比較的規模の小さなものが1基確認されている。長軸の方向はN-75°-Eである。遺物がなく時期は不明である。(第17図)

擲立柱建物跡は調査区南端から検出されている。計14個の柱穴からなる。1個の柱穴は平面形が方形を呈し、1辺が50~70cm程で深さは10~20cm程である。柱穴間を結ぶ線はやや斜交する。遺物がなくやはり時期は不明である。(第5図)



第4図 清跡実測図

P₁: 59×60×14 P₆: 78×68×24
 P₂: 56×48×8 P₉: 66×54×30
 P₃: 60×60×14 P₁₀: 68×66×20
 P₄: 54×50×10 P₁₁: 74×66×20
 P₅: 84×72×25 P₁₂: 68×58×16
 P₆: 50×42×8 P₁₃: 70×60×15
 P₇: 58×24 P₁₄: 52×46×10

P7

P4

P2

P11

P8

P5

P3

P12

P9

P6

P7

P13

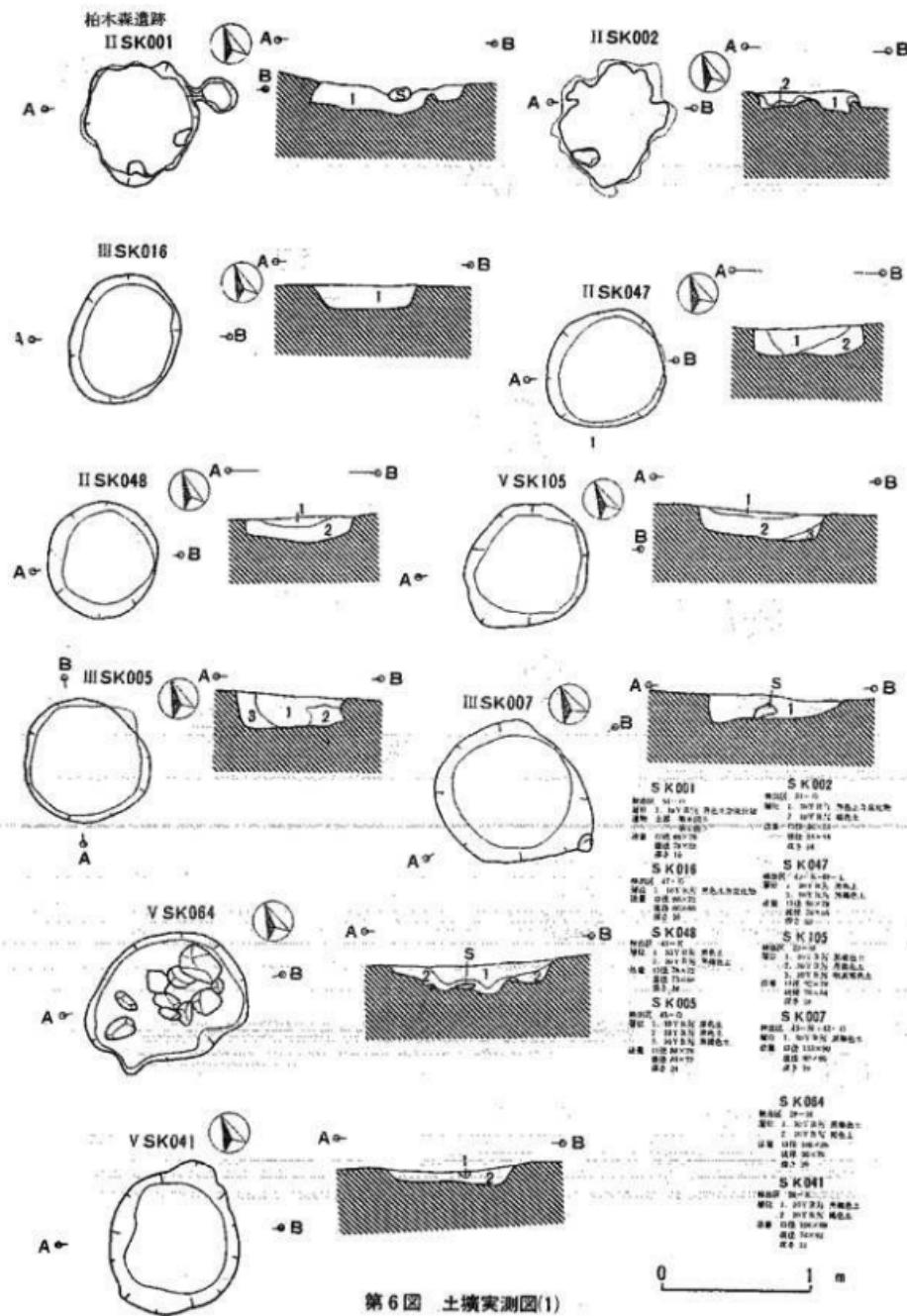
P10

P14



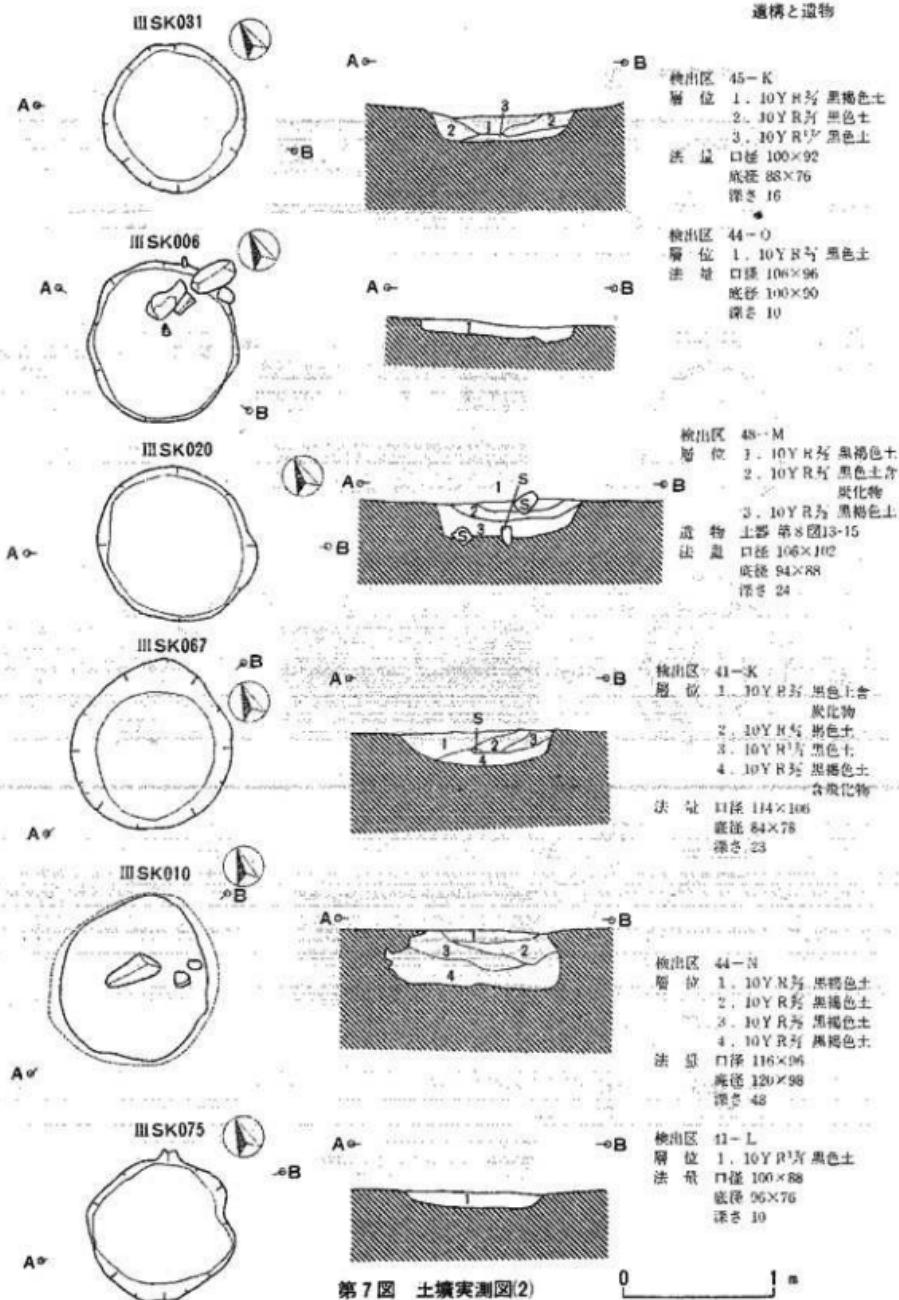
0 2 m

第5図 挖立柱建物跡実測図

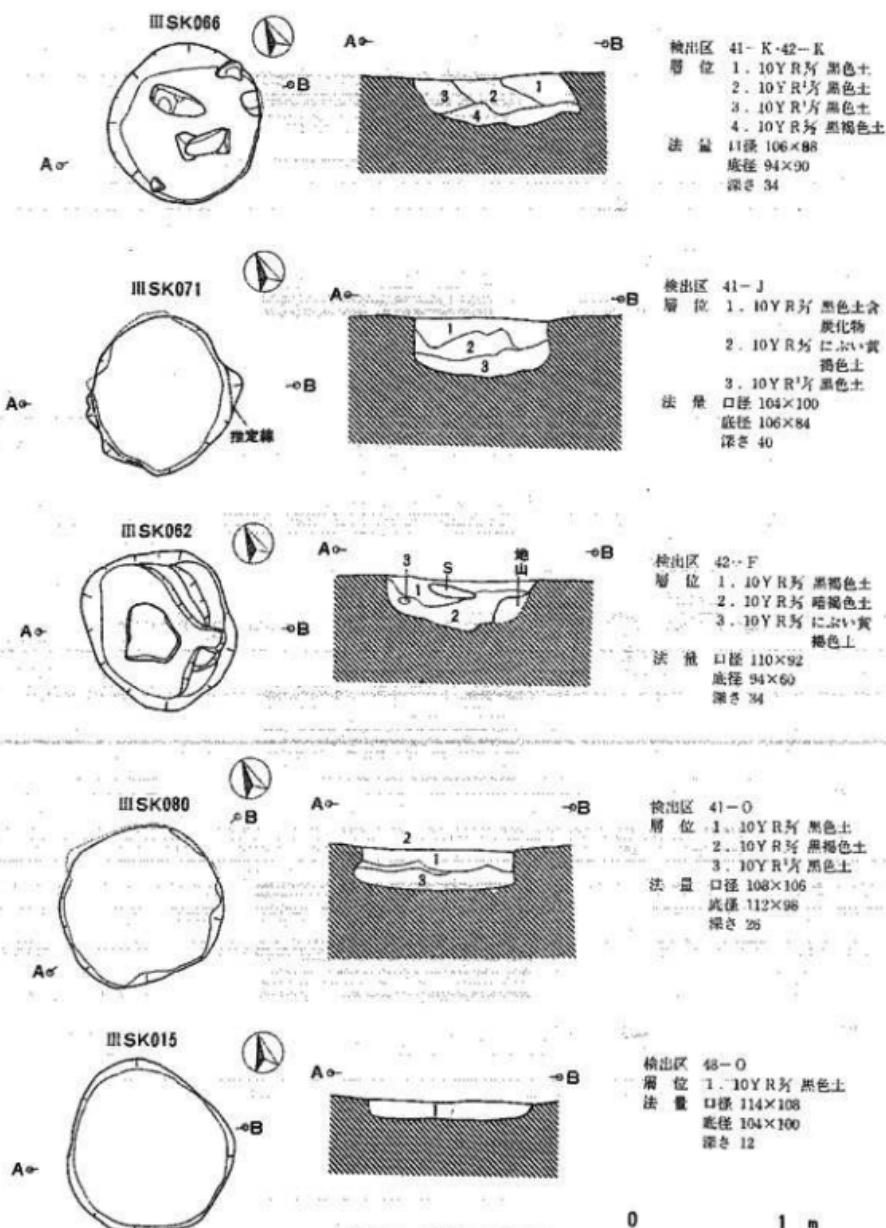


第6図 土壌実測図(1)

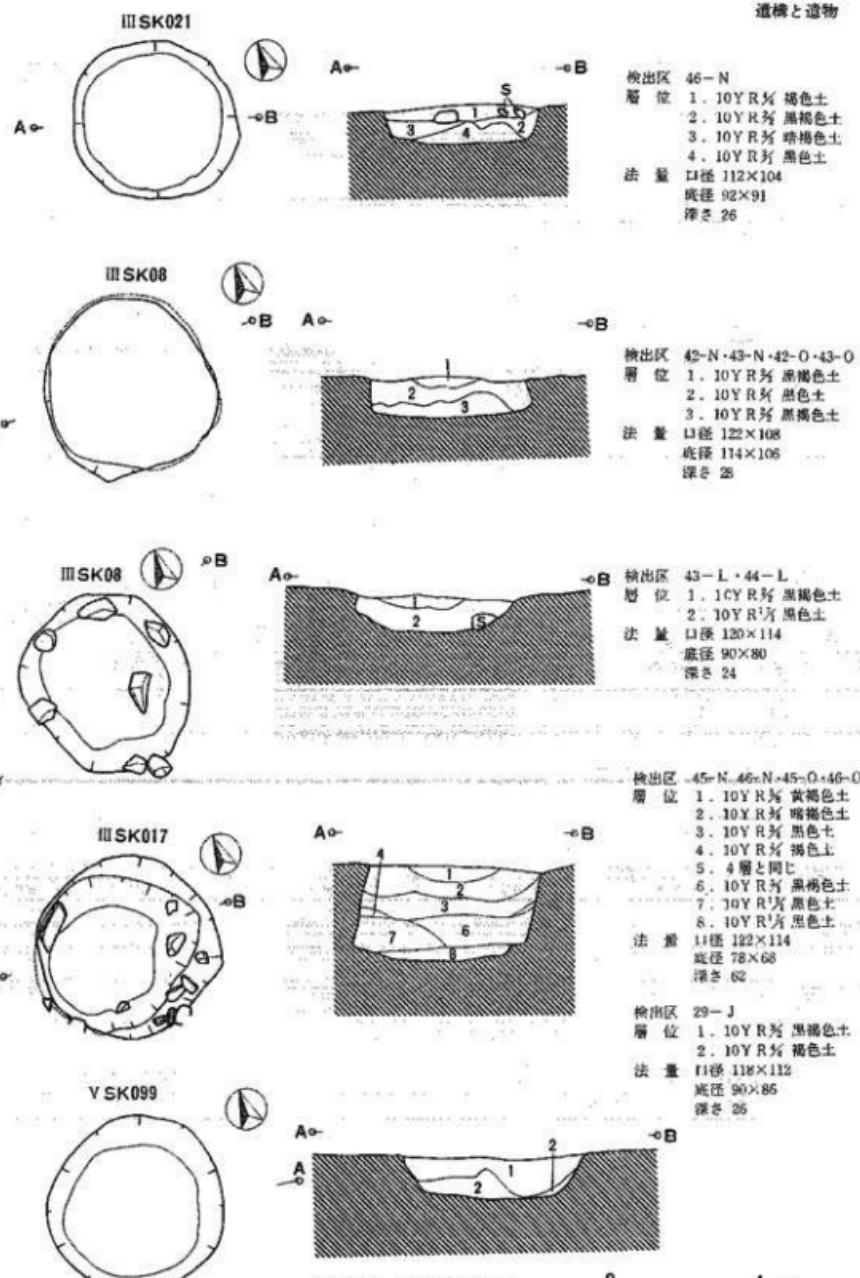
遺構と遺物



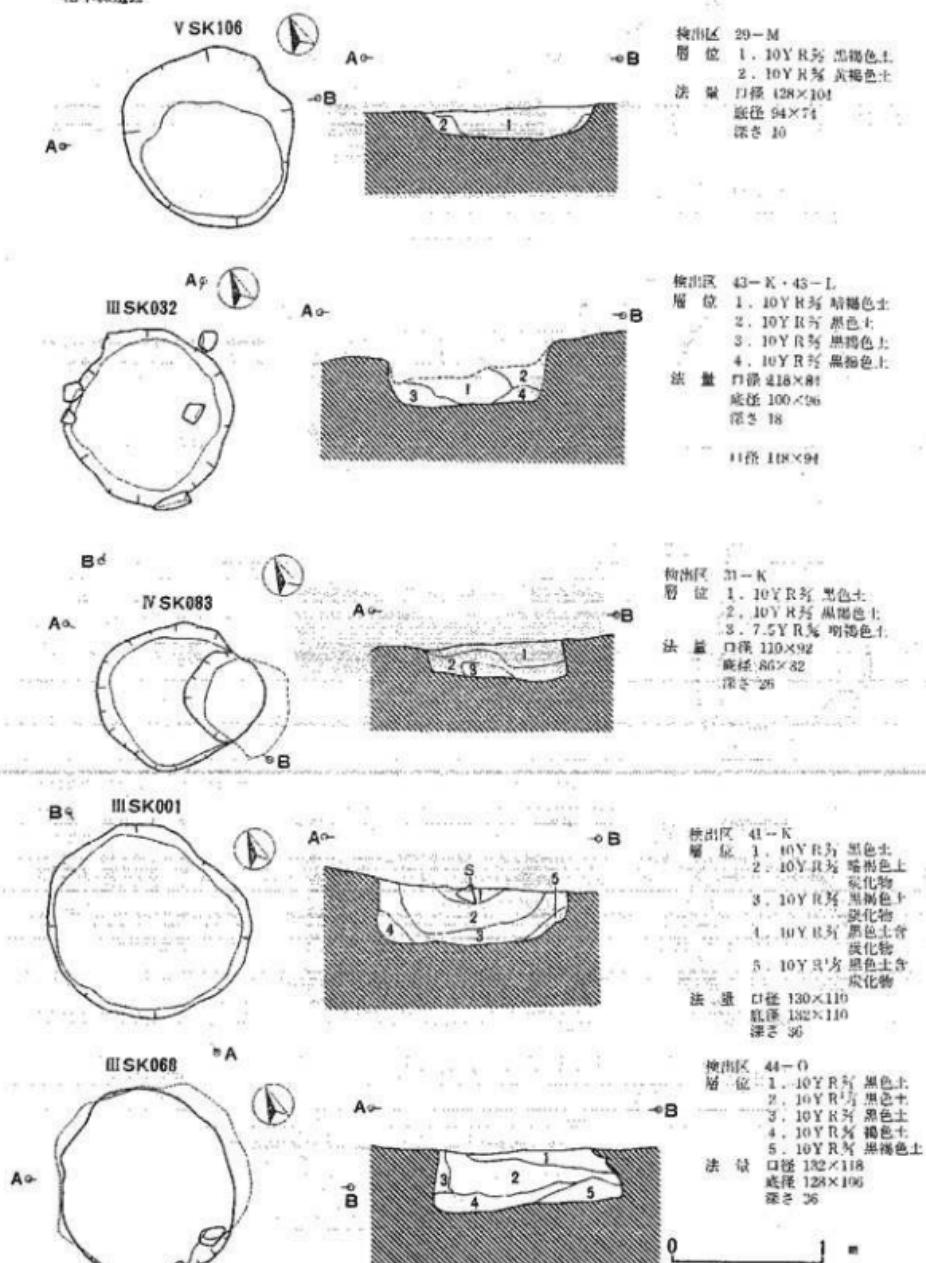
第7図 土壌実測図(2)



第8図 土壤実測図(3)



第9図 土壌実測図(4)



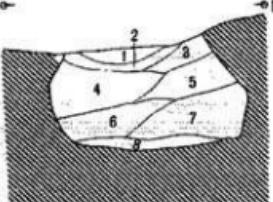
第10図 土壌実測図(5)

A

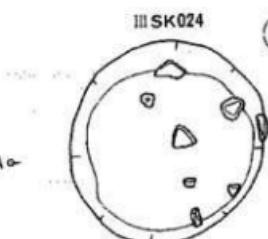


III SK029

A



bB

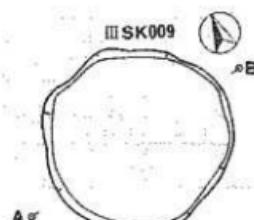
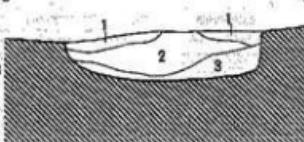


III SK024

A

A

B

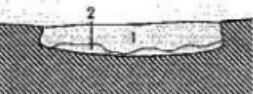


III SK009

A

A

B



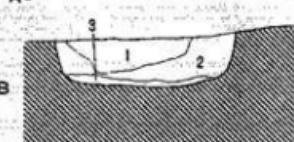
V SK103



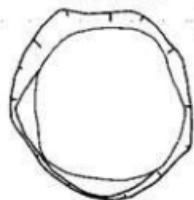
A

A

B



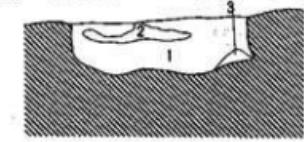
III SK069



A

A

B



第11図 土壌実測図(6)

遺構と遺物

検出区 48-J

- 層位 1. 10Y R 3 黒色土
2. 10Y R 3 黑褐色土
3. 10Y R 3 黑褐色土
4. 10Y R 3 黑褐色土
5. 10Y R 3 淩色土
6. 10Y R 3 淩色土
7. 10Y R 3 黑色土
8. 10Y R 3 黑褐色土

法量 口径 118×100

底径 140×118

深さ 68

検出区 46-M

- 層位 1. 10Y R 3 黑色土
 2. 10Y R 3 黑褐色土
 3. 10Y R 3 黑色土
- 遺物 土器 第3回9

法量 口径 138×128

底径 112×110

深さ 32

検出区 44-N

- 層位 1. 10Y R 3 黑褐色土
 2. 10Y R 3 黑色土
- 遺物 土器 第3回12

法量 口径 128×122

底径 120×112

深さ 22

検出区 29-L

- 層位 1. 10Y R 3 黑褐色土
2. 10Y R 3 黑色土
3. 10Y R 3 黑褐色土

法量 口径 132×120

底径 112×106

深さ 32

検出区 41-K

- 層位 1. 10Y R 3 黑色土
2. 10Y R 3 黑褐色土
3. 10Y R 3 明黄褐色土

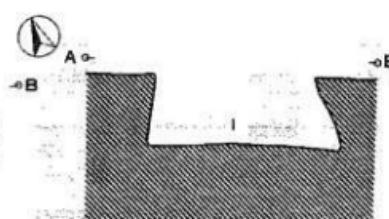
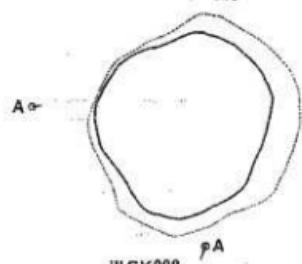
法量 口径 130×116

底径 108×94

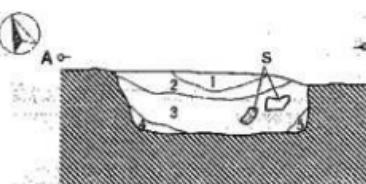
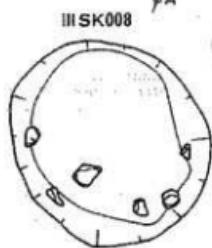
深さ 38

柏木森遺跡

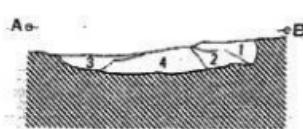
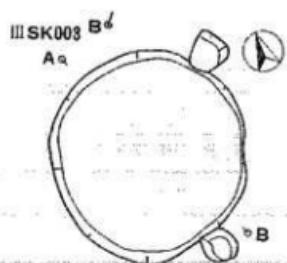
VISK026



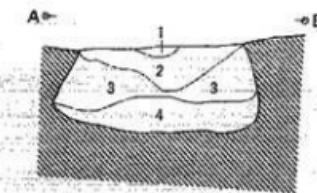
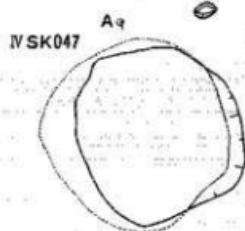
検出区 39-N・39-I
層位 1. 7.5YR^{4/6} 黒色土
含炭化物
法量 口径 124×112
底径 148×134
深さ 46



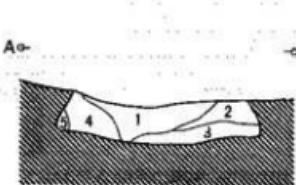
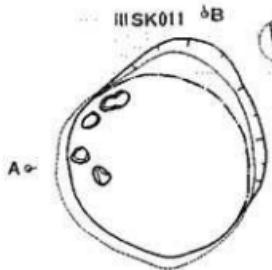
検出区 43-N・44-N
層位 1. 10YR^{4/6} 褐色土
2. 10YR^{4/6} 暗褐色土
3. 10YR^{4/6} 黑色土
4. 10YR^{4/6} 黑褐色土
5. 10YR^{4/6} 黑色土
遺物 上部 第3回5
法量 口径 142×122
底径 128×99
深さ 42



検出区 44-N・44-O
層位 1. 10YR^{4/6} 暗褐色土
2. 10YR^{4/6} 黑色土
含炭化物
3. 10YR^{4/6} 黑色土
4. 10YR^{4/6} 暗褐色土
法量 口径 142×126
底径 124×120
深さ 18

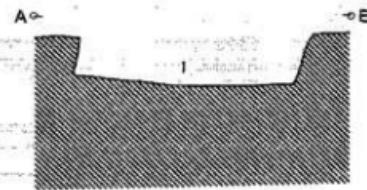


検出区 37-I
層位 1. 10YR^{4/6} 黑色土
含炭化物
2. 10YR^{4/6} 黑褐色土
含炭化物
3. 10YR^{4/6} 黑褐色土
含炭化物
4. 10YR^{4/6} 暗褐色土
含炭化物
法量 口径 122×106
底径 126×122
深さ 58

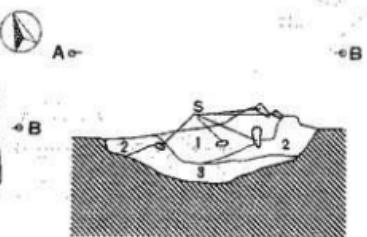
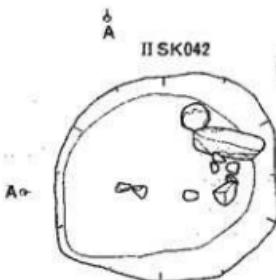


検出区 44-N
層位 1. 10YR^{4/6} 黑褐色土
2. 10YR^{4/6} 黑色土
3. 10YR^{4/6} 黑色土
4. 10YR^{4/6} 黑色土
5. 10YR^{4/6} 黑色土
遺物 石器 第2回5
第1回5

第12図 土壌実測図(7)



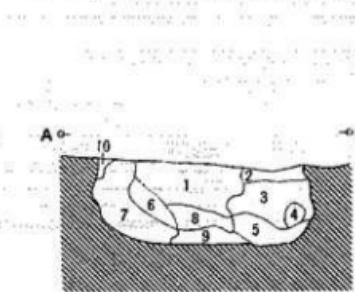
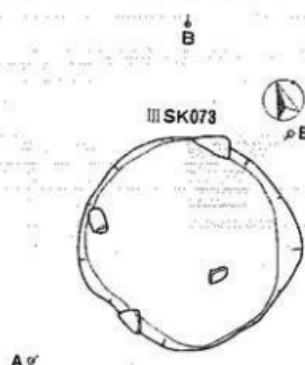
検出区 31-N
層位 1. 10Y R 1/2 黒色土
法量 115×160×118
底径 148×116
深さ 34



検出区 49-M
層位 1. 10Y R 1/2 黄褐色土
2. 10Y R 1/2 黑褐色土
3. 10Y R 1/2 黑褐色土
法量 口径 164×144
底径 115×102
深さ 42



検出区 42-J・42-K
43-J・43-K
層位 1. 10Y R 1/2 10Y R 1/2
Y R 1/2
黒色土～黒褐色土
遺物 上部 第7回21・30
第8回2
法量 口径 158×118
底径 144×110
深さ 52

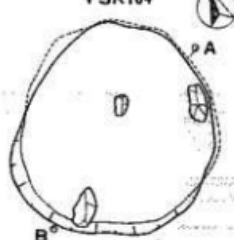


検出区 41-K
層位 1. 10Y R 1/2 黑褐色
土含炭化物
2. 10Y R 1/2 黑色土
3. 10Y R 1/2 黑色土
4. 10Y R 1/2 黄褐色土
5. 10Y R 1/2 黑色土
6. 10Y R 1/2 黑色土
7. 10Y R 1/2 黑色土
8. 10Y R 1/2 黑色土
含炭化物
9. 10Y R 1/2 黑色土
含炭化物
10. 10Y R 1/2 黄褐色土
10. 10Y R 1/2 にいわ
法量 口径 148×136
底径 136×124
深さ 54

第13図 土壌実測図(8)

柏木森道路

V SK104



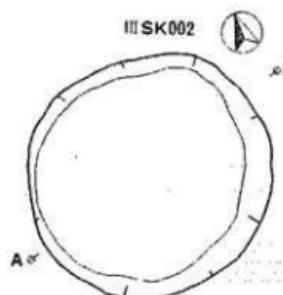
B →

→ A

検出区 29-L・29-M

- 層位 1. 10Y R 5% 黒褐色土含炭化物
2. 10Y R 5% 暗褐色土含炭化物
3. 10Y R 5% 黑褐色土
4. 10Y R 5% 黑褐色含炭化物
- LB. 明黄褐色土
- 法量 口径 142×122
底径 136×130
深さ 62

III SK002



A' →

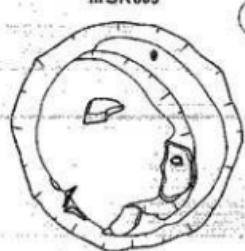
A' →

→ B

検出区 44-O・4-5

- 層位 1. 10Y R 5% 明黄褐色土
2. 10Y R 5% 暗褐色土
3. 10Y R 5% 黄褐色土
- 法量 口径 166×156
底径 148×138
深さ 30

III SK065



A' →

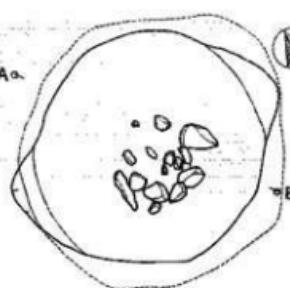
B →

→ B

検出区 42-K

- 層位 1. 10Y R 5% 黄褐色土
2. 10Y R 5% 黑褐色土含炭化物
3. 10Y R 5% 黑褐色含炭化物
4. 10Y R 5% 黑色土
- 遺物 土器 第7回17
- 法量 口径 152×130
底径 104×82
深さ 25

II SK045



A' →

→ B

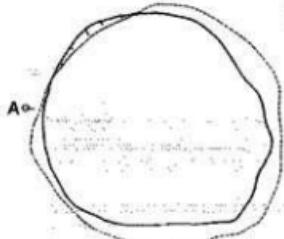
検出区 49-L・49-M

- 層位 1. 10Y R 5% 暗褐色土
2. 10Y R 5% 黑褐色土
3. 5Y R 5% 暗褐色土
4. 10Y R 5% 明褐色土
5. 10Y R 5% 黑褐色土
6. 10Y R 5% 暗褐色土
7. 10Y R 5% 黑褐色土
8. 10Y R 5% 灰褐色土
9. 10Y R 5% 黑褐色土
10. 10Y R 5% 黑褐色土
- 遺物 土器 第8回
28-29・31-33
- 法量 口径 188×166
底径 150×176
深さ 86

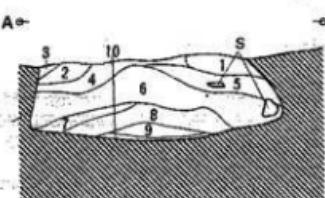
第14図 土壤実測図(9)

0 1 m

III SK025



A-B

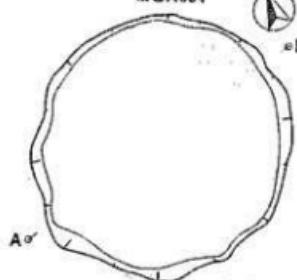


-B

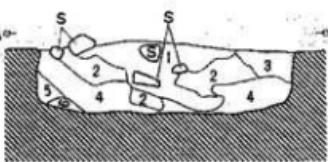
遺構と遺物

- 検出区 46-N・46-S
層位 1. 10Y R 5% 黒色土
2. 10Y R 5% 黑褐色土
3. 10Y R 5% に砂砾
黄褐色土
4. 10Y R 5% 黄褐色土
5. 10Y R 5% 褐色土
6. 10Y R 5% 明黄褐色土
7. 10Y R 5% 棕褐色土
8. 10Y R 5% 黑色土
9. 10Y R 5% に砂砾
黄褐色土
10. 10Y R 5% 黑色土
地盤 口径 155×140
底径 170×154
深さ 34

III SK004



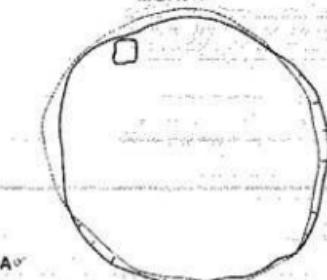
A-B



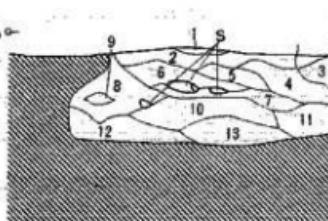
-B

- 検出区 44-N
層位 1. 10Y R 5% 明黄褐色土
2. 10Y R 5% 黑褐色土
3. 10Y R 5% 墓場褐色土
4. 10Y R 5% 黑色土
5. 10Y R 5% 新褐色土
6. 10Y R 5% 黑褐色土
地盤 口径 175×168
底径 160×152
深さ 64

III SK012



A-B



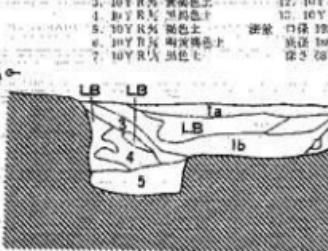
-B

- 検出区 44-N・45-N
層位 1. 10Y R 5% 黑褐色土
2. 10Y R 5% 黑褐色土
3. 10Y R 5% 黑褐色土
4. 10Y R 5% 黑褐色土
5. 10Y R 5% 新褐色土
6. 10Y R 5% 黑褐色土
7. 10Y R 5% 黑色土
8. 10Y R 5% 黑褐色土
9. 10Y R 5% 黑色土
10. 10Y R 5% 黑褐色土
11. 10Y R 5% 黑褐色土
12. 10Y R 5% 黑褐色土
13. 10Y R 5% 黑褐色土
地盤 口径 192×174
底径 186×174
深さ 28

V SK028



A-B

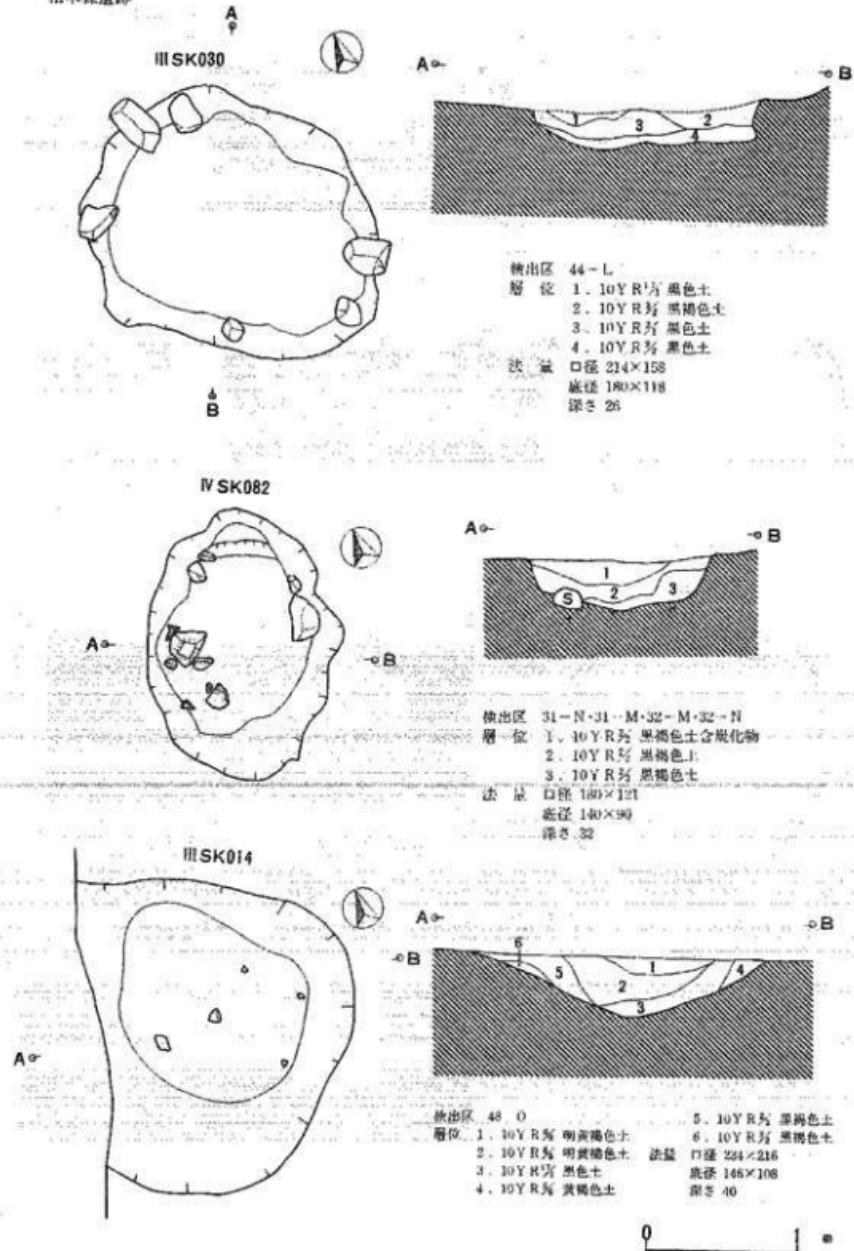


-B

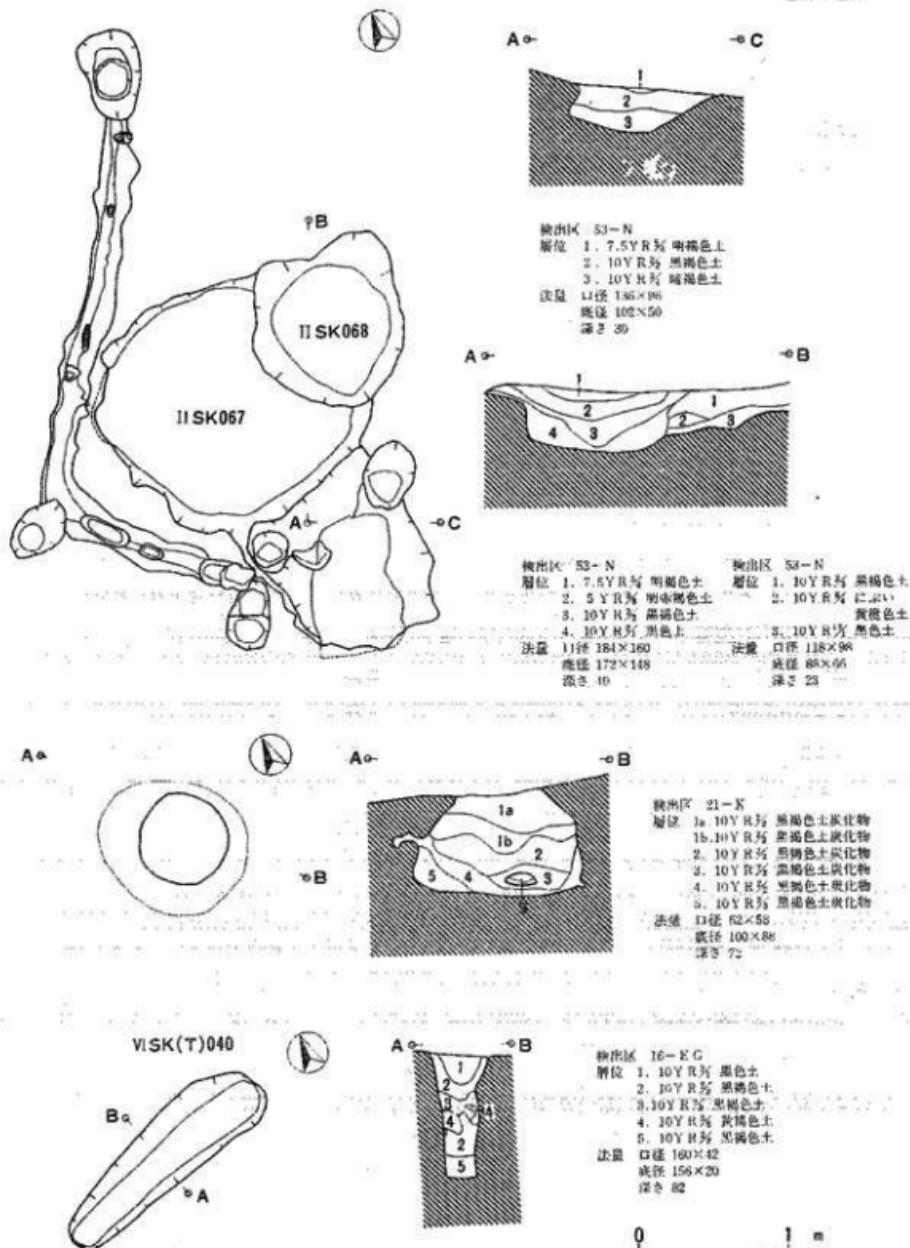
- 検出区 24-C・24-H
層位 1a 10Y R 5% 黑褐色土
1b 10Y R 5% 黑色土
2. 10Y R 5% 黑褐色土
3. 10Y R 5% 黑褐色土
4. 10Y R 5% 黑色土
5. 10Y R 5% 黑褐色土
地盤 LB 10Y R 5% 明褐色土
口径 222×150
底径 147×125
深さ 68

A-B

第15図 土壤実測図(10)



第16図 土壤実測図(II)



第17図 土壤実測図(2)

出土遺物

《土器》

土器は時期的に大きく縄文時代の土器片と平安時代の土師器片とに分けられる。縄文時代の土器片には、縄文時代早期末～前期初頭の時期、縄文時代中期、縄文時代後期前葉～中葉、縄文時代後期末葉～晩期初頭のものが含まれる。

第Ⅰ群土器、縄文時代早期末～前期初頭のものを本群とする。

第Ⅰ類土器（第18図1～13、第19図1～10、第20図1～12、第21図1～7）

表裏縄文の土器である。表面を右側、裏面を左側に置いて図示する。縄文原体は大半がLRを用いている。RLが用いられているのは、第18図1、第19図5、6、8、第20図6、7、8の7点であり、他は全てLRのものである。口縁部資料、胴部資料に分けて記述する。

《口縁部資料》（第18図）

原体の回転方向は、a横位、b縦位、c斜位（左上一右下）、d斜位（右上一左下）の4つが基本となり、そのうちのいずれか1つ乃至2つの組合せで施文される。口縁部資料の観察によれば、表面及び裏面での原体回転方向は以下の通りである。

表面

裏面

a 横位	7, 10, 11, 12	a 横位	12
b 縦位	なし	b 縦位	7, 10, 11
c 斜位（左上一右下）	… 3	c 斜位（左上一右下）	… 1, 5, 13
d 斜位（右上一左下）	… 1, 2, 4, 5, 8, 9, 13	d 斜位（右上一左下）	… 3, 8, 9
a + c or d	6, 8	a + c or d	6

また口縁部の断面形状は、口縁上端がやや外反するのが共通する特徴であるが、大きく分けると、

上端が丸味を帯び平縁となるもの ……………… 1～9

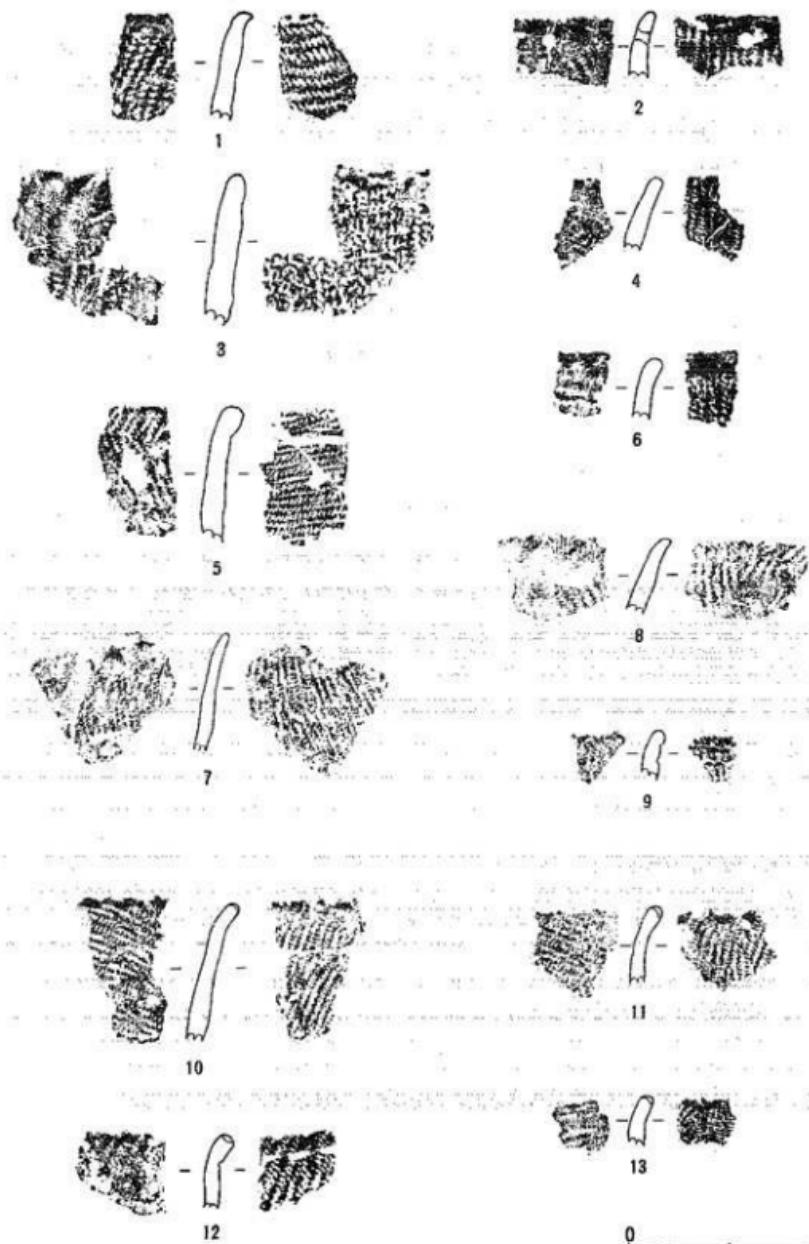
上端が丸味を帯び、10mm前後の間隔で刻目をもつもの ……………… 10～13

の2種類がある。後者では刻口の方向は右→左のものが多い。

その他口縁部の特徴としては、5, 11のように口縁直下に竹管状工具の背面を用いて浅い沈線をめぐらすものがあり、11の沈線は17mm程の間隔で押し引きされたものである。

《胴部資料》（第19図、第20図、第21図1～7）

第19図1～10の資料は、第18図9の口縁部資料とともに同一個体である。表面に地文として



第18図 出土遺物・第1群土器(1)

LR原体が、横位乃至右上—左下の方向で回転施文された後、同一原体の圧痕による文様が施される。比較的圧痕の明瞭に観察できる第19図3の資料によれば、LR原体1条に連弧状に垂下するように他のLR原体1条を絡ませ、その圧痕で文様を表出させている。土器全体の文様の復元はできないが、以上の基本的なパターンが繰り返されて器面に何段か施されている。胴部での原体の回転方向は一定していない。

第1類土器は胎土に細砂粒が混入されるが、焼成は良好で堅緻な仕上りとなっている。

第2類土器（第22図1～17）

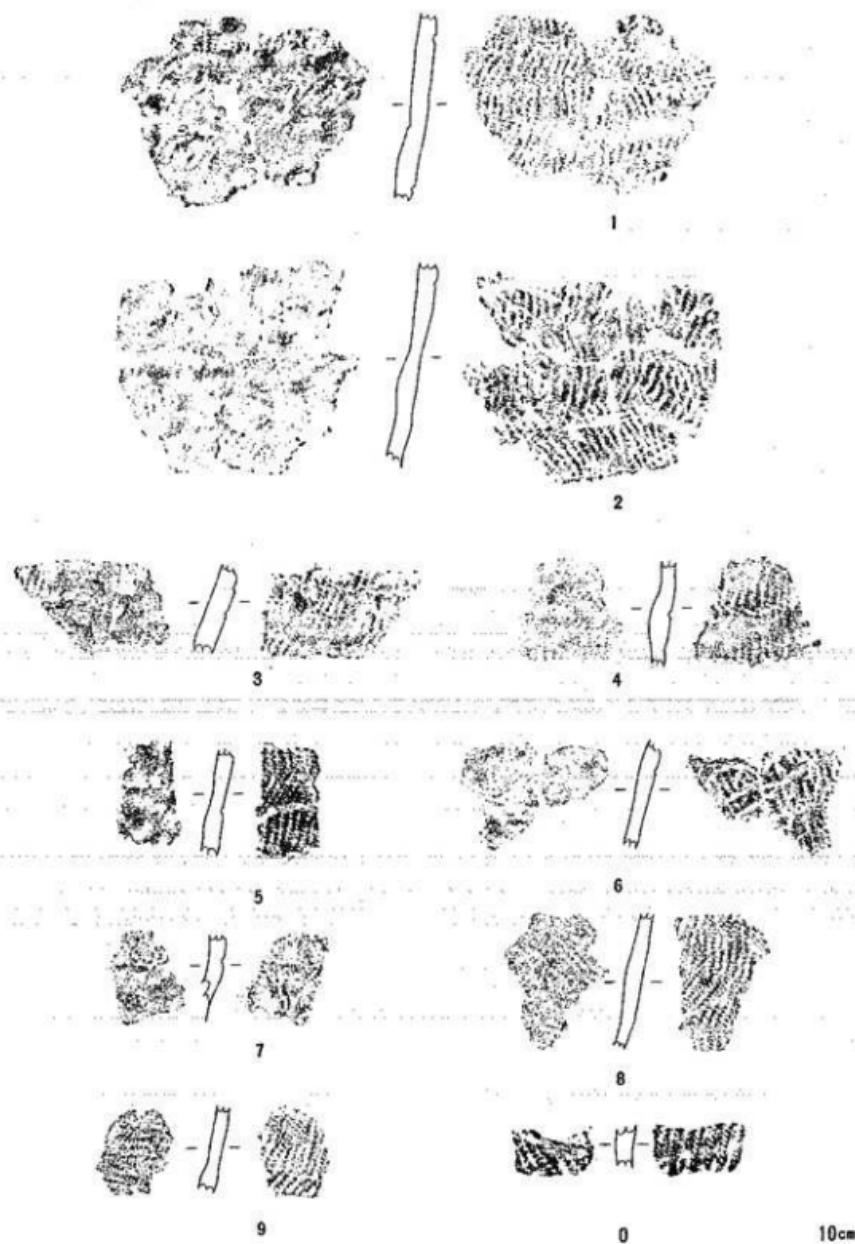
連續刺突文、ループ文、コンパス文によって文様構成される上器である。第22図1～17は同一個体である。口縁部及び胴部には4条づつの連續刺突文帯がめぐる。連續刺突文は1段の捺りの繩文原体の先端（1段→2段の際に折り曲げられる側）を器面に押し付けて施文している。施文方向は左→右である。刺突文の施文にさきだち、刺突列が最終的に条をなして施文されるよう先端の鋭い工具により4条の刺線を施文し、刺突文はその上から施されている。

ループ文は1段捺りの繩文原体RとLの2種類を用いて施文している。1段→2段の際に折り曲げられる側と逆側の先端を、Rの施文列では器面に対して左に折り曲げ、Lの施文列では右に折り曲げて施文している。施文方向は同じく右→左である。コンパス文は、幅10mm程の半截竹管状の工具を用い、左→右の方向で施文している。全体では緩い波状口縁を呈し（波頂部は左右対称ではなく右側による）、やや開き気味に立ち上り胴部が膨らむ器形を呈すると思われる。胎土はかなり砂質の土を用い製作されているが、焼成は比較的良好に行われ堅緻な仕上りになっている。

第3類土器（第22図18～28、第23図1～6）

複節の斜繩文を施した土器である。第22図18～28、第23図1～6とも同一個体である。使用されているのは、LR Lの原体である。原体は口縁部近くでは正確に構位に回転されるが、底部に近づくにつれて回転方向にずれが生じる。また第22図18～21、23、25等に顕著であるが

原体の1方の先端を2条のRの原体で縛っているため、その圧痕も器面に表われている。器形は平縁の深鉢形をとると思われるが、底部近くの資料から判断すれば底部は鈍角の尖底になると思われる。器壁には多量の纖維を混入させるが、焼成は良好で堅い。



第19図 出土遺物・第1群土器(2)

第4類土器（第23図7）

器面全体にL Rの斜繩文を施した土器である。原体の回転方向は一定していない。胎土は砂粒を多く含むが纖維は含まない。

第5類土器（第23図8、9、10）

羽状繩文を施した土器である。原体はL RとR Lのものを結束して用いている。胎土中には纖維を含み、焼成は良好なものとなっている。

第6類土器（第23図11、12）

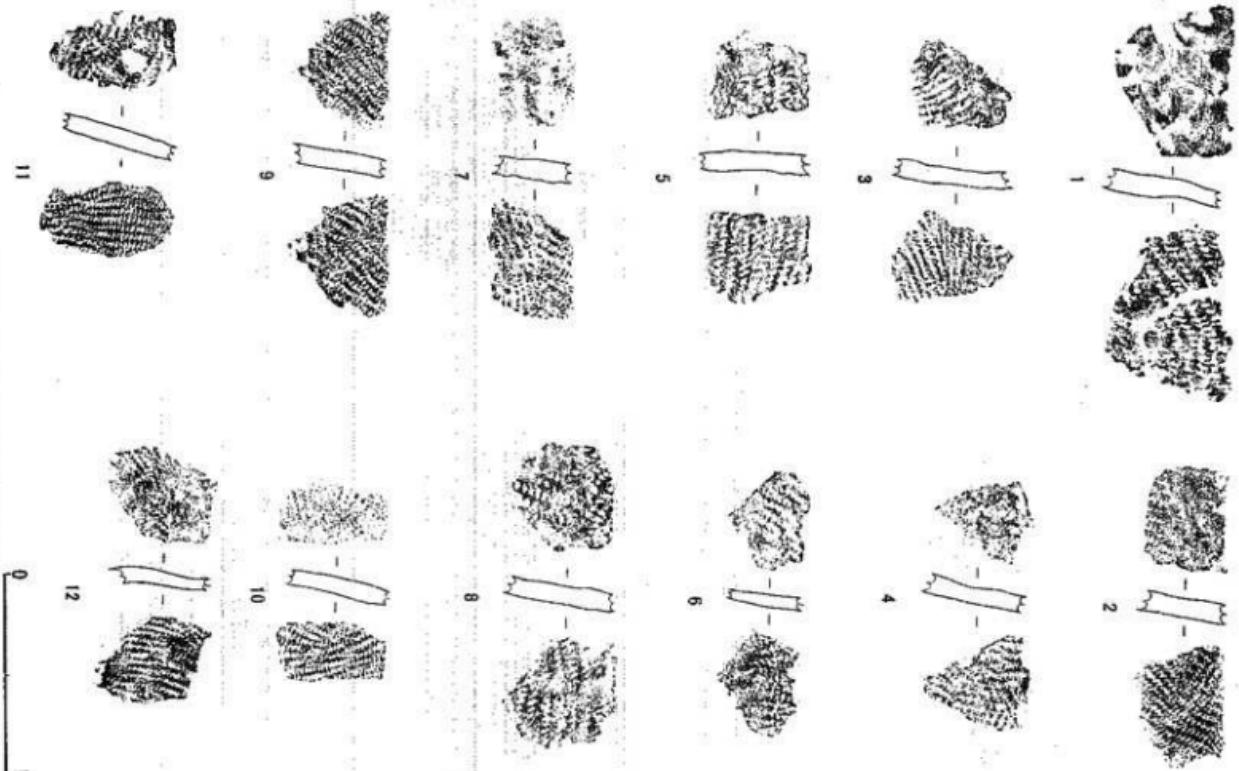
組紐の回転圧痕されたものである。

第7類土器（第23図13、14）

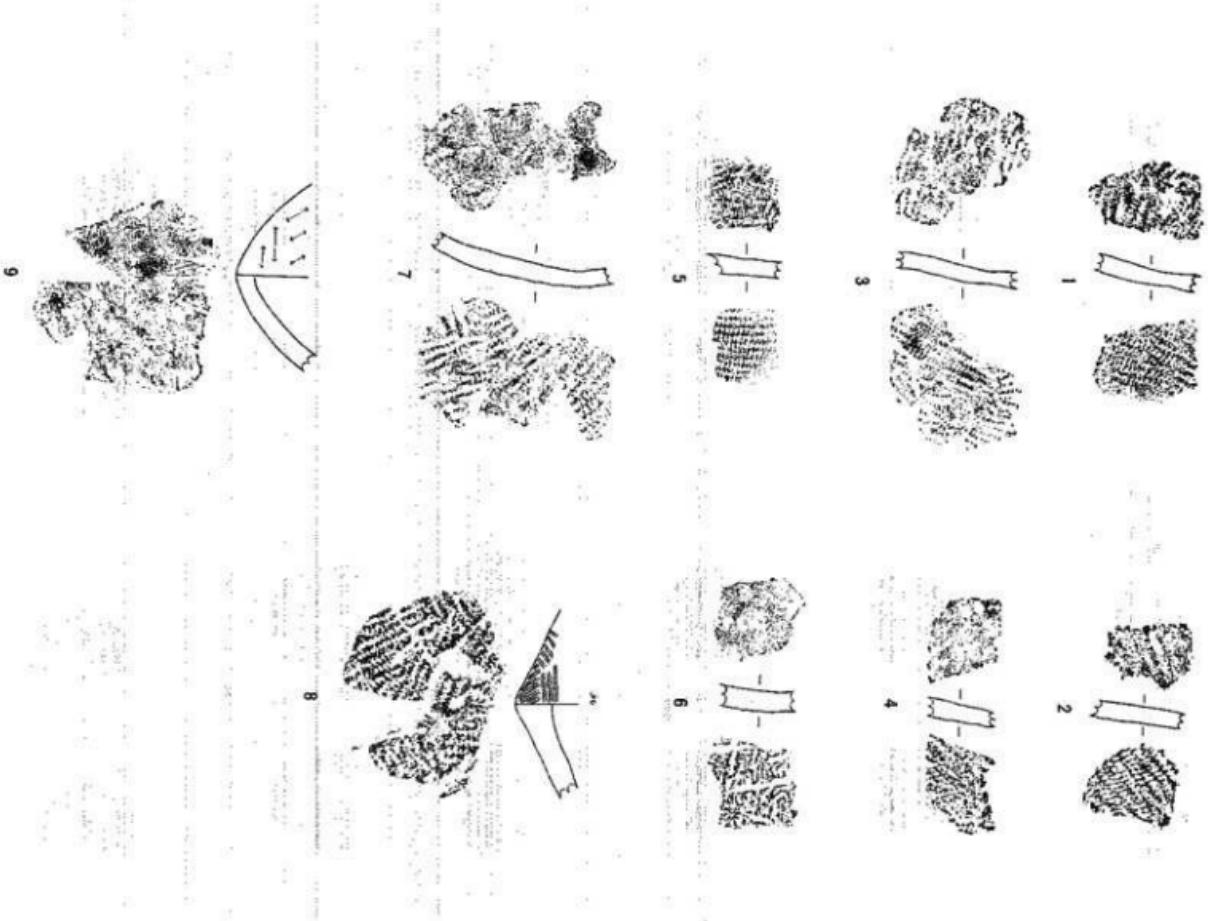
連続瓜形文の施された土器である。粘土紐による微隆起線上に上位と下位と連続して瓜形文を施している。13では微隆起線上の瓜形は向きを変えて施文されているのに対し、14では同一の方向に施文されている。胎土には纖維を含まず焼成は良好である。

第8類土器（第23図15）

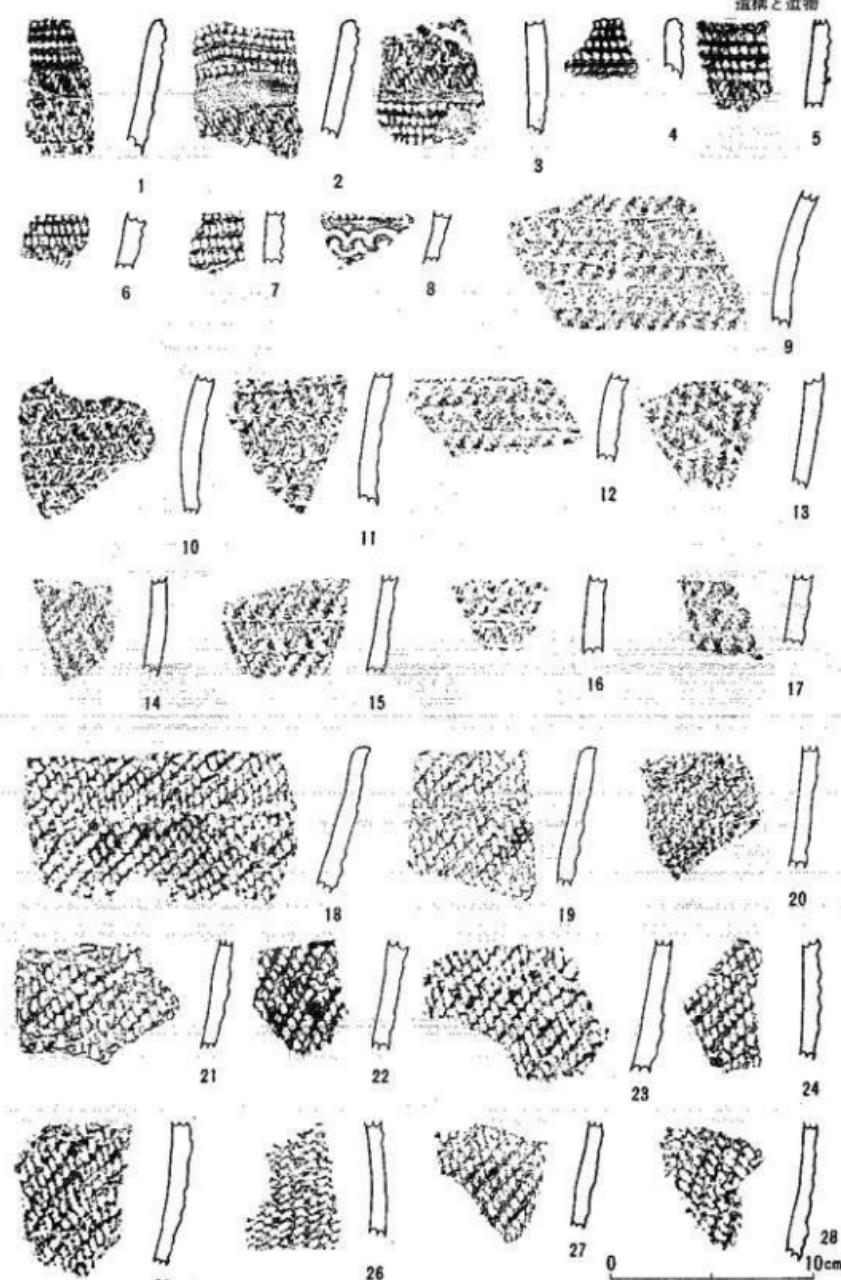
角棒状の工具により、連続して押しひき施文された土器である。押しひきの間隔は2 mm乃至3 mmである。施文方向は右→左である。胎土には僅かに纖維を含み焼成は良好である。



第20図 出土遺物・第1群土器(3)

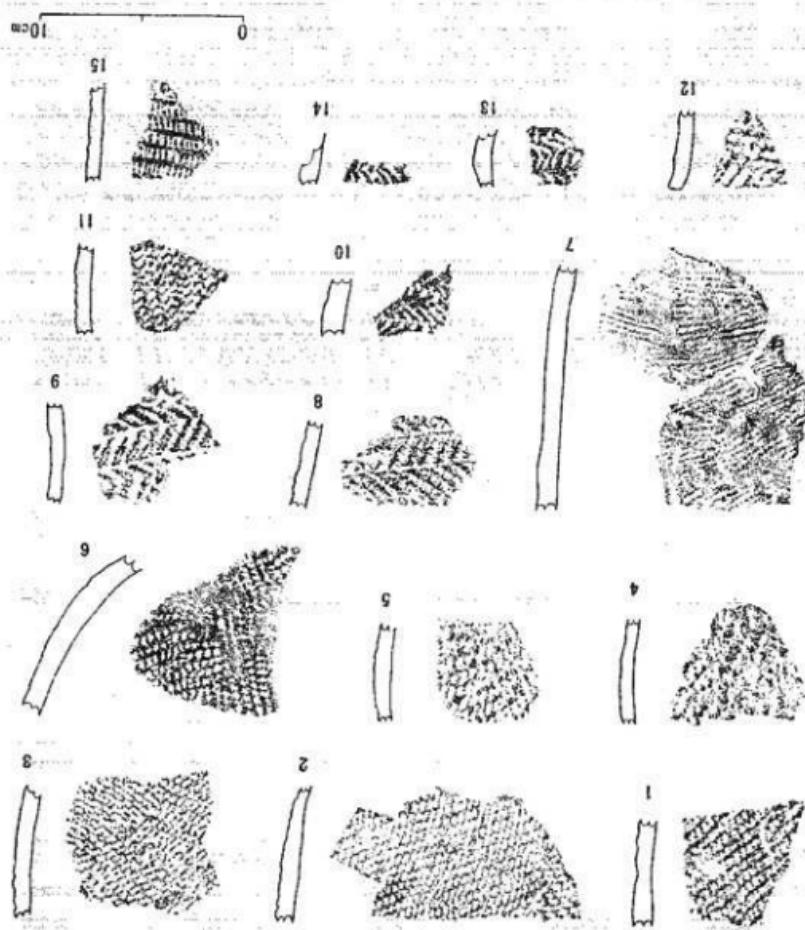


第21図 出土遺物・第1群土器(4)



第22図 出土遺物・第I群土器(5)

第23圖 出土遺物・第1新土器(6)



第II群土器 繩文時代中期のものを本群の土器とする。(第24図1~3, 第26図1)

4片とも同一個体である。弁状突起には粘土紐の隆帯を貼付している。地文としての繩文はR Lを用い、突起下部ではその上に半截竹管による沈線文が描かれる。胎土中には細砂粒が若干量混入し、焼成は良好である。

第III群上器 繩文時代後期前葉～中葉のものを本群とする。

第1類土器 (第24図4)

隆帯と沈線文による文様構成をとる土器である。口縁は波状口縁を呈し、口唇に沿って隆帯が張り巡らされ、隆帯上にはL R繩文が施される。また、波頂部から隆帯を垂下させている。隆帯で区画された中には沈線文が地文上に描かれる。胎土には細砂粒が含まれ焼成は良好である。内面は二次火熱のためか斑状に剥落している。

第2類土器 (第24図5~17)

磨消繩文手法のとられる土器である。沈線によって直線的な構図を描き、沈線による区画に沿って地文の繩文を磨消している。地文として用いられる繩文はL Rが多い。胎土中には僅かに砂粒を含み、焼成は概して良好である。

第3類土器 (第24図18~20)

無文の土器である。口縁端が大きく肥厚する。器面の無文調整は丹念なミガキによってなされている。20は山形の大きな突起となるものである。胎土は比較的精選されており焼成も良好である。

第IV群土器 繩文時代後期末葉～晩期初頭のものを本群とする。

第1類土器 (第24図21~32, 第25図1~11)

磨消繩文手法により、入組文及び連弧文等の描かれるものである。入組文の入組部分で沈線が三叉状に変化するものである。また口縁部には所謂魚尾状の突起や、山形の突起を持つものもあり、突起下の空間にも三叉文が入れられる例もある。また第25図11は、器面に蝶面状の突起を作出したものである。

第26図2は、台付の鉢形土器である。口縁には上端に刺突のある突起、矧みのある突起、山形の突起の三種類の突起が付けられる。突起下には突起を囲むように沈線の連弧文が描かれ、体上半の文様帶内では上下を区画する沈線から、互いに向き合う弧線が描かれている。地文としてはしの無節の繩文が用いられている。

第2類土器（第25図12～19、第26図3～6）

口縁部が無文化され、三叉状陰刻を基調とする模様が施される土器である。12のように玉抱きの三叉文の形狀をとる場合もある。

第26図3は、口縁部と胴部の境に屈曲部をもつ鉢形土器である。口縁部は小波状を呈し、波頂部間を連続する弧状沈線が連結する。屈曲部には短沈線列がめぐる。胴部の文様帶には磨消繩文手法による人組文が描かれる。地文として用いられている繩文はLRである。

第26図5は、口縁部からゆるい曲線を描いており鉢形土器である。口縁部の文様帶には弧状沈線と三叉状沈線が描かれる。文様帶の下限は2条の平行沈線で画される。胴部以下にはLRの繩文が回転施文される。第26図6は台付の鉢形土器である。口縁部には4単位の突起が付され突起間もまた小波状を呈する。口縁部と胴部の境には屈曲部があり、口縁部文様帶と胴部文様帶を画しているが、両文様帶ともに三叉状沈線が描かれる。胴部文様帶の下限は3条の平行沈線で画される。また台部との境にも2条の平行沈線がめぐる。台部の文様帶は3段に分けられる。上段の文様帶には枝線をもつゆるい波状沈線が描かれる。中段の文様帶には楕円形と円形の透し彫りが交互に配され、その間を波状沈線が連絡する。また、この区画の内部を三叉状の透し彫りが充填する。下段の文様帶には三叉状の沈線が施される。地文として用いられているのはLRの繩文である。

第26図6は浅鉢形の土器である。器形から推して台部の付く可能性もある。口縁部文様帶は欠失しており不明であるが、体部上半の文様帶には三叉状の沈線が円形の刺突を中心として配される。文様帶の下限は2条の平行沈線が画される。胴部以下にはしの無筋の繩文が回転施文される。

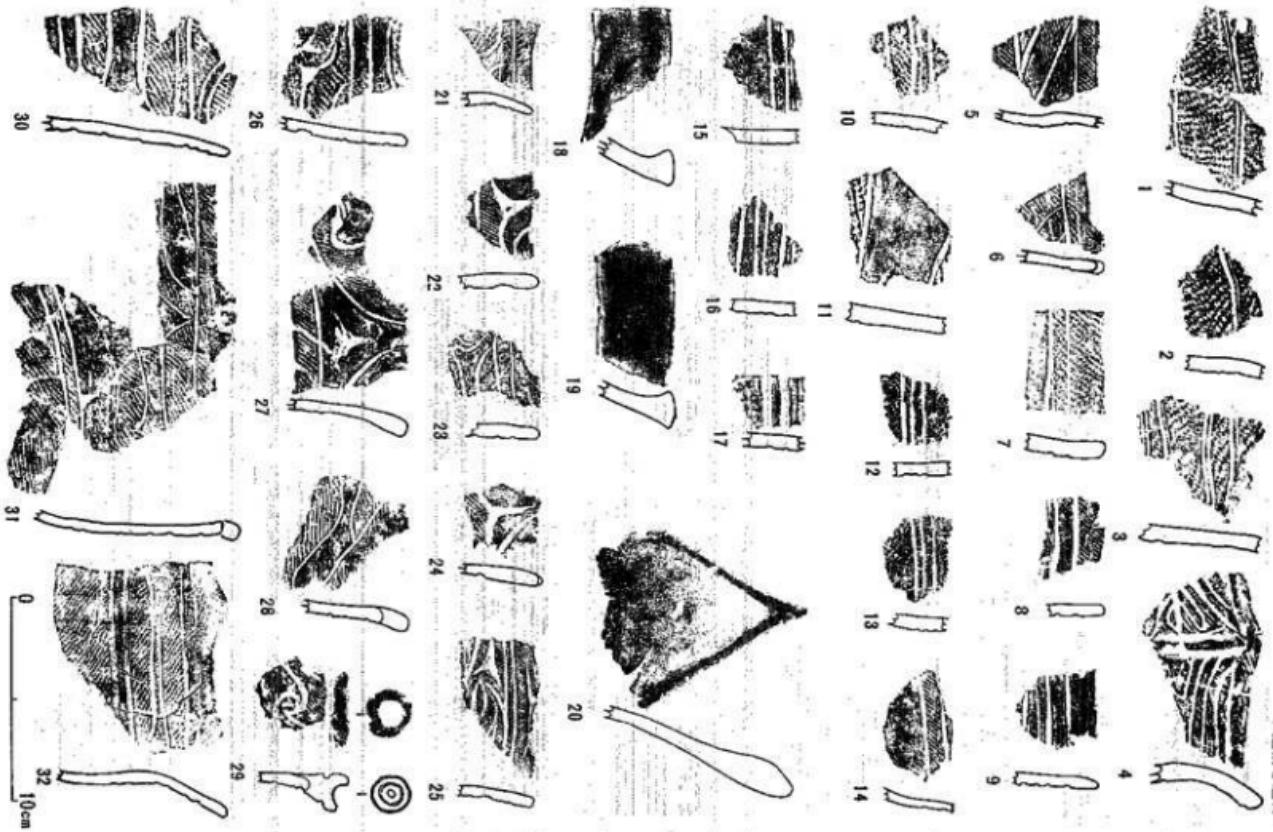
第2類土器の胎土は概して精選されており、器面も文様帶を中心に非常に研磨されている。焼成も良好で堅緻な焼き上がりになっている。

第3類土器（第25図20～24）

羊齒状文及び羊齒状文の変化した截痕列の施された土器である。明確に羊齒状文と言い得るのは22のみであり、他のものはかなり大きめの截痕列と化している。第2類土器同様胎土は精選されたものが用いられ、焼成も良好である。

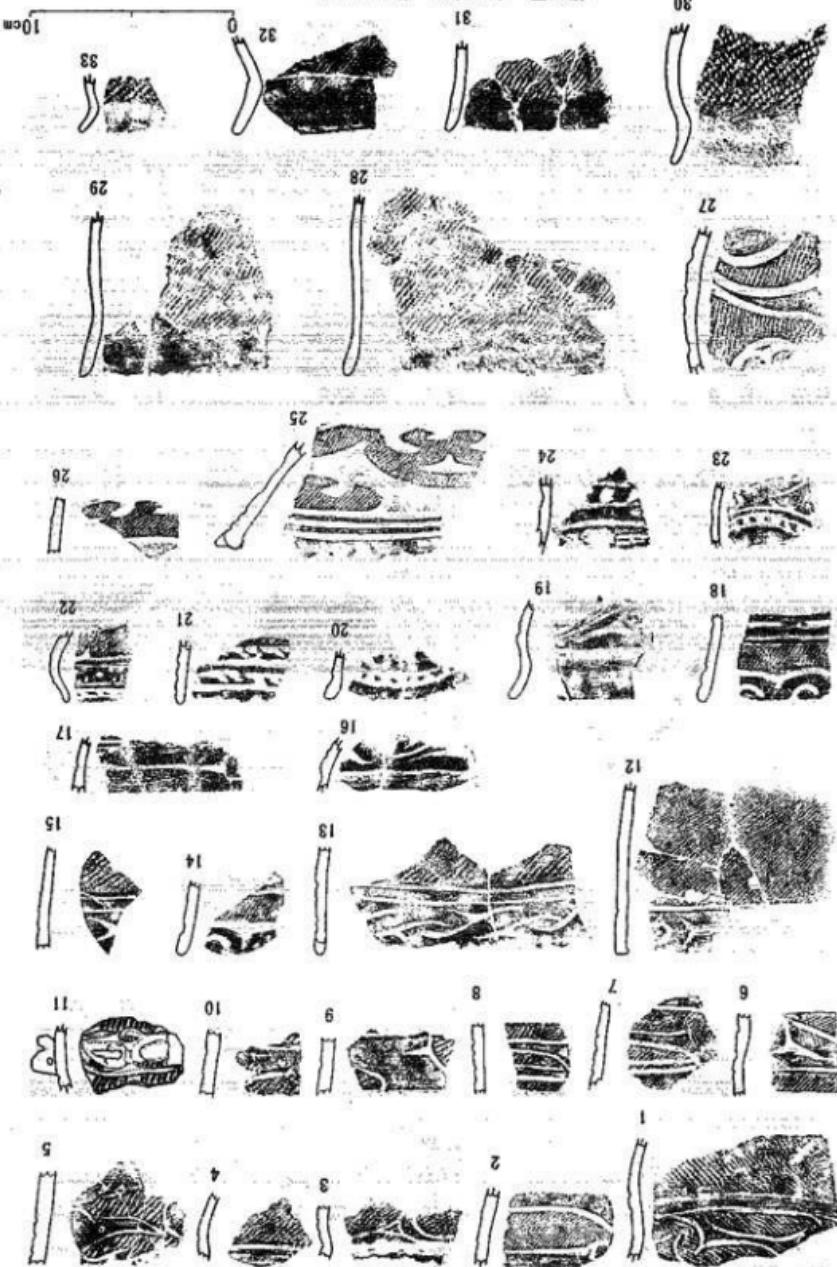
第4類土器（第25図25～27）

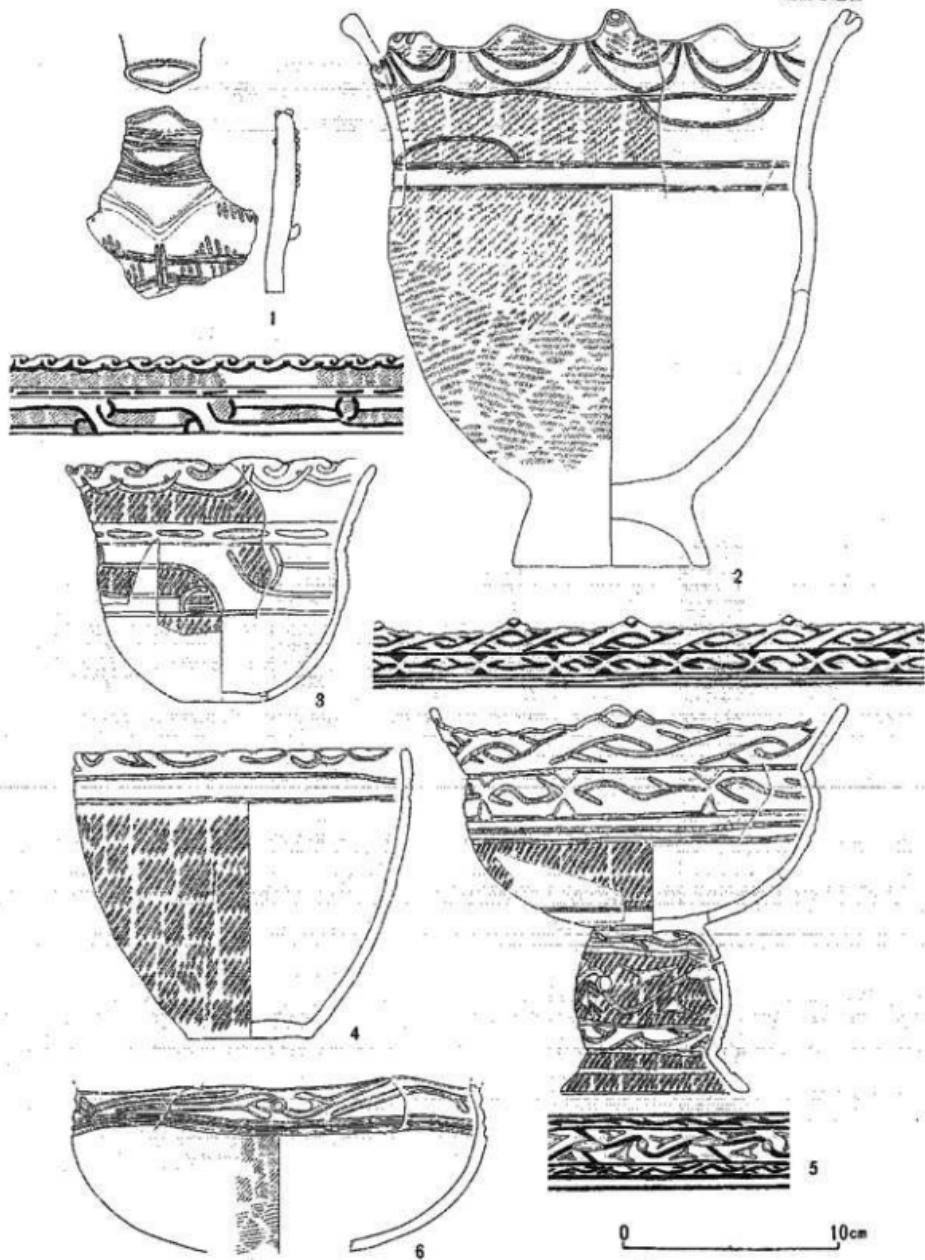
体部の磨消繩文の発達したものである。25は浅鉢形の土器である。口縁に所謂2個1対のB突起が付され、体部文様帶の上限は3条の平行沈線によって画される。27はかなり太い沈線によって磨消部分を区画したものである。地文に用いられるのは25～27ともLR繩文である。



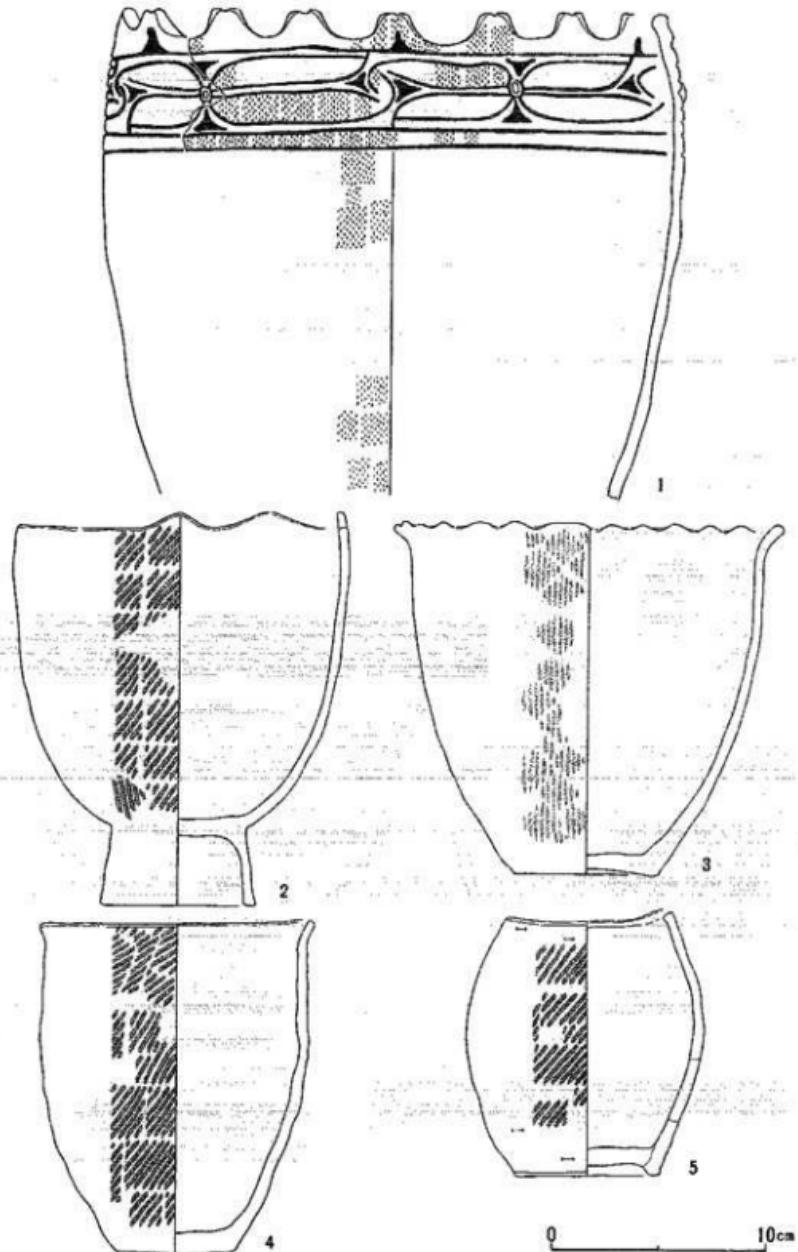
第24図 出土遺物・第II群、III群、IV群土器

第25圖 出土遺物・第IV群土器



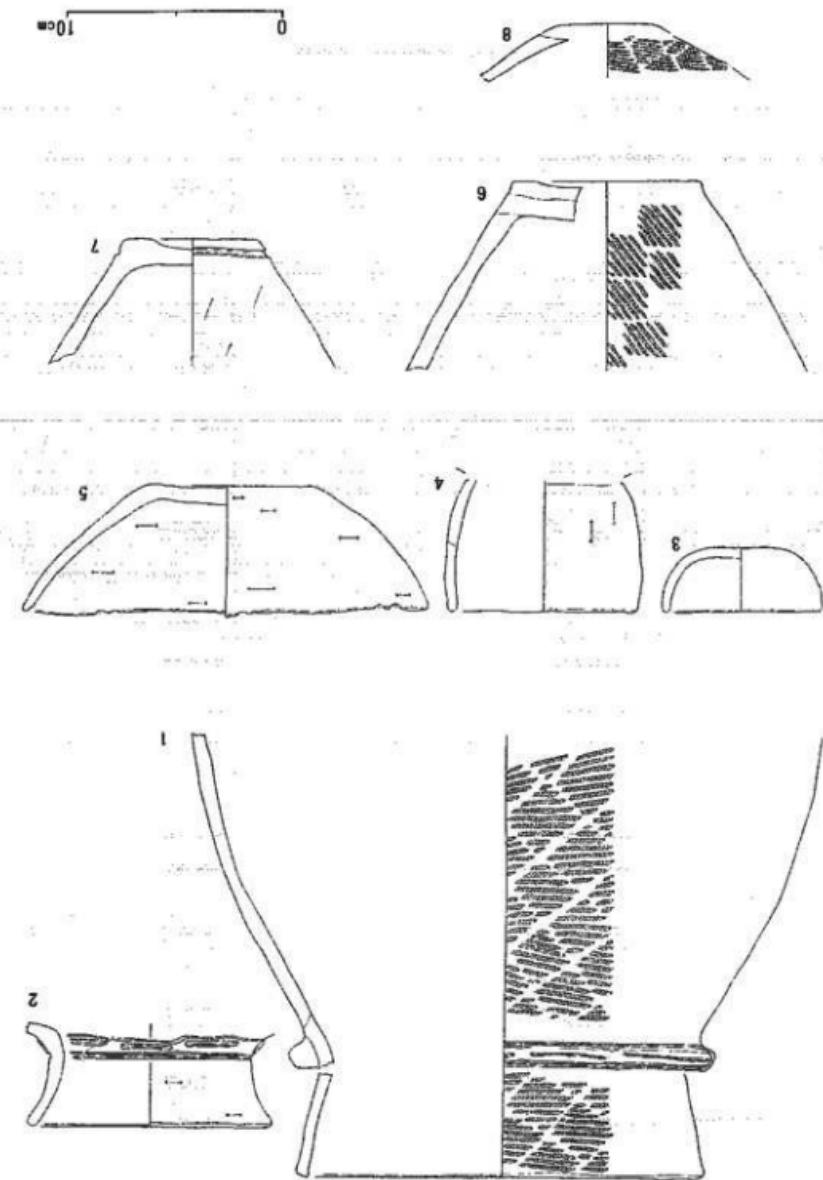


第26図 出土遺物・第II群、IV群土器

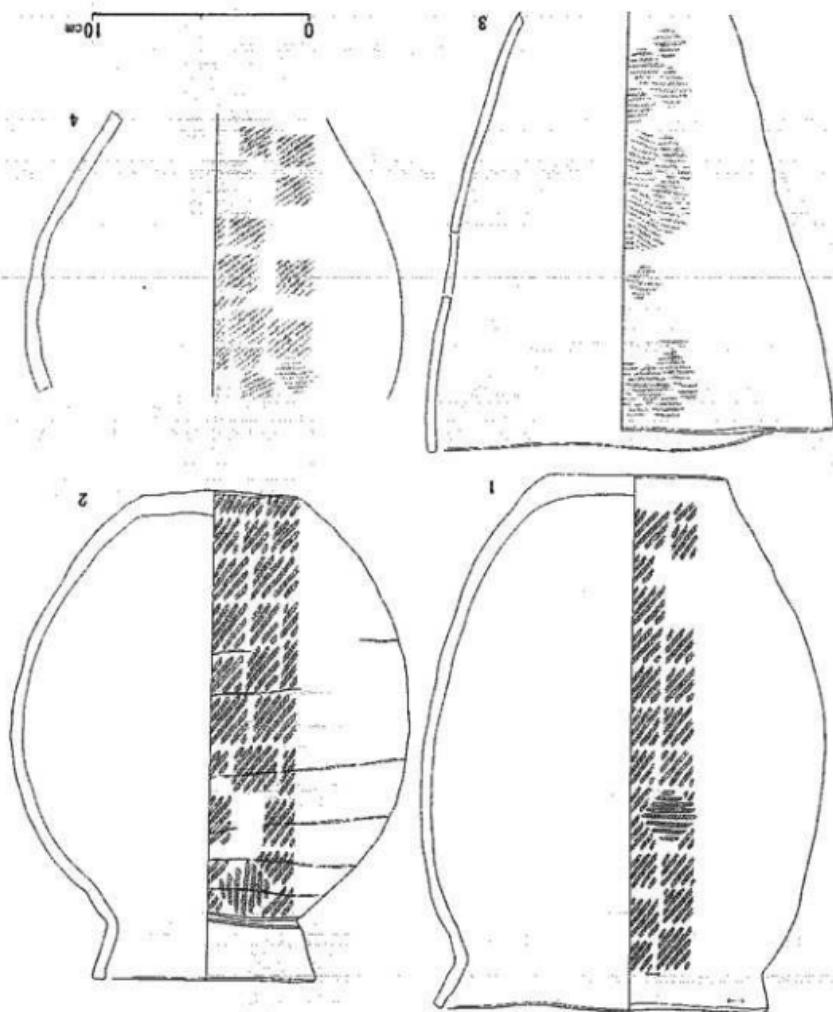


第27図 出土遺物・第IV群土器

第28图 出土漆器·第IV号土器



第29圖 出土遺物・第IV號土器



第5類土器（第27図2～5、第29図1～4、第25図28～33）

文様をもたず、縄文だけの施された土器である。器形は口付の鉢形、鉢形、壺形等がある。縄文はL Rが多いが、第27図3、第29図3、4ではLの無節の縄文が施されている。また第25図28～33のように口縁部が無文化されるものもある。胎土は砂粒を多く含む。

第6類土器（第28図1、2）

頭部に所謂メガネ状の突起をもった土器である。器形はやや広口の壺形をとる。頭部の突起上には間隔をおいて沈線がひかれる。第28図1では口縁部と体部にL Rの縄文が施される。胎土は砂粒を多く含む。

第7類土器（第28図3、4、5）

器面が無文研磨された土器である。第28図4は縱方向、第28図3、5は横方向に研磨されている。第28図5は口縁部に刻目をもつ。胎土は精選されており、焼成も良好である。

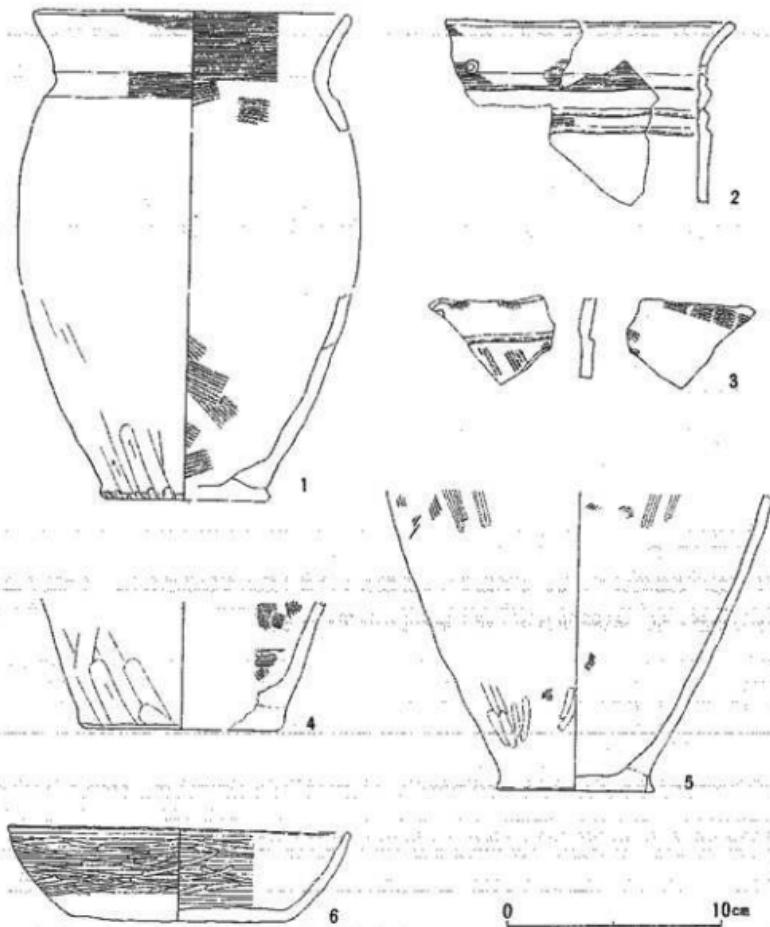
底部資料（第28図6、7、8）

鉢形土器の底部資料である。第28図6は第5類または第6類の底部と思われ、第28図7は第2類または第6類、第28図8は第2類上器のものと思われる。

第V群土器 土師器を本群の土器とする。

第1類土器（第30図1～5）

變形の土器である。1は最大径が胴部上半にくると思われるものである。外面は口縁部～頭部が横位のナデ、胴部以下が縦位のヘラケズリである。内面は口縁部が横位のナデ、胴部以下にはハケメが残る。外面頭部のナデ調整部分では、調整の結果2本の隆線が残る。また外面底部近くではヘラ状工具の押圧痕が残る。底部底面には木葉痕を残す。2は頭部に3つの段をもつ變形土器、口縁部～頭部の破片である。外面は横位のナデにより調整されるが、体部以下にはミカキが施される。内面は口縁部が横位のナデ、頭部以下にはミカキが施される。また口縁部は1個所穿孔されている。3は内外面ともにハケメを残す變形土器頭部の破片である。外面に1段屈曲部を残す。又は外面ヘラケズリ、内面バケメの残る變形土器の底部である。5は内外面ともハケメを施した後ミカキ調整を行っている。底部は意図的に張り出させたと思われ、底面も丹念なミカキ調整が行われている。第1類土器は胎土中に砂粒を若干量混入している。



第30図 出土遺物・第V群土器

第2類土器（第30図 6）

壺形の土器である。外側は主に横位のミガキ、底部及び底部近くではケズリののちナテ調整を行っている。内面は横位のミガキを施し、後に黒色処理を行っている。胎土はよく精選された粘土を用い焼成も良好である。

《石器》

出土した石器は、表採、遺構外、遺構内のもの合わせて71点である。フレイクが大半を占めるが、トランシェ様石器と見做すことの出来るもの4点、磨製石斧2点が含まれる。

トランシェ様石器

第31図1は、最大長36mm、刃部の幅27mm、刃部角57°、本体の厚さ11mmである。両面とも丁寧な調整加工が施されている。

第31図2は、縦長の剥片を用いたものである。最大長75mm、刃部の幅39mm、刃部角79°、本体の厚さ16mmである。両側縁から表裏両面に調整剝離が施されるが、片面の刃部に近い部分では素材剥片の主要剝離面が残る。刃部は素材剥片の最も古い面が用いられる。また、基部には打面として母岩の自然面がそのまま残る。

第31図3は、横長の剥片を用いたものである。最大長70mm、刃部の幅45mm、刃部角44°、本体の厚さ14mmである。素材の主要剝離面には刃部を除いて殆ど調整剝離は施されていない。表面の調整剝離は両側縁に加えられ、刃部及び基部では素材剥片の剝離面がそのまま残る。

第31図4は、基部及び刃部とも折損したものである。現存する部分での最大長65mm、刃部の推定幅40mm程、本体の厚さ22mmである。素材剥片の主要剝離面側には、右側縁からの調整剝離が施されるが、左側縁からの調整剝離はない。表面には全体に両側縁からの加工が施されている。刃部は素材の主要剝離面側からの強い力で欠損したと思われる。基部も同じく主要剝離面側からの力が加えられているが、欠損したとするよりも基部の整形のため加熱したように見える。

第31図5は、かなり肉厚の横長の剥片を用いている。この図では素材剥片の主要剝離面側を左において図示している。最大長100mm、刃部幅61mm、刃部角54°である。素材剥片の主要剝離面では専ら側縁の整形のための剝離が行われるのみである。表面では左側縁からの調整剝離が施されるが、刃部及び右側縁は調整が行われていない。

第31図6は、ヘラ状石器乃至はトランシェ様石器の基部と思われるものである。両面に調整剝離が施されている。現存する部分で最大長46mm、幅32mm、最大厚25mmである。

調整加工及び使用痕のある剥片

第31図7は打面として自然面を残している。現存部分での長さ42mm、幅50mm、厚さ13mmである。

第31図8は、表面左側縁が刃部として用いられている剥片である。最大長95mm、最大幅57mm、厚さ22mmである。表面及び主要剝離面には全く調整剝離が施されていない。

第32図1は、素材剥片の表面、左側縁に調整を加えた剥片である。また、右側縁下部にも僅かながら調整が認められる。調整は刃部を作出するような細いものではなく、粗い整形を施した程度である。刃部としては右側縁上部を用いている。主要剝離面側には何の加工も施されない。

第32図2は、素材剥片の表面、左側縁及び下縁に刃部作出のための調整剝離を加えた剥片である。右側縁は母岩の自然面をそのまま残す。主要剝離面側には何の加工も施されない。

第32図3は、構長の剥片を用い、素材剥片表面、図では左上の縁辺に刃部作出しの調整を施したものである。表面及び主要剝離面側からの剝離によって素材剥片の打面は剝除されている。

第32図4は、素材剥片の両側縁に刃部作出の調整剝離を施している。調整は主に主要剝離面側に行われる。素材剥片の先端は階段状剝離をなしている。

第32図5は、両側縁を刃部として用いた剥片である。調整剝離は全く施されていない。

第32図6は、素材剥片の両側縁、弧状に張り出した表面左側縁と、同じく弧状に内湾した右側縁部分を刃部として用いている。若干左側縁上部に調整剝離が施される。

磨製石斧

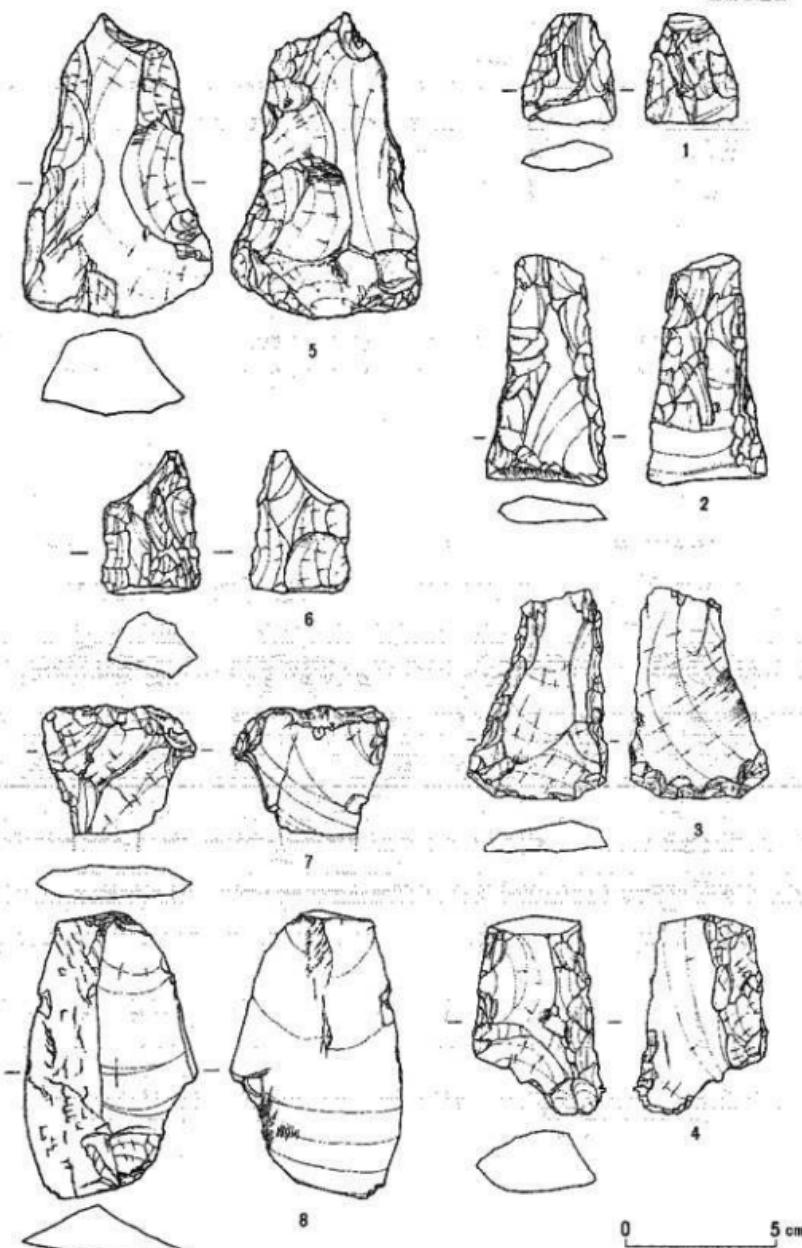
第32図7は、刃部と基部の幅が殆ど差のない平面形が短冊形の磨製石斧である。刃部は緩い弧を描き、刃部を正面に見た場合も直線とならず緩く湾曲する。側縁部の陵線は不明瞭で、断面形は階段形を呈する。

第32図8は、基部の尖る楔形の磨製石斧である。刃部は比較的強い弧を描き、正面に見た場合直線をなす。側縁は陵線が比較的明瞭に残る。

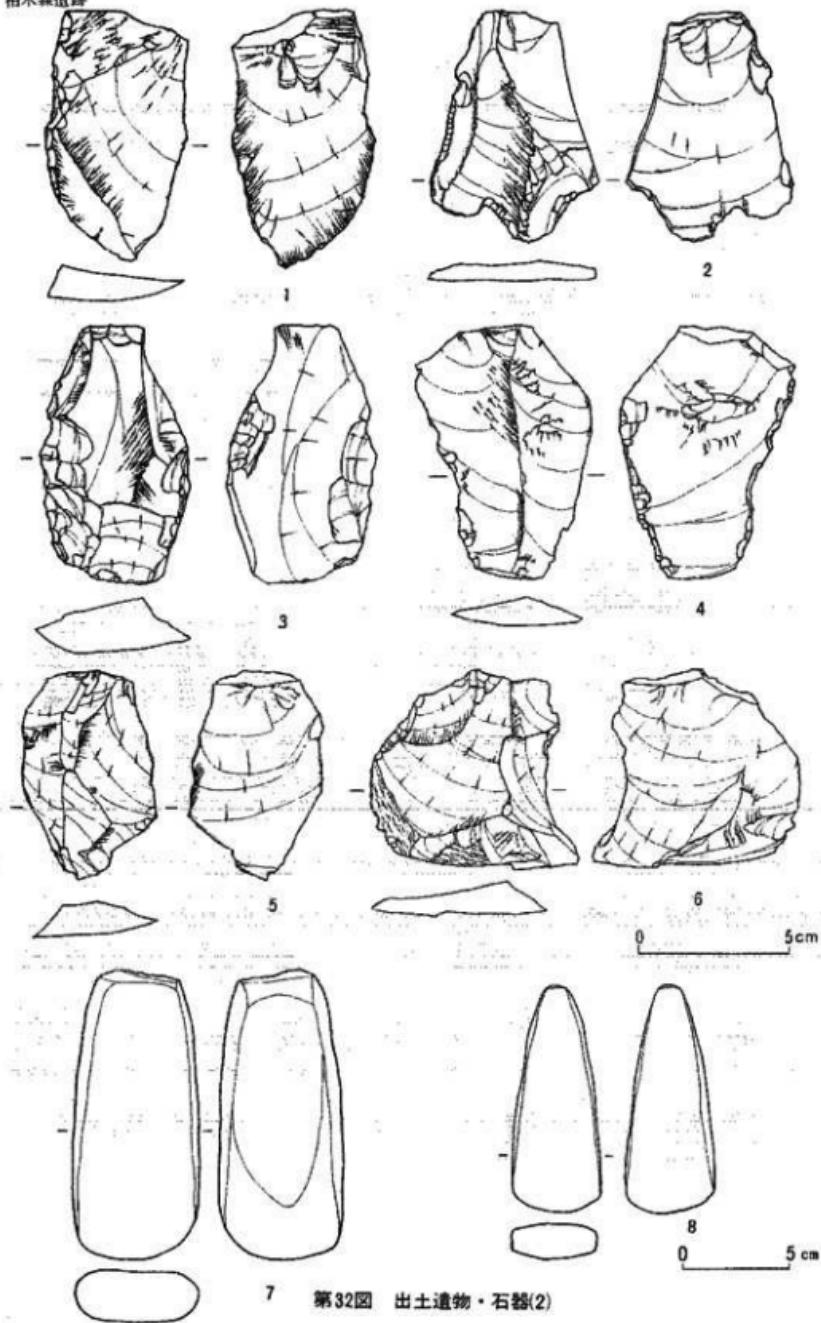
第1表 石器石質・出土地点一覧表

番号	石質	出土地点	番号	石質	出土地点
31-1	頁岩	表 採	32-1	頁岩	表 採
31-2	頁岩	表 採	32-2	頁岩	34-J
31-3	頁岩	30-H	32-3	頁岩	表 採
31-4	頁岩	31-F	32-4	頁岩	80-H
31-5	頁岩	表 採	32-5	頁岩	51-L
31-6	頁岩	44-L	32-6	硬質泥岩	31-N
31-7	頁岩	表 採	32-7	花崗岩	34-G
31-8	頁岩	60-J	32-8	流紋岩	59-J

*表採としたものは重機による表土除去の際出土したものである。



第31図 出土遺物・石器(1)



第32図 出土遺物・石器(2)

6. まとめ

今回柏木森遺跡は、のべ108日間にわたっておよそ13,500m²を調査している。検出した遺構は、溝跡、道路跡、円形土壙、Tピット、擡立柱建物跡であり、遺物は縄文時代早期末葉～前期初頭、中期、後期前葉～中葉、晚期初頭、古代の各時期のものを出土している。広大な調査面積に比較して、検出遺構、出土遺物とも調査以前に予想した程の成果を挙げ得なかつたが、2、3の検討すべき問題を提示することは出来たと思われる。ここでは、調査期間、整理期間を通して気付いたそれら若干の問題を整理してまとめてかえたい。

1) 土壙について

本遺跡からは前述のように縄文時代各期、平安時代の遺物が出土している。このうち縄文時代晩期の遺物によって時期の特定が可能な遺構は60基に及ぶ土壙である。

検出された土壙は、その形態がおよそ円形である。径はおよそ70cmから200cmの範囲内に収まる。断面形は、検出面での開口部よりも壙底部がやや広くなる末広がりのものと、略方形のものとの二種があるが、構築面は検出面よりもかなり上位にあつたと思われ。本米の断面形状は詳らかではない。覆土はおよそ自然堆積の状態を呈する。土壙内からの出土遺物は少なく、まれに完形または完形に近い土器を出土することがある。

以上のような形態をもつ土壙は調査区内に群をなして存在する。1群は調査区の中央部にあり、他の1群は調査区の北側を東西に横断する農道の両側に位置する。後者はまた2～3群に分けることも可能である。各群は各々10基前後の土壙からなっている。群在する土壙群は、群内で土壙どおしの新田関係が認められる場合があり、土壙覆土内に黄褐色土のレンズ状堆積の認められるものを出、認められないものを新として把えることができる。

土壙の廃絶が自然に任せたことをもって墓壙であることを否定し、即ち貯蔵穴とすることはできないが、仮に貯蔵穴とした場合遺跡全体をどのように復元することができるだろうか。

貯蔵に供された食料としては、植物性の食料を考えられており、主にドングリ・クリ等の出土例が多い。これらの堅果類は春には発芽してしまうことからその貯蔵は1冬に限られる。また採集時期も秋の1時期に限られている。採集時期が限られていることは、その時期に大量の堅果類の貯蔵の必要が生じることを意味する。おそらく冬期間の食料とされるものであるから、それは膨大な量にのぼったと思われる。これらの堅果類が、その採集地から居住地である集落へいちどきに運ばれ貯蔵された場合もあるが、採集地近辺に仮に貯蔵し、後に居住地である集落へ運ばれた場合もあると思われる。居住地と採集地の距離が離れている場合、この様な

方策は容易にとられたと思われる。本遺跡に構築された土壙は、そのような假の貯蔵を目的として構築された貯蔵穴ではないかと考えたい。

2. 遺物

第1群 第1類～第3類土器について

第1群土器は大まかに縄文時代早期末葉～前期初頭に時期比定し得る土器をあてている。細くは第1類～第8類まで分類しているが、ここでは比較的資料の豊富な第1類～第3類の土器について特徴を要約し、型式的な内容を吟味してみたい。

第1類土器

- ①平縁（小波状を含む）の深鉢形の器形を呈する。（底部形状は不明）
- ②砂粒を混入させるが、植物性纖維の混入はない。
- ③口唇部がやや外反し、刻目を施す場合もある。
- ④器表面には斜行縄文が施され、原体の側面圧痕による文様が施される場合もある。
- ⑤裏面には器表面と同じ原体を用いて斜行縄文が施される。

第2類土器

- ①器形は緩い波頂部をもち、胴部に僅かにカーブをもつ深鉢形を呈する（底部形状は不明）。
- ②胎土には砂粒を混入させるが、植物性纖維の混入はない。
- ③口縁部～体部にかけて原体先端による刺突列、ループ文、コンバス文等の文様帯が重なり

合ふ。

第3類土器

- ①器形は平縁の深鉢状を呈し、底部形状は鈍角の尖底を呈する。
- ②胎土には多量の植物性纖維を混入する。
- ③器表面には原体先端を轉った複節の斜縄文が施される。

以上が本遺跡出土第1群土器中第1類～第3類の大まかな特徴を列記したものである。

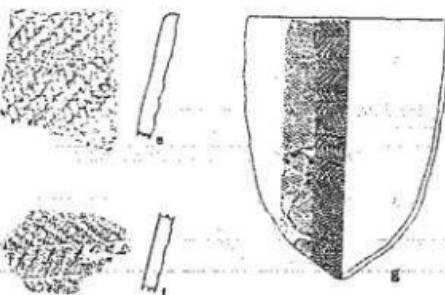
東北地方北部での縄文時代早期後半から前期初頭にかけての土器編年は、青森県内の出土資料をもとにおおむね以下のように理解されている。

(日ヶ久保式) 赤御堂式 ⇌ 早稻田5類 ⇌ 長七谷地第Ⅲ群 ⇌ 早稻田6類C ⇌ 早稻田6類a b ⇌ 表館式
《尾紋式》

この日ヶ久保式から表館式に至る編年は、從米赤御堂式→早畠田5類→早畠田6類→表館式という大まかな型式変化の把握がされていた。しかし、早畠田6類の内容が細分される可能性を含むものであったため、長七谷地貝塚の調査によって指摘された第Ⅲ群土器の位置づけと、それによって分離された早畠田6類の細分型式が設定され、より細かに型式の変化が辿れるようになつたものである。長七谷地貝塚の報告の中では各々の型式について細かな分析がなされているが、その推移を1. 施文上の特徴 2. 器形 3. 胎土の3つの点に焦点を絞り大まかに見た場合以下の表のように要約できる。

第2表 縄文時代早期末～前期初頭土器編年（青森県内）

	1. 施文上の特徴	2. 器 形	3. 胎 土
（日ヶ久保式） 赤御堂式	単節の表裏繩文 一部に条痕文	尖底深鉢	織維含まず
早畠田5類 《長七谷地第Ⅲ群b類》	特殊原体（0段多条、附加条）による繩文	平底深鉢	織維混入
長七谷地第Ⅲ群	0段多条の羽状繩文 横走繩文	丸底深鉢	織維混入
早畠田6類C	単節・複節 0段多条の糾繩文	丸底・尖底の深鉢	織維混入
早畠田6類a.b 《尾鉗式》	簾竹管の押しひき文	尖底深鉢	織維混入
表 館 式	ループ文・コンバス文	平底深鉢、汲状口縁	不 明

	鹿角地域内出土土器	備考
赤御堂式		a. 柏木森遺跡第1群 b. 第1類土器
長七谷地第4群		c. 宮内日遺跡出土 d. Lの0段多条原体 R L ○羽状繩文 ○横縞を含む
早稻田6類 c		e. 柏木森遺跡第1群 第3類土器 f. 柏木森遺跡第1群 第5類土器 g. 上高岡W遺跡出土 ○HLH, LRL結束第1種 ○羽状繩文 ○横縞を含む
早稻田6類 a・b		h. 柏木森遺跡第1群 第3類土器
表館式		i. 柏木森遺跡第1群 j. 第2類土器

第33図 鹿角地域内早期末～前期初頭出土土器

このような縄文時代早期後半～前期初頭の型式変化の中に、本遺跡出土の第Ⅰ群第1類土器、第2類土器、第3類土器を位置づけるとするならば、第1類土器は赤御堂式、第2類土器は表館式、第3類土器は早稻田6類Cにそれぞれ相当させ得る。また本遺跡出土の資料では極く僅かしか認められないが、第8類とした押しひき文の施された土器は早稻田6類のa bに相当させることができ、第5類とした羽状縄文の施された土器は第3類と同様早稻田6類Cにあてることができると思われる。

秋田県内の該期の資料は未だ出土例が少なく、青森県内の幅年に充當させるにも甚だ不充分な状況であるが、比較的調査が綿密に行われている鹿角地域内で（日ヶ久保式）赤御堂式から表館式に至る型式に出土資料を対比させれば第33回のようになる。このうち、赤御堂式に相当し得る資料は鹿角地域内で比較的多く出土しており、本遺跡の他に大地平遺跡、上萬岡IV遺跡、猿ヶ平II遺跡等でも出土している。大地平遺跡出土資料の中には表裏縄文の他に条痕文を一部に施す資料も含まれ、青森県内の資料と共通する特徴をもつ。また赤御堂式土器の地域性として岩手県内の相当型式（崎山弁天資料）には胎土に纖維を含むことが指摘されているが、鹿角地域内の出土資料が纖維を含まないことも青森県内の資料と共通するところである。この他、表館式に相当する資料は妻の神II遺跡からも出土している。

第II群土器について

本遺跡出土の第II群土器は、縄文時代中期のものをあてた。この同一個体4片の土器は弁状突起をもつこと、粘土紐の貼付文、沈線による所謂肋骨文と呼ばれる文様の施されることから円筒上層a式に比定することが可能である。

第III群土器について

本遺跡出土の第III群土器は、縄文時代前葉～中葉までのものを含む。

第1類土器は出土片数が1片のみであるが、波状口縁を呈し粘土紐の貼付による隆帯と、その凹凸内に充填される沈線文によって特徴づけられる土器である。県内での類似の土器は、鹿角市飛鳥平遺跡、同市北ノ林II遺跡、大館市鷺ヶ長根遺跡等で出土している。これらの遺跡から出土している土器は口縁部に粘土紐隆帯による文様帶があり、体部以下の文様帶とが画然としていることが共通する特徴である。青森県内でも近年同様の資料の増加からその位置づけが問題となり、従来の十腹内I式の範疇から分離して前十腹内I式として独立させて位置づける見方がされるようになってきている。同じように大館市鷺ヶ長根遺跡の報告でも前十腹内I式として縄文時代後期前葉に位置づけている。しかしながらその型式的な内容、さらには地域性、系統上の問題等未だ瞭然とはされず、今後明らかにすべき点が多い。

第2類土器は、沈線文と磨消繩文による模様の描かれることを特徴とする。広い意味では十腰内I式の中に見えられると思われるが、曲線的なモチーフが認められず、沈線が著しく平行線化していることから十腰内I式の中でもより新しい部分を占める土器群かとも思われる。

第3類土器は器面が無文調整されることを特徴とする。また、口唇部がかなり肥厚していることも特徴である。十腰内II式に比定することができる。

第IV群土器について

第IV群土器は、繩文時代晩期初頭の土器である。

第1類土器は東北地方北部の後期末葉からの系統上に位置づけられる入組文系の土器である。

特徴として口縁部によく発達した魚尾状の突起、体部文様帶内に磨消繩文手法をもって描かれる入組文、弧状の区画文をあげることができる。この段階では三叉文の未だ未発達なものも含まれるが、魚尾状の突起の下部空間に三叉文が充填される場合や、入組文の入組部分に三叉文が生じる場合がある。

第2類土器になると、三叉文が独立した陰刻文として施されるようになる。三叉文の施される文様帶も口縁部に限定され、無文調査されるようになる。以上のことから第1類土器を大洞B₃式、第2類土器を大洞B₃式に比定することが可能である。

第3類土器は羊齒文をメルクマールとする大洞BC式に比定が可能である。

第4類土器は听讀雲形文として内部の文様の発達したものである。口縁部の文様帶は2~3条の平行沈線と化している。大洞C₁式に比定することができる。

第5類~第7類土器は、晩期の諸型式に伴った土器として理解できる土器群である。類別毎の型式比定はできないが、第27図2のような合付の鉢形土器は比較的古い時期に伴つたものであろうし、第6類の頸部にメガネ状の突起文を付した土器はより新しい時期に伴つたものと考えられる。

第V群土器について

第1類の壺形の土器は頸部に段差が大きな屈曲部をもち、口頸部の比較的長いことを特徴とする。また器面調整にハケメを残すことも特徴である。第2類とした壺形土器は、器面調整はミガキによって行われ、内面が黒色処理されることを特徴とする。このような特徴をもつた土器は比較的古い様相を示すものであり、鳥野遺跡の出土資料が本遺跡出土の資料に近い。鳥野遺跡の報告では8世紀の後半に位置づけている。

発掘調査参加者

安保 富蔵	成田 惣太	松岡 武男	浅石 三郎	小田島政美	松岡 徳良
黒沢 猛	川又 鶴治	金沢 武	田中慶太郎	菊地 信広	福垣 弘定
浅石 松蔵	阿部 行夫	工藤 幸作	工藤 与八	井上 政治	奥村 一之
梅戸正次郎	川又 秀也	川又 武司	三ヶ田昌人		
安保テイ子	津江 ミナ	成田 キヌ	井上 ミヲ	嵐山 スエ	嵐山千代美
工藤 イネ	津江 良子	川村千鶴子	佐藤 シミ	阿部 子エ	佐藤アヤ子
阿部 テル	嵐山 トヨ	似鳥 キサ	柳沢 テル	柳沢 敏江	金田一實津子
石井ヨシエ	関 キワ	川又 ヨリ	松岡 テイ	石川 リサ	金沢 ミキ
小田島カチ	信賀 正子	川村 ツエ	川又 澄江	安保 幸子	豊田 与里
浅石恵留子	相川 金子	川又 ヤエ	兎沢キヨエ	中西 リチ	相川 リヨ
賀川 政子	石鳥谷妙子	柳沢 ヤス	三ヶ田孝子	兎沢 キヌ	田中ヨシエ
木村サチ子	佐藤 ツマ	木村 敏子	木村 テル	作山 ミエ	苗代沢ノブ
津江 和子	金沢ハルエ	小田島礼子	嵐山 陽子	阿部 シガ	小田島キク
齊藤キヨエ	浅石 タミ	浅石 ナツ	井上トミエ	工藤 スミ	工藤 キヌ
工藤 イツ	阿部 シマ	佐藤 キエ	松岡トキヨ	高畠 サキ	阿部 シモ
三上 美子	三上 トヨ	安保 櫻	柳沢 ヤス	奥村 初江	



図版 1

柏木森遺跡航空写真



柏木森遺跡調査前



柏木森遺跡調査風景



柏木森遺跡北端調査区



図版 3

柏木森遺跡南端調査区

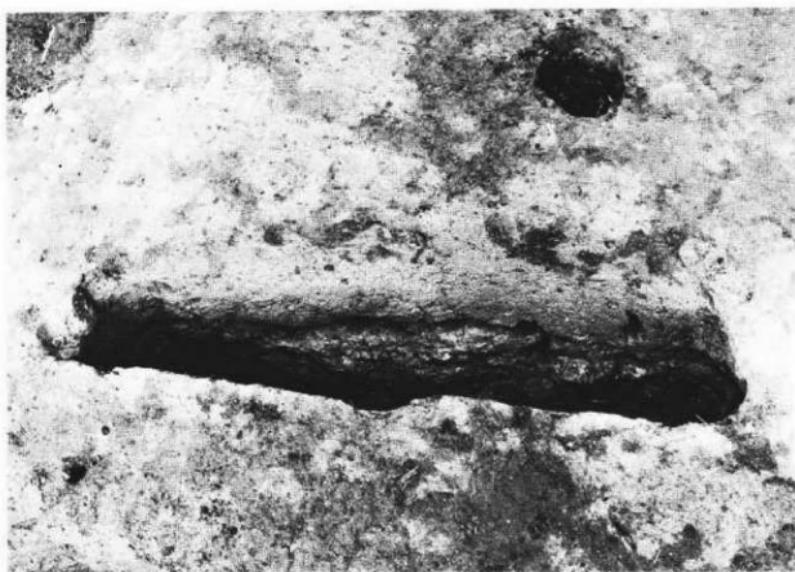


遺跡基本層序



図版 4

縄文時代早期末土器底部出土状態



VISK (T) 040



図版 5

II SK 064 土器出土状態

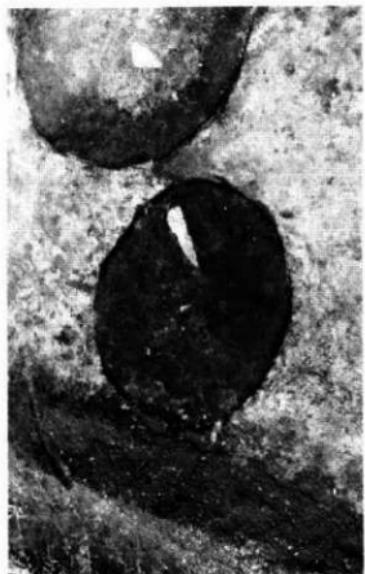


II SK 001 土器出土状態



图版 6

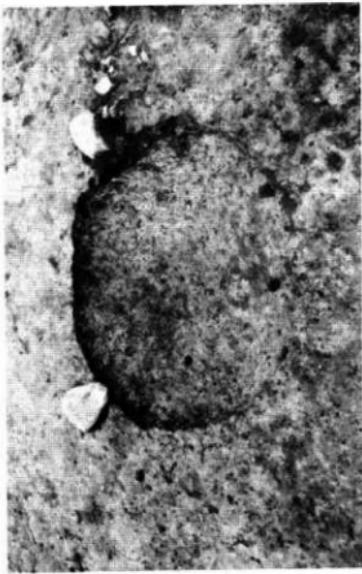
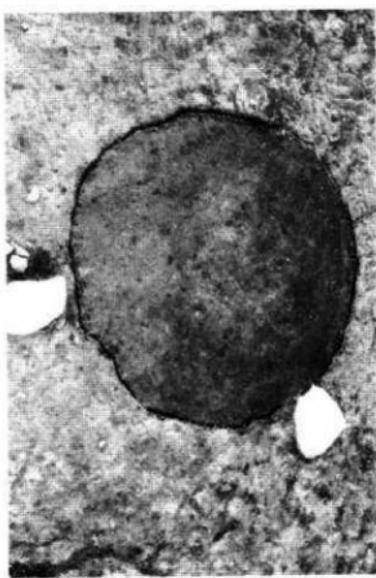
III SK 011 土器出土状態



図版 7

上：調査区中央部土壤群

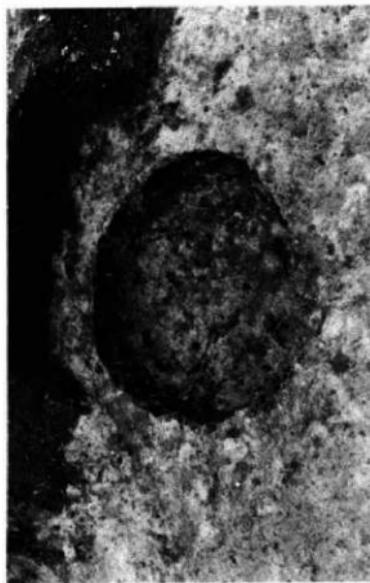
下：III SK 001



图版 8

上 : III SK 002

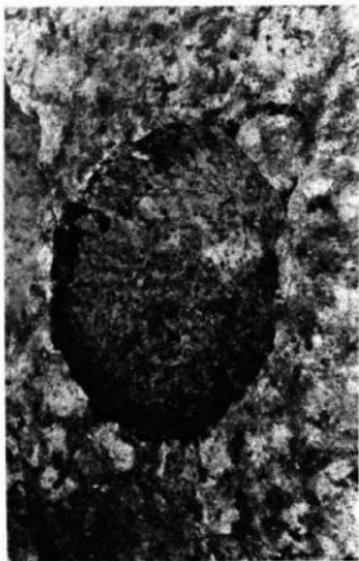
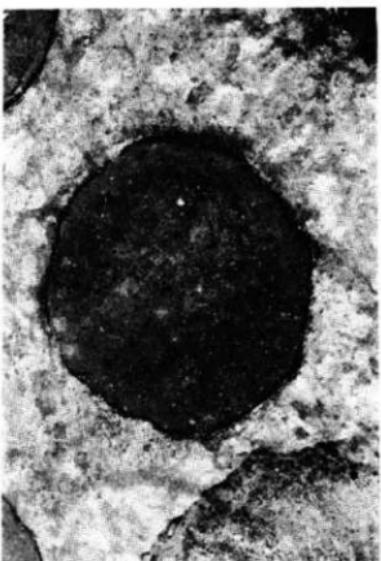
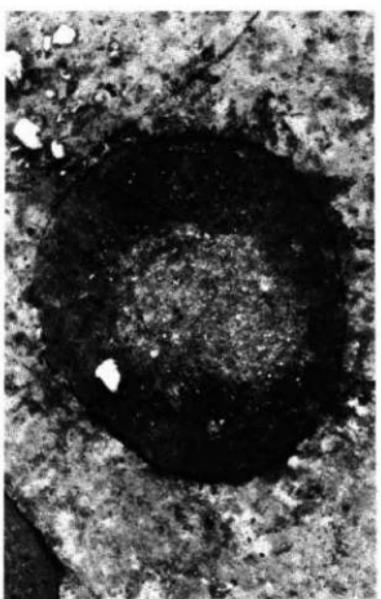
下 : III SK 003



図版 9

上 : III SK 005

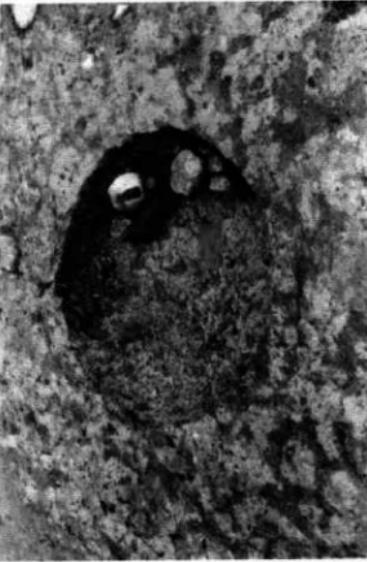
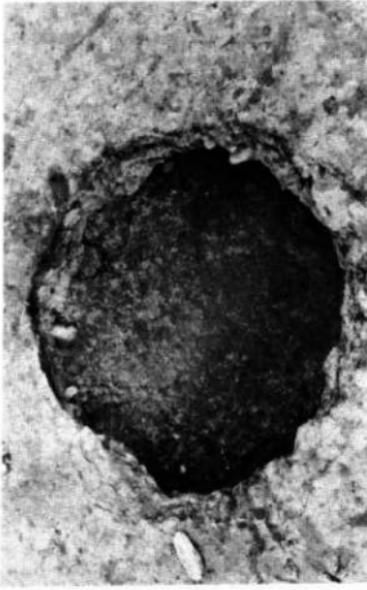
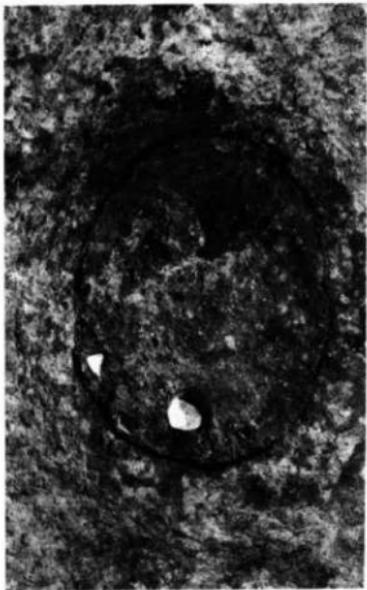
下 : III SK 006



図版10

上：MSK 008

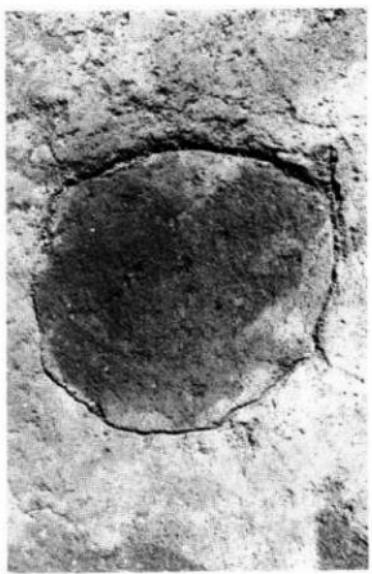
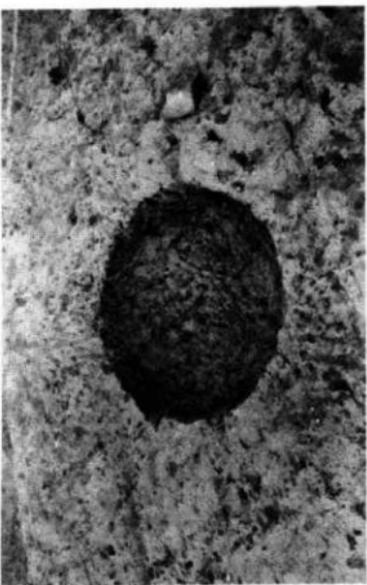
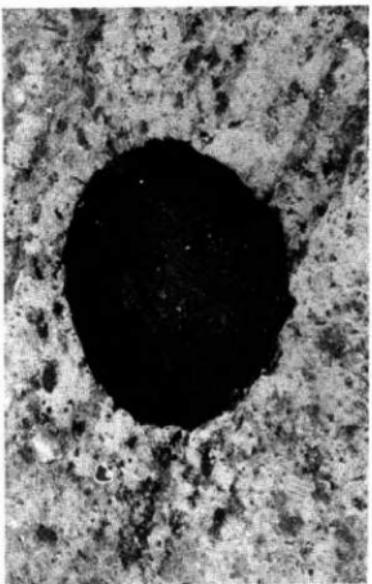
下：MSK 009



図版II

上：ⅢSK 012

下：ⅢSK 024



圖版12

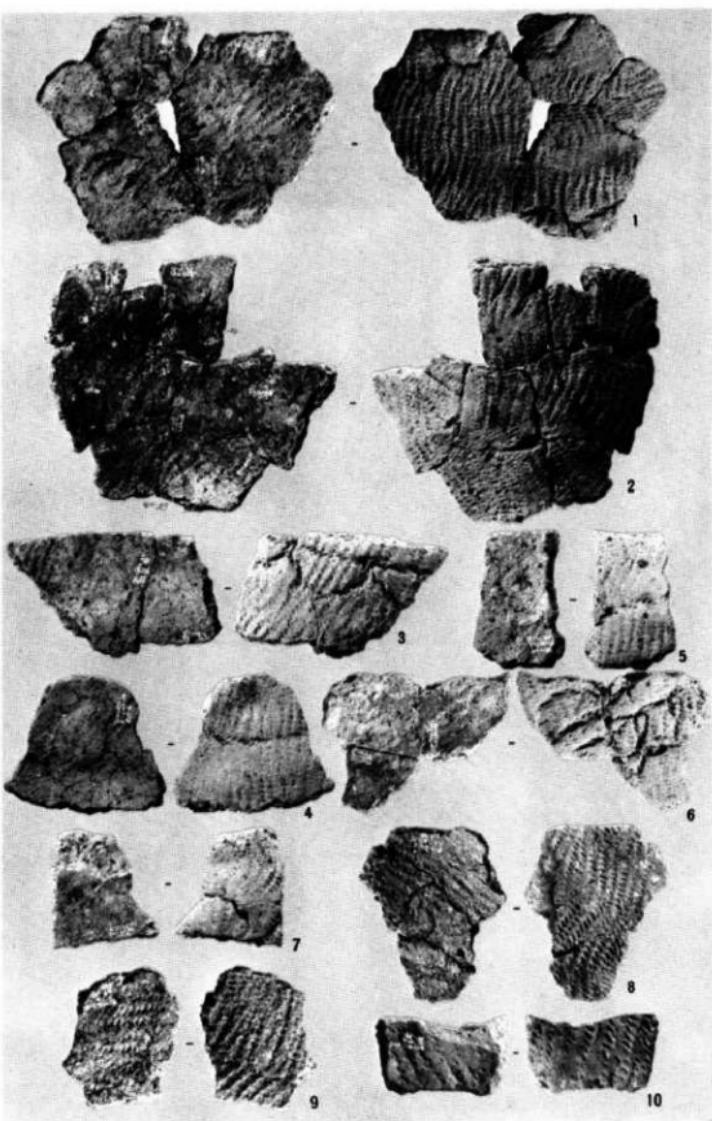
上：III SK 031

下：III SK 043



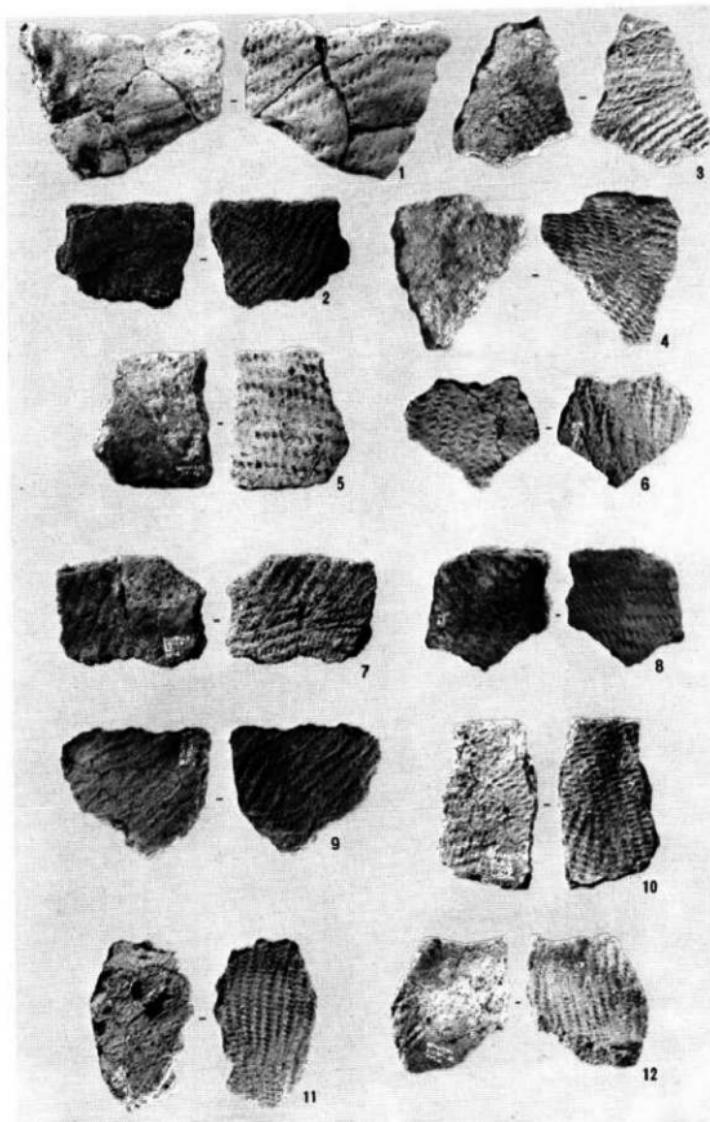
圖版13

第1群土器（1）



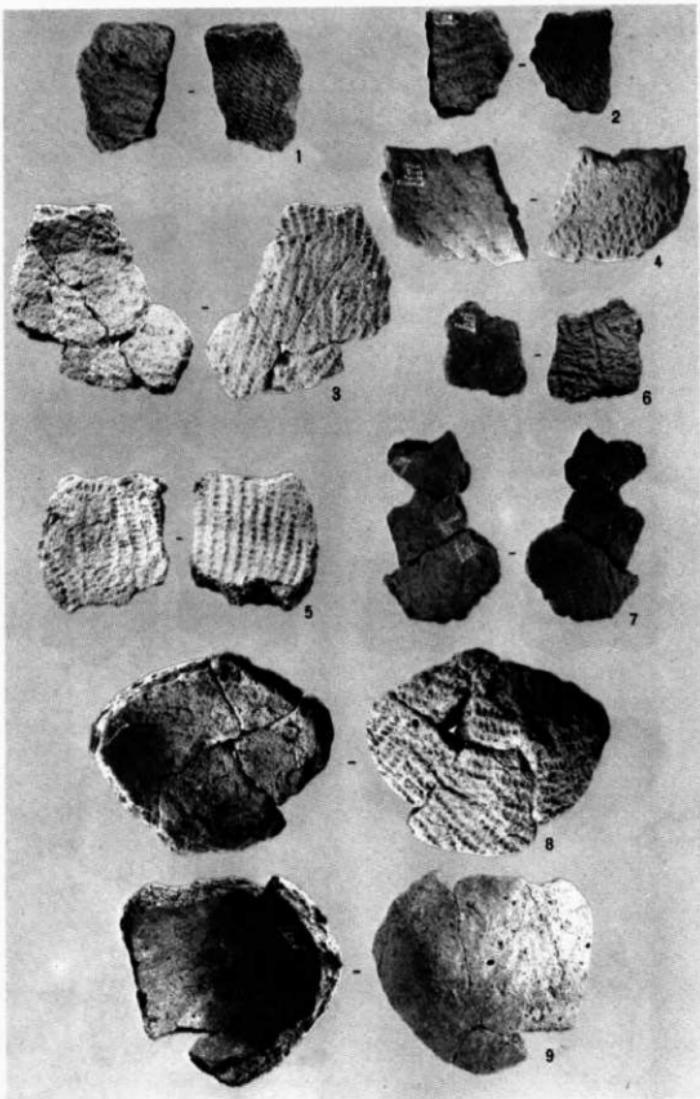
図版14

第Ⅰ群土器(2)



図版15

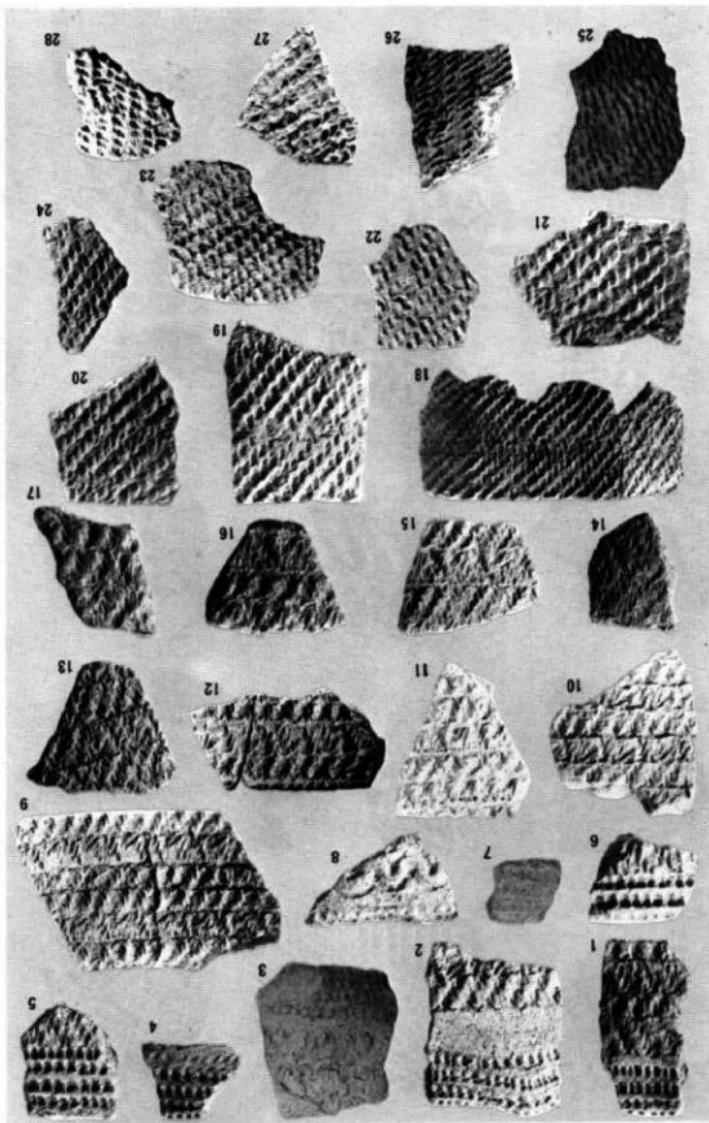
第I群土器(3)



图版16

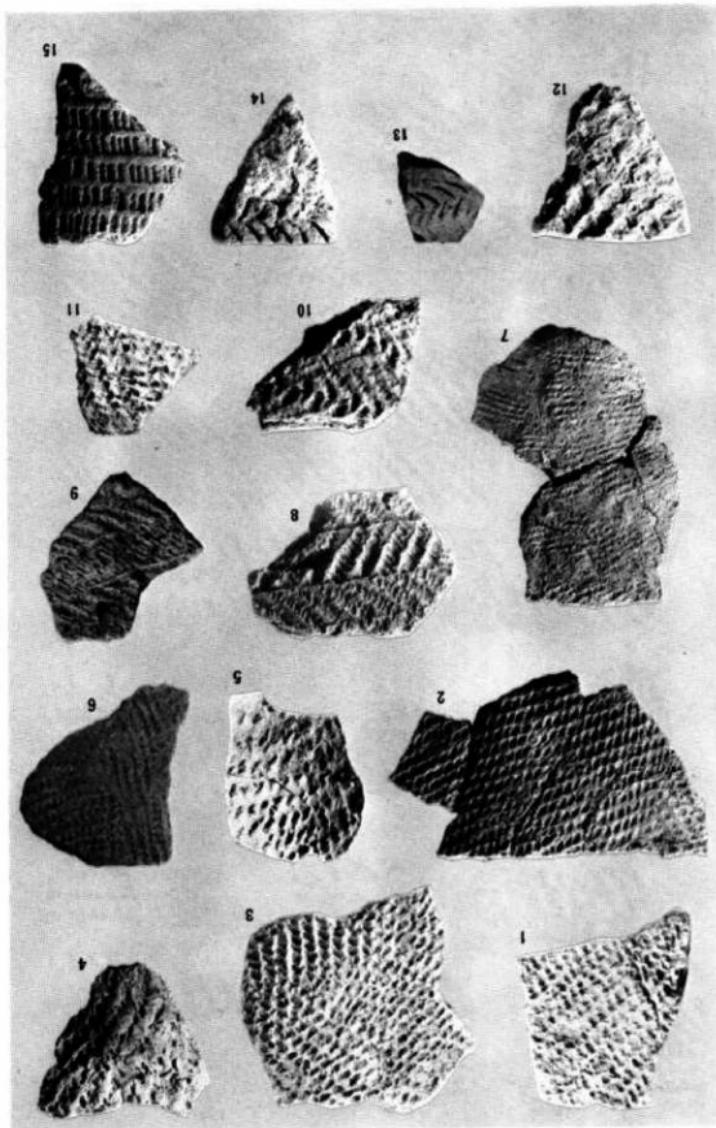
第1 片土器(4)

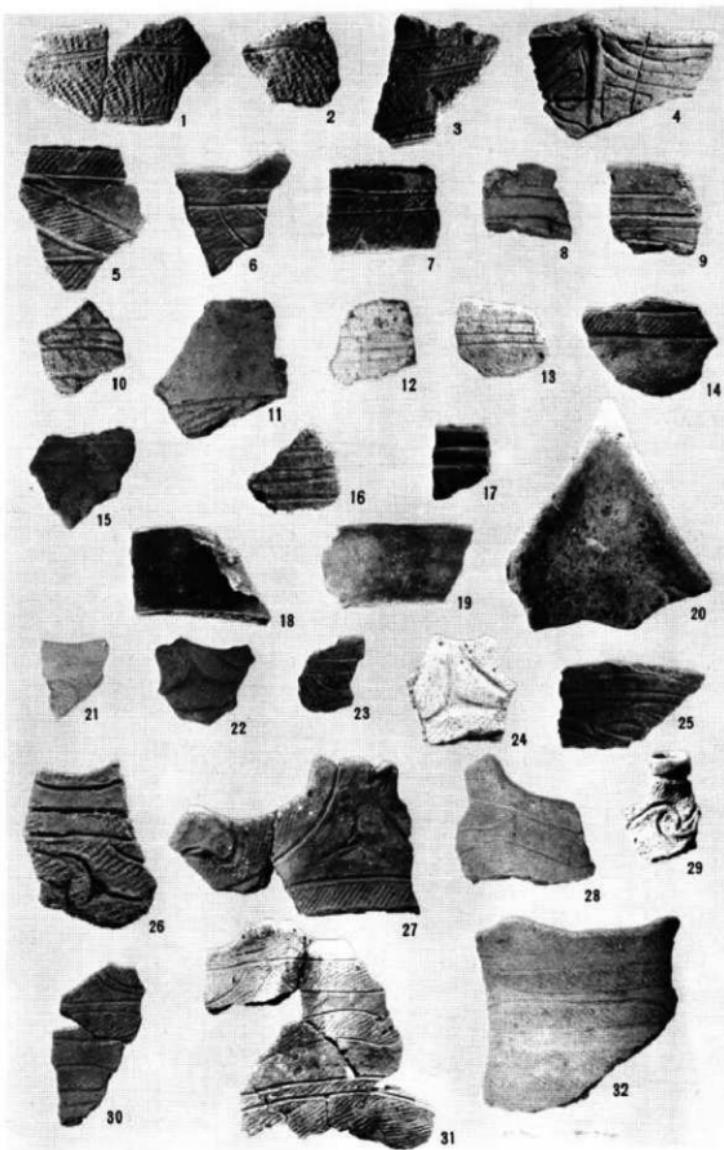
圖版17 第1號土壤(5)



圖版 18

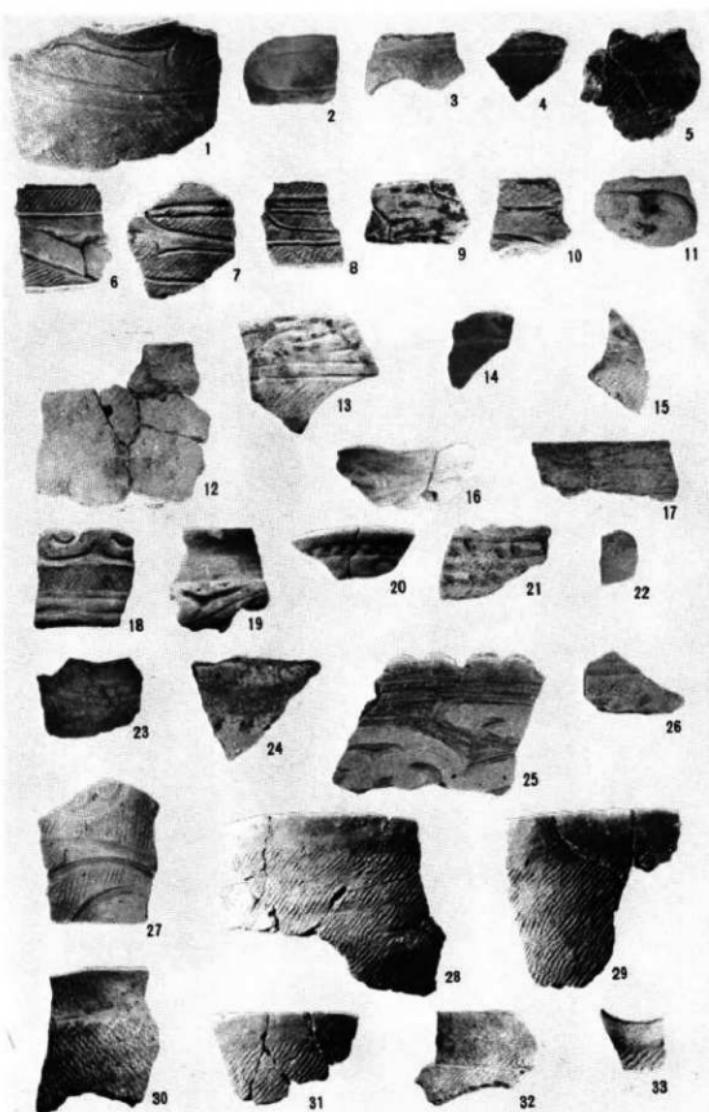
(9) 種子植物





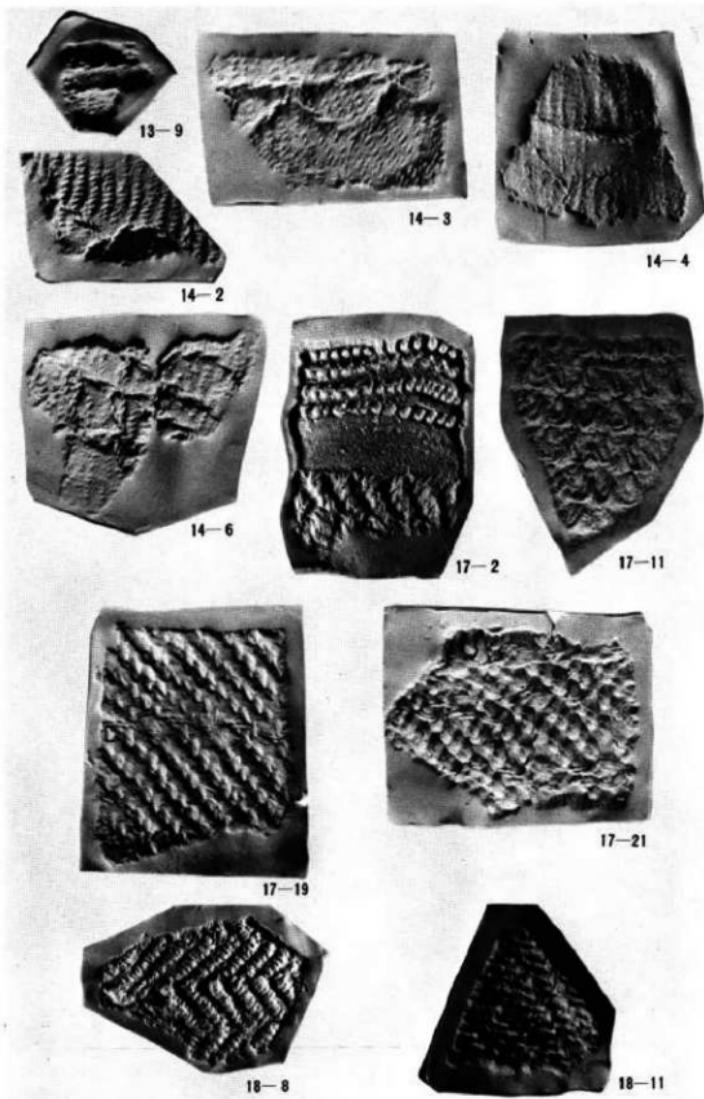
圖版19

第二群、第三群、第四群土器



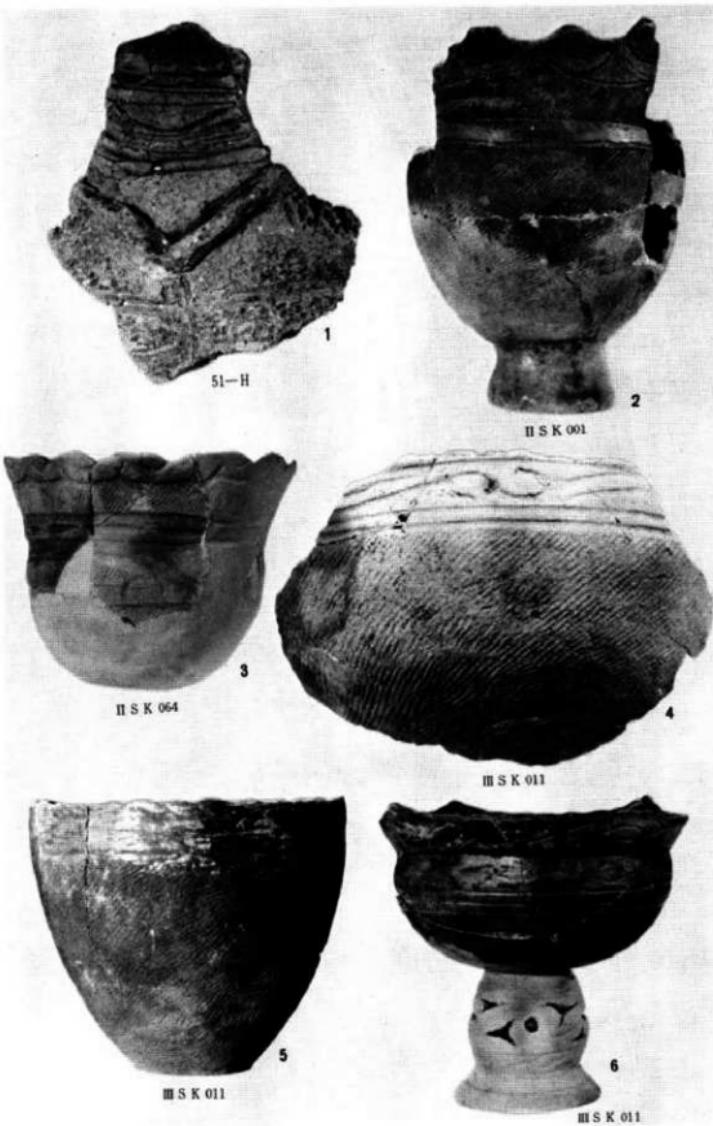
图版20

第四群土器



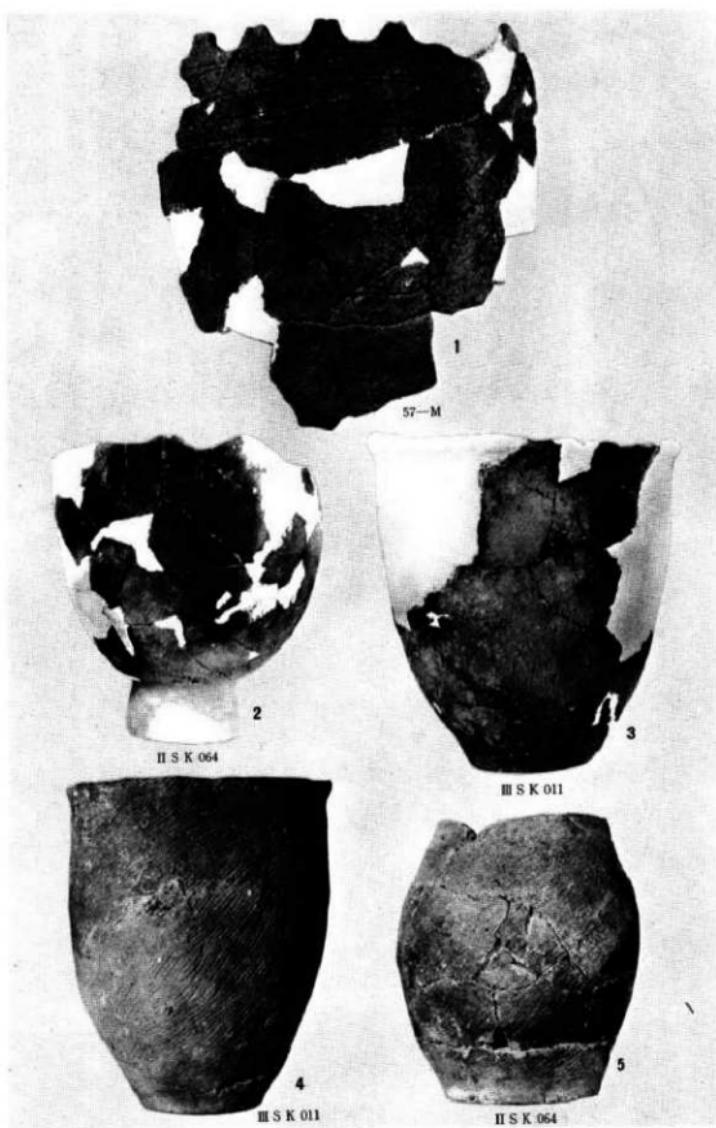
图版21

第1群土器原体場面



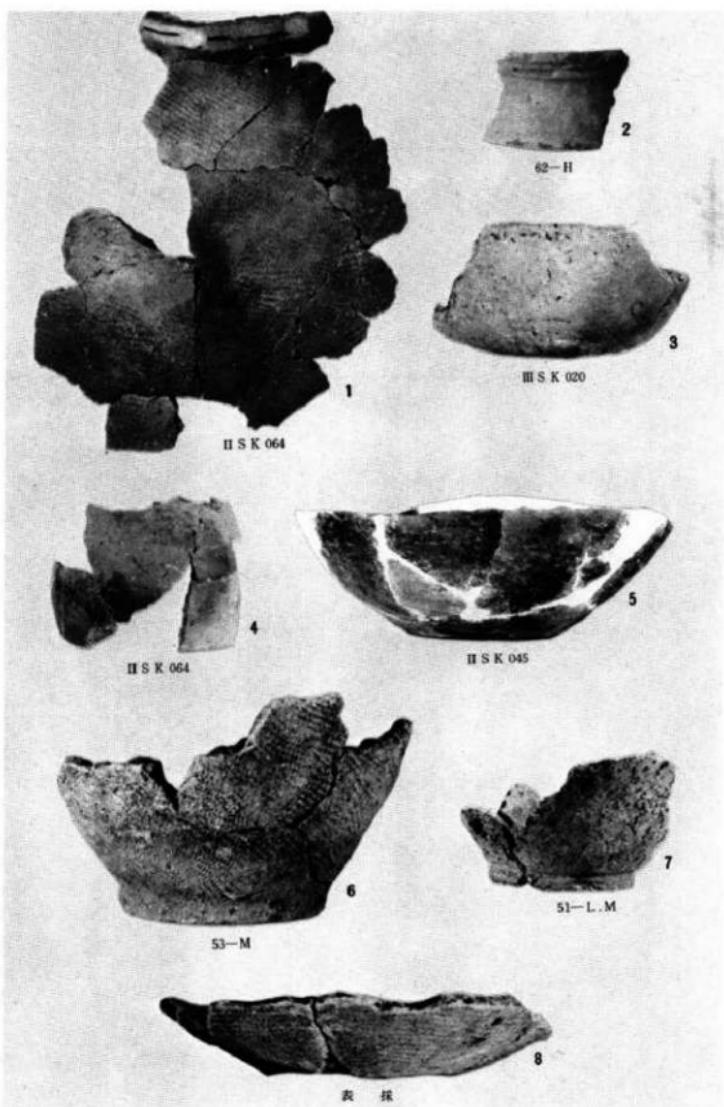
图版22

第II群、第IV群土器



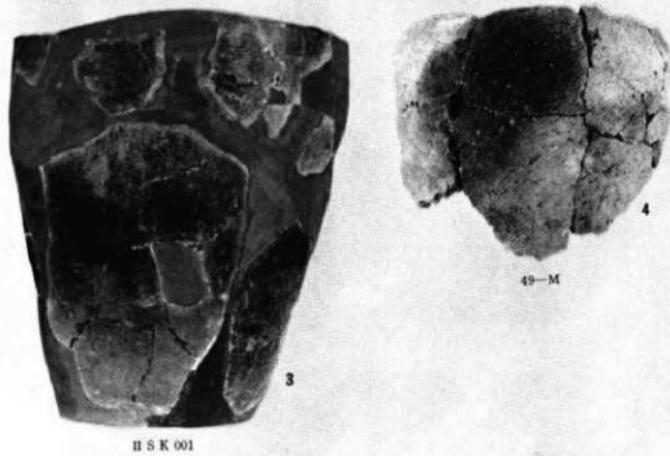
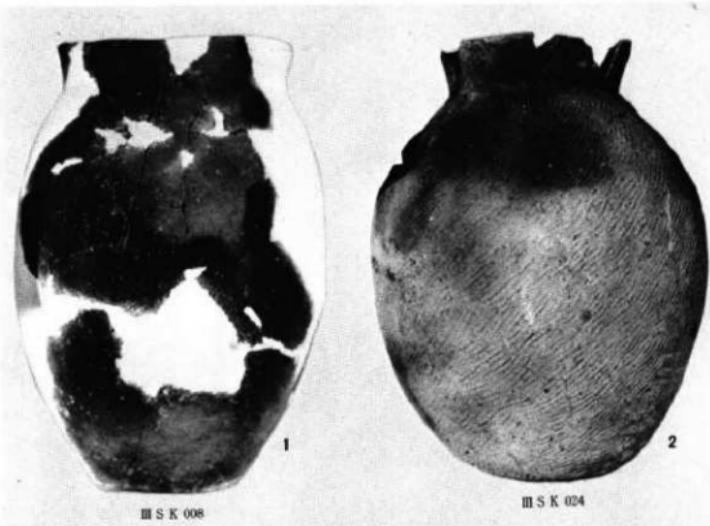
图版23

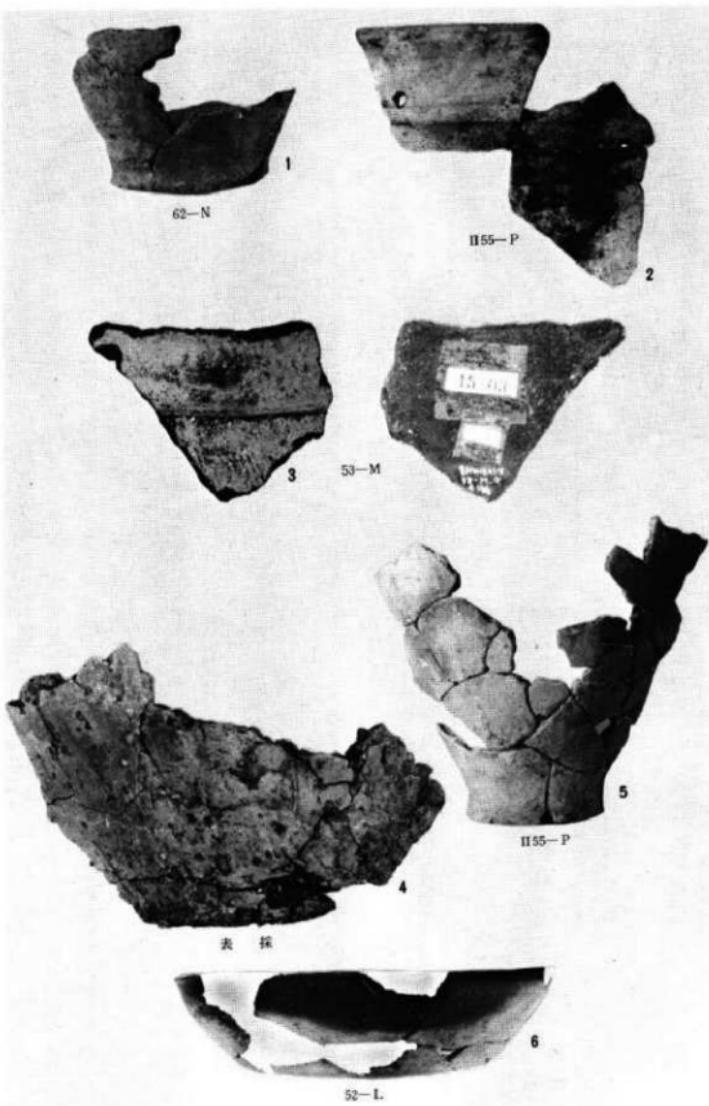
第IV群土器(1)



圖版24

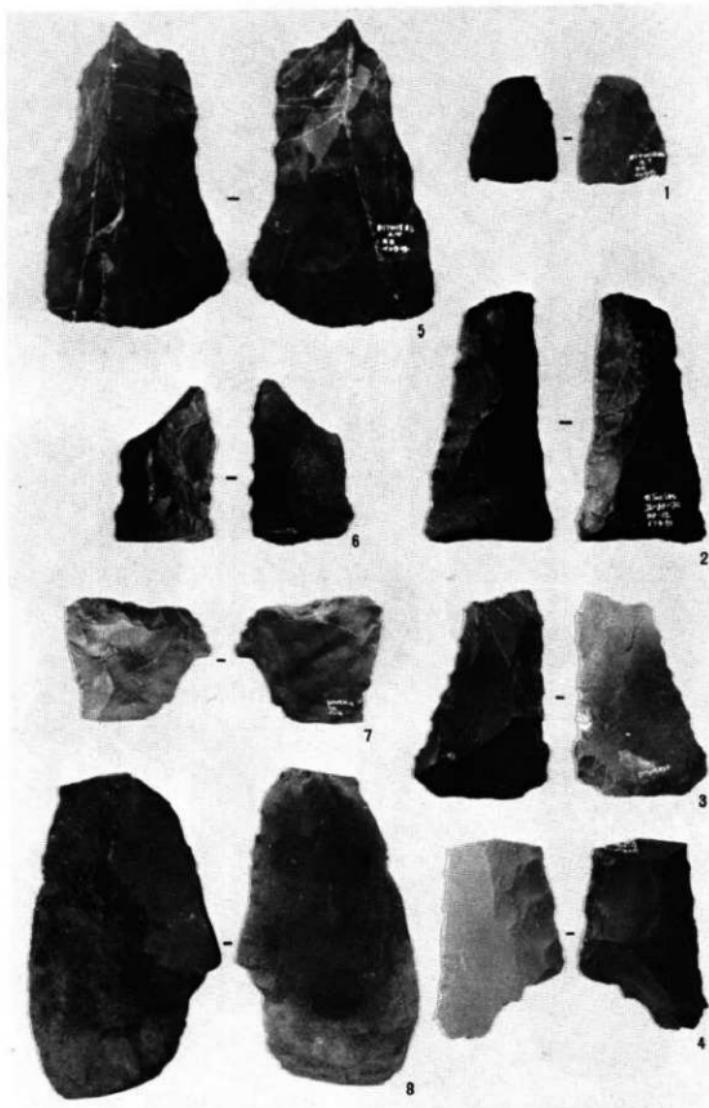
第IV群土器(2)





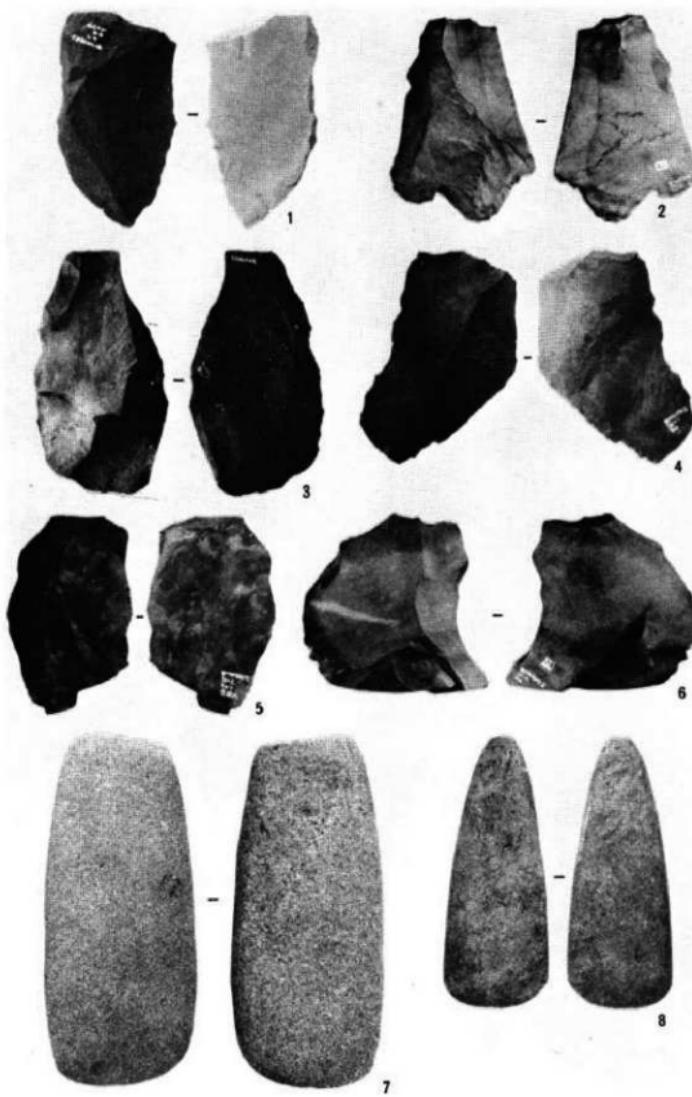
図版26

第V群土器



图版27

石器(1)



图版28

石 器(2)

中　の　崎　遺　跡

遺　跡　番　号　　No.16
所　在　地　　鹿角市花輪字中の崎95番地他
調　査　期　間　昭和55年8月22日～12月12日
　　　　　　　昭和56年5月25日～11月14日
発掘調査予定面積　12,920m²
発　掘　調　査　面　積　19,158m²

1. 遺跡の概観

(1) 遺跡の立地と環境

中の崎遺跡は、秋田県鹿角市花輪字中の崎95番地他に所在する。

遺跡は岩手県に源を発する米代川流域の鹿角盆地内東側にあり、国鉄花輪線陸中花輪駅の東南東約1.6kmに位置する。

遺跡は大きく分けて3つの台地からなり、南からI～III区とした(第2図)。I区は遺跡南側にありほとんど平坦面である。II区は中央部にあり、西側に段々低く3段の台地を形成している。III区は北側にあり、II区から北西部にのびた舌状台地で調査対象はその付根部分である。遺跡は鳥越軽石火山灰層の堆積面である鳥越段丘面上にあり、調査対象面積は18,457m²である。

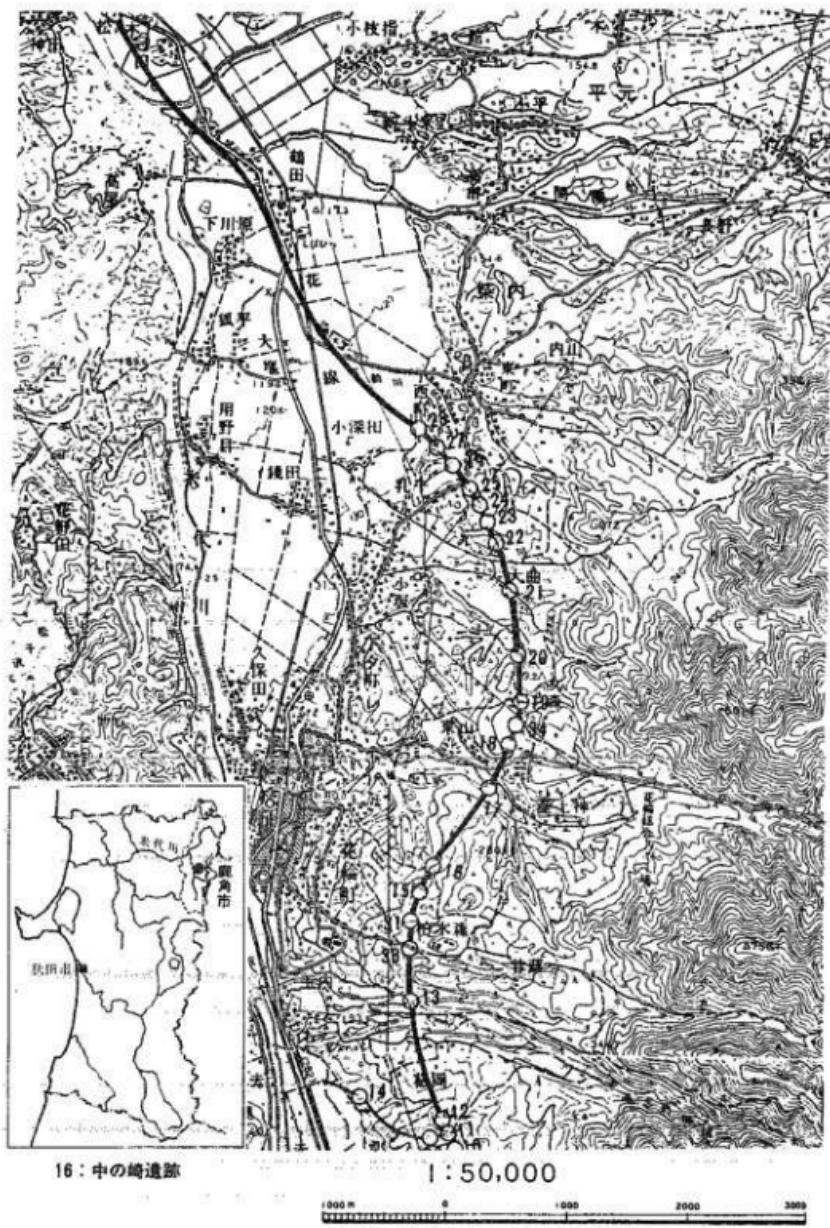
(2) 遺構の分布

中の崎遺跡は比較的平坦な鳥越段丘面上にあり、北側及びII区西側が急崖となっている。I～III区とも遺構の分布はまばらで、それほど集中している箇所はない。II区中央部東側に土壙が集中する箇所がみられる程度である。

(3) 遺物の出土状態

遺構内の遺物は、平安時代の竪穴住居跡出土のものが多い。特にI区検出のものは、SI018竪穴住居跡を除いて、多数の遺物が出土した。II区の竪穴住居跡出土の量にはバラツキがみられ、SI102, 104, 107, 108, 112竪穴住居跡からは多数の遺物が出土するものの、その他の竪穴住居跡からの出土は少ない。III区のSI301竪穴住居跡からも遺物は多く出土しており、I～III区ともかまどを持つ竪穴住居跡は例外なく多くの遺物を出土することがわかる。また、壙の出土比率も全出土遺物の17%前後と比較的高い。SI104竪穴住居跡から壙とともに、多数の完形の壙が出土した。また、土壙はI, II区から32基検出されているが、遺物の出土量は極めて少ない。

遺構外出土遺物は、あまり多い方ではないが、縄文時代前・中・後・晩期、弥生時代、平安時代のものが出土しており、I区では縄文時代晚期後葉の土器が、完形一個を含め数ヶ所からまとまって出土した。概して言うと、I区は晩期のものが、II区は後期のものが多く出土する。



第1図 遺跡位置図

2. 調査の方法

中の崎遺跡はサービス=エリアのため面積が広く、そのため調査は2か年継続して行われた。55年度は南側のI区から調査にはいったが、II区は山林のためI区のみに5m×5mのグリッドを組み調査にはいった。グリッドの南北基線は日本道路公団の付設したSTA125+00とSTA125+40を結ぶ線とした。南北基線はアルファベットとし、西に行くにつれ進むものとした。調査区域の幅が広くA～Zでは足りず、その西側についてはB、B……として区別した(西←……B、A、Z、Y……N、M、L……→東)。南北基線は算用数字とし北へ行くにつれ進むものとした(北←……12、11、10……→南)。各グリッドの名称はこれら基線の直交する東南隅の座標の算用数字とアルファベットの組み合わせにより呼ぶことにした(15-K、14-L……)。

56年度調査はIII区より行ったが、II区内はまだ整備されておらず、既調査区であるI区からII区内を通してIII区へグリッドのラインで見通すことは不可能だった。このため見通せるところを利用して、セオドライトと横河ヒューレット=パッカード社光波測距測角儀モデル3810Aを使いIII区内に仮基準杭を2本打ち込み、これらの杭を使ってI区の基線をそのまま利用し、III区内にグリッドを組んだ。

II区調査開始時にはI区の基準杭が工事のため消滅していたのでIII区から南へ返す形で業者に委託して杭打ちを行った。

遺構はグリッドの基線をもとに、間尺もしくは1mのメッシュを組んで実測した。実測の縮尺は原則としてS=1/100で、カマド等必要なものはS=1/50で行った。また地形実測図は、航空測量と現場にて行ったS=1/200の平板測量により作成した。

報告書使用の挿図は現場作成のもの及び整理期間中作成のものをもとに、遺構実測図のうち堅穴住居跡、堀跡については任意の縮尺、土塁はS=1/100とし、遺物実測図はS=1/50及び1/100にできるかぎり統一した。遺物の写真図版については遺物実測図と同じく1/50、1/100とした。

遺構実測図中に使用したスクリーン・トーンは次のとおりである。



遺構・遺物記号は、平城京発掘調査で実施しているものを参考に既往自動車道関係遺跡発掘担当者が協議して定めたものを使用した。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構・遺物	記号	遺物
SA	権列・柱列	SK	土 壁	SX(B)	焼 土 遺 構	RQ	石 製 品
SB	塊 物 跡	SK(B)	プラスチックビット	SX(B)	猪 場	RT	貝 製 品
SC	廊	SK(B)	堅穴状遺構	SX(S)	配石(堅穴状遺構)	RU	人 骨
SD	溝・堀・濠	SK(P)	ビ ット	SX(B)	土 蔵 墓 遺 構	RV	紙・布 製 品
SE	井 戸 跡	SK(S)	土 壁 墓	RC	炭 化 物	RW	木・竹 製 品
SF	築 地・土 堆	SK(T)	トラップビット	RM	金 属 製 品	RY	そ の 他
SG	堀 池	SL	河 川	RN	自 然 遺 物		
SH	広 場	SM	道路・橋・階段	RO	骨 角 製 品		
S1	住 居 跡	SX	そ の 他	RP	土 製 品		



第2図 グリッド配置図

3. 調査経過

中の崎遺跡の発掘調査は、サービス＝エリア区域内で面積の広いこともある、昭和55年8月22日～12月12日、昭和56年5月25日～11月14日の2か年にわたって調査が行われた。発掘予定面積は12,920m²である。

中の崎遺跡は大きく3つの台地からなっており、それらを南から順にI区、II区、III区と呼ぶことにした(第2図)。昭和55年度はこのうちI区を調査することにした。

鳥居平遺跡を終了した昭和55年8月22日から、器材搬入を行い、発掘調査にはいった。数本のトレンチを入れて土層を観察したところ、Sライン以西で10ライン以南においての表土が深いことがわかった。9月14～16日の間、機械による表土剥ぎを行った。

16日に方形の竪穴住居跡を検出し、S1001, 002とした。造構番号は検出順に001～付すこととし、精査の結果造構でないとわかったものはそのまま欠番とした。18日にはI区南側を東西に横切る農道に接してS1003を検出した。S1003は現在使用中の農道に造構北側がかかっており、農道を付け替える必要が出てきた。そこで10月2日に道路を北側に付け替え、S1003の北側を精査したところ、造構は既に道路により破壊されていた。また、これと前後してI区の農道北側部分を精査したところ、表土がたいへん浅く、遺物も少なく造構はまったく確認されなかつた。

以後は、標準層位第V層の火山灰層の上面・下面で面的精査を行い、竪穴住居跡、土塙、溝等を検出した。しかし、造構が確認される箇所は表土も薄く、火山灰層との新旧関係をつかむのは難しかった。S1001, 002が火山灰層より新しいことが確認されたにすぎない。造構はI区北西部に集中していたため、ここに造り方を組んだ(基準高: H = 181.200m)。13日に9～Sグリッドから土師器の合口壺棺が出土し、これをS X 011とした。周辺を精査したところ、小ピットが検出されたものの合口壺棺と関連ある造構は検出できなかつた。

29日からは、II区の大部分が山林のため枝払いなどの整備を始めた。

30日に、造構確認面である標準層位第V層上面まで掘り下げがほぼ終了したので、S = 1%の造構分布図を作成した。11月11日から、さらに標準層位第IX層上面まで、トレンチによる掘り下げを行つた。その結果、造構は確認されなかつたが、第V層中から縄文時代前期の土器片数点が出土した。

11月下旬からは、検出済の住居跡、土塙、溝等の実測を怠いだが、降雪のため思うようにはかどらず、12月12日、I区の調査を終了した。I区の発掘面積は4,386m²であった。

昭和56年度は当所妻の神I遺跡の調査を行わなければならず、5月25日から調査にはいったものの、作業員を二分しての調査であった。

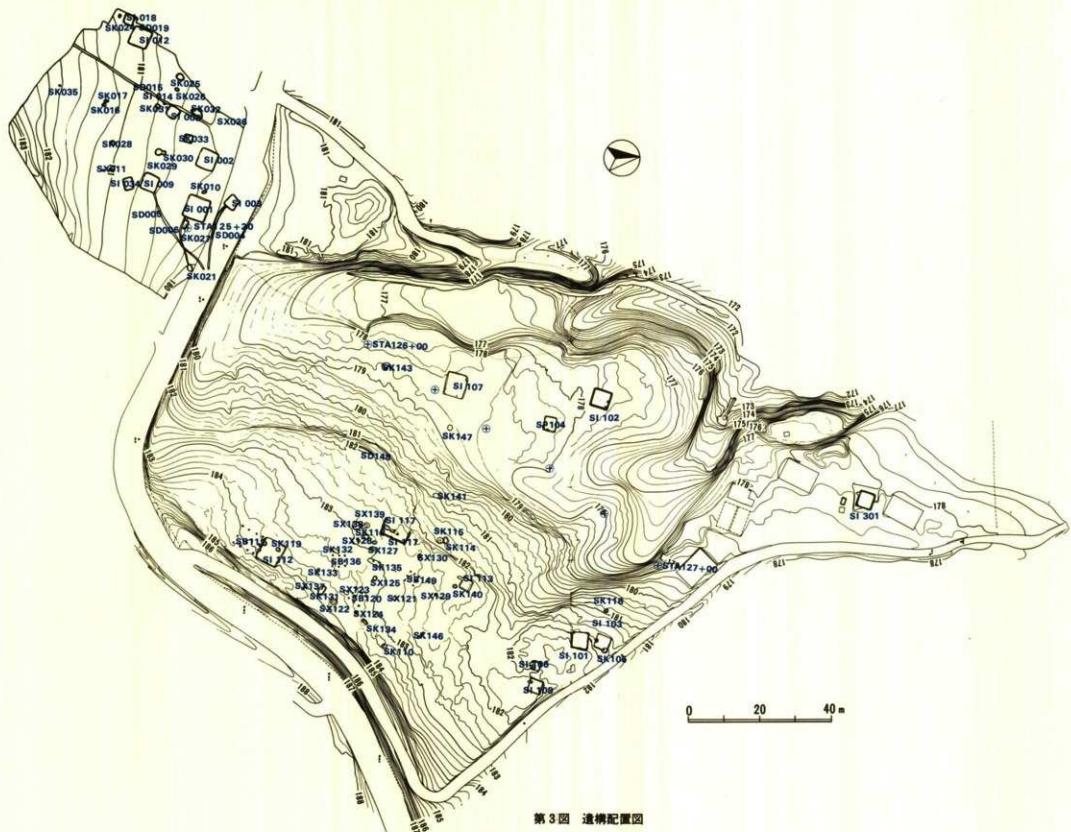
適当なプレハブ建設用地がないため、遺跡の北端のⅢ区を先行調査し、終了後、そこを建設用地とすることにし、5月25日からⅡ区のトレンチ掘りとⅢ区の表土剥ぎにはいった。6月8日に方形の竪穴住居跡を検出、SI301とした。Ⅲ区から検出された遺構はこれのみであり、20日にⅢ区の調査を終了した。Ⅲ区の発掘面積は1,962m²であった。

Ⅱ区は面積が広く、また試掘の結果表土部分がある程度の厚さをもつことがわかったので、表土は機械で剥ぐことにし、機械排土の終了した7月6日からⅡ区の精査にはいった。14日～17日にⅡ区に業者による杭打ちの設定を行った。グリッドの基線は昨年調査分のものをそのまま使用した。平行して調査していた妻の神I遺跡の調査が急がれるため、表土剥ぎの途中ではあったが、25日から一旦、中の崎遺跡の調査を中断した。

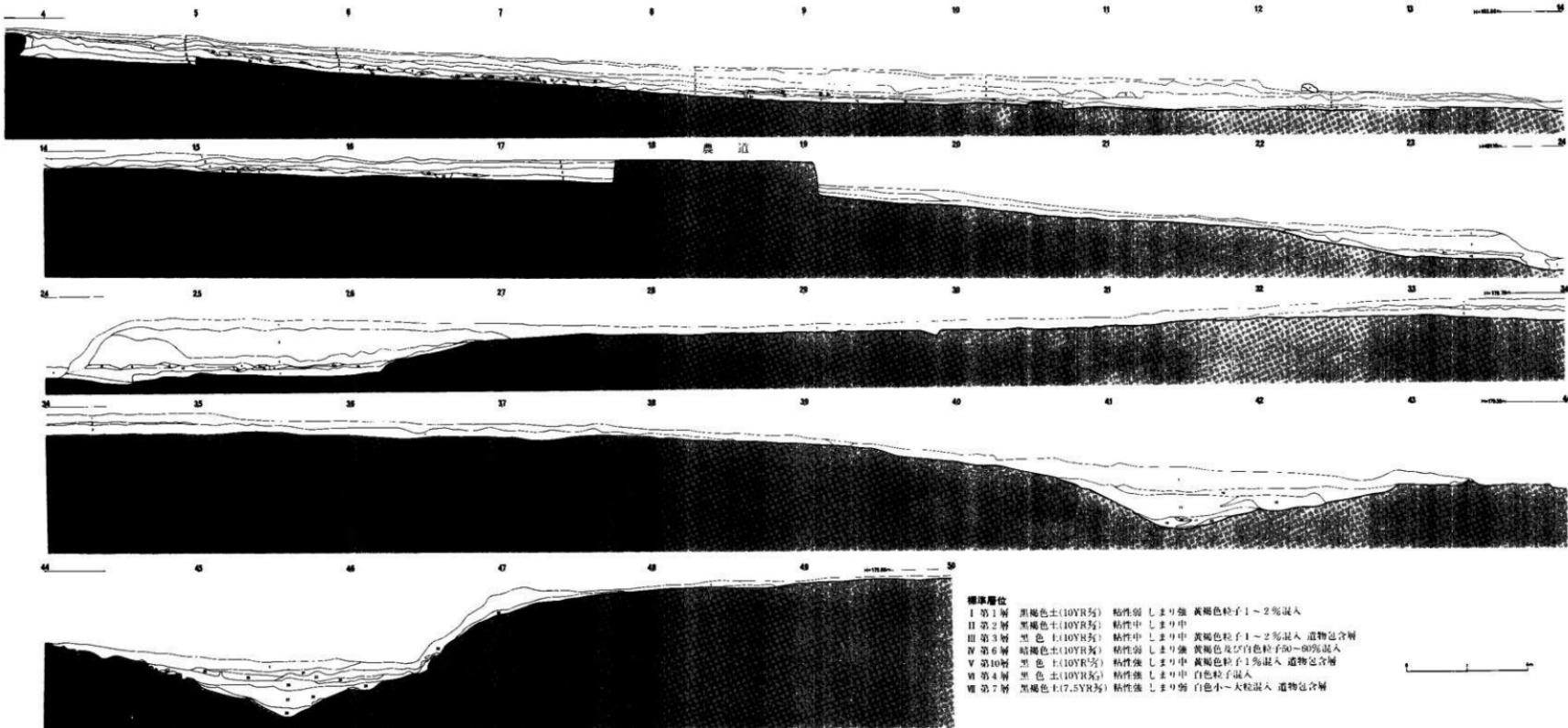
妻の神I遺跡を終了し、8月17日から、全員で中の崎遺跡の調査を再開した。24日Ⅱ区北側から方形の住居跡プランを確認、SI101とした。混乱を防ぐためⅡ区の遺構番号は101からとし、検出順に番号をふった。その後は地山の一つ上の層である暗褐色土上面で遺構確認に努め、住居跡、土壌等を検出していった。

9月1日から小玉班の補佐員、作業員が応援に参加する。この後は、さらに掘り下げ地山面で精査面積を広げ、住居跡をほぼ掘り終えた10月22日に航空測量を行った。遺構の最終確認面である地山面からは、ピットが数基確認されたのみで、縄文時代の遺物もほとんど出土しなかった。

地山面まで掘り下げをほぼ終了した11月9～14日の間、平板測量による地形図を作成、対岸の水晶山頂から遺跡全景を撮影し、中の崎遺跡の発掘調査を終了した。Ⅱ区の発掘面積は、12,810m²であり、この結果中の崎遺跡の発掘総面積は19,158m²となった。



第3図 造構配置図



第4図 Sライン断面図

4. 遺跡の層位

遺跡は約20,000m²の広範な地域にわたっており、I～III区ではそれぞれ基本層序には差異がみられる。

I区においては、1～7層がほぼ基本層序といえる。ただし、堅穴住居跡を検出した北西部では削平がひどく、1層の次が地山という箇所も多くみられた。

II区においては、2本の沢口がみられ、その箇所はかなり低くなっている。それ以外の平坦な台地面においても、I区ほどの厚い堆積は認められず、大湯浮石層も欠如しているところが多く、あるところでも土壤化が進み、しっかりした層とはなっていない。

III区においては、表土が薄く、直下が地山という状態であった。

遺跡のはば中央を通るSラインにおける断面の土層記述は以下のとおりである(第4図)。

第1層 黒褐色 土 10YR 4/6	表土。ローム中粒混入。
第2層 黒褐色 土 10YR 4/6	黄褐色小粒混入。4層に比してしまりよし。3層と同程度のしまり。
第3層 黒褐色 土 10YR 4/6	炭化物微小粒。黄褐色小粒混入。粘性ややあり。
第4層 黒褐色 土 10YR 4/6	炭化物微小粒。黄褐色小粒混入。粘性ややあり。遺物包含層。
第5層 黑褐色 土 10YR 4/6	平安時代堅穴住居跡確認面だがこの面で確認できないものも多い。テラヘルム混入。大湯浮石層。6mはアシナ部分主体。8mはバニス部分主体。6mは黒色土化質しい。
第6層 明黄色褐色 土 10YR 4/6	黄褐色小粒～中粒混入。粘性強。しまり悪し。
第7層 黑褐色 土 10YR 4/6	黄褐色大粒を土に下部に混入。粘性強。しまり悪し。
第8層 黑褐色 土 7.5YR 4/6	黄褐色大粒を土に下部に混入。粘性強。しまり悪し。
第9層 喧褐色 土 10YR 4/6	地山への漸移層。
第10層 黑褐色 土 10YR 4/6	粘性強。しまり中。黄褐色粒子1%混入。遺物包含層。
第11層 黄褐色 土 10YR 4/6	地山。鳥越段丘。
第12層 黑褐色 土 7.5YR 4/6	
第13層 黑褐色 土 10YR 4/6	4, 5, 6m層の混入層。かく隠。
第14層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性弱。
第15層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性弱。
第16層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性弱。
第17層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性弱。
第18層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性中。
第19層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性強。
第20層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性強。砂紋が底面に堆積している。
第21層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性弱。
第22層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性弱。
第23層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり中。粘性弱。
第24層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性弱。
第25層 喧褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性弱。
第26層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり大。粘性中。
第27層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり中。粘性中。
第28層 黑褐色 土 10YR 4/6	しまり小。粘性強。
第29層 はよい黄褐色土 10YR 4/6	大湯浮石の二次堆積か?

5. 遺構と遺物

(1) 遺構

① I 区の遺構

a. 穫穴住居跡

S I 001 穫穴住居跡

第 1 表		挿図番号	第 5 ~ 9 図	図版番号	図版 5 ~ 7 · 51 · 52
遺構名		S I 001	検出地区	14-S, 14-T, 15-S, 15-T	
法	壁長	658cm	東側壁	614cm	南側壁
法	壁高	58.8~67.8cm	西側壁	60.5~65.0cm	北側壁
景	壁溝幅	25.0~38.0cm	26.0~35.0cm	22.0cm	26.0~37.0cm
景	壁溝深	17.3~27.6cm	19.3~20.2cm	19.7~24.1cm	17.2~26.1cm
形	態	方	形	面積	主軸方向
かまど	位	置	南西壁西寄り	構築素材	芯部石組

プラン確認 標準崩落の位置で一部が突出されたか、純めて小明確だったため、地山上上面まで掘り下げて確認した。

壁面の状態 壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをする。

床面 平坦で堅固である。

壁溝 ほぼ全周している。

柱穴、ビット 西側隅を除く三隅と東壁側に2個、西壁側に2個、南壁側に1個、北壁側に3個及び対角線上に4個の計15個の住穴が確認された。他に2個のビットが確認された。

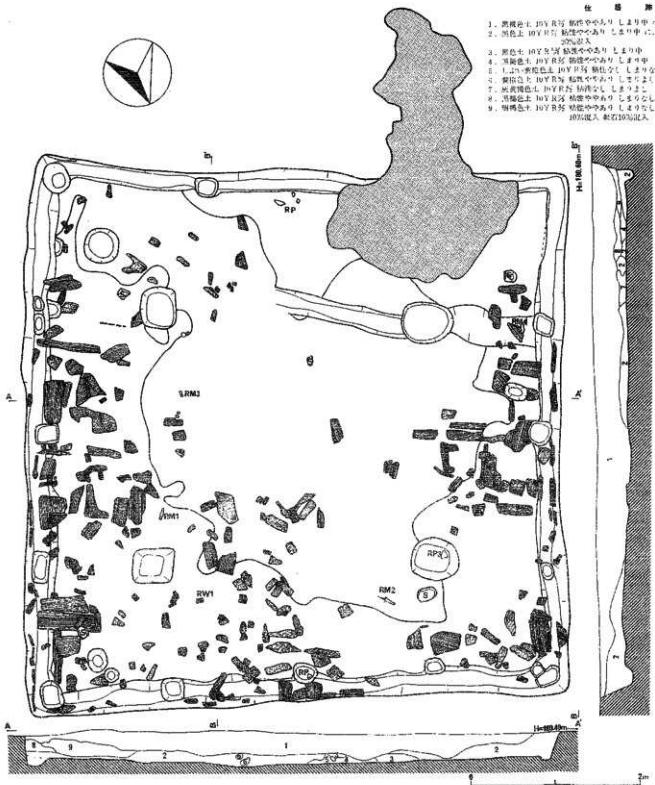
かまど 扁平な石を芯材として構築されたものである。煙道部に天井部の芯材として用いられたと思われる石が崩落している。構築上に大湯浮石の混入がみられるので、大湯浮石より新しい時期に構築されたものであろう。

遺物とその出土状態 当竪穴住居跡からの遺物出土量は、中の崎遺跡においては最大量である。壺、甕ともに出土量は多く、その比率は約1:3である。壺はいずれも回転糸切りである。甕は小型~大型のものまであり、ロクロを使用したものが多い。口縁部は反りがあるがそれは

土色說明

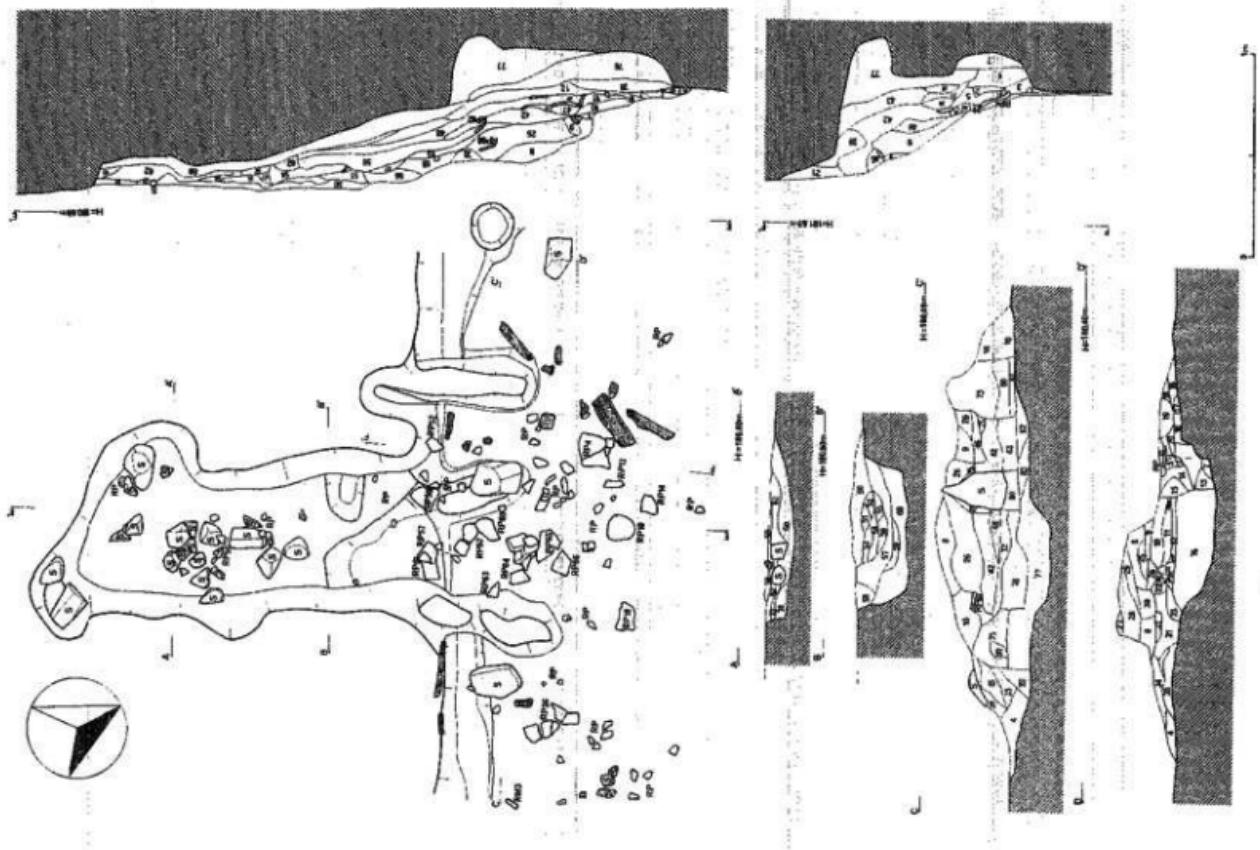
方　マ

1. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 2. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 3. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 4. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 5. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 6. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 7. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 8. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 9. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。
 10. 酒粕牛乳 10% 水溶性新茶入りヨウリウシテ 中小の軽井沢温泉入
湯宿。10日1杯、1ヶ月で10kg。1杯約100ml。



第5図 SI001 竪穴住居跡

第6図 S1001整穴住居跡カマド



ど大きく外反するものは少ない。砂底の土器も3点出土している。12は縁の羽口で全体的に火熱を受け、特に上部が著しい。また上部にガラス質のものが付着している。また鉄器も出土している（第134図）。

SI 002 穹穴住居跡

第2表		挿図番号	第10~12図	図版番号	図版8・9・53	
遺構名	SI 002	検出地区	13-V, 13-W, 14-V, 14-W			
法 量	壁長	531cm		496cm	494cm	500cm
	壁高	35.7~44.1cm		40.2~48.8cm	38.4~46.7cm	35.6~45.8cm
	壁溝幅	15.0~26.0cm		21.0~29.0cm	10.0~26.0cm	17.0~26.0cm
	壁溝深	5.7~11.1cm		2.7~14.0cm	1.7~5.5cm	6.0~6.2cm
形態	方位	方形	面積	27.2m ²	主軸方向	N34°E
かまと	位置	南西壁寄り			構築素材	芯部石組

プラン確認 IV層上面にて一部が確認されたが、最終確認面は地山上面である。

壁面の状態 壁はしまりがよく、ほぼ垂直に近い立ちあがりをする。

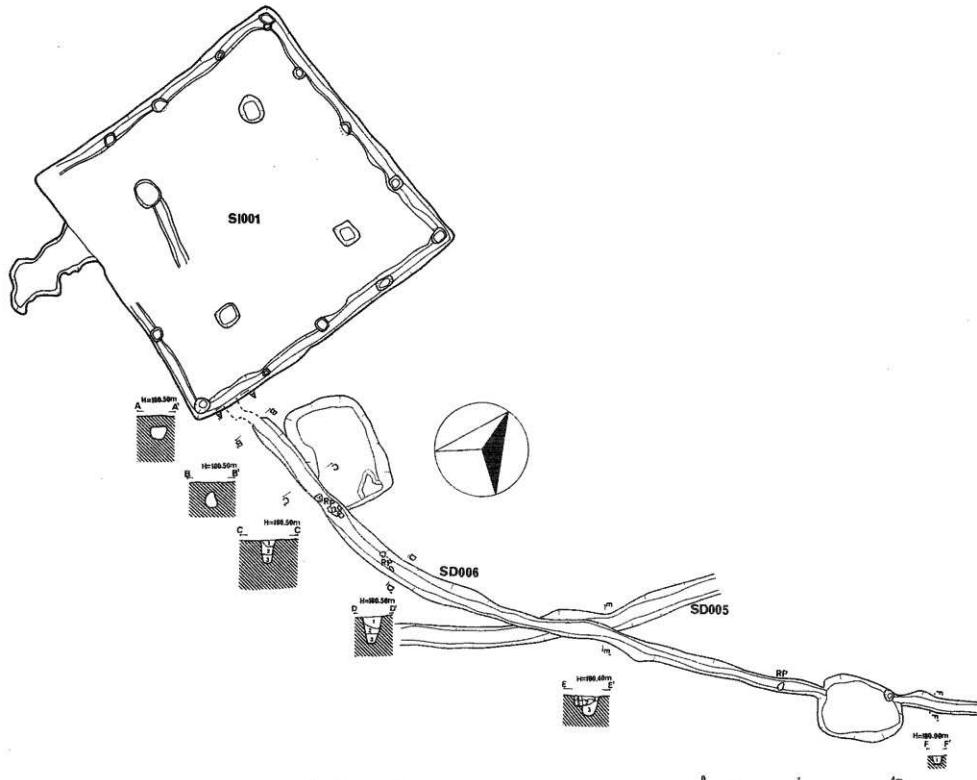
床面 平坦で堅固である。貼床である。

壁溝 住居跡四隅及びカマド付近を除いてほぼ全周する。

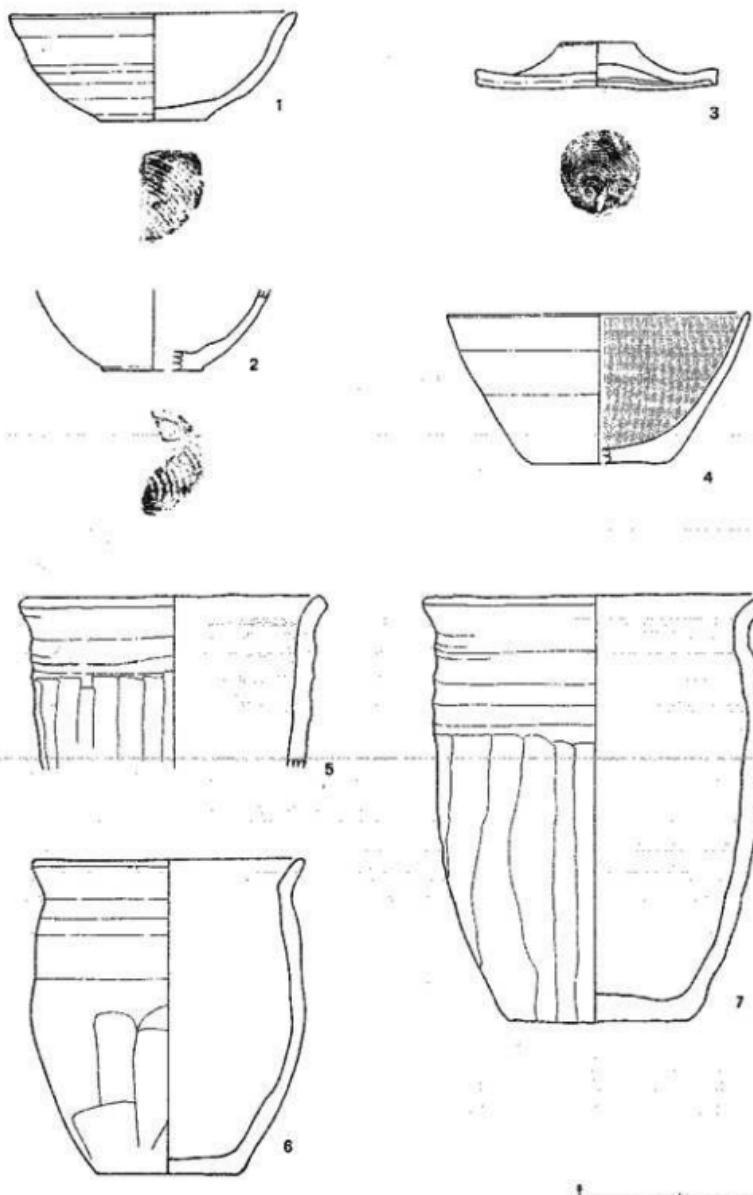
柱穴、ピット 住居跡四隅と南壁を除く三壁の中間部、及び南壁かまと両側に2個、南壁東側に1個、住居跡北側の床面に2個の計12個の住穴が検出された。他に3個のピットが確認されているが、その内南側隅のピット内からは多量の土器片が出土している。

かまと 扁平な石を芯材として構築されたものである。天井部、袖部共に芯材の石が構築当時に近い形で遺存している。

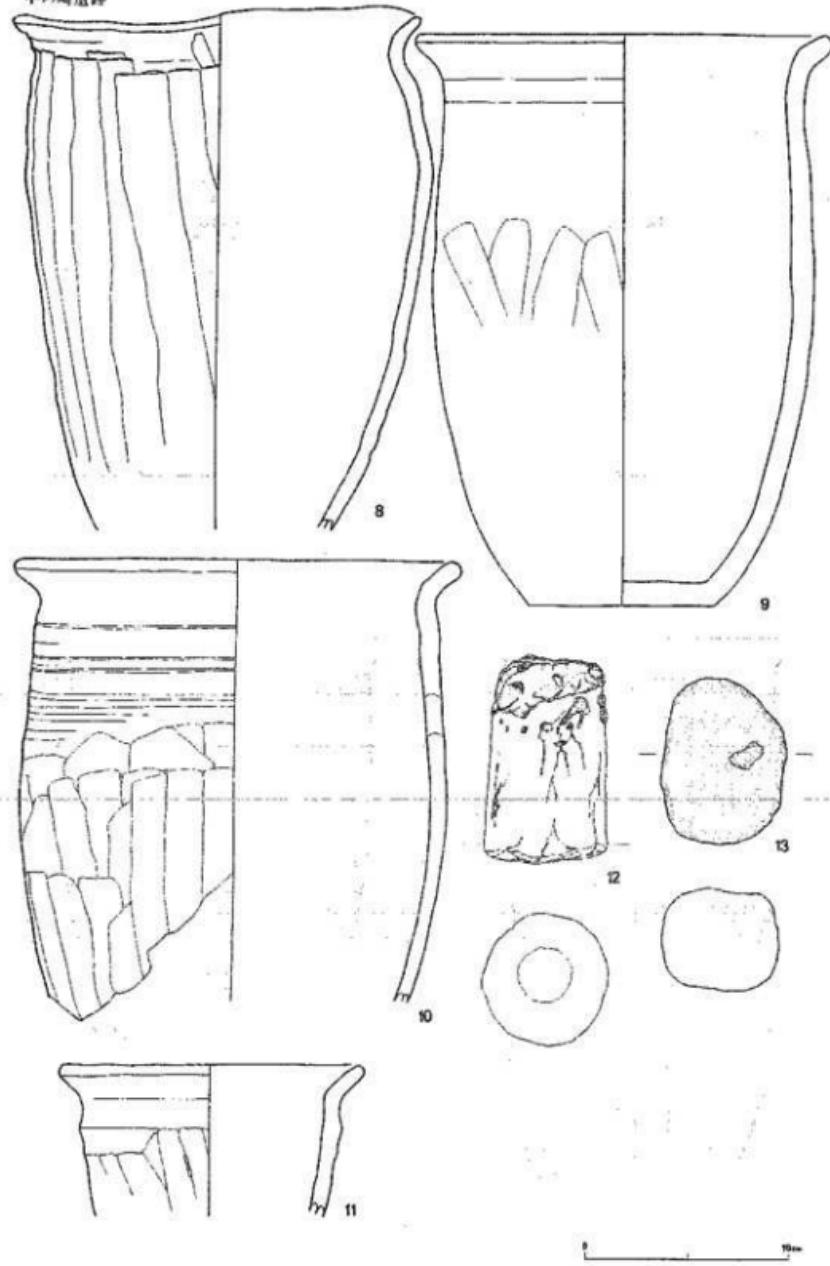
遺物とその出土状態 遺物の出土量は多く、3番目の出土量である。环はいずれも圓軸条切り枝法によるものである。またいわゆる赤焼土器の比率が大きい。甕は頸部が短く、若干の反りのあるものが出土している。またロクロを使用している物も多い。第12図8は本葉底のある土器で、砂底の土器も3点出土している。9は磨石で石質は安山岩である。



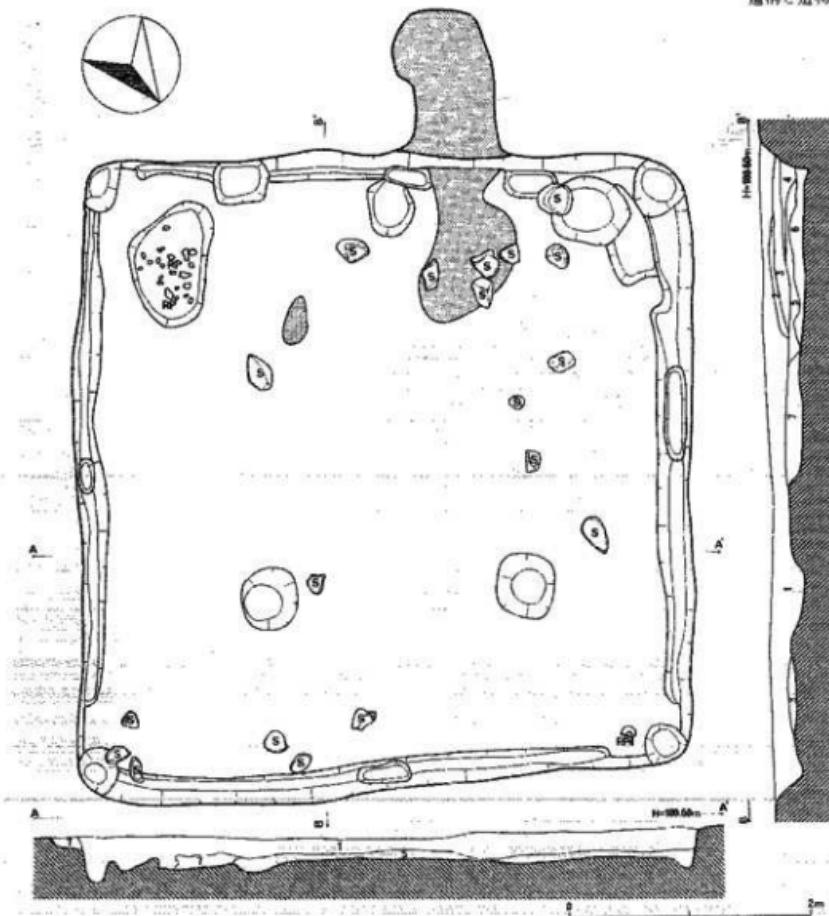
第7図 SI001竪穴住居跡, SD006付墓溝



第8図 SI001整穴住居跡出土遺物(1)



第9図 S1001竪穴住居跡出土遺物(2)



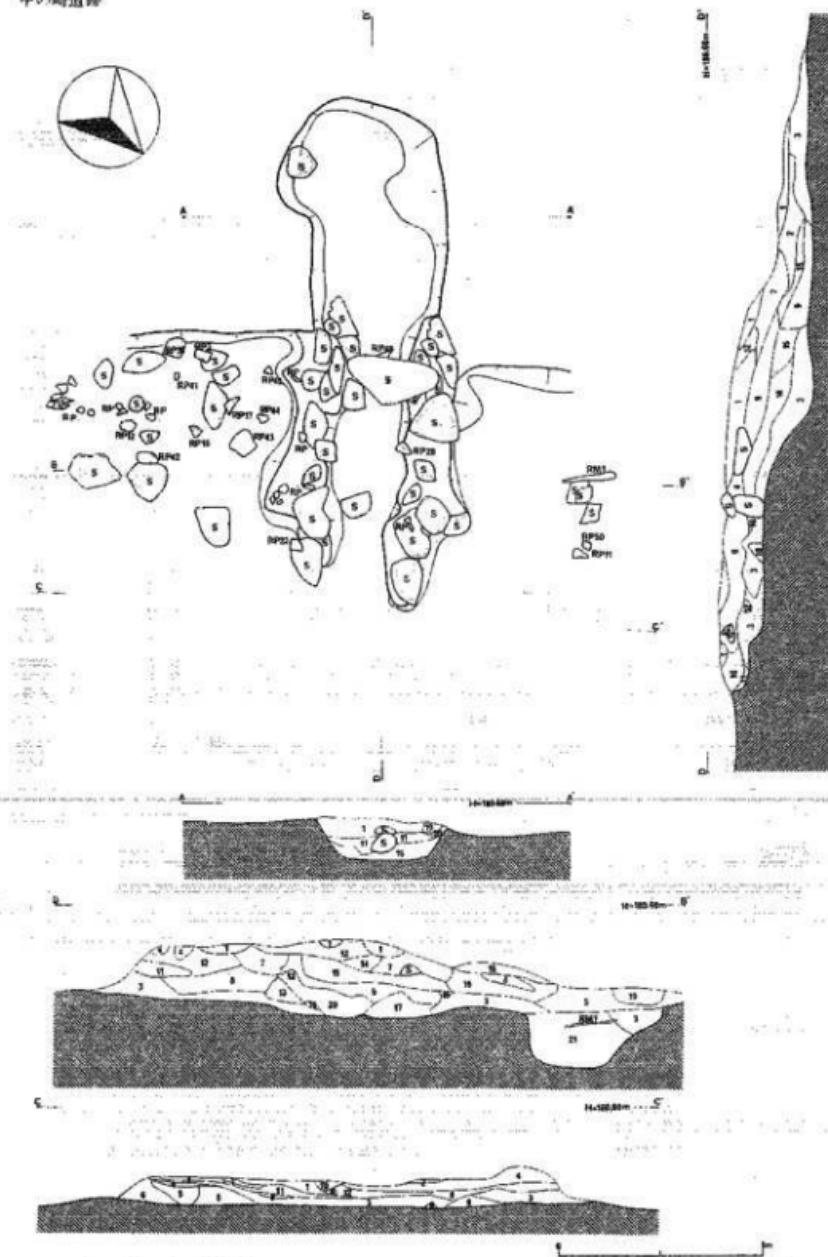
第10図 S1002竪穴住居跡

伝居跡の様式

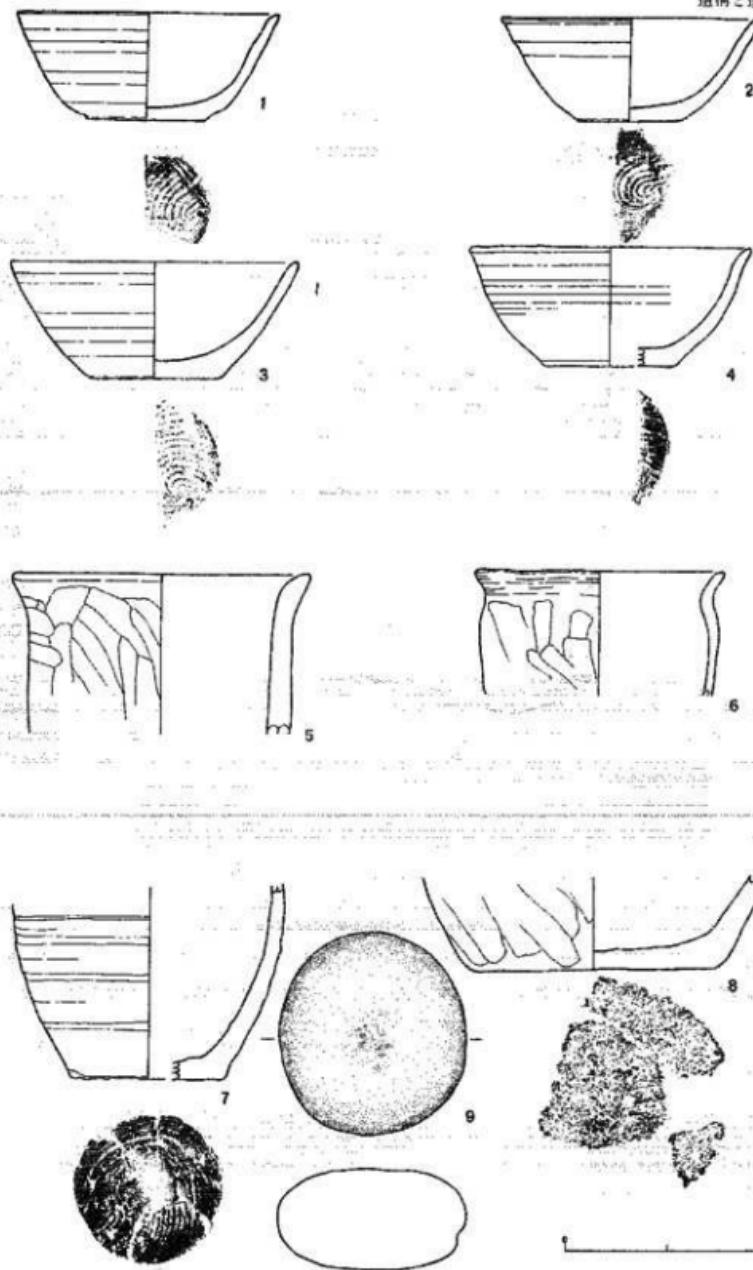
1. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 中粒の硬石塊が混入
 2. にじみ赤褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまりなし
 3. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 鮎褐色(7.5Y R 3%)
 大粒の硬石塊
 4. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 5. 黑色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 黄褐色(10Y R 5%)
 大粒の硬石塊
 6. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 7. 黑色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 鮎褐色土(10Y R 5%)
 大粒の硬石塊
5. 鮎褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 混合灰小粒30%混入
 6. 鮎褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 7. 鮎褐色土 5 Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 8. 鮎褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 明黄褐色(10Y R 5%)
 混入
 9. 鮎赤褐色土 5 Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 10. 黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまりなし
 11. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 12. 黑色土 7.5 Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 13. 黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 14. 明褐色土 7.5 Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 15. にじみ赤褐色土 5 Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 16. 混色土 7.5 Y R 5% 粘性ややあり しまり中 混合灰大粒5%混入
 17. 明黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 18. 黑色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 19. にじみ黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 鮎褐色(5Y R 5%)
 混合灰(10Y R 5%) プロック状に混入
 20. 黑色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 混合灰大粒80%混入

カマドの様式

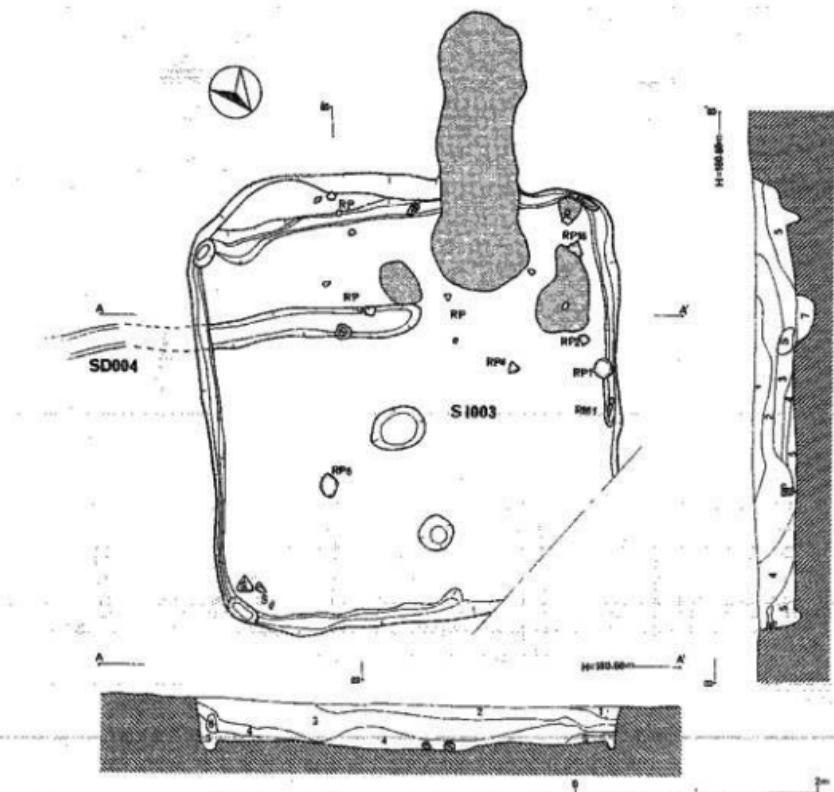
1. 黒褐色土 7.5 Y R 5% 粘性あり しまりなし
 2. 赤褐色土 5 Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 3. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 鮎褐色(10Y R 5%)
 極大粒混入
 4. にじみ黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中



第11図 SI002堅穴住居跡カマド



第12図 SI002竪穴住居跡出土遺物



第13圖 SI003豎穴住居跡

後醍醐の死

- | | | | |
|---------|-----------|---------|-------|
| 1. 黒褐色土 | 10 YR 4/6 | 粘性で少々あり | しまりなし |
| 2. 淡褐色土 | 10 YR 4/2 | 粘性や少々あり | しまりなし |
| 3. 褐色土 | 10 YR 4/8 | 粘性や少々あり | しまりなし |
| 4. 咖褐色土 | 10 YR 4/2 | 粘性なし | しまりなし |
| | | 混入 | |
| 5. 暗褐色土 | 10 YR 4/2 | 粘性や少々あり | しまりなし |
| 6. 黑色土 | 10 YR 2/3 | 粘性あり | しまりなし |
| 7. 黑褐色土 | 10 YR 2/3 | 粘性あり | しまりなし |

カマドの煙土

- 黒褐色土 10 YR 8/4 粘性ややあり しまり中 小枝の表面混入
 - 黒褐色土 10 YR 4/4 粘性あり しまり弱
 - 緑褐色土 7.5 YR 4/4 粘性あり しまり弱
 - 黒褐色土 10 YR 8/4 粘性ややあり しまり中
 - 暗褐色土 7.5 YR 4/4 粘性あり しまり中
 - にごい赤褐色土 5 YR 8/4 粘性ややあり しまり中
 - 黒褐色土 7.5 YR 4/4 粘性ややあり しまり中 小枝の表面混入
 - 赤褐色土 5 YR 8/4 粘性あり しまり中
 - 褐色土 7.5 YR 4/4 粘性ややあり しまり中
 - 暗褐色土 10 YR 8/4 粘性なし しまり中 大枝の表面混入

15. 鉛石がやわらかい「その他の園芸」

16. 桜色土 7.5Y R 4% 粘性をなし しまり中 深井解
17. 桜色土 10Y R 3% 粘性をなし しまり中 鹿少鉢の有田鉢混入
18. 暗桜色土 7.5Y B 1% 粘性をやあり しまり中 や
19. 暗桜色土 7.5Y B 2% 粘性をやあり しまり中 や
20. 黒土色土 7.5Y R 5% 粘性をややあり しまり中 小鉢の有田10%混入
21. 優雅桜色土 7.5 Y R 5% 粘性をややあり しまり中 や
22. にじ・桜色土 7.5Y R 5% 粘性をややあり しまり中
23. 赤褐色土 5 Y R 5% 粘性をなし しまり中
24. 褐色土 7.5Y R 5% 粘性をやあり しまり中
25. にじ・黄桜色土 10Y R 4% 粘性をあり しまり中
26. 黄褐色土 10Y R 4% 粘性をやあり しまり中
27. 黑褐色土 10Y R 4% 粘性をややあり しまり中
28. にじ・黄褐色土 10Y R 4% 粘性をややあり しまり中
29. 明褐色土 2.5 Y R 4% 粘性をややあり しまり中 深井解
30. にじ・黄褐色土 10Y R 4% 粘性をややあり しまり中 5% R 4% 30%混入
31. 明褐色土 7.5 Y R 4% 粘性をやあり しまり中 小鉢20%赤褐色土
32. 黑褐色土 10Y R 4% 粘性をややあり しまり中 小鉢20%赤褐色土
(5 Y R 4%) 30%混入

S1003 穂穴住居跡

第3表 挿図番号		第13~17図		図版番号	図版9~11・54・55	
遺構名	S1003	検出地区	15-U, 16-U			
法 量	壁長	325cm	(224)cm	338cm	(222)cm	
	壁高	42.4~47.1cm	35.3~43.6cm	44.0~53.8cm	36.0~44.9cm	
	壁溝幅	7.0~15.0cm	8.0~15.0cm	10.0~28.0cm	10.0~19.0cm	
	壁溝深	6.9~15.0cm	6.1~8.5cm	5.0~8.0cm	8.2~15.7cm	
形態	方形	面積	12.4m ²	主軸方向	N52°E	
かまど	位置	南西壁西寄り		構築素材	芯部石組	

プラン確認 上面は削平されており、表土下直下が地山で、その地山上面にて検出された。

壁面の状態 壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをする。北側隅は農道下だったので、道路をつけ替えて掘り下げたが、遺構は既に破壊されていた。

床面 平坦で堅固である。

壁溝 南壁を除く三方は壁沿いに壁溝が走るが南壁のかまど東側は壁より離れて壁溝が走っている。

かまど燃焼部東側付近より排水溝と思われるSD004が東へ走っている。

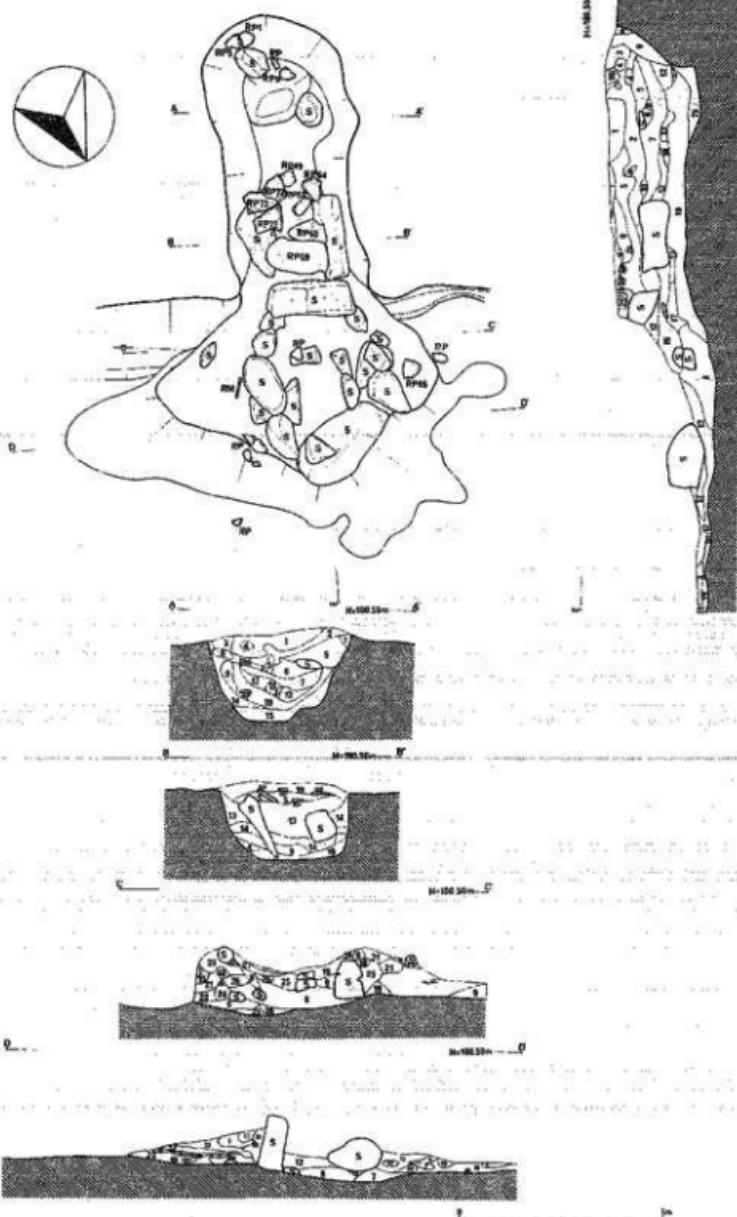
柱穴、ピット 北側隅を除く三隅に確認される。他に住居跡中央部に1個、中央部北側に1個計2個のピットが確認された。

かまど 扁平な石を芯材として構築されたものである。天井部、袖部共に芯材の石が構築當時に近い形で遺存している。また煙道部は土師器甕の破片により強化されている。構築土の一部に浮石が混入しており、浮石よりも新しい住居跡と思われる。

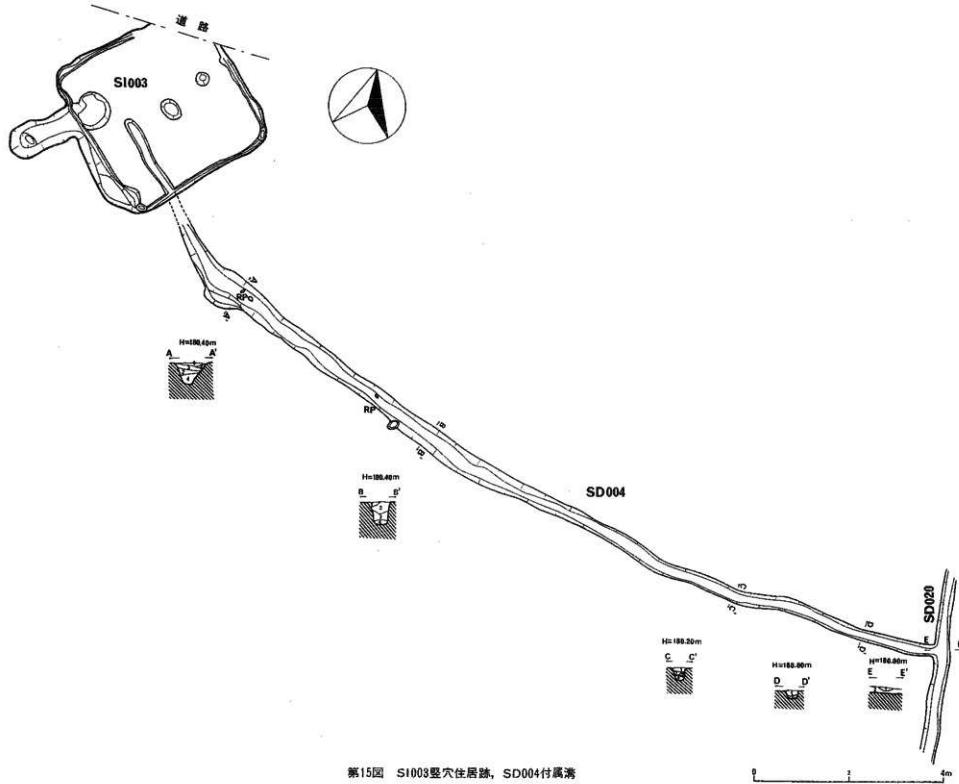
遺物とその出土状態 遺物の出土量は中程度である。环の完形ではなく、破片のみの出土であるが、いずれも回転糸切り技法が施されている。甕の口縁部はほとんど反りのないものもあるが、頭部が短く反りや深い比較的大きいものが多い。また砂底の土器も2点出土している。

第17図11~17は付属溝であるSD004から出土したものである。环は回転糸切り技法が施されており、甕はいずれも底部破片である。

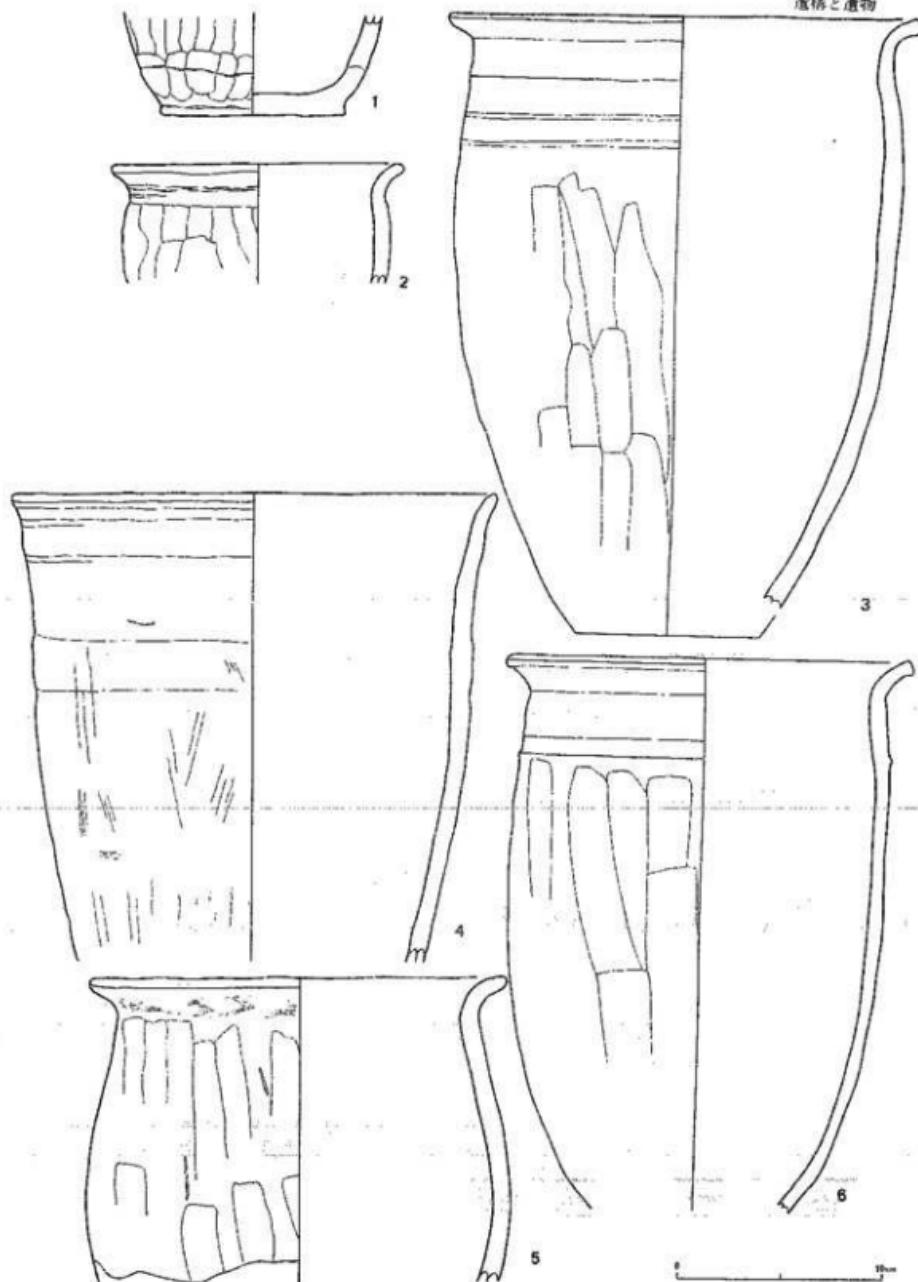
18~21はS1003穂穴住居跡から出土したものであるが、いずれも縄文時代のものと思われる。21は搔器で、石質は頁岩である。



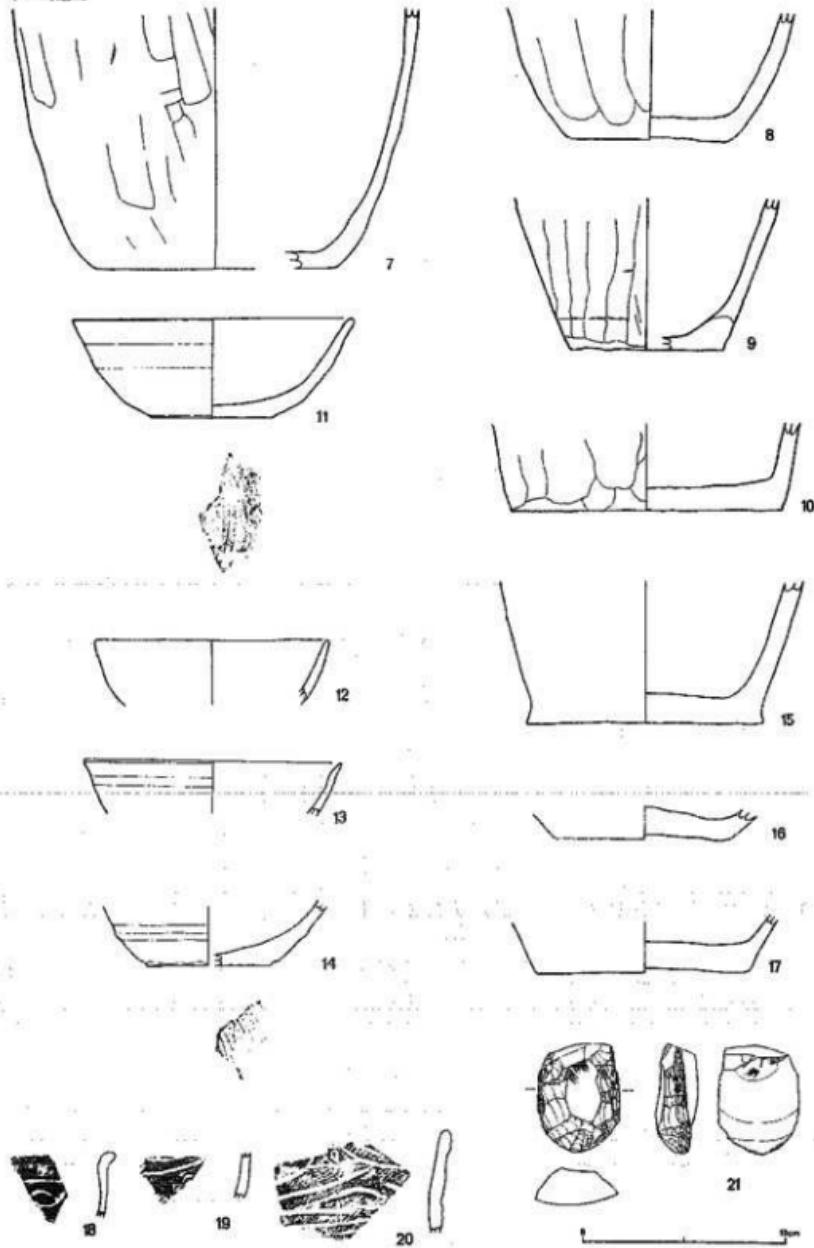
第14図 SI003豊穴住居跡カマド



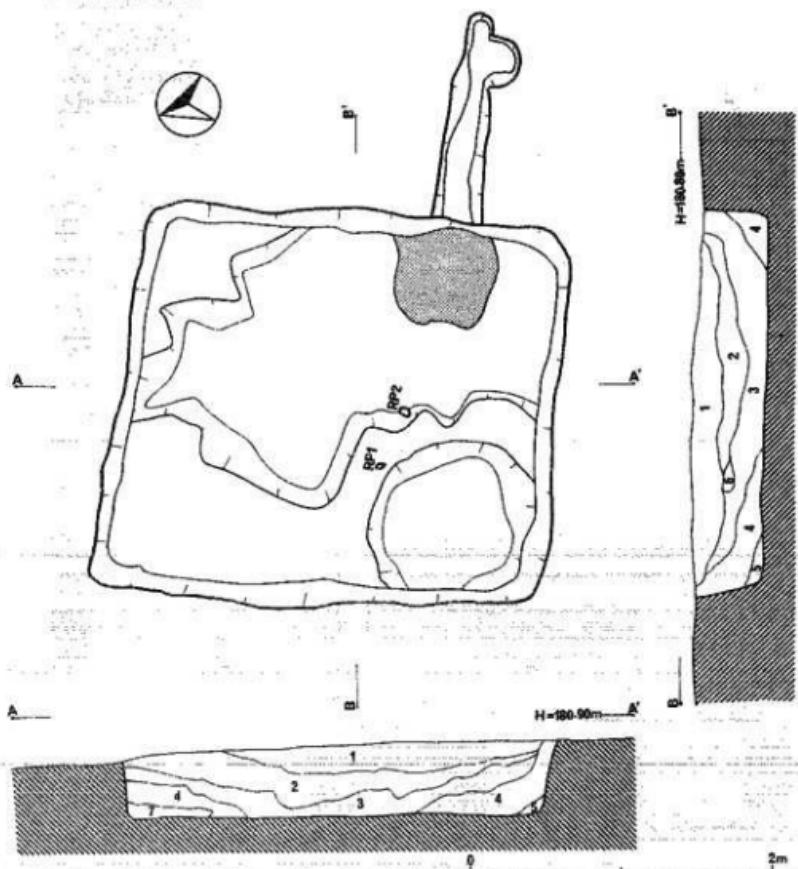
第15図 SI003堅穴住居跡, SD004付漏溝



第16図 S1003堅穴住居跡出土遺物(1)

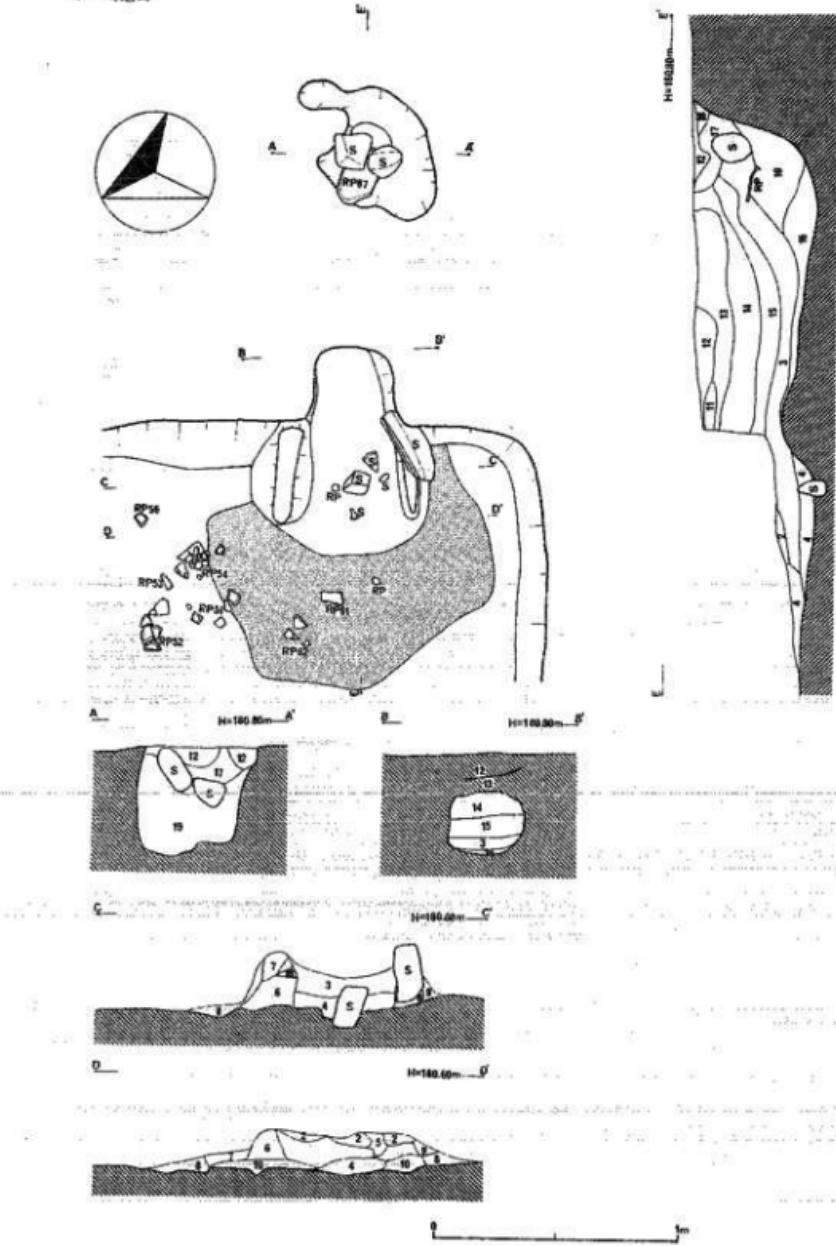


第17図 SI003整穴住居跡出土遺物(2)

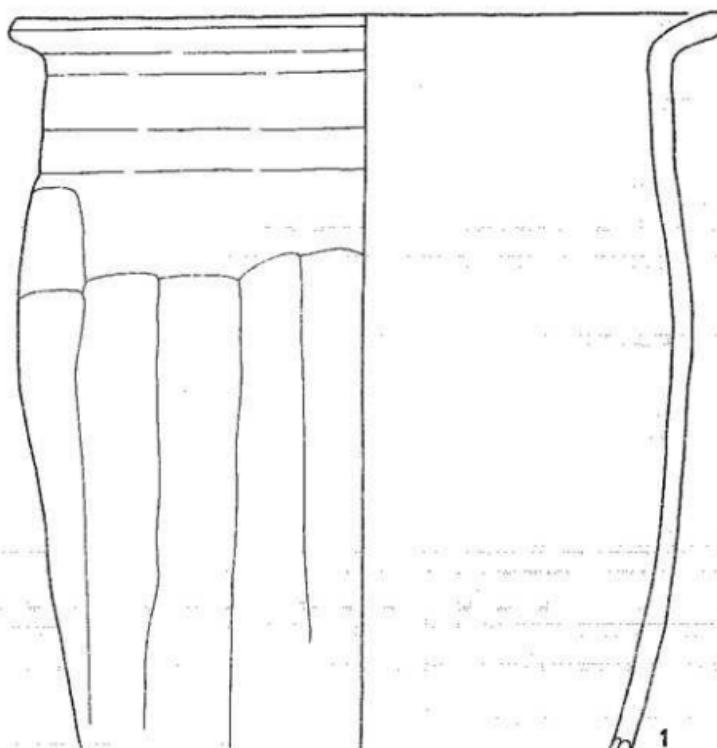


第18図 S1008豎穴住居跡

住居跡の埋土								
1. 黒褐色土 10YR 5/6	しまり中 滲潤色土 (5YR 6/6)	炭化物	白色	6. 褐色土 7.5YR 6/6	粘性やさあり	しまり中	粘土質	
	板状小粒 1%混入			7. こぶし状褐色土 10YR 6/6	粘性ややあり	しまり中	粘土質(板)	
2. 黒色土 10YR 5/6	粘性ややあり しまり中	火山性かる石混入		8. 黑褐色土 10YR 5/6	粘性ややあり	しまり中	粘土質(板)	
3. 黑褐色土 10YR 5/6	しまり中	黄褐色ブロック 火山性板状小粒を含む		9. 褐色土 7.5YR 6/6	粘性ややあり	しまり中	黄褐色 (7.5YR 5/6)	
	板状小粒は自然崩壊したとは思われにくい			10. 褐色土 10YR 5/6	粘性ややあり	しまり中	灰黒褐色 (10YR 5/6)	
4. 黑褐色土 10YR 5/6	しまりなし	黄褐色小粒 白色粘土混入		11. 砂岩層				
5. 黑色土 10YR 5/6	粘性あり しまりなし			12. 黑褐色土 10YR 5/6	粘性ややあり	しまり中		
6. 黑色土 10YR 5/6	粘性あり しまりなし			13. 黑褐色土 10YR 5/6	粘性ややあり	しまり中		
7. あさき色土 2.5YR 6/6	粘性あり しまりなし	黒褐色土 (30YR 5/6)		14. 黑褐色土 10YR 5/6	粘性ややあり しまり中			
	混入			15. 黑褐色土 7.5YR 6/6	粘性を少し弱め 粘土 炭化物混入 砂石			
カマドの埋土								
1. 淡褐色土 7.5YR 5/6	粘性ややあり しまり中	施土 わずかに灰		16. 磐石層				
	地盤混入 粘土質			17. 黑褐色土 10YR 5/6	粘性ややあり しまり中			
2. 黑褐色土 10YR 5/6	粘性なし しまり中	磐石10%混入		18. 黑褐色土 10YR 5/6	粘性ややあり しまり中			
3. 淡褐色土 7.5YR 5/6	粘性あり しまり中	発土混入 粘土質		19. 黑褐色土 7.5YR 5/6	粘性あり しまり中 粘土質			
4. 黑褐色土 10YR 5/6	粘性なし しまり弱	風化物混入 粘土質						



第19図 S1008竪穴住居跡カマド



第20図 SI008堅穴住居跡出土遺物

第4表		揮園番号	第18~20回	園版番号	園版12・13・56
造構名	SI008	検出地区	10-W, 10-X, 11-W, 11-X		
法		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
壁長		254cm	250cm	282cm	295cm
量	壁高	37.5~38.0cm	53.2~57.3cm	38.9~58.4cm	43.9~49.6cm
形態	方形	面積	7.8m ²	主軸方向	N45°W
かまど	位置	南東壁南寄り		構築素材	芯部石組

SI 1008 穫穴住居跡

プラン確認 地山上面にて検出した。この箇所は表土が薄く、すぐ地山である。

壁面の状態 壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをする。

床面 貼床面はほぼ平坦で堅固であるが若干の凹凸がみられる。

柱穴、ピット 柱穴は確認されなかった。西側隅に大きなピットが1個確認されている。

かまど 上部削平のため袖部の遺存状態は不良である。煙道部はトンネル状になっている。

燃焼部において支脚と思われる石が検出されている。

遺物とその出土状態 遺物の出土量は中程度であるが、完形もしくは完形に近いものは第20図1のもの1点のみである。壺も数点出土しているが、底部は出土していない。縁の口縁部は頸部が短く、反りのあるものが多い。砂底の土器も1点出土している。

SI 1009 穫穴住居跡

第5表		挿図番号	第21~24図	図版番号	図版13・15・56	
遺構名	SI 1009	検出地区	11-S, 11-T, 12-S, 12-T			
法 量	壁長	450cm	412cm	441cm	435cm	
	壁高	20.7~27.6cm	24.5~27.3cm	21.1~24.1cm	9.3~21.0cm	
	壁溝幅	17.0~40.0cm	—	26.0~38.0cm	—	
	壁溝深	7.2~10.1cm	—	2.1~8.9cm	—	
形態	方形	面積	19.7m ²	主軸方向	N28°E	
かまど	位置	不明		構築素材		

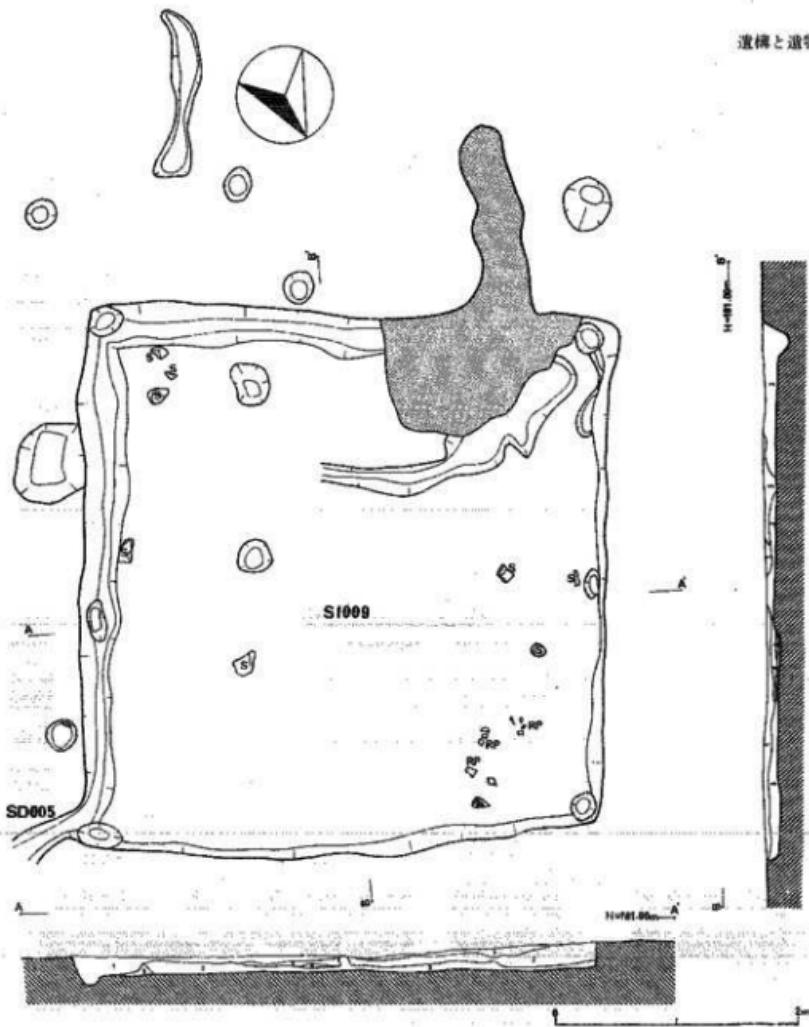
プラン確認 標準層位第IV層上面にて一部が確認されたが不明確だったため地山面が最終確認面となった。

壁面の状態 上面が削平されているため壁の立ちあがりははっきりしているが全体の状態は不明である。

床面 平坦で堅固である。

壁溝 南壁沿いと東壁沿いに確認されている。かまど燃焼部より東側に、住居跡北東隅に排水溝と思われるSD005が走っている。この溝はSI001竪穴住居跡の付属溝であるSD004により切られている。

柱穴、ピット 住居跡四隅と東壁、西壁の中間部に2個、住居跡南壁外、東壁外に5個計11



第21図 S1009竪穴住居跡

住居跡土

1. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒石30%混入
2. 黒褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 深石30%混入
3. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中
4. 黑褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中
5. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中
6. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性あり しまりよし

カマド壙土

1. 淡褐色土 7.5Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒石50%混入
2. 褐色土 7.5Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒石30%混入
3. 黑褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中
4. 増粘土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中
5. 増粘土 7.5Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒石25%混入
6. 黑褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒石20%混入
7. 黑褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中
8. 增粘土 7.5Y R 5/4 粘性ややあり しまり中

9. 増粘土 7.5Y R 5/4 粘性ややあり しまり中

10. 増粘土 7.5Y R 5/4 粘性あり しまりなし

11. 褐色土 7.5Y R 5/4 粘性あり しまりなし

12. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性あり しまりなし

13. 褐色土 7.5Y R 5/4 粘性ややあり しまり中

14. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中

15. 增粘土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒子15%混入

16. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性なし しまりなし

17. 增粘土 5Y R 5/4 粘性なし しまり中

18. 增粘土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒子40%混入

19. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中

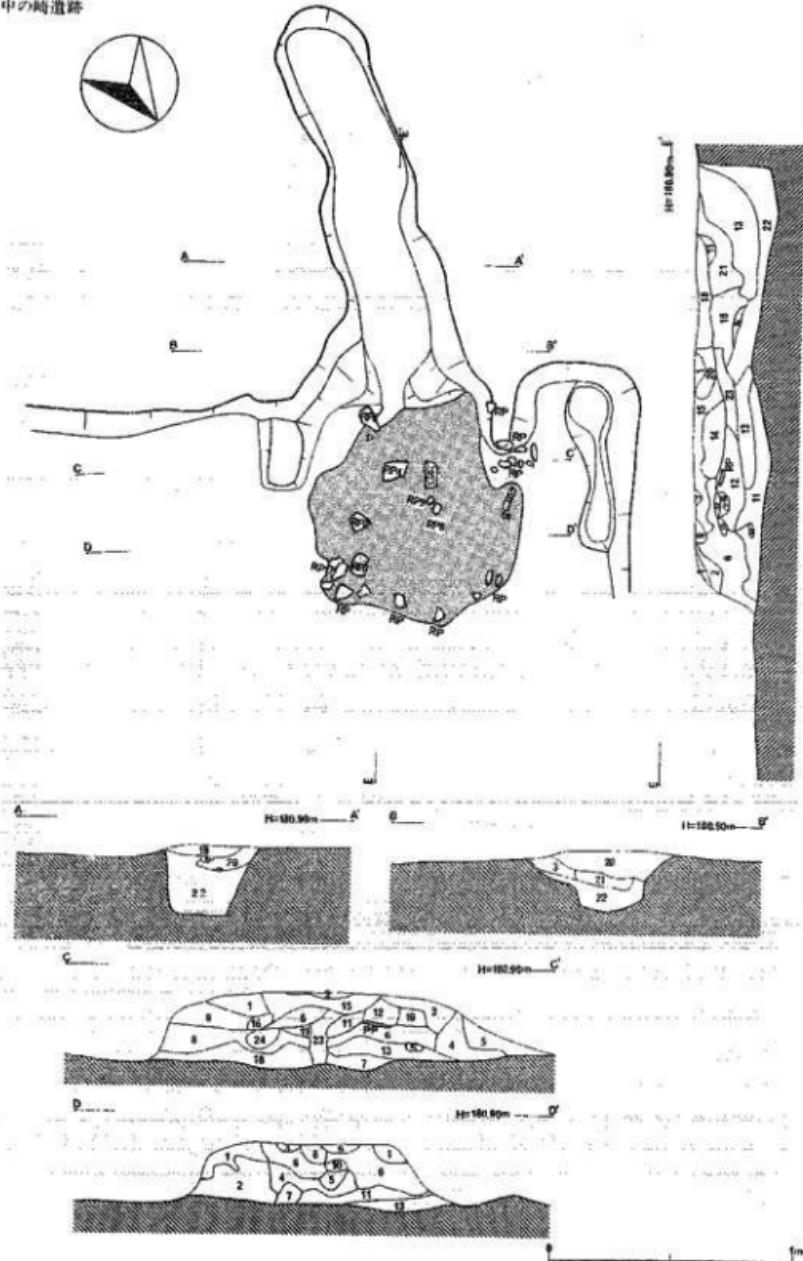
20. 黑褐色土 7.5Y R 5/4 粘性ややあり しまり中

21. 黑褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒石30%混入

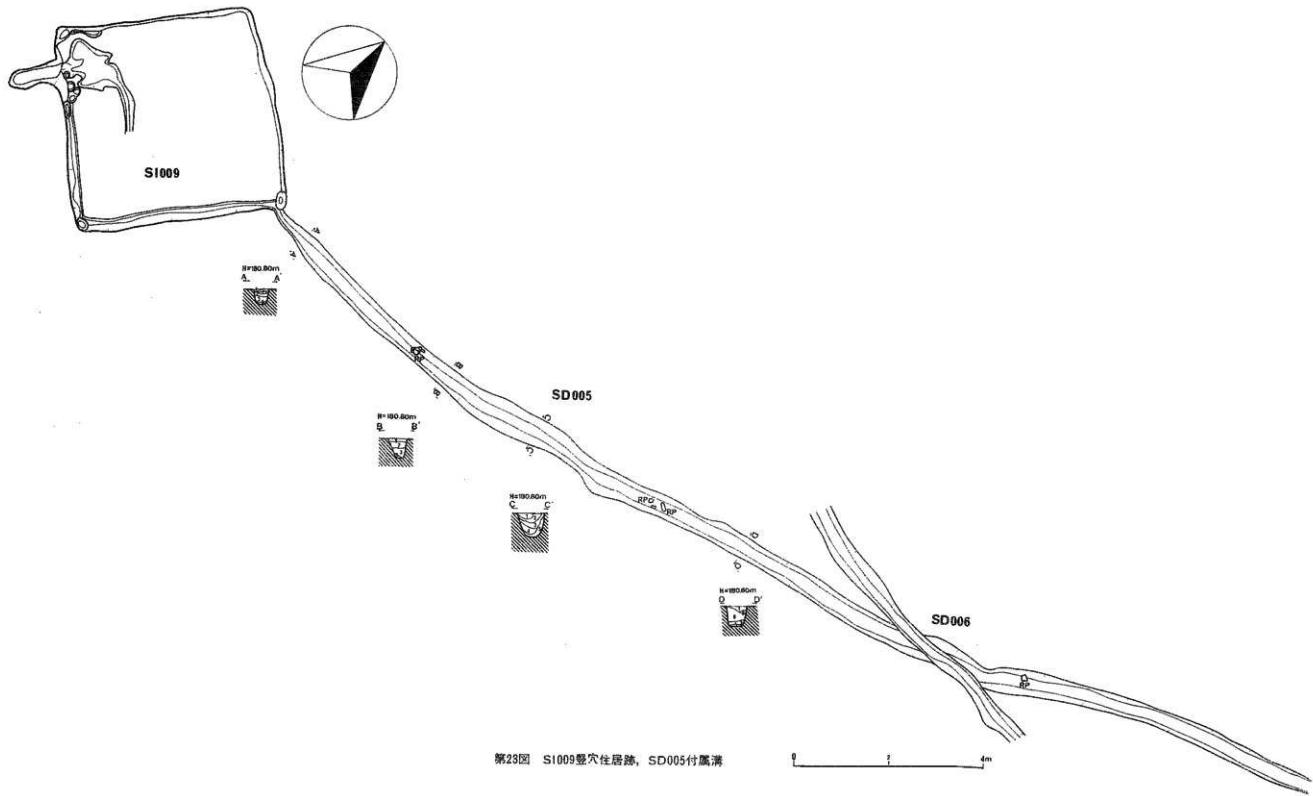
22. 黑褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 小粒石10%混入

23. 淡褐色土 5Y R 5/4 粘性ややあり しまり中

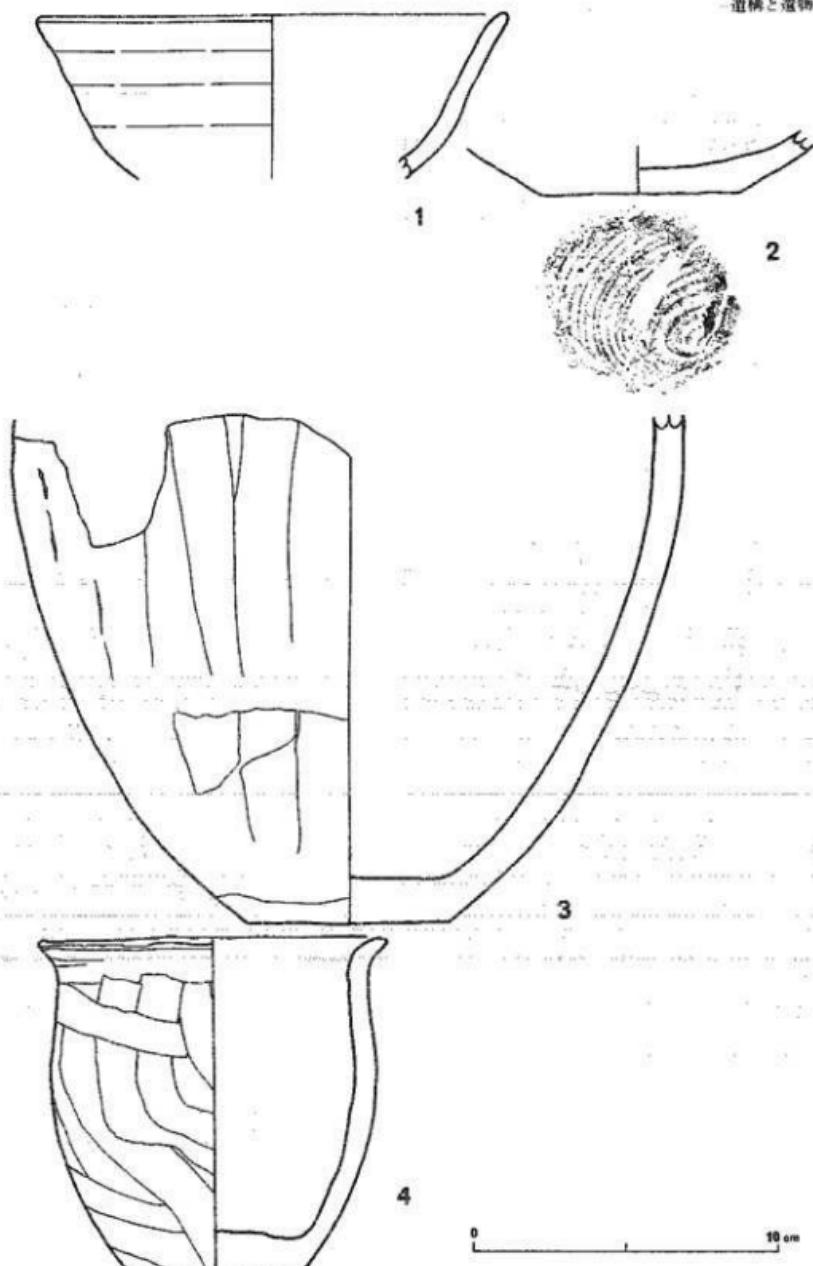
24. 淡褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中



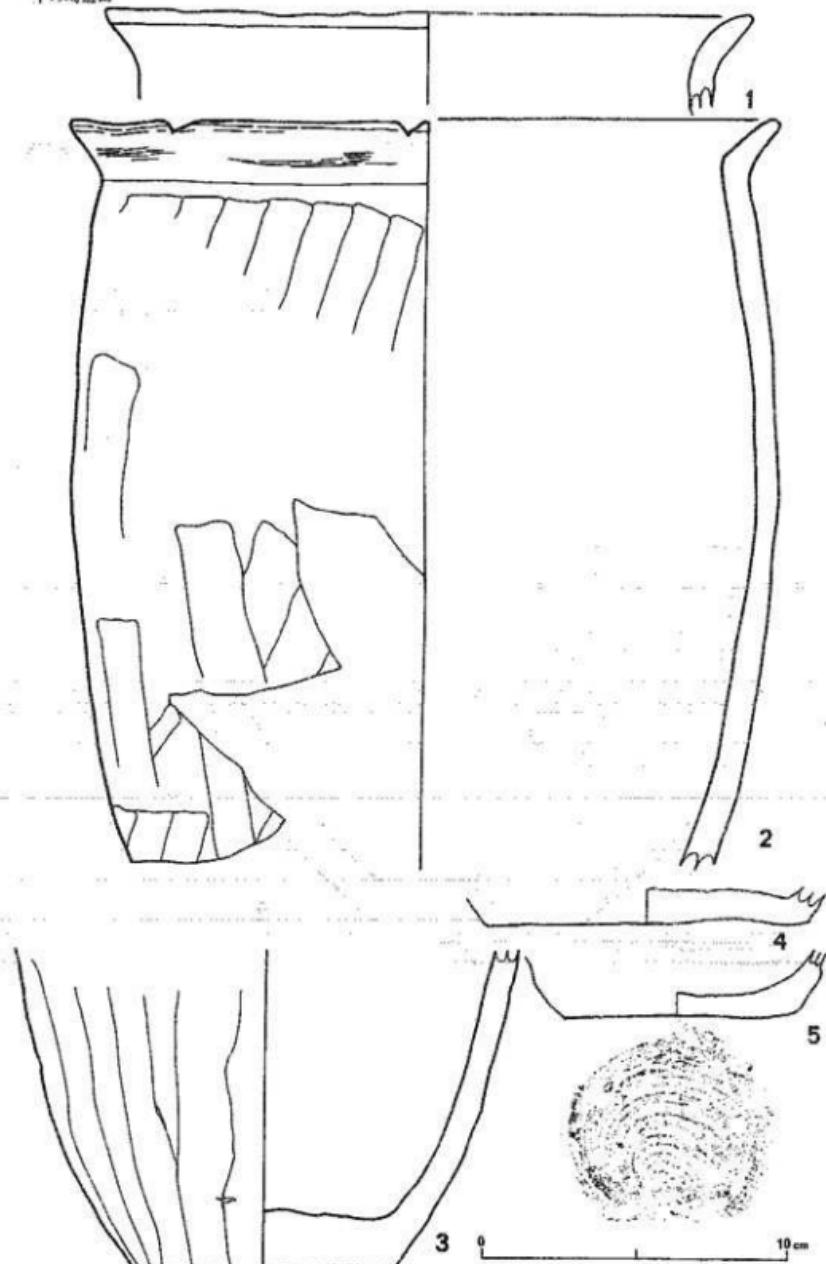
第22図 S1009竪穴住居跡カマド



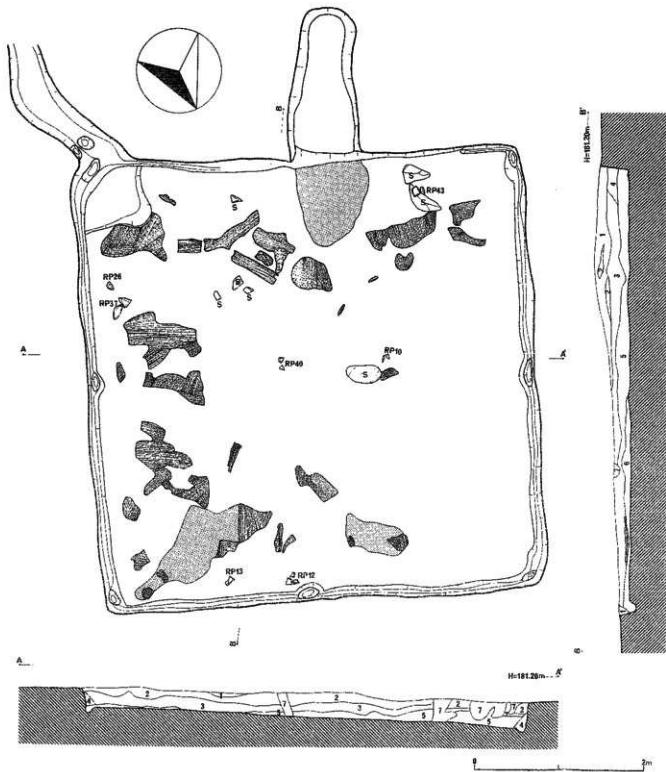
第29図 S1009整穴住居跡, SD005付属溝



第24図 S1009堅穴住居跡出土遺物



第25図 SD005溝跡出土遺物



第26図 SI1012竪穴住居跡

- 住居跡土**
1. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりなし
 2. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりなし 混入10%起火
 3. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりなし 黄褐色土(10Y R 5%)混入
 4. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりなし 黄褐色土(10Y R 5%)混入
 5. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりなし 黄褐色土(10Y R 5%)様大3
 6. 蒸化物
 7. 煙灰
- カマド壁土**
1. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまり中 浮石混合土
 2. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまり中 浮石10%混入
 3. 蓝色土 7.5 Y R 5% 粘性ややあり しまり中 黑褐色土(10Y R 5%)混入
 4. 蓝色土 7.5 Y R 5% 粘性ややあり しまりなし 土上10%混入
 5. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまり中 蒸化物 黑褐色土(10Y R 5%)混入
 6. 明黄褐色土 10Y R 5% 粘性あり しまりよし 粘土(天井部分)
 7. 明黄褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまりよし
 8. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりよし 浮石20%混入
 9. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりよし 浮石30%混入(混合土)
 10. 黑褐色土 7.5 Y R 5% 粘性なし しまりよし 土上10%混入
 11. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりよし 炉土5%、蒸化物5%混入
 12. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中 浮石10%混入
 13. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性ややあり しまり中
 14. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりよし 土上10%混入
 15. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりよし 土上10%混入
 16. 黑褐色土 7.5 Y R 5% 粘性なし しまりなし (煙灰天井部分の廻したもの)
 17. にじい黒褐色土 10Y R 5% 黄褐色(7.5 Y R 5%)にじい 黄褐色土(10Y R 5%)にじい 土上10%混入(煙灰天井部分の廻したもの)
 18. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりなし 土上10%混入
 19. 黑褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりなし 土上10%混入
 20. 明褐色土 7.5 Y R 5% 粘性なし しまりよし 土上
 21. 黄褐色土 10Y R 5% 粘性なし しまりなし

個の柱穴が検出された。他に住居跡中央部や東側に1個と南側に1個の計2個のピットが確認されている。

かまと 上部削平のため還存状態不良である。袖部及び芯材の確認はできなかった。

遺物とその出土状態 遺物出土量は多い方である。壺の底部はいずれも回転糸切りである。壺の口縁部は反りのほとんどないものと反りの明確なものが混在するが、いずれも頸部は短いのが特徴である。また砂底の土器も1点出土している。

第25図は付属溝から出土した遺物で、いずれも土師器である。5は壺で内面黒色処理で、底部は回転糸切りである。壺は反りの明確なものが多く出土しており、その頸部は短い。

S I 012 穫穴住居跡

第6表 挿図番号		第26~30図		図版番号	図版16・17・57・58	
遺構名	S I 012	検出地区	6-A, 6-Z, 7-A, 7-Z, 8-Z			
法 量	壁長	東側壁 528cm		西側壁 515cm	南側壁 515cm	北側壁 510cm
	壁高	44.3~53.4cm		28.5~39.9cm	35.5~41.0cm	28.6~42.1cm
	壁溝幅	11.0~15.0cm		12.0~19.0cm	7.0~15.0cm	11.0~15.0cm
	壁溝深	11.0~16.7cm		6.9~13.0cm	5.0~8.7cm	8.9~18.0cm
形態	方位	方形	面積	28.9m ²	主軸方向	N 31° E
かまと	位置	南北壁南寄り			構築素材	芯部分組

プラン確認 地山上面にて確認した。

壁面の状態 壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをする。

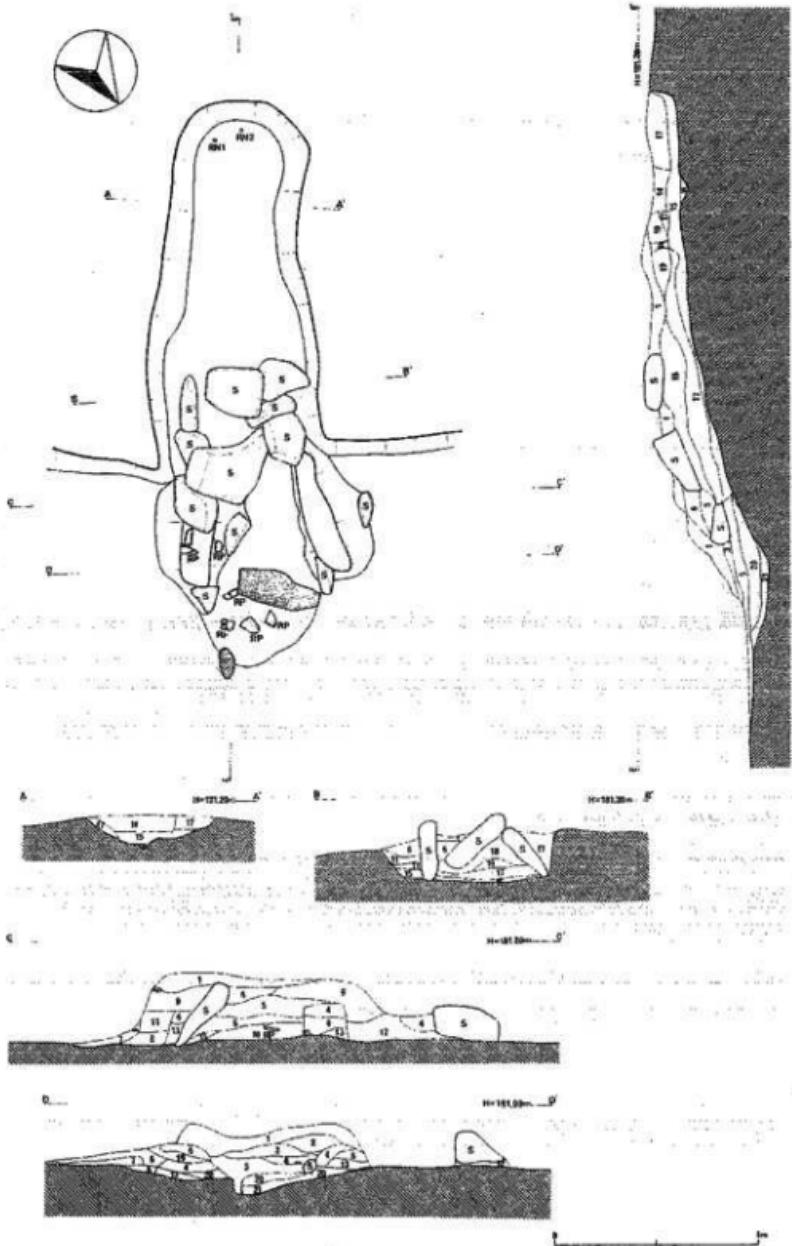
床面 平坦で堅固である。壁材に用いられたと思われる炭化材が多量に検出されている。

壁溝 ほぼ全周する。

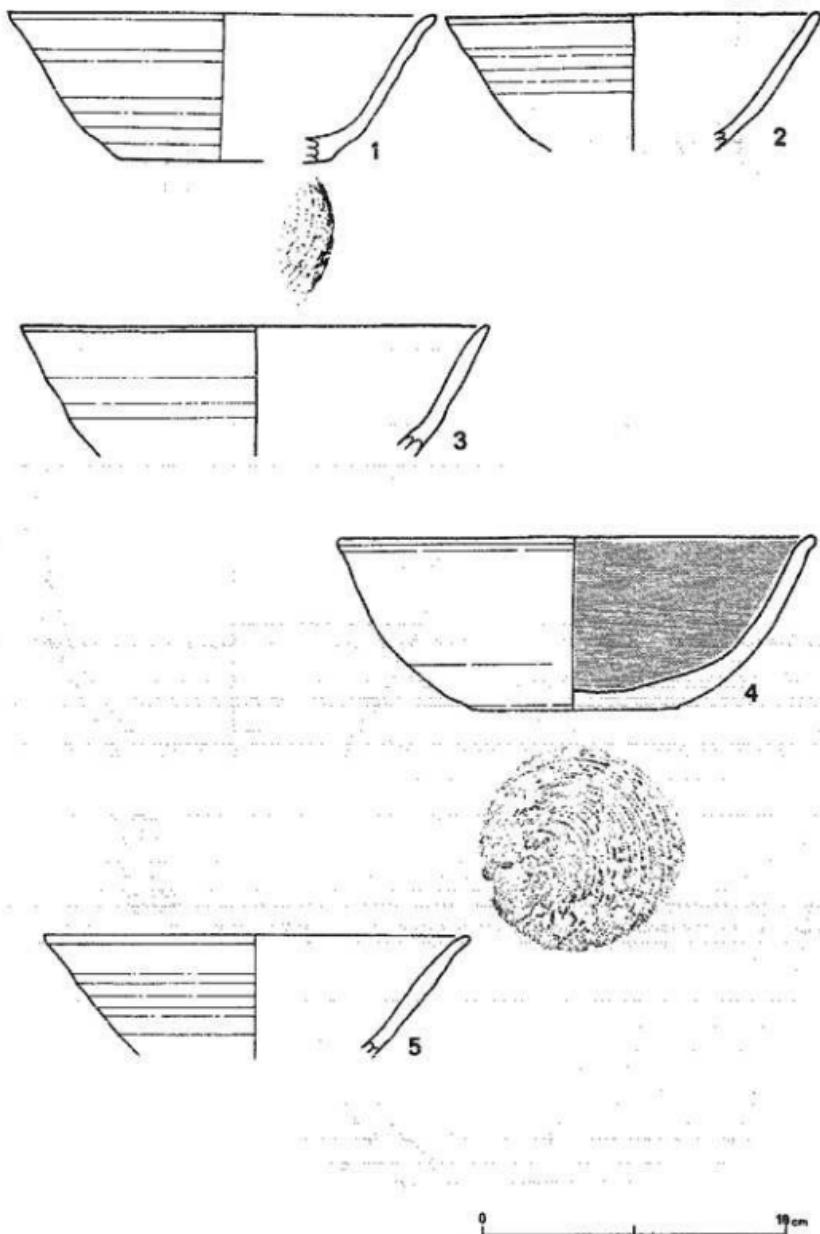
柱穴、ピット 住居跡四隅及び南壁を除く各壁の中間部に計7個の柱穴が検出された。住居跡南東隅に排水溝の一部と思われるピット1個が確認されている。

かまと 扁平な石を芯材として構築されたものである。煙出口部において鉄器2個が検出されている。

遺物とその出土状態 遺物の出土量は多い方である。壺の比率が比較的高いが、壺は底部ヘラ切りのものが1点出土しているが、他は回転糸切りされている。土師器壺の口縁部は外反するものが多いが、その頸部は短い。P.149第30図9は須恵器壺である。これは、S I 012 穫穴住居跡床面から出土したものであるが、特に頸部の片側は0.5~2cm程の小破片になっており、

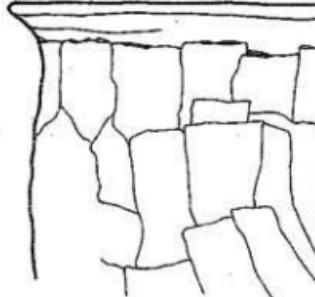


第27図 SI012豊穴住居跡カマド

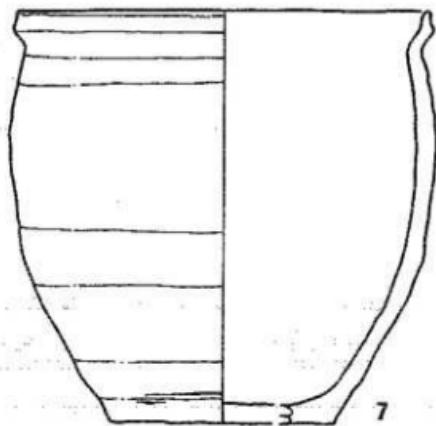


第28図 S1012竪穴住居跡出土遺物(1)

中の崎遺跡

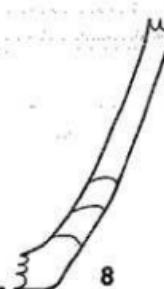
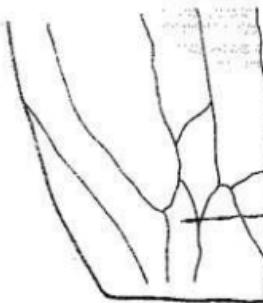


m 6



m 3

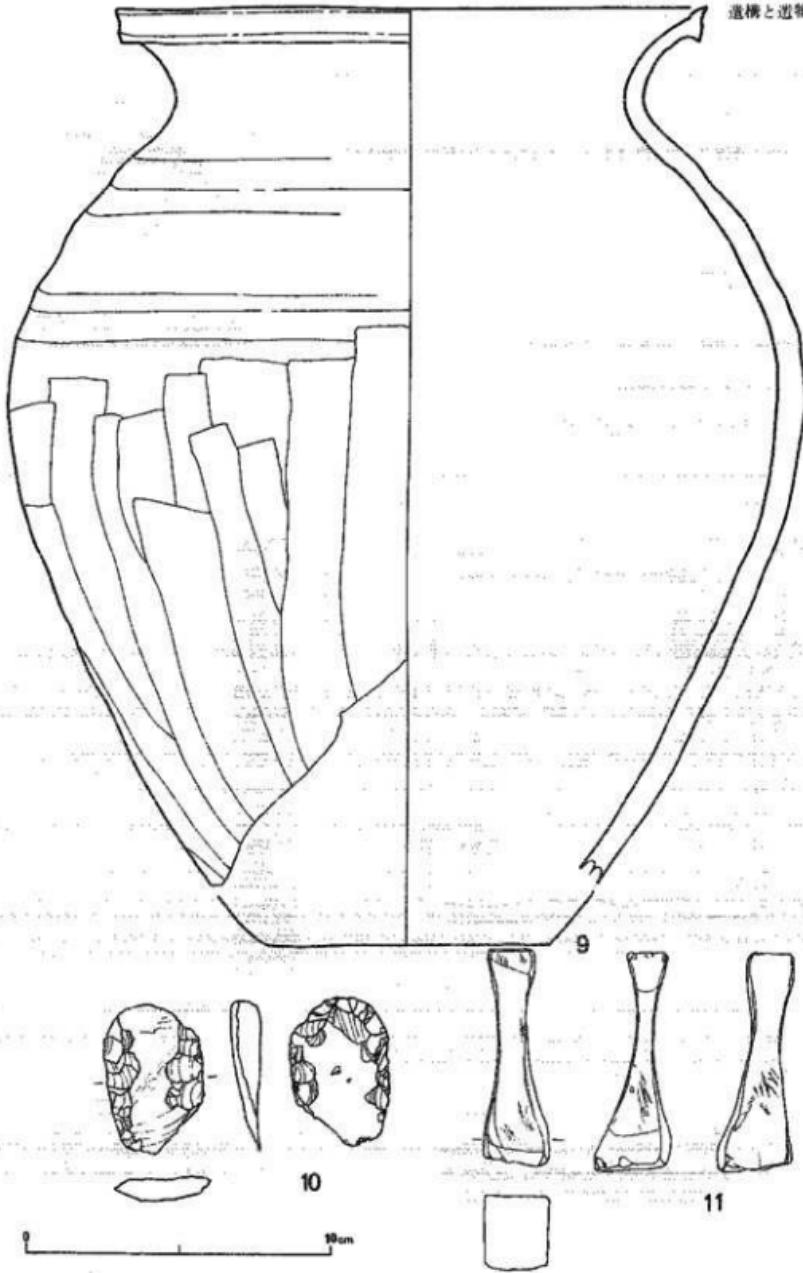
m 7



m 8



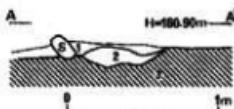
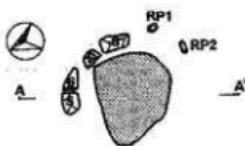
第29図 SI012竪穴住居跡出土遺物(2)



第30図 SI012竪穴住居跡出土遺物(3)

頭部の極めて狭いところに大きい圧力がかかって碎かれた
ような状態で出土した。

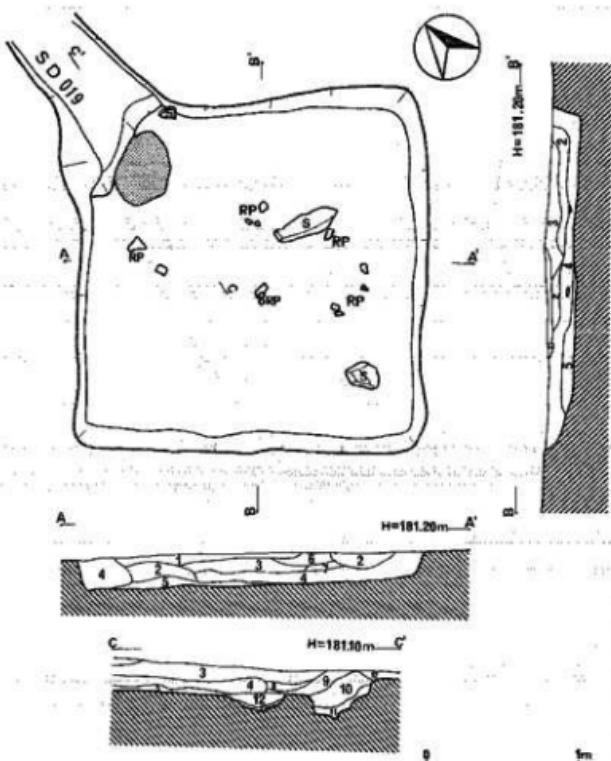
10は搔器で、石質は頁岩。11は砾石で石質は凝灰岩であ
る。



第31図 SI1014堅穴住居跡

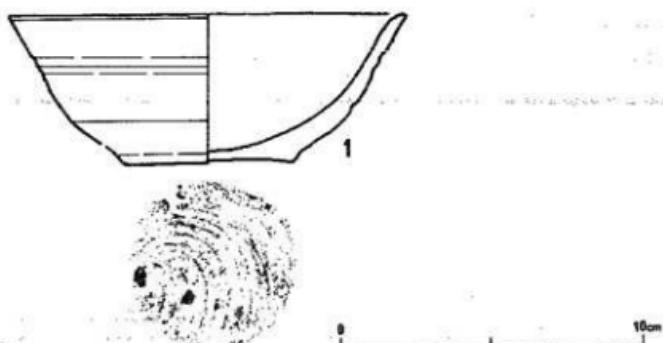
プラン確認 標準層位の第VII層にて検出したが、上部の
削平がひどく壁は検出されなかった。

炉 60cm×45cmの範囲で焼土が検出されており、その回



第32図 SI1018堅穴住居跡

- 1. 黒褐色土 30YR 5/6 しまり中 浮石少量混入
- 2. 黒褐色土 30YR 5/6 浮石混入 下部には部分的にブームブロックを混入
- 3. 淡黄土色 10Y R 5/6 しまりなし 浮石少量混入
- 4. 黑褐色土 10Y R 5/6 しまりなし 浮石少量混入
- 5. 黑色土 10Y R 5/6 しまりなし 浮石少量混入
- 6. 黑褐色土 10Y R 5/6 砂質土 浮石混入
- 7. 黑色土 10Y R 5/6 粘性あり しまりよし 嵌入物なし
- 8. 喀斯特土 10Y R 5/6 しまりなし
- 9. 喀斯特土 10Y R 5/6 しまりなし 下部に焼土混入
- 10. 黑褐色土 10Y R 5/6 しまりなし 黄褐色ブロックを50%混入
- 11. 黑色土 10Y R 5/6 しまりなし
- 12. オリーブ褐色土 2.5 YR 5/6 粘性あり しまりよし



第33図 SI018堅穴住居跡出土遺物

りを数個の石が囲む石開炉である。縄文時代のものと思われる。

覆土 断面観察による覆土の状態は次のとおりである。

1. 黒色土 10Y R 3/4 赤色極小粒混入。粘性ややあり。
2. 褐色土 7.5 Y R 3/4 焼土。炭化物極小粒2~3%混入。
3. 黒褐色土 10Y R 3/4 標準層位第Ⅳ層。

SI018 堅穴住居跡

第7表 採集番号		第32・33図		図版番号	図版58	
造構名	SI018	検出地区	6—A, 6—Z			
法	壁長		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
量	壁高		240cm	(180)cm	230cm	(168)cm
形態	方	形	面積	5.2m ²	主軸方向	N 40°E
かまど	位置	なし			構築素材	

プラン確認 遺跡西側は表土が薄く、その直下の地山上面から検出された。

壁面の状態 壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをしている。

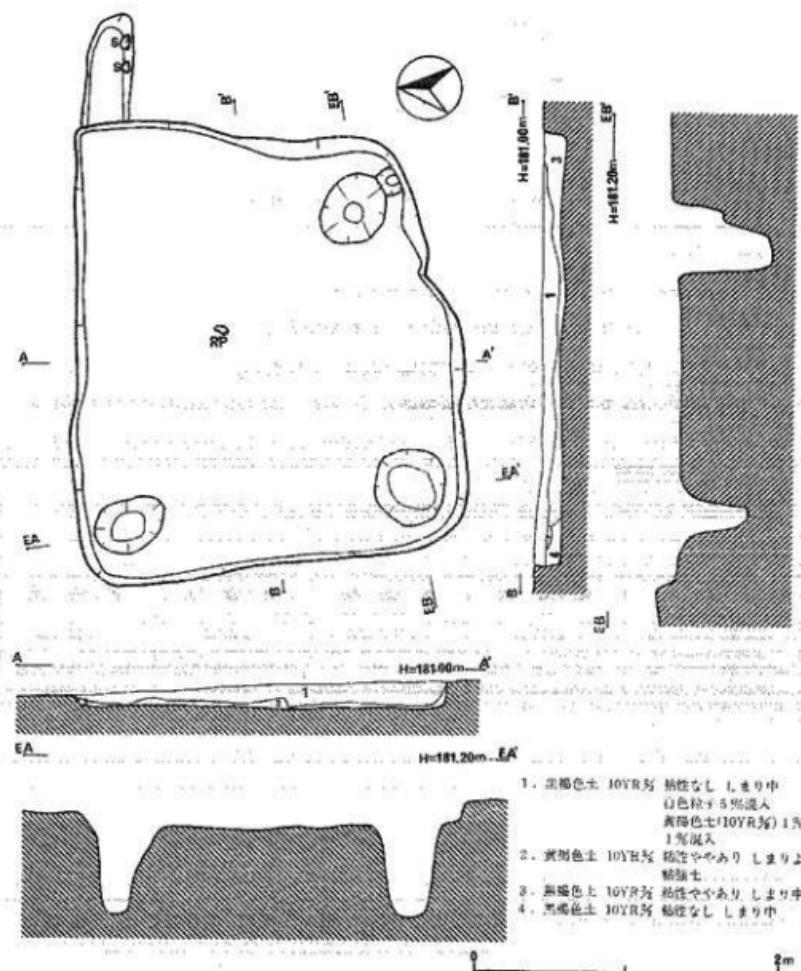
床面 平坦で堅固である。

壁溝 壁溝は確認されているが、北側隅に排水溝と思われる溝(SD019)を検出した。しかし発掘範囲西端のため、全体は不明である。またSD019の下部に縄文時代晩期初頭の土壌を検出したが、範囲外のためその計測は不可能であった。

柱穴、ビット 確認されず。

かまど 北側隅付近に焼土が確認されているが、かまどは検出されていない。

遺物とその出土状態 遺物出土量は少ない。第33図1は壙で底部は回転糸切りである。その他は土師器裏の破片が数点出土したのみである。



第34図 S1034豎穴住居跡

S I 034 竪穴住居跡

第8表		地図番号	第34図	図版番号			
遺構名	S I 034	検出地区	10-S, 11-S				
法	壁長	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁		
壁高	205cm	244cm	265cm	303cm			
形態	方形容	面積	7.1m ²	主軸方向	不規則		
かまど	位置	なし	構築素材				

プラン確認 S I 009 竪穴住居跡の南方で検出された。IV層上面で S I 009 の一部が検出されているが、その面で S I 034 竪穴住居跡は検出されておらず、不確実ながら S I 034 の方が古い可能性がある。

壁面の状態 壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをしている。

床面 平坦で堅固である。

壁溝 検出されなかった。

柱穴 ピット 北東隅を除く三隅に 3 個の柱穴が確認された。

かまど 検出されなかった。

遺物とその出土状態 遺物は土師器の縁の脇部破片が 1 点出土したのみである。

b. 土壌

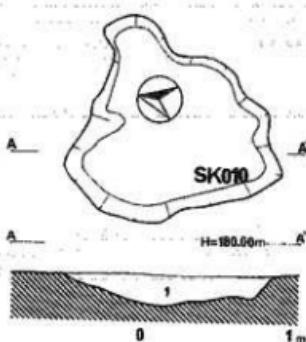
SK010 土壌 (第35図)

15-U 地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部 136×132cm、壙底部 134×108cm、深さ 20cm、面積 (壙口部における平面積で以下同じ) 1.272m² を測る。床面は凹凸があり、壁も不明確であるが、ゆるやかに立ち上がる。

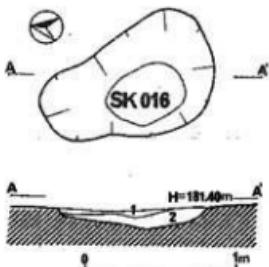
主軸方位は N 77° E である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒色土 10Y R^{1/2} 貼性中。しまり悪し。

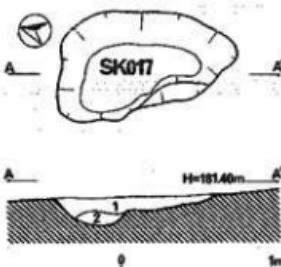
黒褐色土 10Y R^{1/2} 2% 混入。



第35図 SK010 土壌



第36図 SK016土壤



第37図 SK017土壤

SK016 土壤 (第36図 図版18)

7-V地区より標準層位の第VII層（以下標準層位はローマ数字で示す）にて検出された。平面形は不整橢円形を呈する。壌口部119×70cm, 壌底部54×36cm, 深さ14cm, 面積0.664m²である。床面は若干の凹凸があり、壁はゆるやかな立ち上がりを呈する浅い小土壤である。主軸方位はN 38°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒色土 10Y R 4% しまりやや悪し。粘性ややあり。ほとんど混入物含まず。
2. 暗褐色土 10Y R 4% 粘性中。3層への漸移層。
3. 黒褐色土 7.5 YR 4% 標準層位の第VII層。

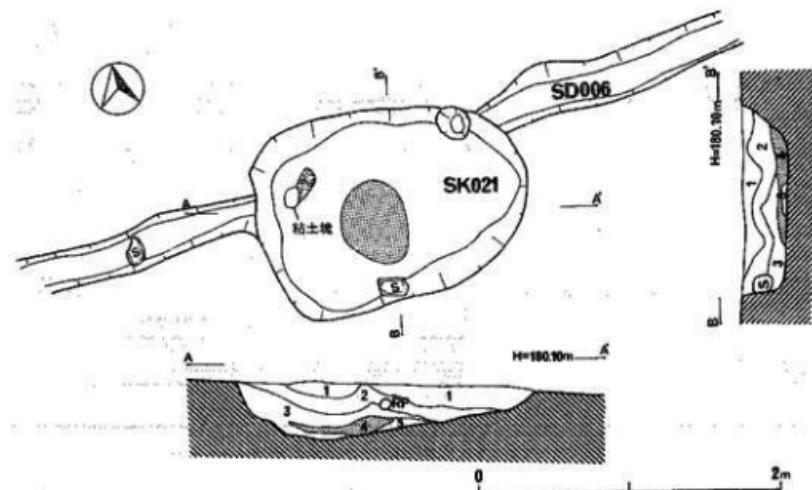
SK017 土壤 (第37図 図版18)

7-V地区から第VII層にて検出された。平面形は不定形を呈する。壌口部122×72cm, 壌底部80×42cm, 深さ18cm, 面積0.688m²である。床面は北側が一段落ち込んでいる。壁はゆるやかな立ち上がりを呈する。主軸方位はN 5°Wである。断面観察における埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒色土 10Y R 4% しまりやや悪し。粘性ややあり。ほとんど混入物含まず。
2. 暗褐色土 10Y-R 4% 粘性中。3層への漸移層。
3. 黒褐色土 7.5 YR 4% 標準層位の第VII層。

SK021 土壤 (第38図 図版18)

16-P, 16-Q地区より地山上面にて検出された。平面形は橢円形を呈する。壌口部182×128cm, 壌底部158×104cm, 深さ38cm, 面積2.0m²である。床面は西側にゆるやかに傾斜しており、壁はゆるやかな立ち上がりを呈する。床面から焼土及び炭化物が検出された。SD006溝跡を切っており、これより新しい。西側に粘土塊がある。主軸方位はN 70°Eである。造物は土



第38図 SK021土壤

師器片が出土している。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R 4/2 粘性中。しまり中。白色粒子混入。
2. 黑褐色土 10Y R 4/2 粘性なし。しまりなし。50%白色粒子混入。黄褐色土中粒1%混入。粘性やや強し。
3. 黒色土 10Y R 4/2 部分的に2層とのさかいめに帯状に焼土を混入する。粘性中。しまり悪し。
4. 赤褐色土 5 Y R 4/2 焼土。
5. 黑褐色土 7.5 Y R 3/2 黄褐色+黒色小粒をまだら状に混入。

SK024 土壌 (第39図 図版19)

5—A, 5—Z地区より地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部186×126cm、壙底部164×96cm、深さ34cm、面積1.68m²である。床面は西側ではほぼ平坦であるが、東側は若干の凹凸がある。壁面も東側はしっかりしているが、西側は不明確なところもある。主軸方位はN 45°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R 4/2 一様に浮石を含むが特に多いところがある。粘性中。
2. 黒色土 10Y R 4/2 土壌の最下部に帯状に堆積。粘性中。下部に焼土混入するところあり。
3. 暗褐色土 10Y R 4/2 黄褐色大粒20%混入。

4. 浅黄色土 2.5 Y 1/4

浮石

5. 黒褐色土 10 Y R 5/6

炭化物白色極小
粒含む。

6. 黒褐色土 10 Y R 5/6

炭化物白色極小
粒含む。焼土多
し。

7. 褐色土 7.5 Y R 5/6

焼土小粒含む。
炭化物含む。

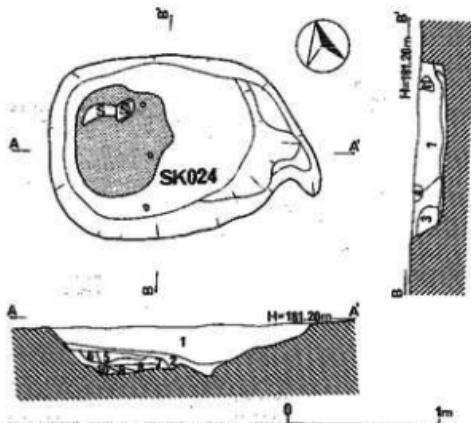
8. 明赤褐色土 5 Y R 5/6

焼土。

9. 黒色土 10 Y R 5/6

灰が多量に混じ

10. 黒色土 10 Y R 5/6

炭化物極小粒含
む。

第39図 SK024土壤

SK025 土壌 (第40図 図版

19)

10-Y, 10-Z 地区より地山上

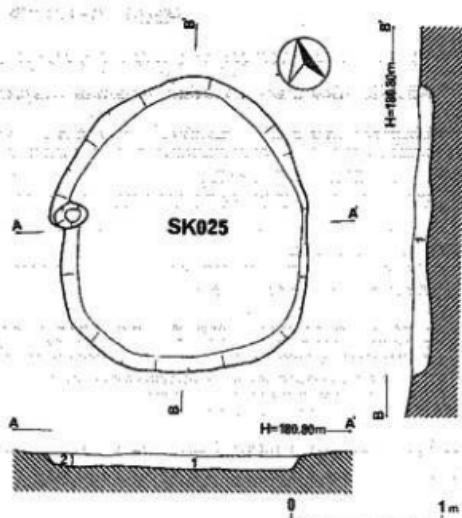
面にて検出された。平面形は不整

梢円形を呈する。横口部 196 × 170

cm, 壕底部 175 × 146 cm, 深さ 14 cm,

面積 2.660 m² である。床面はほぼ

平坦で浅い土壤である。主軸方位は N 30° E である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒色土 10 Y R 5/6 粘性中。しまり弱。褐色土 10 Y R 5/6 と暗褐色土 5/6 を 1 ~ 2 % ま
だら状に混入。3 % 位火山性白色粒混入。

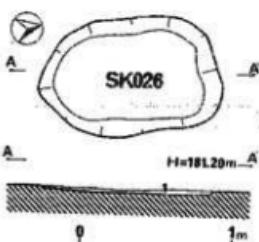
第40図 SK025土壤

2. 暗褐色土 10Y R % 粘性中。しまり弱。

SK026 土壙 (第41図 図版19)

10-Y地区より地山上面にて検出された。平面形は不整橢円形を呈する。壙口部120×78cm、壙底部97×55cm、深さ4cm、面積0.776m²である。上部は削平されており、床面はほぼ平坦な浅い土壙である。主軸方位はN31°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

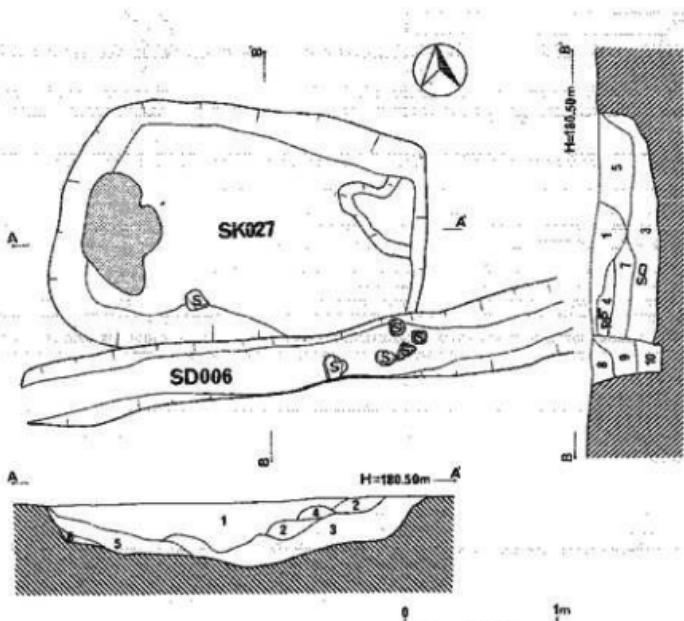
1. 黒色土 10Y R % 粘性中。しまり弱。火山性白色粒3%混入。



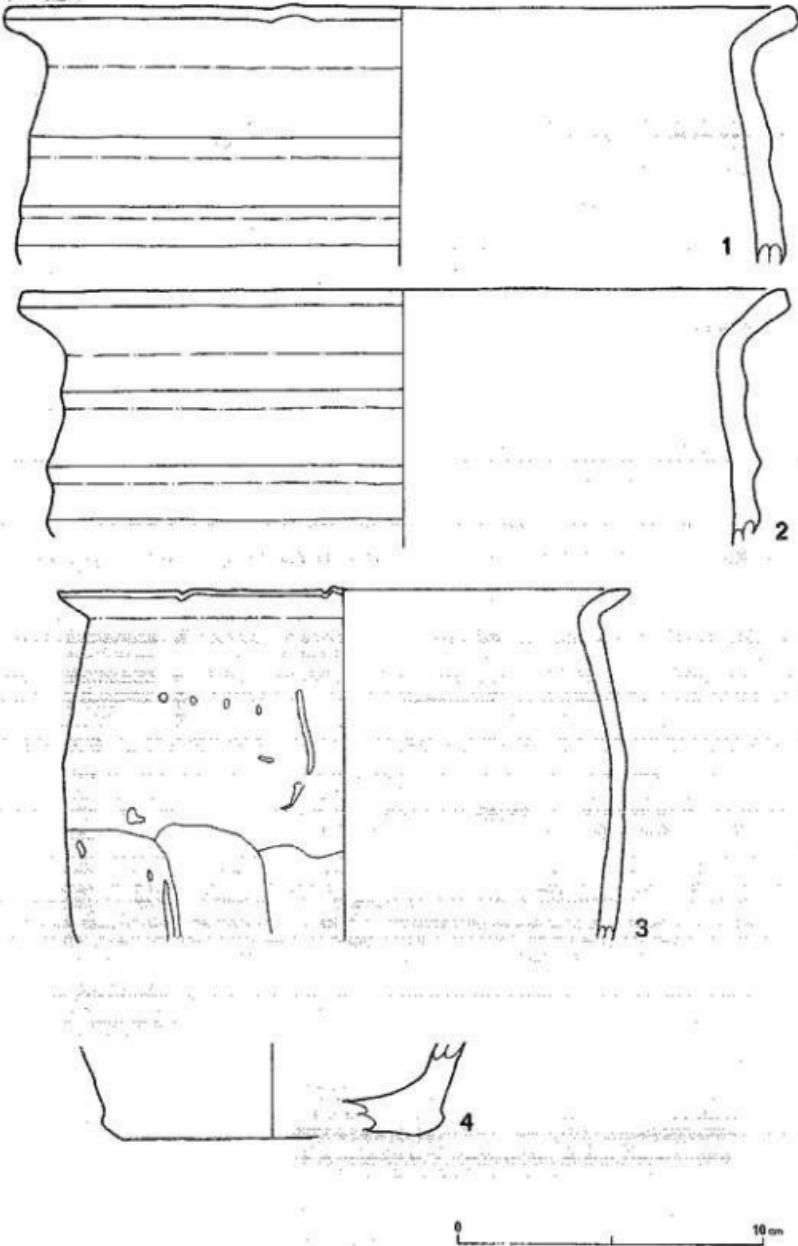
第41図 SK026土壙

SK027 土壙 (第42・43図 図版20)

14-R, 14-S, 15-R, 15-S地区より地山上面にて検出された。平面形は隅丸長方形を呈する。壙口部244×170cm、壙底部210×126cm、深さ56cm、面積3.472m²である。床面は若干の凹凸があり、壁はやや急に立ち上がる。SD006付属溝に切られており、これより古い。



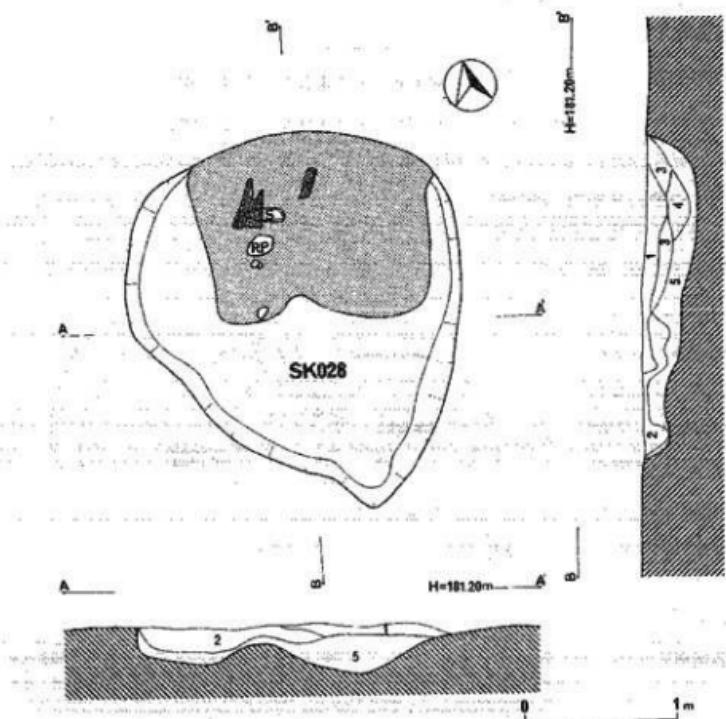
第42図 SK027土壙



第43図 SK027土壤出土遺物

また埋土の状態をみると、浮石の上から焼土が検出されており、浮石よりも新しいものと思われる。主軸方位は N54°Wである。遺物は第43図に示す土器が出土した。いずれも土師器の盤でロクロ使用のものもある。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 7.5Y R 3% 黄褐色極大~小粒 2~3%混入。浅黄色 2.5Y 3%の浮石が大~極小粒状に 5%混入。
2. 黑褐色土 10Y R 3% 浮石を斑状に 5%混入。
3. 黑褐色土 10Y R 3% 黄褐色小~極大粒 10%混入。浮石の混入はほとんど見られない。
4. 喀褐色土 10Y R 3% にぶい赤褐色 5Y R 3%の焼土含む。炭化物極小粒 5%混入。
5. 黒色土 10Y R 3% 5をベースに浅黄色 2.5Y 3%の浮石が部分的には 20%混入。
6. 黑褐色土 10Y R 3% 白色極小粒 1%混入。しまり悪し。
7. 喀褐色土 7.5Y 3% 7をベースに浅黄色 2.5Y 3%の浮石が大きいブロック状に入る。



第44図 SK028土壤

8. 黒褐色土 10Y R 5% 黄褐色大～中粒 2% 混入。しまり悪し。
9. 黒褐色土 10Y R 5% 白色極小粒一様に 2% 混入。しまり中。
10. 黒褐色土 10Y R 5% 9 層と似ているが白色極小粒はほとんど含まない。黄褐色大粒 1% 混入。しまりよし。

SK028 土壌 (第44図)

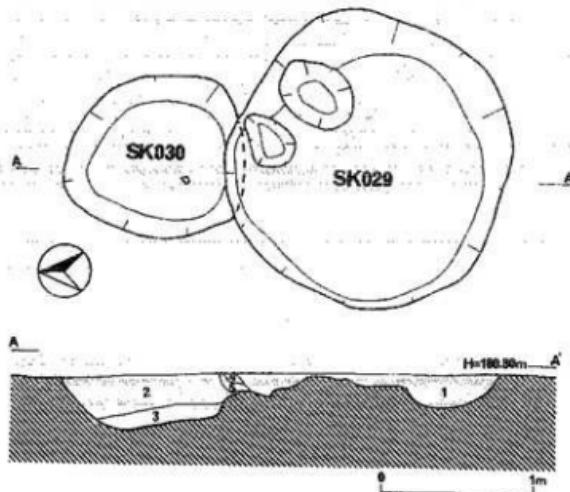
8-T, 9-T 地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部 257 × 225 cm, 壙底部 237 × 210 cm, 深さ 32 cm, 面積 4.04 m² である。床面は中央部に若干の盛り上がりを持つ。焼土と炭化材が検出されており、遺物は土師器の裏の破片が出土している。主軸方位は N 4° E である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒色土 10Y R 5% 粘性中。すきまなし。しまり中。浮石 5% 混入。
2. 浅灰土 2.5 Y 1/4 浮石層。
3. にふい赤褐色土 7.5 Y R 5% 粘性中。焼土。
4. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性中。すきまなし。しまり中。
5. 黒褐色土 10Y R 5% 粘性中。すきまなし。しまり中。

SK029 土壌 (第45図 図版21)

11-U 地区より地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部 198 × 190 cm, 壙底部 157 × 160 cm, 深さ 22 cm, 面積 2.84 m² である。床面はかなりの凹凸がある。また北東部には 2 個のピットがある。SK030 土壌を切っておりこれより新しい。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R 5% 白色極小粒 1% 混入。粘性ややあり。しまりやや



第45図 SK029・030土壤

悉し。

4. 暗褐色土 10Y R 5% SK 030内の埋土がSK 029内に2回目に崩れ落ちたもの。
5. 暗褐色土 10Y R 5% SK 030内の埋土がSK 029内に1回目に崩れ落ちたもの。

SK 030土壤 (第45図 図版21)

11-U地区より地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部 $122 \times 107\text{ cm}$, 壙底部 $92 \times 78\text{ cm}$, 深さ 36 cm , 面積 0.85 m^2 である。床面はほぼ平坦であり, SK 029 土壤より古い。主軸方位は $N 0^\circ$ である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

2. 暗褐色土 白色區小粒50%混入。粘性なし。しまりよし。
3. 黒色土 (10Y R 5%)
4. 暗褐色土 SK 030内の埋土がSK 029内に2回目に崩れ落ちたもの。
5. 暗褐色土 SK 030内の埋土がSK 029内に1回目に崩れ落ちたもの。

SK 031土壤 (第46図)

10-W地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部 $180 \times 126\text{ cm}$, 壙底部 $160 \times 100\text{ cm}$, 深さ 48 cm , 面積 14.4 m^2 である。床面はかなりの凹凸があり, 北側の落ち込みは別の遺構とも思われるが, 断面観察しても不明確なため同一の造構として扱った。主軸方位は $N 3^\circ E$ である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黑色土 10Y R

1% 粘性中。しまり弱。

2. 黑色土 10Y R

2% 粘性中。しまり弱。

明黄褐色 10Y

R 5%を下部に2%混

入。

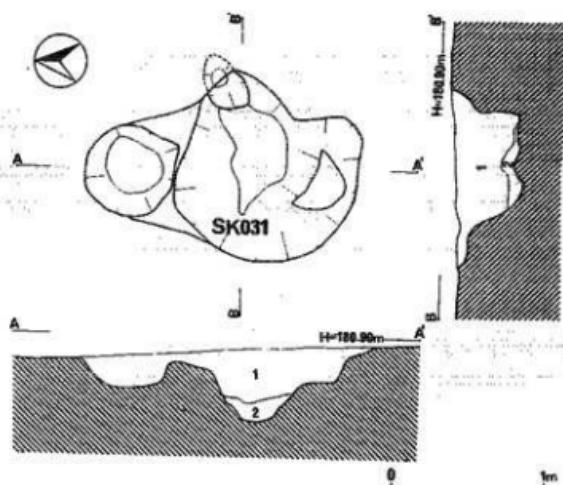
SK 032土壤

(第47・48図

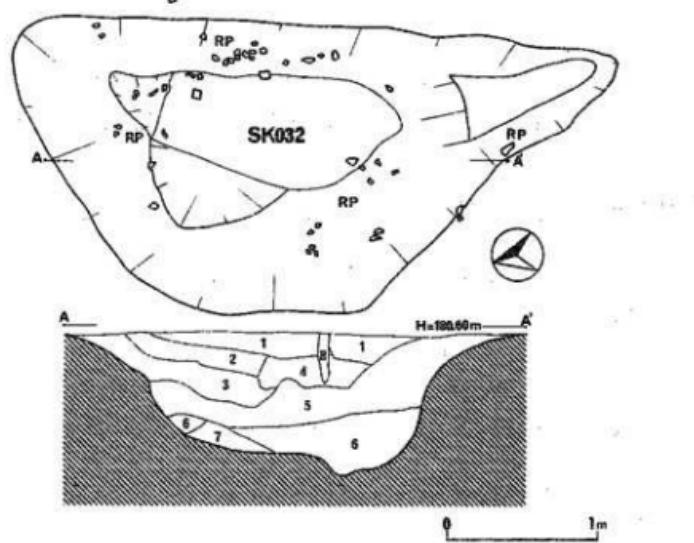
図版21)

11-X, 12-X地区

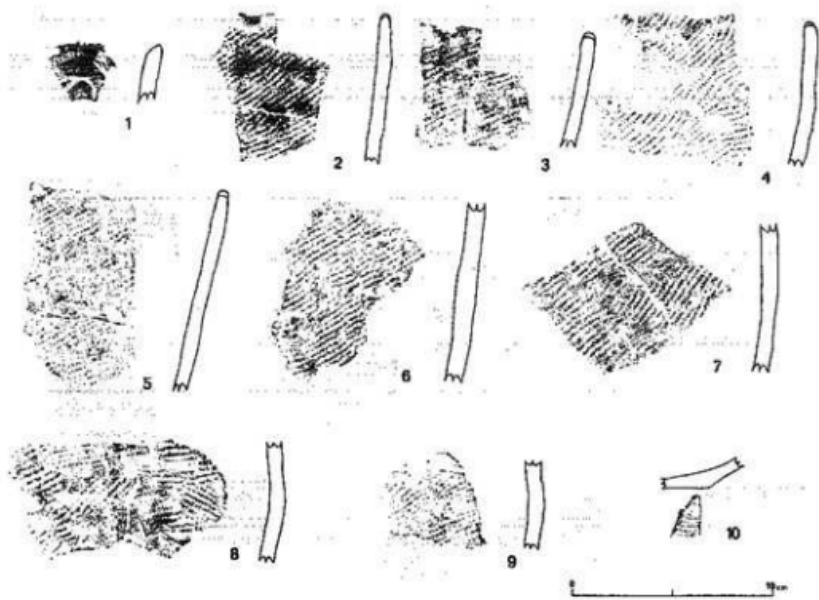
より地山上面にて検出



第46図 SK 031土壤



第47図 SK032土壤



第48図 SK032土壤出土遺物

された。平面形は不定形を呈する。壙口部 396×190 cm, 壙底部 196×104 cm, 深さ94cm, 面積 $5.38m^2$ である。床面は若干の凹凸がある。主軸方位はN $37^\circ E$ である。第48図に示す遺物が出土した。1~9は縄文時代のもので単節R.L.縄文を縱位に回転施文する。10は土師器環の破片で回転糸切り技法が施される。遺物は浮石直下の床面からバラバラの状態で出土しており、浮石除灰後の風倒木痕に、遺物の流れこんだものと考えられる。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. にぶい黄褐色土

10Y R 5% 白色小
~極小粒一様に50%
混入。

2. 黒褐色土

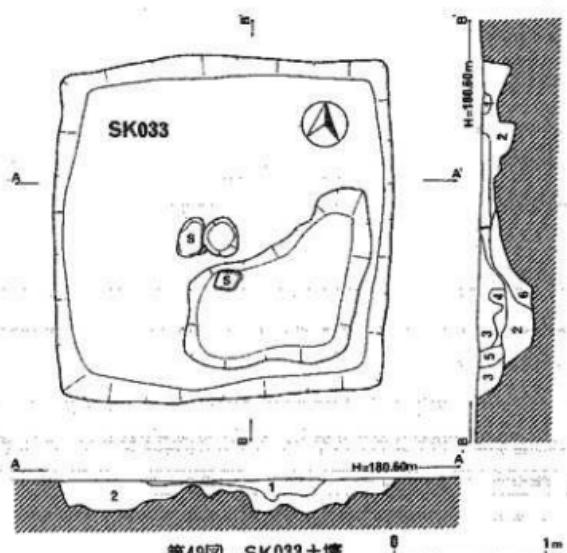
10Y R 5% 炭化物
小粒、黄褐色小~中
粒50%混入。

3. 黒褐色土

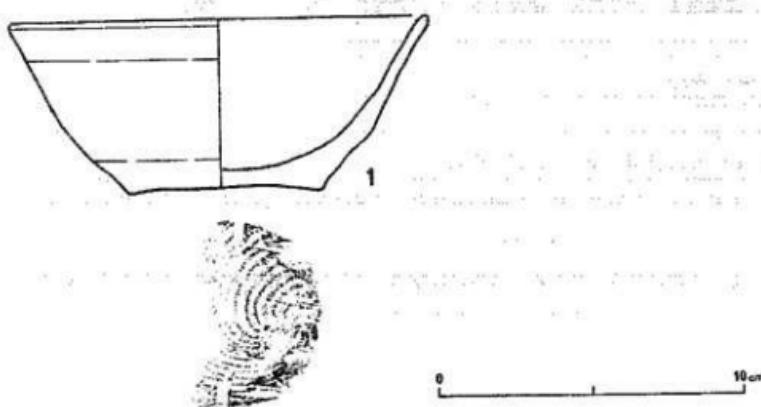
10Y R 5% 白色極
小粒を主に下層に帶
状に10%混入。

4. 浅黄褐色土

2.5Y 3/4 浮石の



第49図 SK033土壤



第50図 SK033土壤出土遺物

かたまり。

5. 黒色土 10Y R^{1/2} ほとんど混入物なし。ごく一部に白色極小粒をごく少量混入。
しまり悪し。
6. 黒色土 10Y R^{1/2} ほとんど混入物なし。ごく一部に白色極小粒をごく少量混入。
しまり悪し。
7. 黑褐色土 10Y R^{2/3} 地山への漸移層。黄褐色極大粒を20%混入。
8. 振乱

S K033 土壙 (第49・50図)

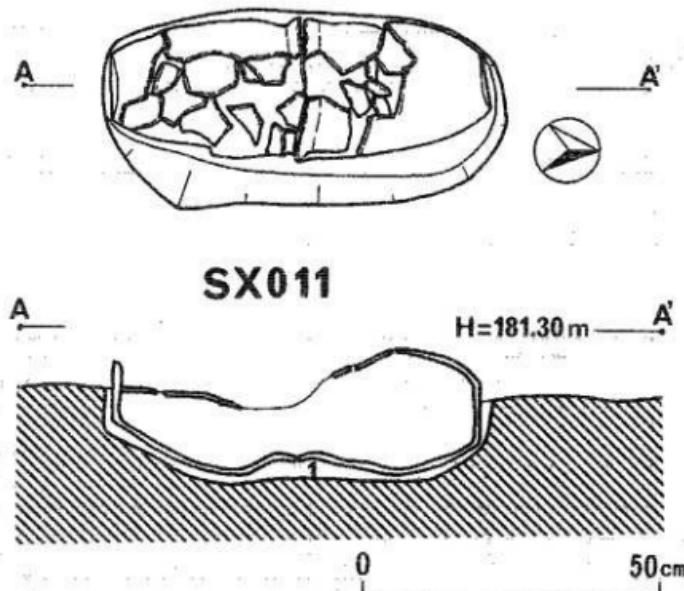
12-V, 12-W地区より地山上面にて検出された。平面形は隅丸方形の竪穴状遺構である。壇口部 224 × 222 cm, 壇底部 200 × 208 cm, 深さ36cm, 面積4.84m²である。床面はかなりの凹凸があり、南東部に不定形の土壙がありこれを切って構築されている。また中央部にはほぼ円形のピットが検出された。主軸方位は N18°E である。遺物の出土量は少ないが、第50図に示す土師器壺が出土した。底部は回転糸切りで切り離されている。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黑褐色土 10Y R^{3/4} 粘性ややあり。10Y R^{1/2}明黄褐色土がまばらに混入。
2. 黑褐色土 10Y R^{3/4} 粘性ややあり。白色極小粒が20~25%混入。
3. 黒色土 10Y R^{1/2} ほそぼそして白色極小粒15~20%混入。
4. 褐色土 10Y R^{1/2} 粘性ややあり。10Y R^{1/2}明黄褐色土2~3%混入。
5. 黑褐色土 10Y R^{3/4} 粘性ややあり。白色極小粒が25~30%混入。
6. 黑褐色土 10Y R^{3/4} 粘性ややあり。黄褐色土中粒が3~4%混入。

c. 合口甕棺

S X011合口甕棺 (第51~53図 図版22)

9-S地区から第4層上面にて検出された。本来は浮石上面から土器より若干大きめに掘りこんだものであろう。甕棺内及び掘り方内のいずれの埋土にも浮石が混入しており、これより新しいものと思われる。2個の土師器の口縁部を合わせて横位に埋葬したもので、甕の大きさ(口径×器高×底径)は南側のものが23.3×31.0×10.0cm、北側のものが20.5×29.0×9.4cmである。調整はいずれも口縁部指ナテ、胴部ヘラケズリが施される。主軸方位は N19°W である。通りにピット等は検出されなかった。なお、この掘方内外の土はリン分析、¹⁴C年代測定を行っており、それらについては付録(P249, 250)を参照されたい。断面観察による埋土の状態は次



第51図 SX011合口甕棺

のとおりである。

1. 黒色土 7.5 YR 3/4 火山性極小粒を混入。粘性弱。

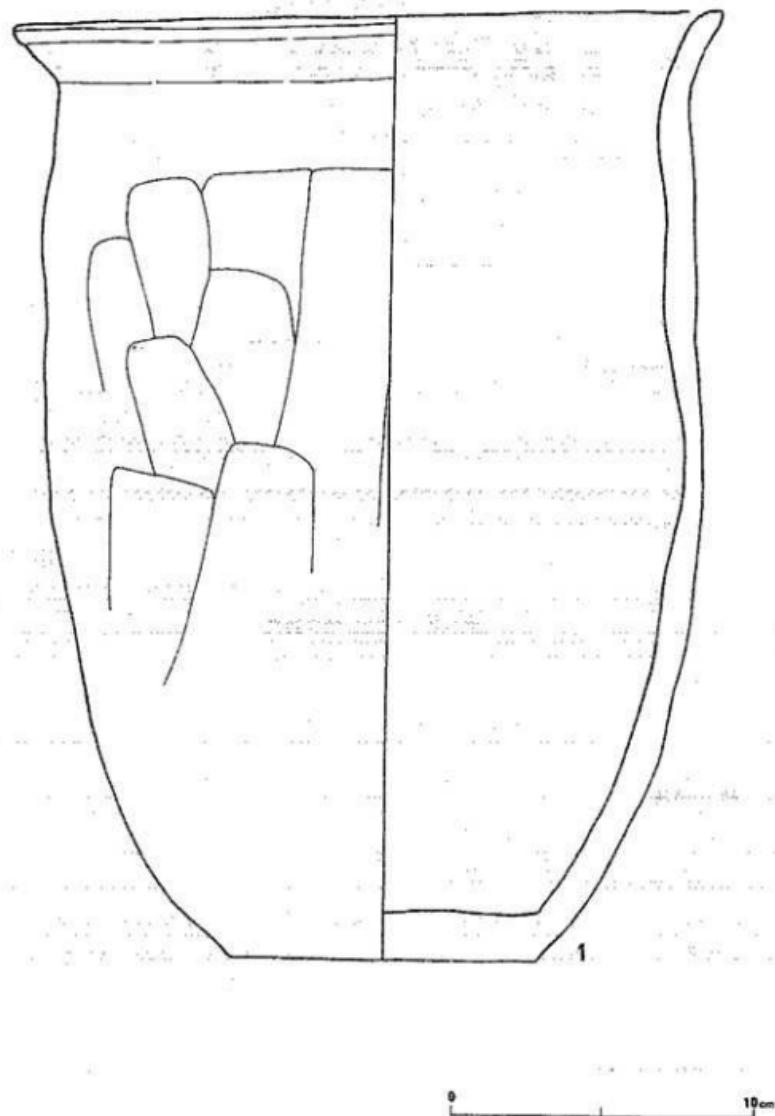
d. 焼土造構

S X F 035 焼土造構 (第54図 国版23)

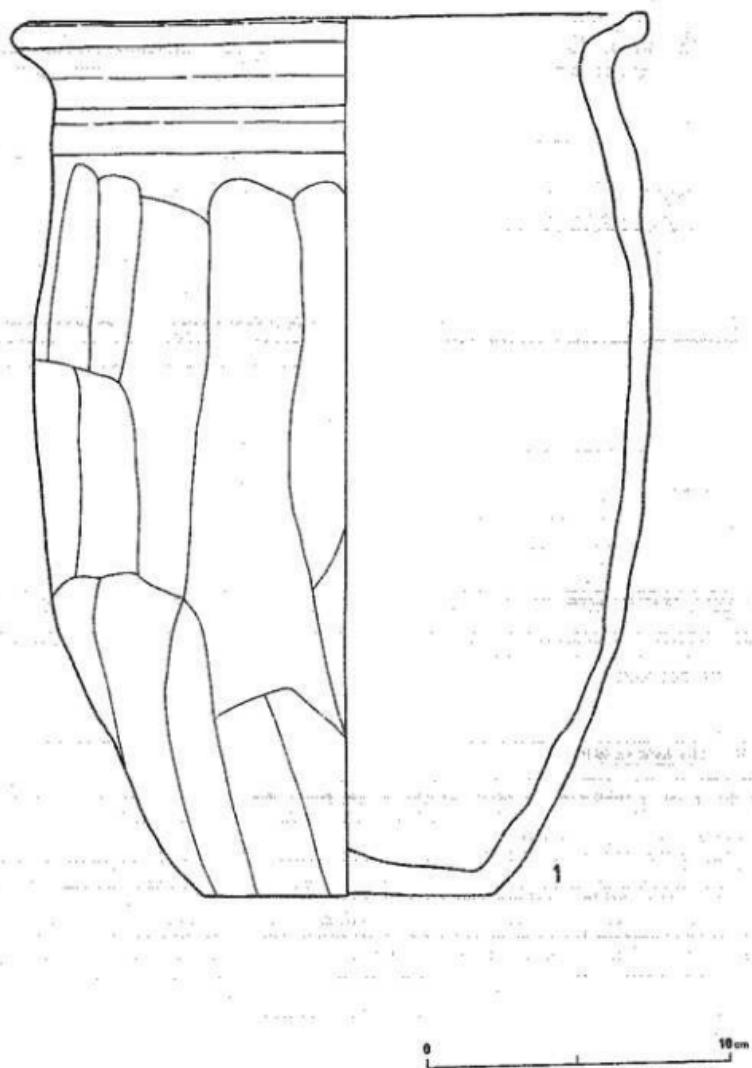
I 区南端の 4-U, 4-V, 5-U, 5-V 地区から検出された。焼土範囲は 35×21cm である。第4層上面から検出されており、縄文時代のものと思われるが、遺物等時代を確定づけるものは出土しなかった。

S X F 036 焼土造構 (第55図)

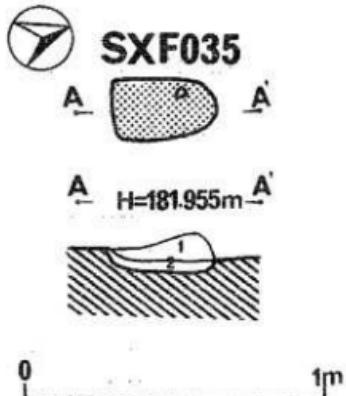
12-Y, 13-Y 地区より第4層上面にて検出された。中央部が 20cm 程掘りこまれており、中央程よく焼けている。遺物が出土しないので時期は不明であるが縄文時代のものと思われる。ピットその他これに伴うと思われる遺構は検出されなかった。



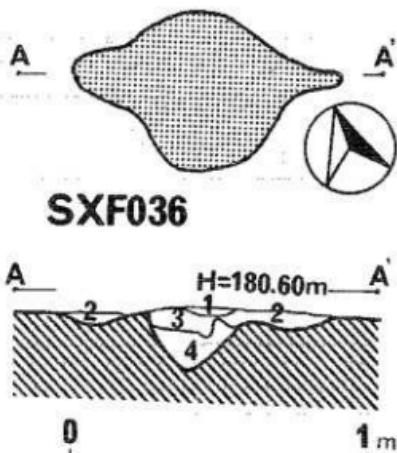
第52図 SX011合口甕棺実測図(1)



第53図 SX011合口壺棺実測図(2)



第54図 SXF035焼土遺構



第55図 SXF036焼土遺構

▲ SXF035 焼土遺構地図

1. 黄褐色土 10YR 5/4 白色腐木灰土を鉢化物に充入しようとし、焼土。
2. 黑褐色土 10YR 5/2 黑色腐木灰土を鉢化物に充入。

▲ SXF036 焼土遺構地図

1. 黄褐色土 7.5YR 5/4 黑化物、白色腐木灰土を鉢化。
2. 黑褐色土 7.5YR 5/2 黑化物、白色腐木灰土を鉢化。
3. 黑色土 6YR 5/2 黑化物で、少々鉢化して、少々鉢化。
4. 黄褐色土 7.5YR 5/4 鉢化層の基礎部。

(2) II区の遺構

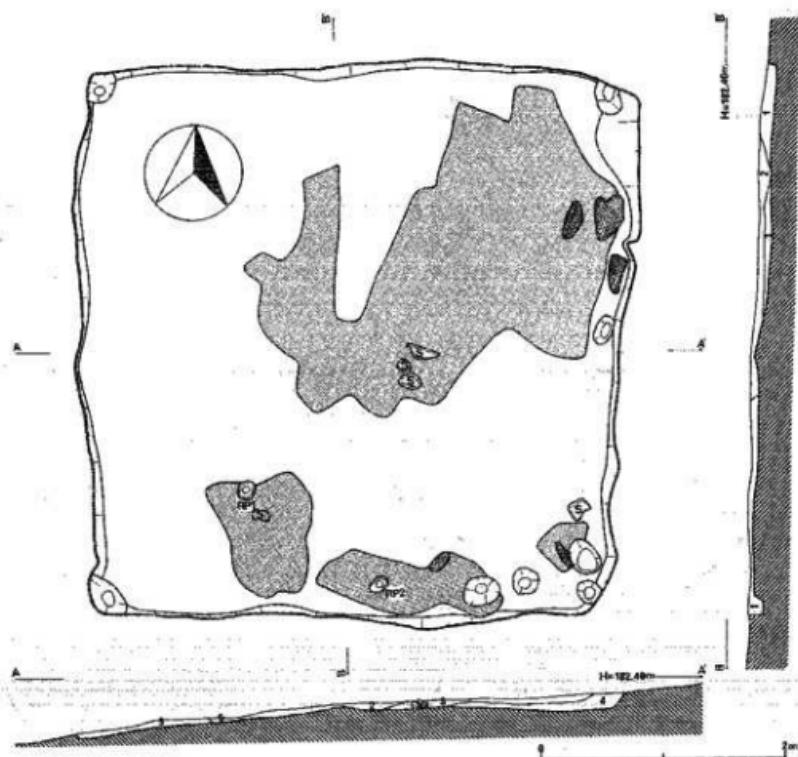
a. 壺穴住居跡

S I 101 壺穴住居跡

第9表 挿図番号		第56~58図		図版番号	図版25・60
遺構名	S I 101	検出地区	44-J, 45-J, 45-K		
法		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
壁長		433cm	446cm	418cm	452cm
壁高		16.9~31.5cm	4.5~6.8cm	9.0~14.5cm	11.4~17.4cm
形態	方	形	面積	20.1m ²	主軸方向
					N 14° E

S I 101 壺穴住居跡埋土

1. 褐色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまり中 黒褐色土10%混入。焼土少量混入。
2. 黑褐色土 10Y R 5/2 粘性あり しまりよし 黑褐色土7%混入。焼土少額混入。
3. 黑色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中
4. 黑褐色土 10Y R 5/2 粘性なし しまりなし 黄褐色土。焼土混入。浮石層。
5. 明黄褐色土 10Y R 5/4 粘性ややあり しまり中 黄褐色土5%混入。
6. " 10Y R 5/2 粘性あり しまりよし



第56図 SI101号穴住居跡

プラン確認 黄褐色土地山上面にて確認された。若干の削平を受けており、特に西側は著しい。

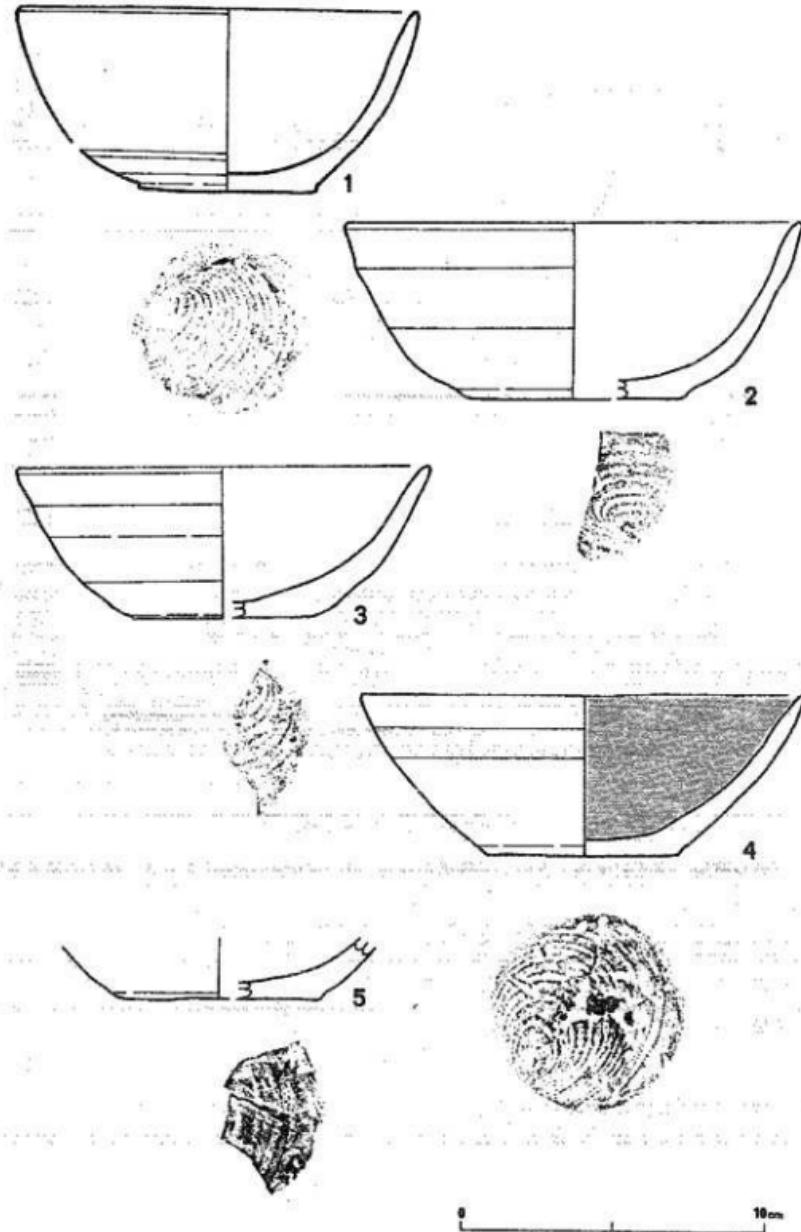
壁面の状態 壁はしまりがよく、垂直に近い立ちあかりをする。

床面 平坦で堅固である。焼土範圍が、床面全体にわたっており、焼失家屋と思われる。

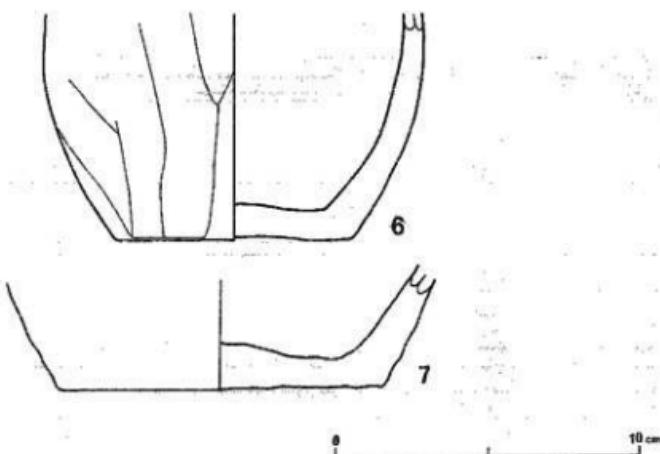
壁溝 確認されず。

柱穴、ピット 住居跡四隅の壁溝内と東壁中間地点の壁溝内に1個の計5個の柱穴を確認した。他に3個のピットも確認した。

遺物とその出土状態 遺物の出土量は少ないが、壺の割合が高いのが特徴である。第57図1～5は土師器の壺で底面は回転糸切りである。甕は出土量が少なく、大型のものはほとんどない。口縁部は若干のくびれがあり頸部の短いものである。



第57図 SI101竪穴住居跡出土遺物(1)



第58図 SI101竪穴住居跡出土遺物(2)

S.I 102 竪穴住居跡

第10表		挿図番号	第59~62図	図版番号	図版26・60・61
遺構名		S I 102	検出地区	38-V, 38-W, 39-V, 39-W, 40-V	
法 量	壁長	500cm	527cm	482cm	482cm
	壁溝高	25.8~30.9cm	25.8~36.6cm	34.1cm	17.6~23.5cm
	壁溝幅	13.0~25.0cm	12.0~20.0cm	8.0~17.0cm	10.0~23.0cm
	壁溝深	17.1~19.1cm	16.4~25.7cm	14.3cm	8.2~14.3cm
形 態	方 形	面 積	24.8m ²	主軸方向	N 27° E
かまど	位 置	不 明		構築素材	

プラン確認 地山上面で確認した。上面は削平されている。

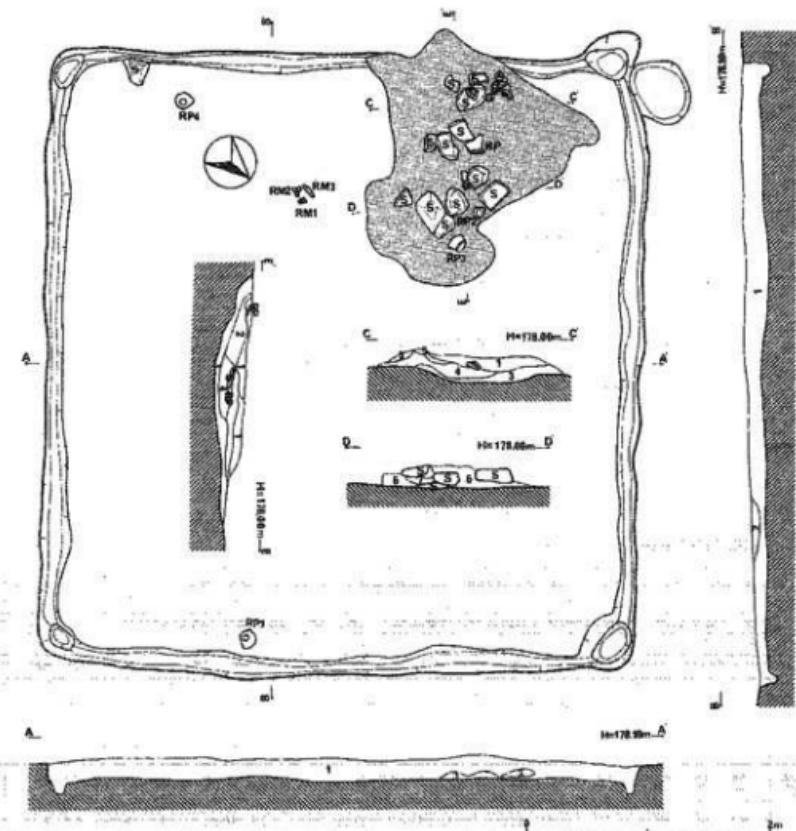
壁面の状態 壁はしまりがよく、垂直に近い立ちあがりをする。

床面 平坦で堅固である。

壁溝 ほぼ全周する。

柱穴、ピット 住居跡四隅の壁溝内に柱穴を確認した。その他住居跡外にも1個ピットを検出した。

かまど 遺存状態は極めて不良であり、煙道部、煙出口部及び袖部は確認されなかった。



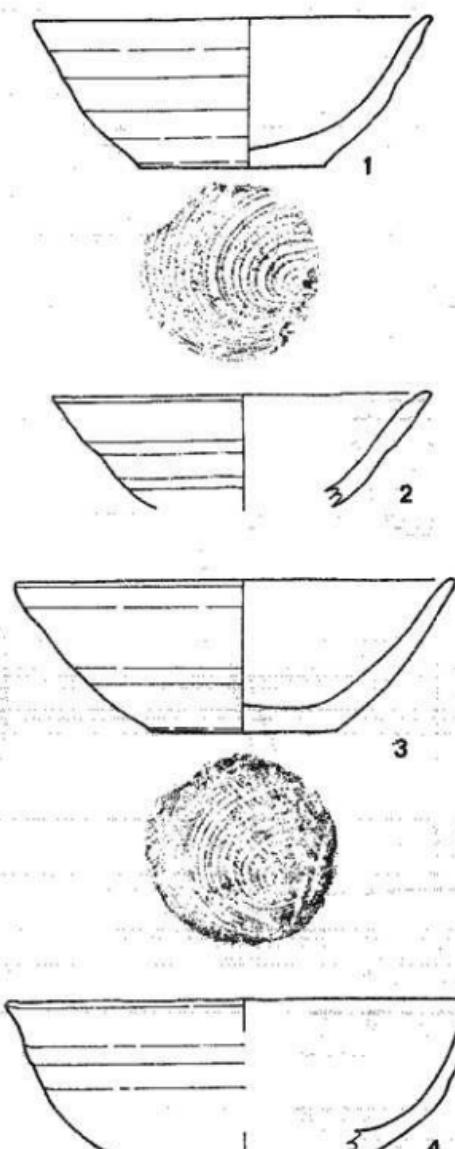
第59図 SI102竪穴住居跡

住居跡埋土

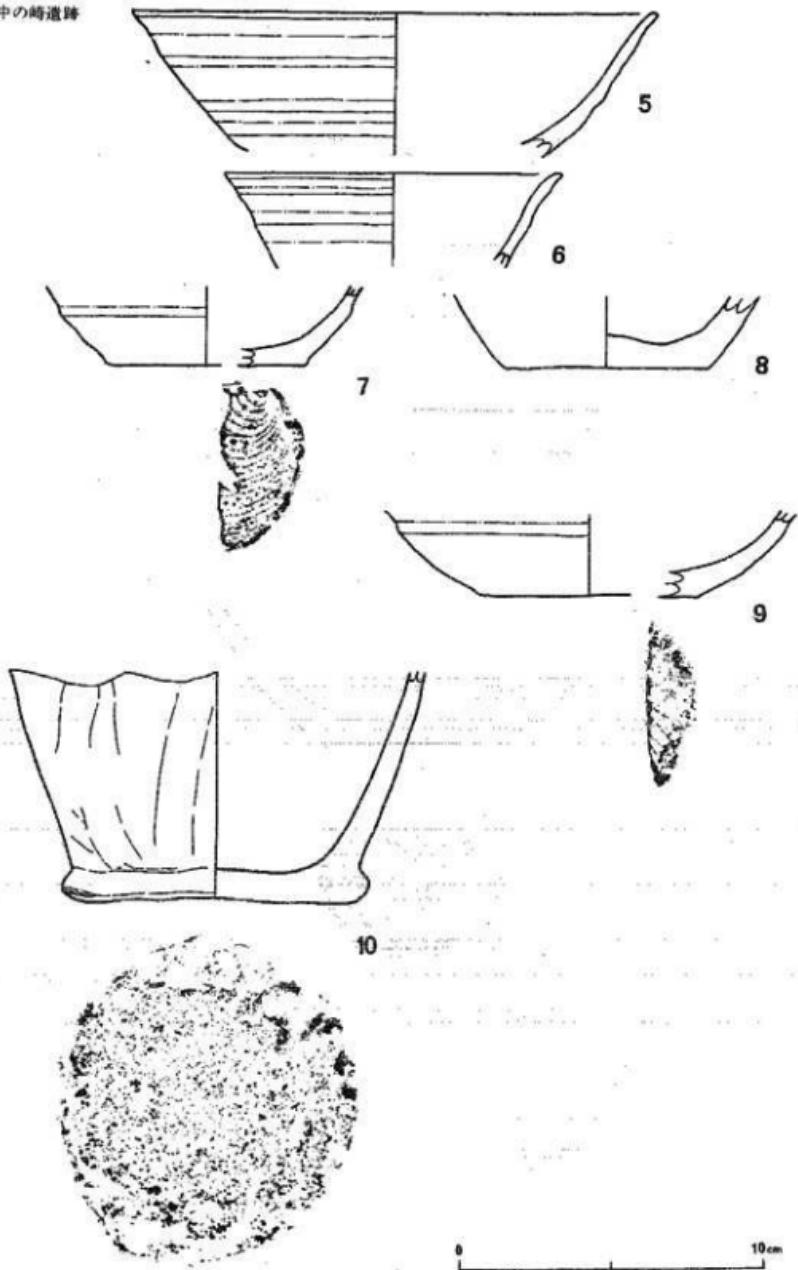
1. 黒色土 10YR 4/2 粘性やあり しまりよし ザラザラした砂粒混入
2. 黄褐色土 10YR 4/2 ブロック
3. 陸續

カマド埋土

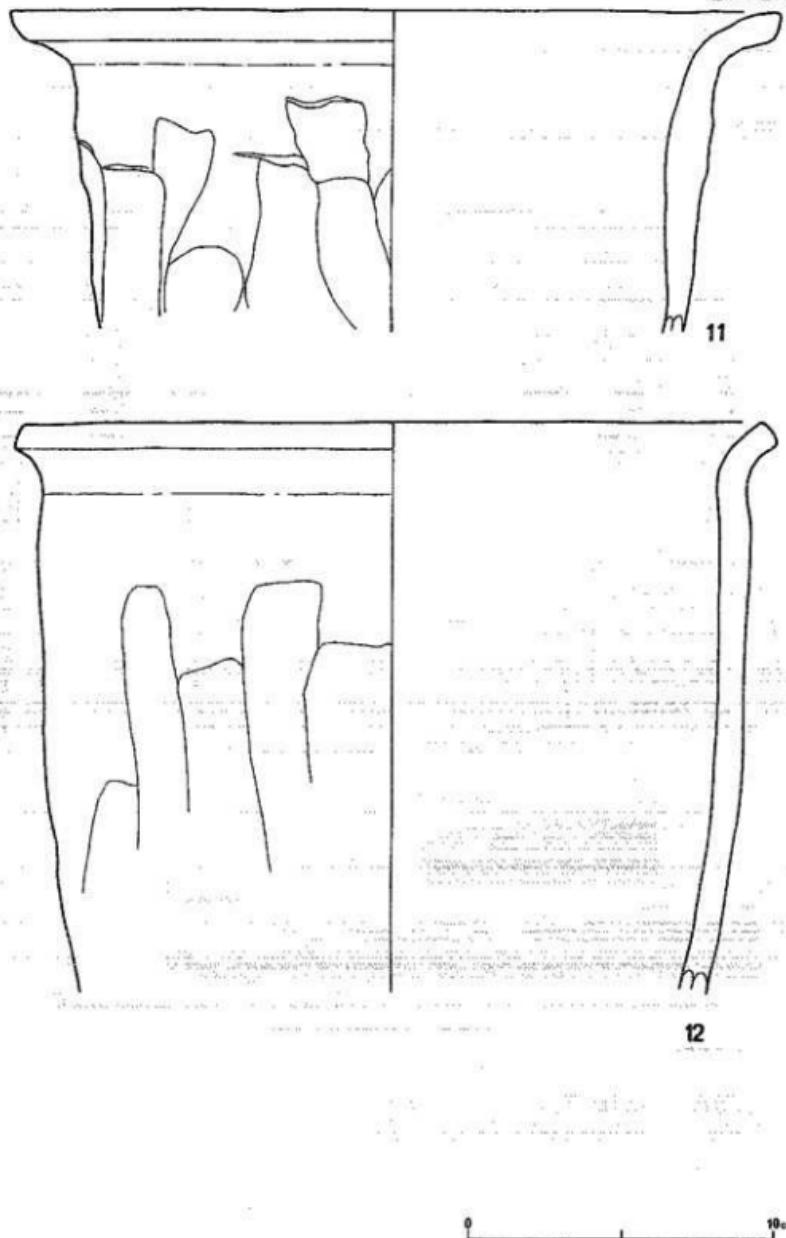
1. 増褐色土 7.5YR 3/2 粘性なし しまりあり
2. 黒褐色土 7.5YR 4/2 粘性なし しまりあり
3. にぶい黄褐色土 10YR 4/2
4. 明赤褐色土 5YR 4/2 粘性なし しまりあり
5. 赤褐色土 5YR 4/2 粘性なし しまりあり
6. 黒色土 10YR 4/2 粘性やあり しまりよし ザラザラした砂粒混入
7. 大理浮石のブロック



第60図 SI102竪穴住居跡出土遺物(1)

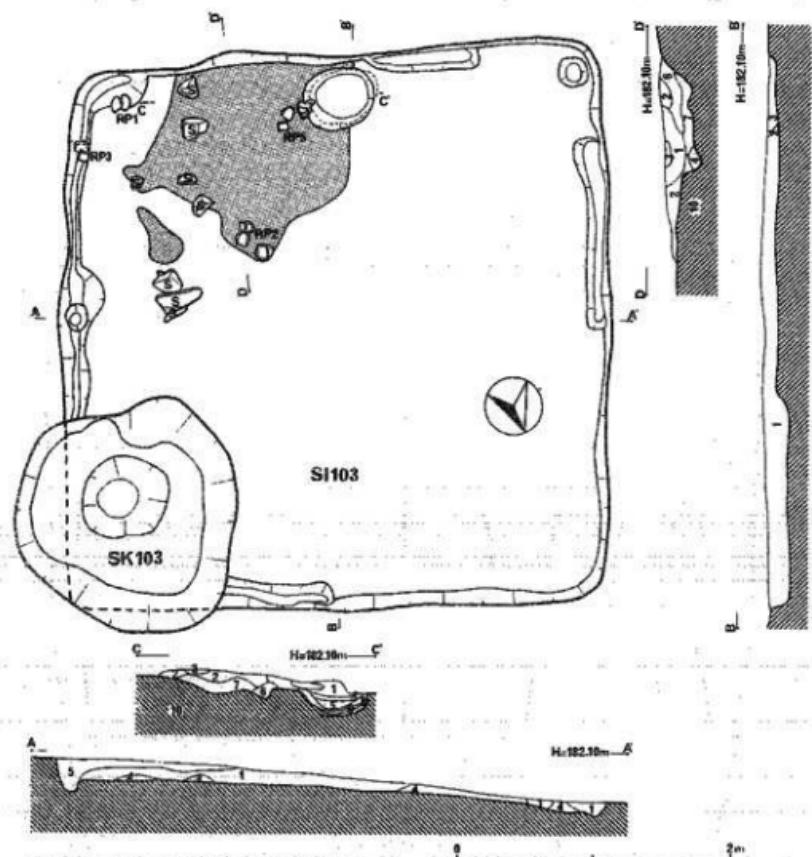


第61図 S1102竪穴住居跡出土遺物(2)



第62図 SI102堅穴住居跡出土遺物(3)

遺物とその出土状態 遺物の出土量は中程度である。第60図1~4、第61図5~7・9は土師器の坏で4を除いて回転糸切り技法が施される。10は砂底の土師器甕である。副部はヘラナテ調整されている。また土師器甕の口縁部は比較的反りの明確なものが多く出土している。



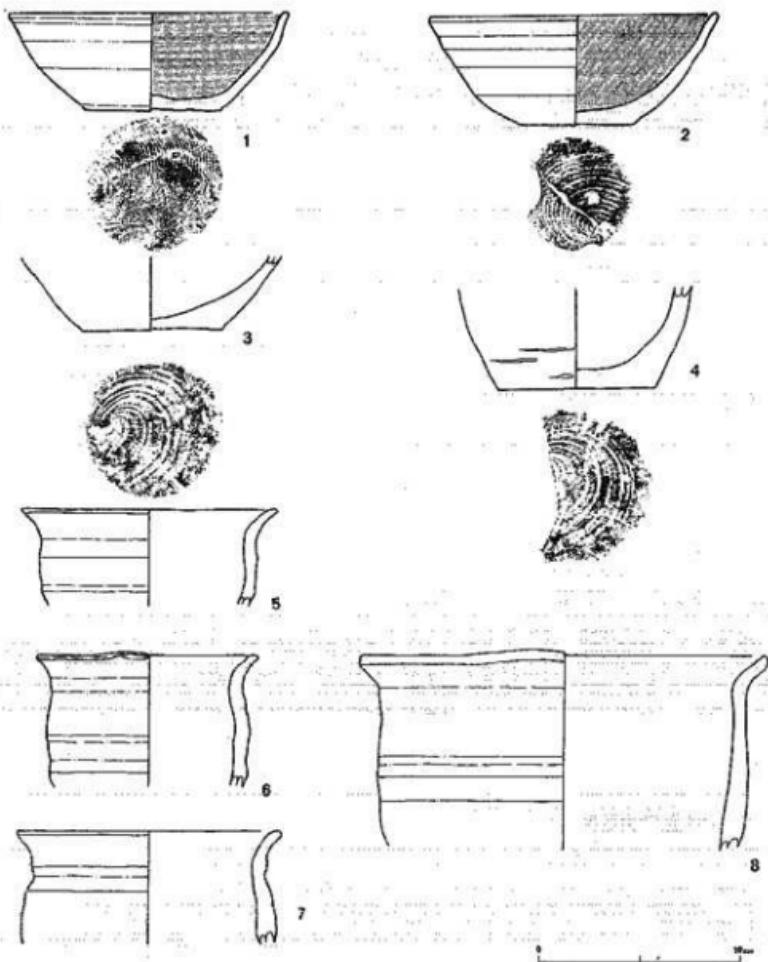
第63図 SI103竪穴住居跡

住居跡土壌

1. 暗褐色土	10Y R 5/6	粘性あり	しまりあり	黄褐色土(10Y R 5/6)35~37mmのかたまりで40%混入。
2. にじみ黄褐色土	10Y R 5/6	無	無	無
3. 黄褐色土	10Y R 5/6	粘性ややあり	無	無
4. 黄褐色土	10Y R 5/6	粘性あり	無	無
5. 黄褐色土	10Y R 5/6	粘性ややあり	しまりなし	無
6. 黄褐色土	10Y R 5/6	粘性あり	しまりあり	無
7. #	#	#	#	#

カマド下土壌

1. にじみ黄褐色土	10Y R 5/6	粘性ややあり	しまり中	赤褐色土(5 Y R 5/6)20mmのかたまりで30%混入。
2. 赤褐色土	10Y R 5/6	無	#	粘土質でかたくしまっている部分内赤褐色土(5 Y R 5/6)混入。
3. 黒色土	10Y R 5/6	なし	無	根5%充填入。赤褐色土(5 Y R 5/6)まだ乾いて若干混入。
4. にじみ黄褐色土	10Y R 5/6	なし	無	赤褐色土(5 Y R 5/6)まばらに混入。
5. にじみ黄褐色土	10Y R 5/6	なし	無	4の10Y R 5/6が若干混入。炭化物がごくわずかにみられる。 もろくてやわらかい。
6. 煙色土	10Y R 5/6	あり	無	10Y R 5/6が若干混入。粘土質でかたい。
7. 煙赤褐色土	5 Y R 5/6	あり	無	赤褐色土(5 Y R 5/6)のみられる。
8-a. にじみ黄褐色土	10Y R 5/6	あり	無	かなりかたい。加熱されてかなりかたい。全層で最もかたい。
9-b. 黒褐色土	10Y R 5/6	なし	無	2#前後柱傍の砂で剥離されている。
10. 黄褐色土	10Y R 5/6	あり	無	浮石混入。



第64図 SI 103堅穴住居跡出土遺物

SI 103 堅穴住居跡

プラン確認 地山上面にて確認されたが、上面は削平されている。

壁面の状態 壁の立ちあがりははっきりしているが上部が削平されているため南壁と西壁が掘り込みが少ない。実際の生活面は上のレベルであったと思われる。また北東隅は SK 103 土壘により破壊されている。

S I 103 穫穴住居跡

第 11 表		挿図番号	第63・64図	図版番号	図版28・62
遺構名	SI 103	検出地区	45-K, 46-J, 46-K		
法 量	東側壁		西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	(257)cm	409cm	380cm	(280)cm
	壁高	24.3~25.8cm	8.4~11.1cm	8.1~17.9cm	3.9~20.4cm
	壁溝幅	8.0~20.0cm	(15.0~23.0)cm	(11.0~18.0)cm	(17.0~24.0)cm
壁溝深		7.3~13.8cm	(4.3~4.8)cm	(5.5)cm	(3.9~7.0)cm
形態	方形容	面積	14.3m ²	主軸方向	N32°E

床面 平坦で堅固である。

壁溝 住居跡四方の一部に壁溝が確認された。

柱穴、ピット 西南隅に1個、南壁中間部に1個、東壁中間部に1個の計3個の柱穴が確認された。

かまど 住居跡南壁東より付近に焼土が確認されただけでかまどは確認されなかつた。焼土部分を地床がとして使用していたのではなかろうか。

遺物とその出土状態 遺物出土量はやや少ない部類に属し、特に壺の少ないので特徴である。第63図1~3に示したのは土師器壺で底部は回転糸切りで切り離す。この3点の他に壺は破片が1点出土したのみである。4は土師器壺で底部は回転糸切りである。5~8は土師器甕でいずれもロクロ使用である。

S I 104 穫穴住居跡

プラン確認 地山上面にて検出したが、上面は削平されていた。

壁面の状態 壁はしまりがよく垂直に近い立ちあがりをするが、上面は削平をうけている。

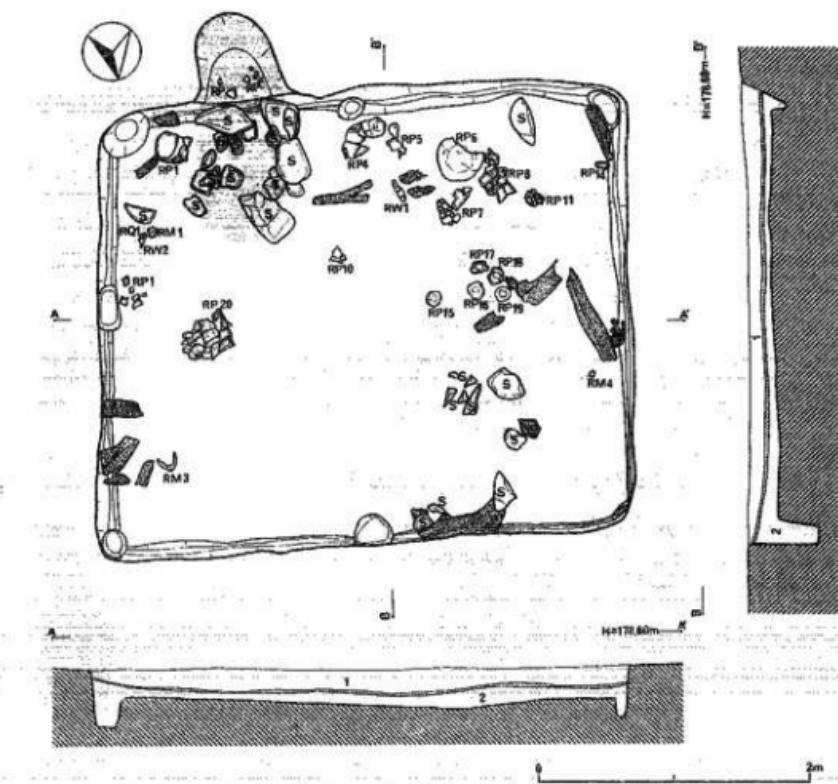
床面 平坦で堅固である。

壁溝 ほぼ全周する。

柱穴、ピット 北西隅を除く三方と西壁を除く各壁の中間部に3個の計6個の柱穴が確認された。

かまど 研平な石を芯材として構築されたものであり、天井部、袖部ともに遺存状態は比較的良好である。しかし、煙道部は上面が削平されている。

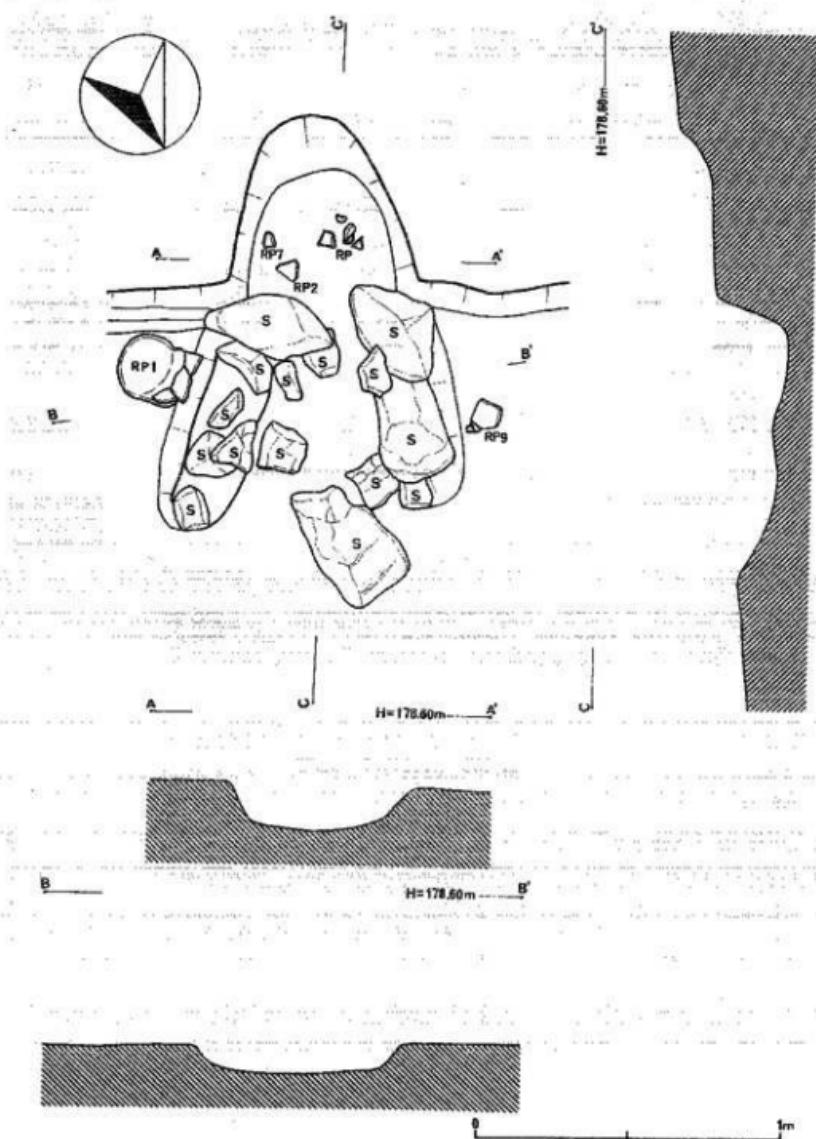
遺物とその出土状態 遺物の出土量はやや多い方である。それに伴って壺が完形の状態で9点出土した。第67・68図1~9は土師器壺で、いずれも底部は回転糸切りである。R P 15~19



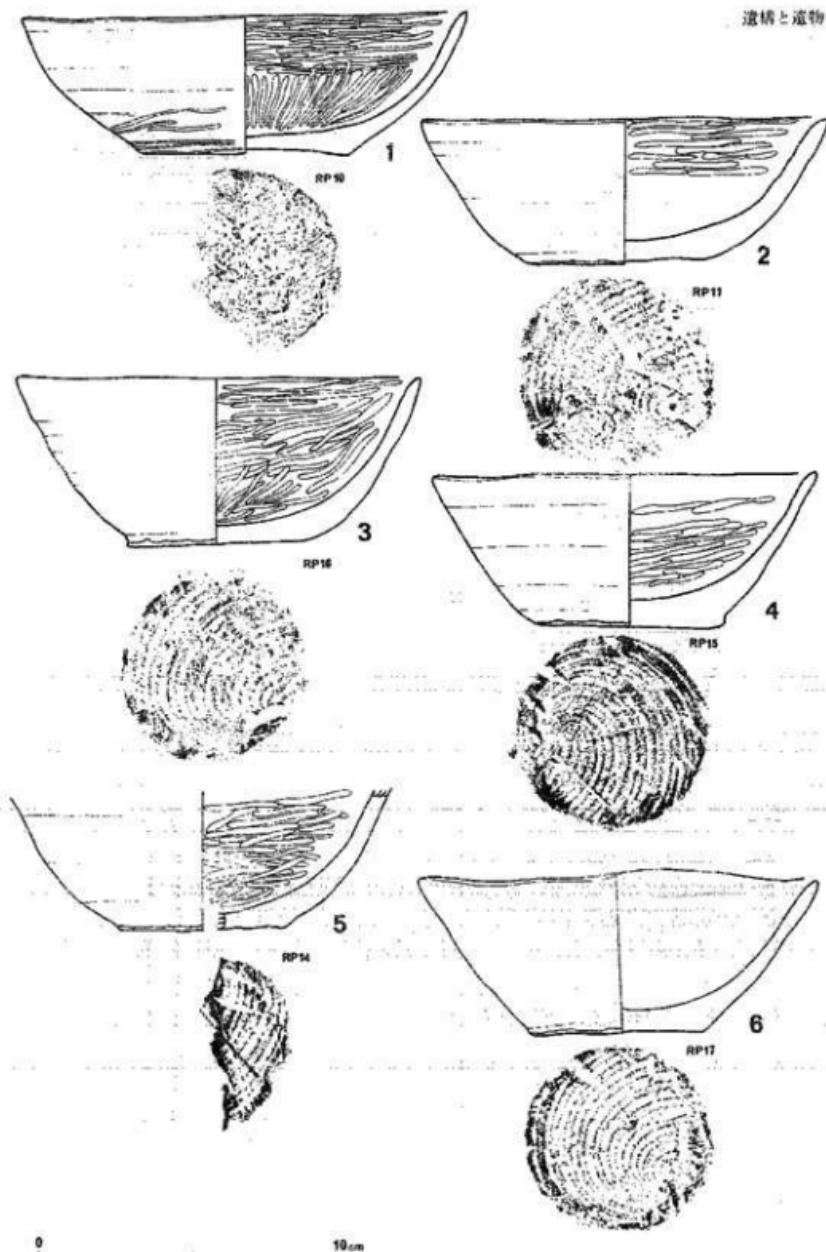
第65図 S1104堅穴住居跡

住居跡埋土 1. 嘴褐色土・10YR 4/6 粘性ややあり、しまりなし。黄褐色大粒3~5%混入。2. 黑褐色土・10YR 4/2 粘性ややあり。

第12表 挿岡番号		第65~71図		圖版番号	圖版29~32・62~66
造構名	S1104	検出地区	37-S, 37-T, 38-S, 38-T		
法 量	壁長	315cm	318cm	377cm	385cm
	壁高	24.7~27.0cm	32.7~35.5cm	25.5~37.1cm	17.8~23.3cm
	壁溝幅	5.0~16.0cm	6.0~12.0cm	10.0~20.0cm	5.0~13.0cm
	壁溝深	2.0~11.8cm	6.9~15.9cm	11.9~14.5cm	3.5~15.1cm
形 態	方 形	面 積	13.2m ²	主軸方向	N 21°E
かまど	位 置	西壁北寄り		構築素材	芯部石組

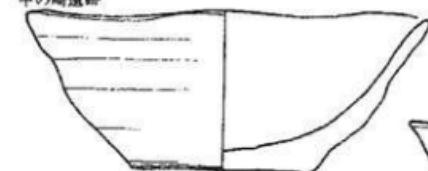


第66図 SI104堅穴住居跡カマド



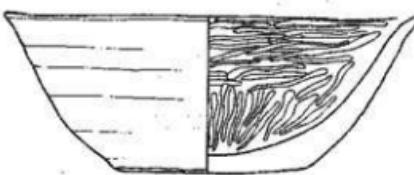
第67図 SI104堅穴住居跡出土遺物(1)

中の縦遺跡



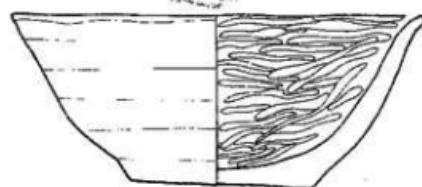
RP10

7

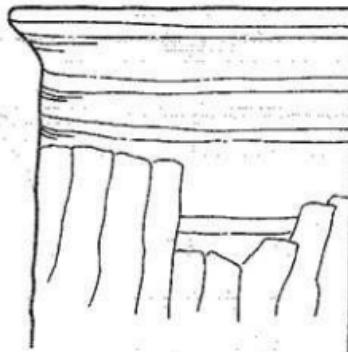


RP10

8



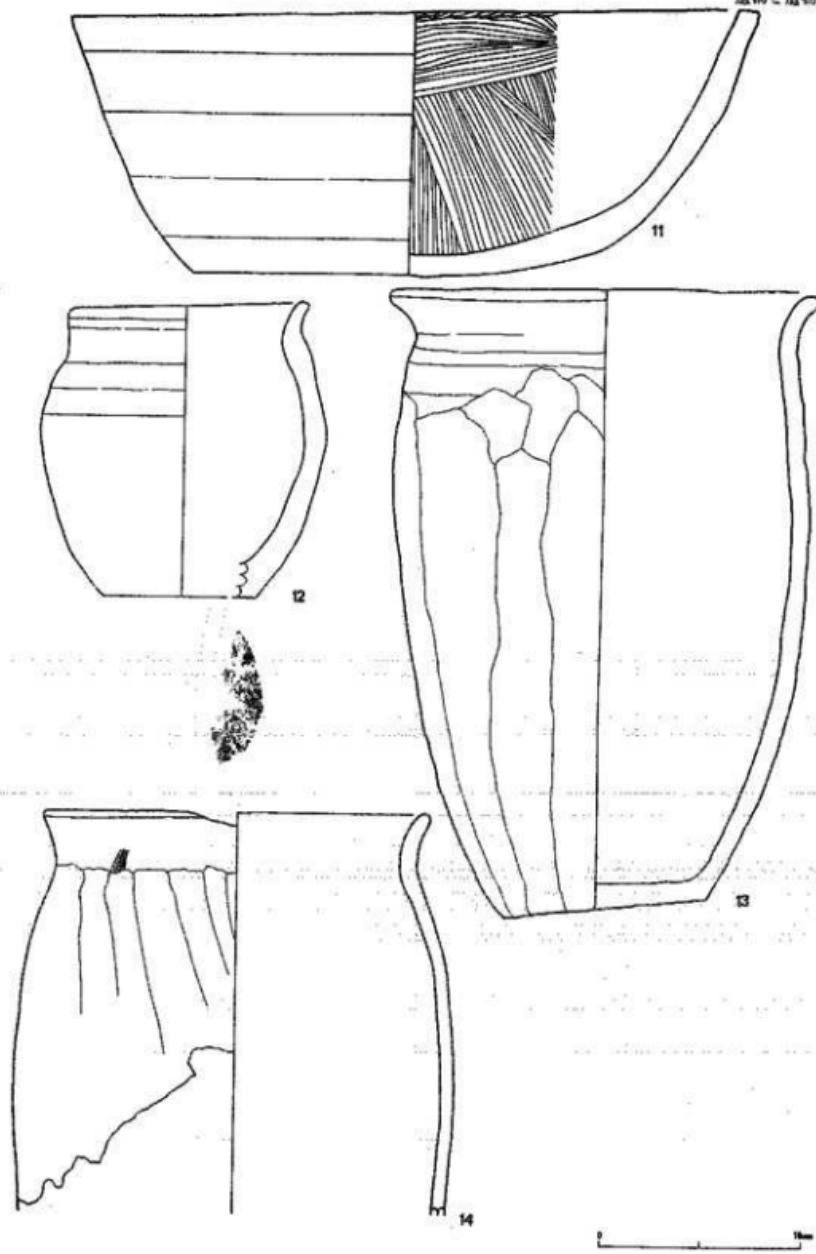
9



10

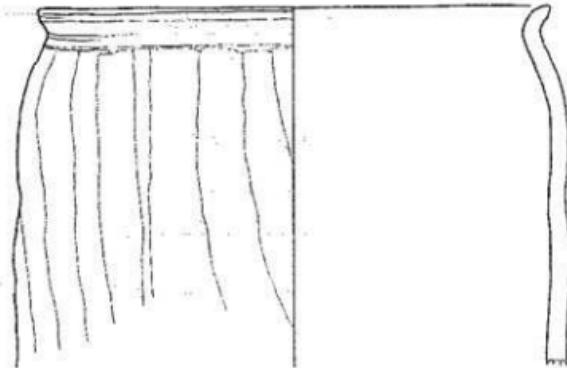


第68図 SI104竪穴住居出土遺物(2)

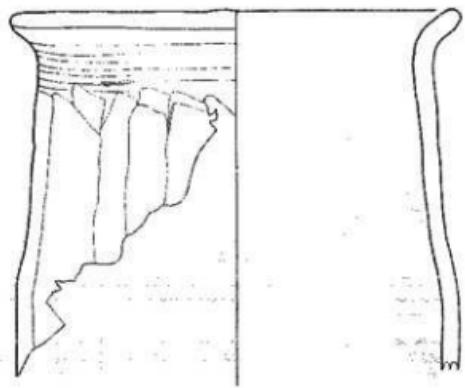


第69図 S1104堅穴住居跡出土遺物(3)

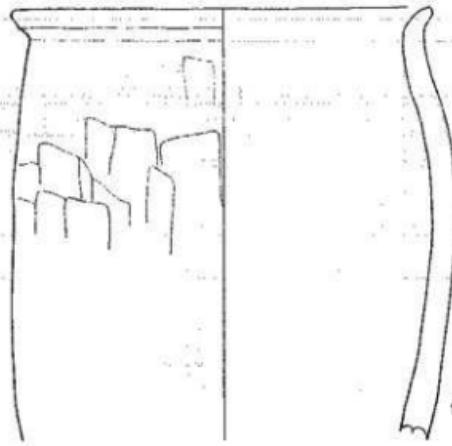
中の崎遺跡



15



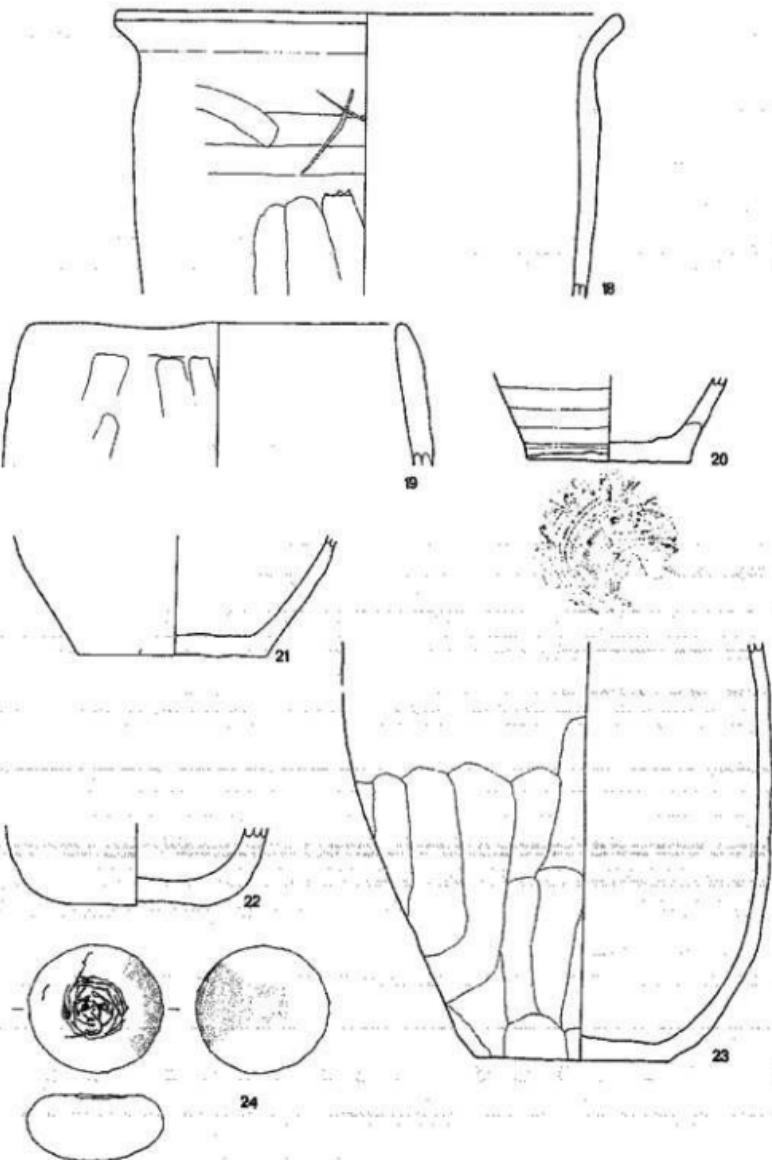
16



17

— 1 —

第70図 S1104竪穴住居跡出土遺物(4)



第71図 SI104竪穴住居跡出土遺物(5)

は住居跡中央やや西寄りからまとまって正立した状態で出土した。IIは場で、口縁部は平らに調整がされており、倒立した状態で出土した。土師器裏も他数出土しており、一部にロクロ使用が認められる。口縁部は頸部が短いが、くびれのあるものが多い。

SI 106 穹穴住居跡

第 13 表		挿図番号	第72・73図	図版番号	図版33・66
遺構名	SI 106	検出地区	43-G, 43-H, 44-G, 44-H		
法		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
壁長	(55.0)cm	235cm	(125)cm	195cm	
壁高	3.4~3.6cm	10.8~11.7cm	(4.8~7.8)cm	9.8~11.2cm	
形態	方形	面積	4.5m ²	主軸方向	N 29° E
かまど	位置	西壁中央	構築素材	芯部石組	

プラン確認 地山上面にて検出したが、上面は削平されている。

壁面の状態 壁は立ちあがりははっきりしているが、実際は上面が削平されており、これより上まであったと思われる。住居跡南側隅及び中央部は擾乱されている。

床面 平坦で堅固である。

壁溝 確認されなかった。

柱穴、ピット 北側隅、西側隅の2個が確認された。他に住居跡中心付近にピットが1個確認された。

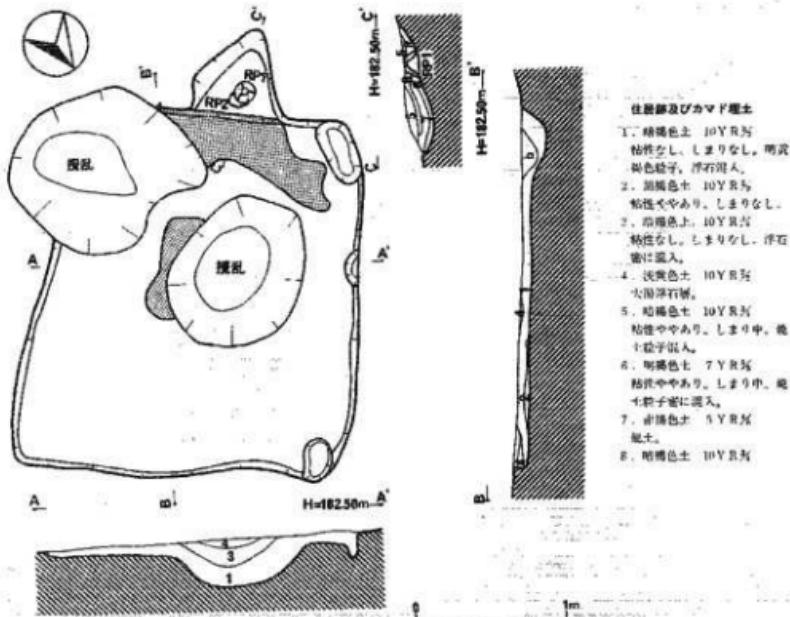
かまど 上部削平のため遺存状態は不良である。支脚と思われる土器が確認された。

遺物とその出土状態 遺物出土量は少ない。第73図1~3は土師器壺で回転糸切りである。

土師器裏の口縁部は頸部が短く、くびれの明確なものが出土している。

SI 107 穹穴住居跡

第 14 表		挿図番号	第74~78図	図版番号	図版34・35・67・68
遺構名	SI 107	検出地区	31-R, 31-S, 32-R, 32-S		
法		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
壁長	528cm	540cm	608cm	599cm	
壁高	37.2cm	15.2cm	17.5cm	20.9~24.4cm	
壁溝幅	10.0~19.0cm	6.0~20.0cm	6.0~14.0cm	7.0~19.0cm	
壁溝深	2.7cm	4.6cm	3.9cm	5.6cm	



第72図 SI106竪穴住居跡

形態	方形状	面積	35.2m ²	主軸方向	N 28°E
かまど	位置	南壁中央に焼土		構築素材	

プラン確認 地山上面にてプランを確認したが、上面は削平されている。

壁面の状態 壁はしまりがよく、ほぼ垂直である。

床面 平坦で堅固である。床面全体に疊が多くみられた。また炭化物も検出されたが、カヤ
状のものが多い。針葉樹と思われる炭化材が西側の一部から検出された。

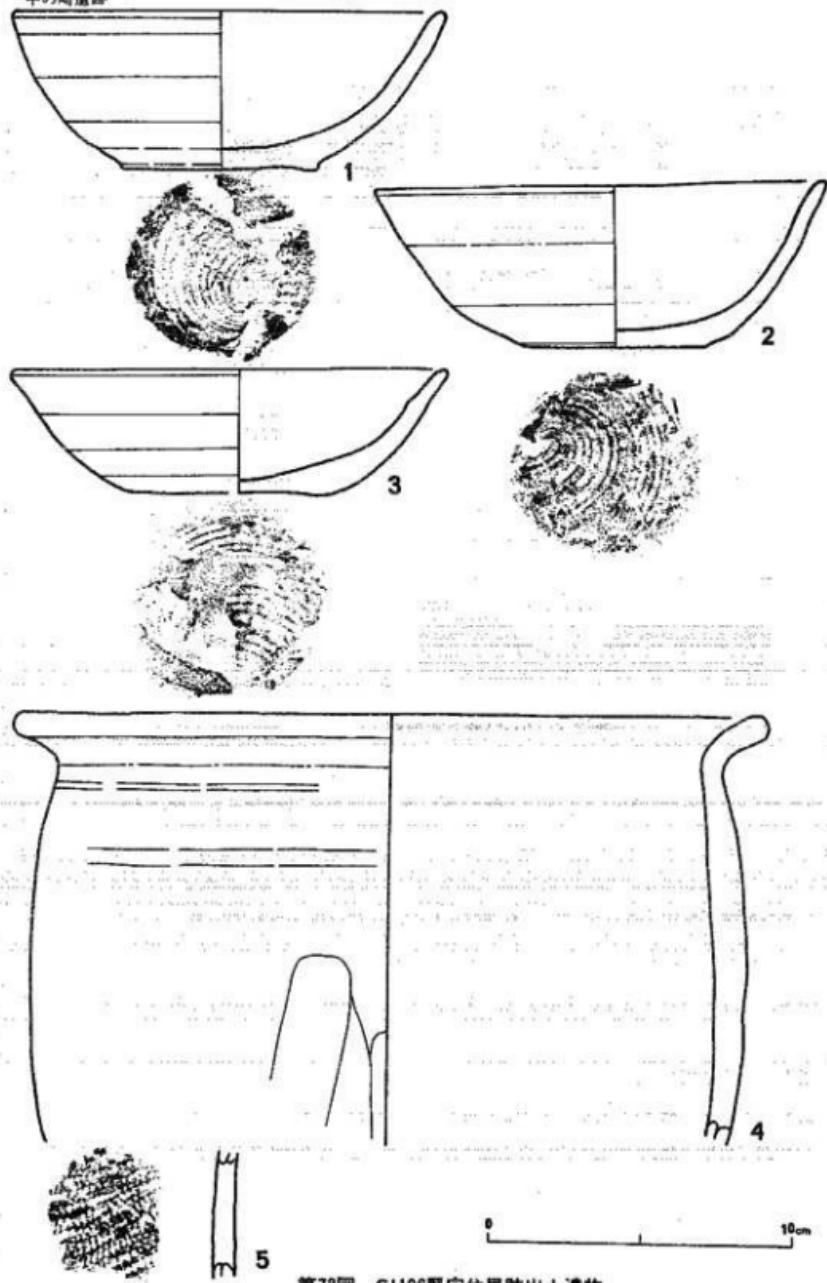
壁溝 ほぼ全周する。

柱穴、ピット 南東隅を除く三方に3個の柱穴を確認した。

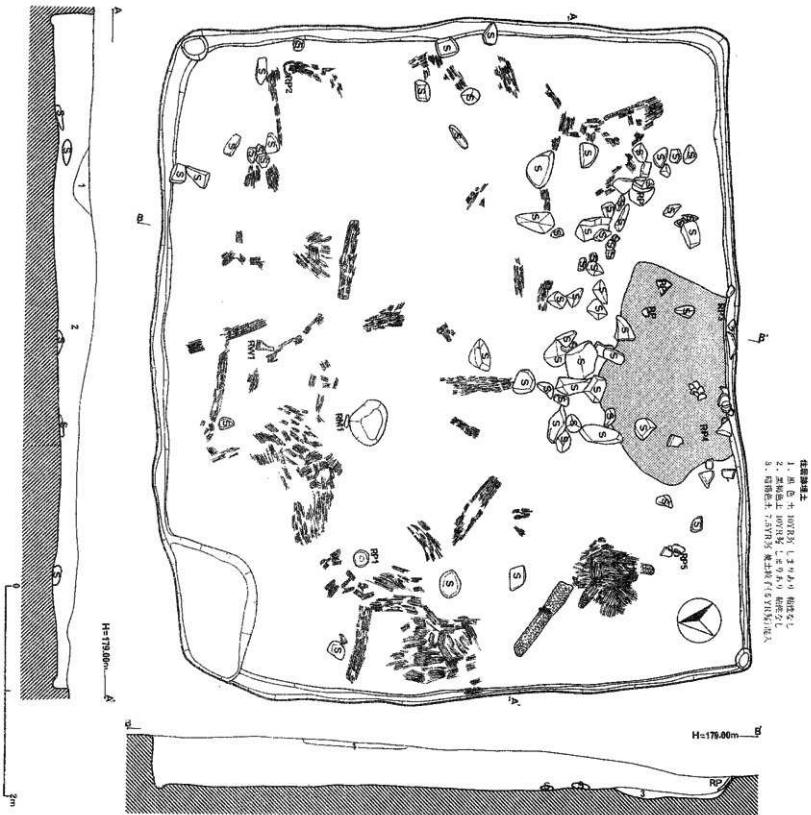
かまど 南壁中間部付近に焼土を確認するのみでかまどは確認されなかった。

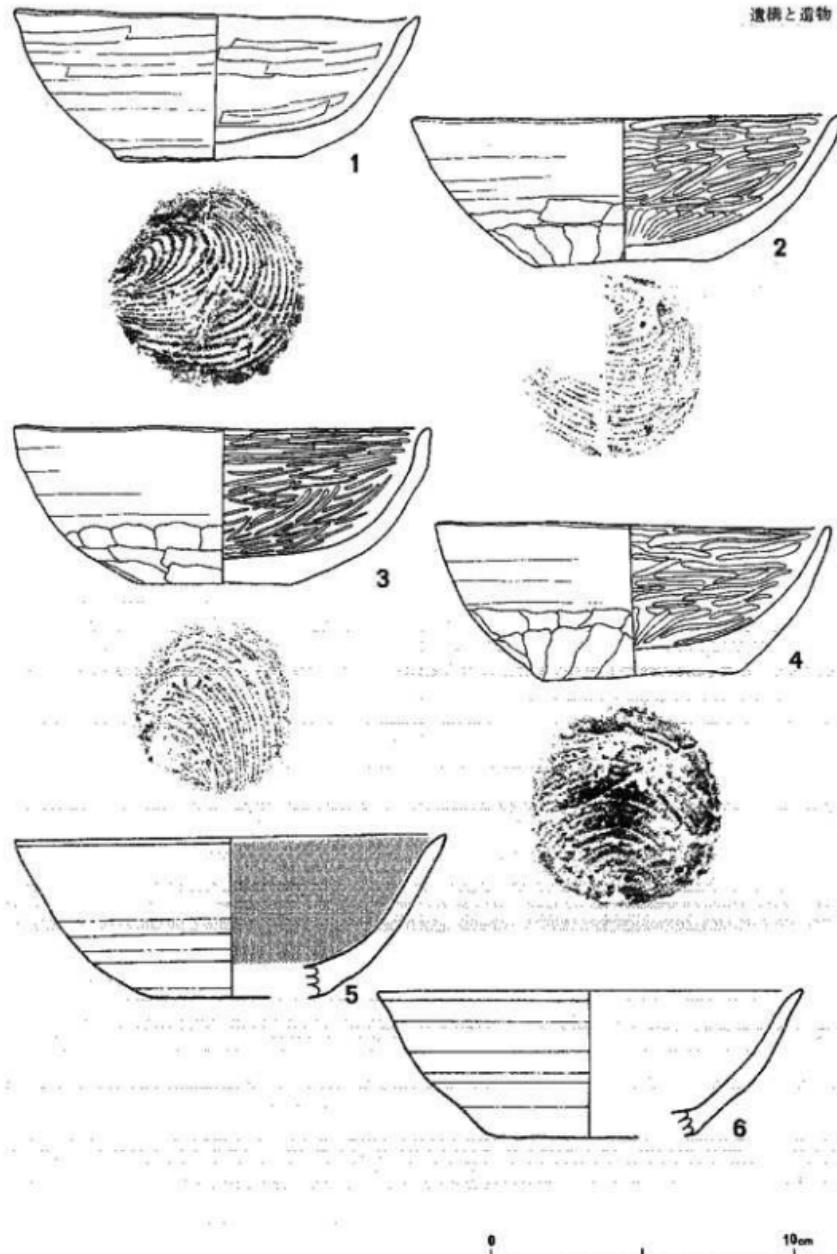
遺物とその出土状態 遺物出土量はやや多い方に属する。堀が破片ながらも3点出土している。第76図7~9がそれで、SI104竪穴住居跡出土のものと違い口縁部に反りがみられ、調査その他のみても当竪穴住居跡の方が新しいものと思われる。土師器環も多く出土しており

中の崎遺跡

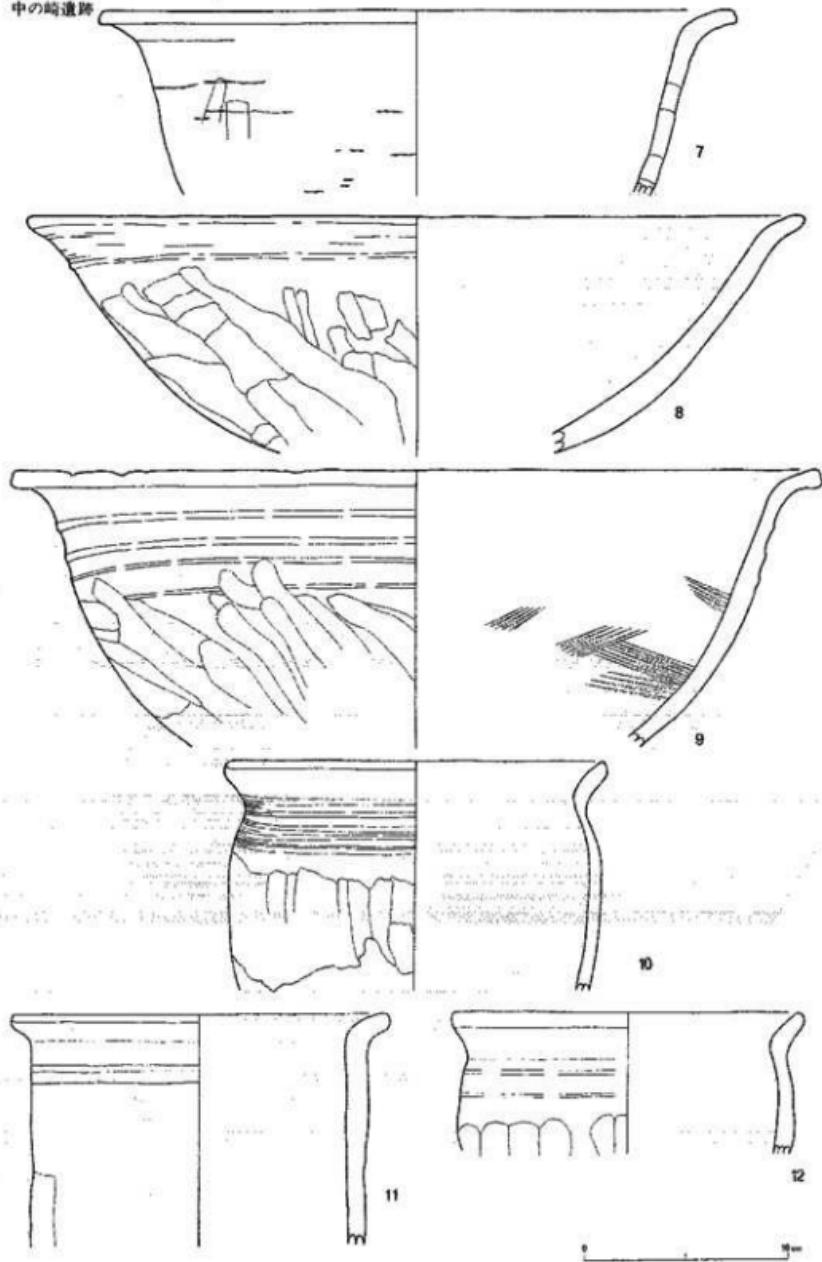


第78図 SI106竪穴住居跡出土遺物

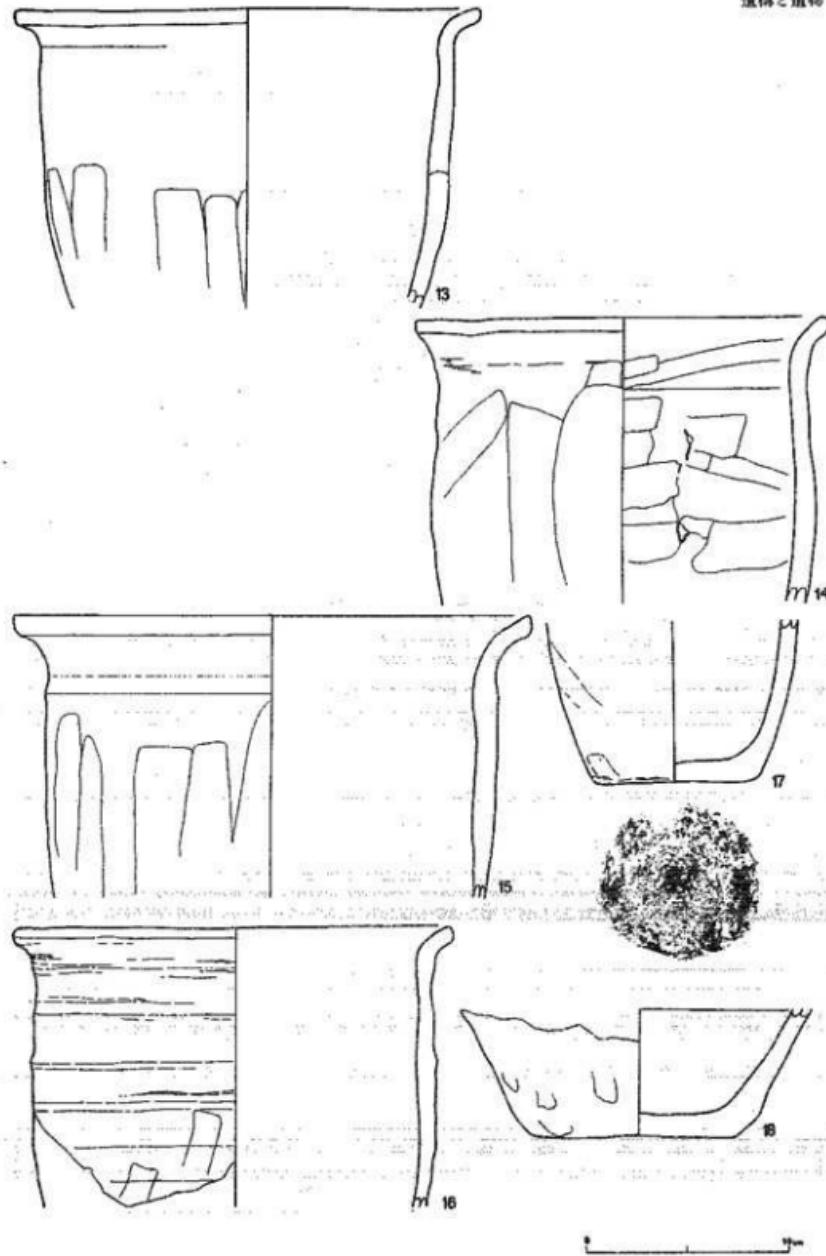




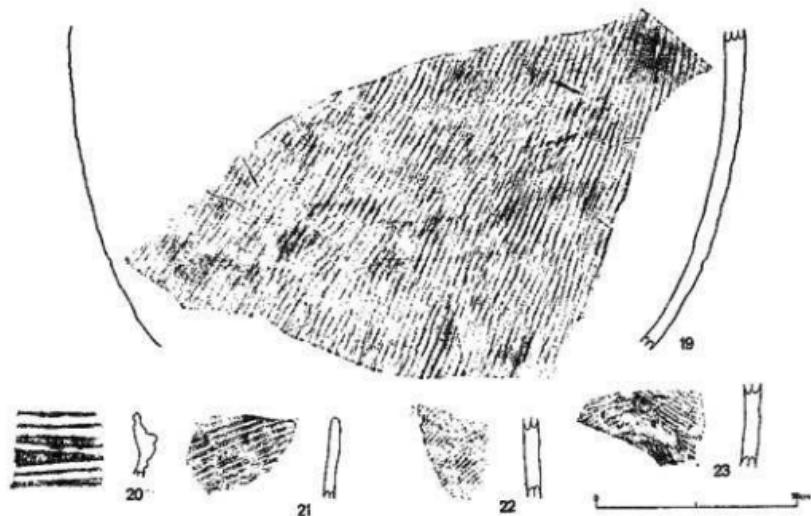
第75図 SI107整穴住居跡出土遺物(1)



第76図 SII-107鑿穴住居跡出土遺物(2)



第77図 SI107竪穴住居跡出土遺物(3)



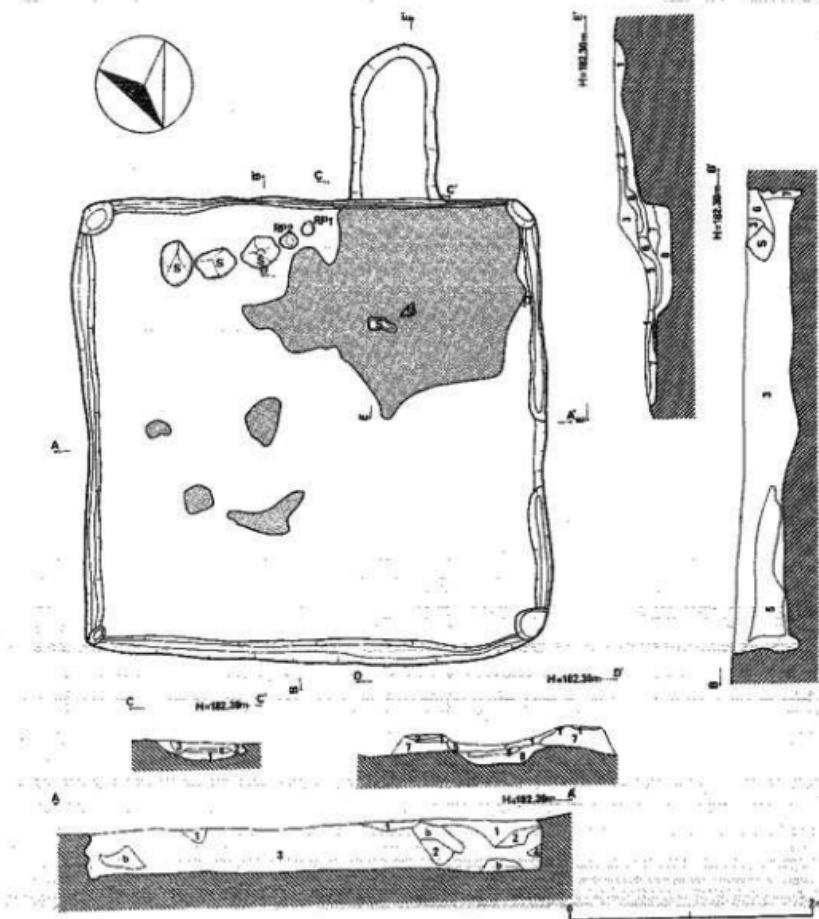
第78図 SI107竪穴住居跡出土遺物(4)

(第75図)、いずれも回転糸切りである。土師器表はほとんどのものにロクロ使用が認められ、最大径が口縁部にあり、頸部は短いが、頸部以下の胴部がほとんどくらまない器形を持つ。第78図19は須恵器の甌で外面に叩き目が施される。第78図20~23は混入した縄文時代晩期の土器である。

SI108 竪穴住居跡

第15表 挿図番号		第79~82図		図版番号	図版36・69	
遺構名		SI108		検出地区		44-F, 44-G
法		東側壁		西側壁		南側壁
		壁長		362cm		357cm
		壁高		39.0~44.1cm		(36.0~58.3)cm
		壁溝幅		8.0~19.0cm		6.0~17.0cm
量		壁溝深		1.1~10.0cm		4.0~11.0cm
						10.0~22.0cm
形態		方形		面積		15.2m ²
かまど		位置		不明		主軸方向
						N32°E
構築素材						

プラン確認 地山上面にて確認されたが、上面は若干の削平を受けている。



第79図 SI108竪穴住居跡

住居跡堆土

1. 黒色土 10Y R 8% 粘性なし しまりなし

2. 黒褐色土 10Y R 8% 粘性なし しまりなし 混合30-50%混入

3. 黑褐色土 10Y R 8% 粘性なし しまりなし 浮石層 厚黄褐色土直産 2-3cmブロック混入

4. 黄褐色土 10Y R 8% 粘性ややあり しまりなし

5. 細砂土 10Y R 8% 粘性なし しまりなし 明黄褐色砂に混入

6. にふい黄褐色土 10Y R 8% 粘性あり しまりよし

7. にふい黄褐色土 10Y R 8% 浮石層

カマド埋土

1. 赤褐色土 10Y R 8% 埋土

2. にふい黄褐色土 10Y R 8% 粘性あり しまりよし

3. 黑褐色土 10Y R 8% 埋土粒子まばらに混入

4. 黑褐色土 10Y R 8% 埋土粒子間に混入

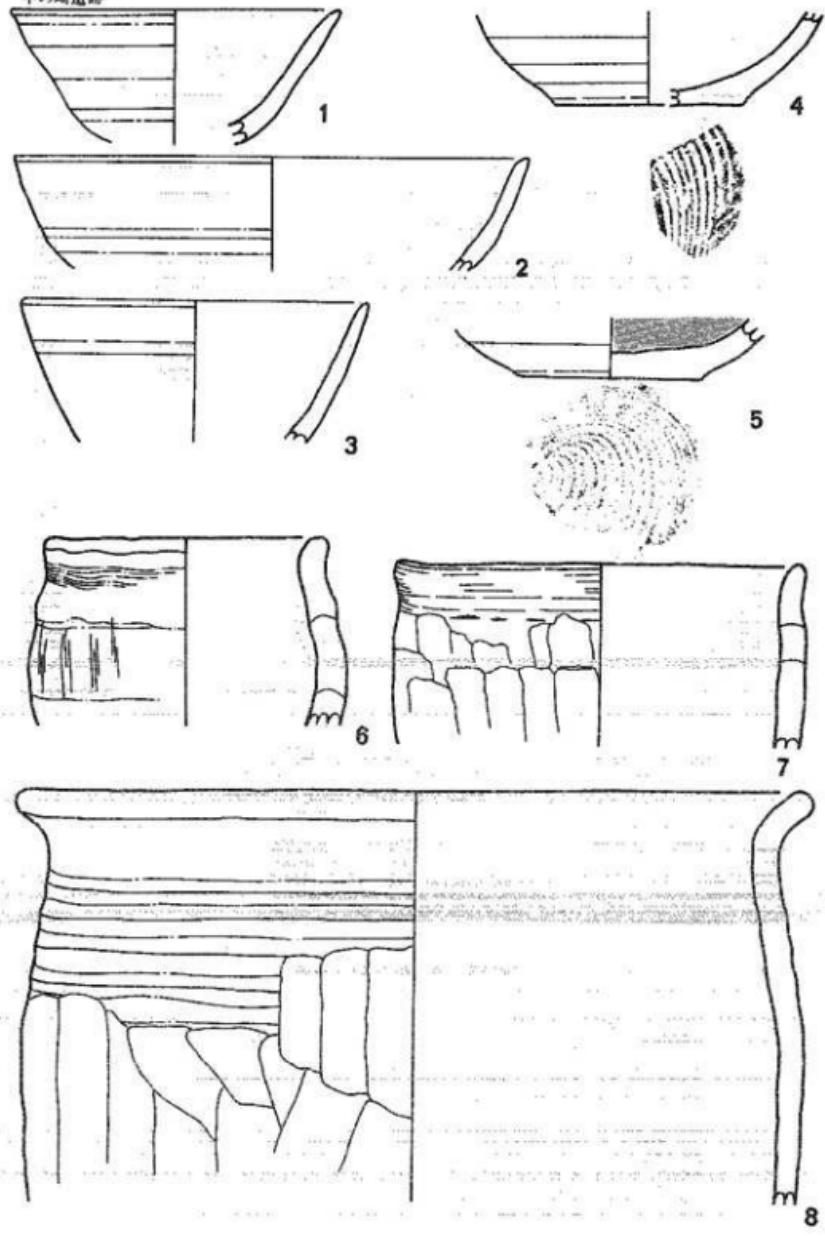
5. 黑色土 7.5Y R 8% 粘性なし しまりなし 砂土

6. 明赤褐色土 5 Y R 8% 砂土

7. 黑褐色土 10Y R 8% 粘性なし しまりなし 明黄褐色土(10Y R 8%)粒子混入 浮石層

8. 黑色土 10Y R 8% 粘性ややあり しまりなし 明黄褐色土 粒子 浮石層に混入

中の崎遺跡



第80図 SI108竪穴住居跡出土遺物(1)

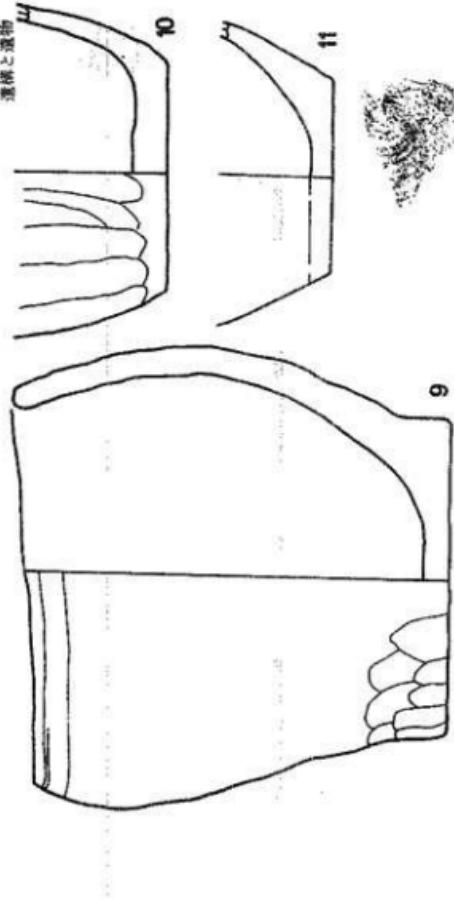
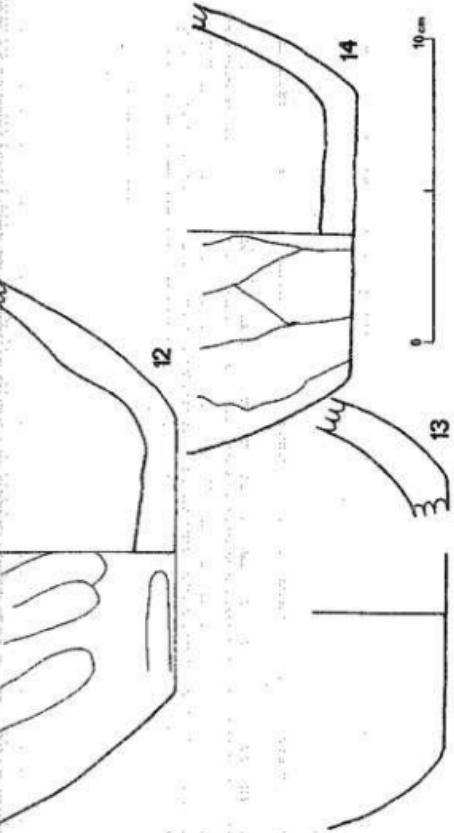
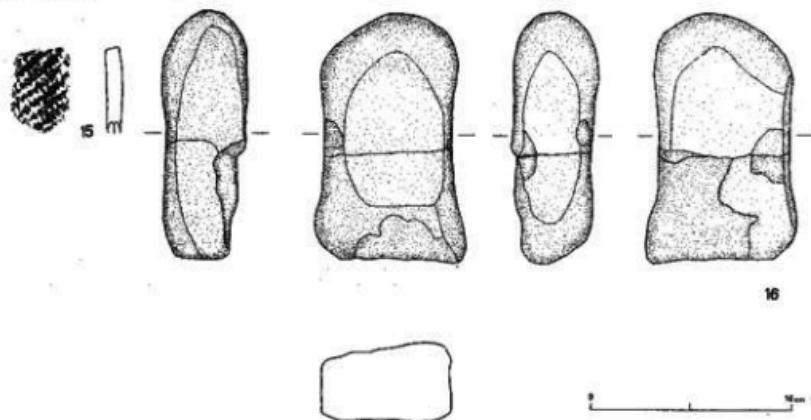


図9～11　S1108壁穴住居跡出土遺物
（左）S1108壁穴住居跡出土遺物
（右）S1108壁穴住居跡出土遺物



第81図 S1108壁穴住居跡出土遺物(2)

中の崎遺跡



第82図 SI108竪穴住居跡出土遺物(3)

壁面の状態 壁はしまりがよく、ほぼ垂直に立ちあがる。

床面 平坦で堅固である。

壁溝 ほぼ全周する。

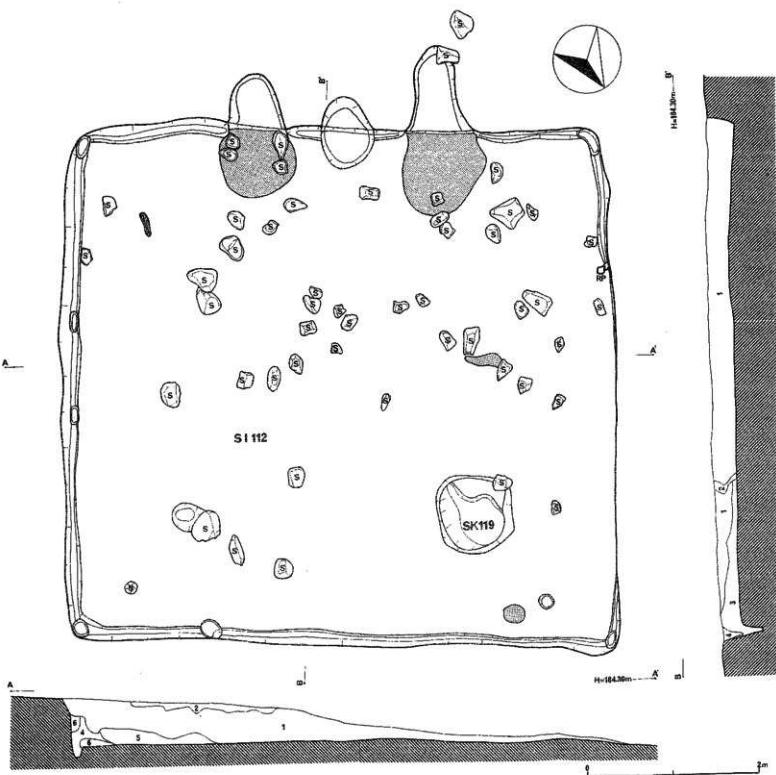
柱穴、ピット 四隅に4個の柱穴を確認する。

かまど 上部削平のため遺存状態は不良である。しかし、袖部はわずかながらその痕跡をとどめた。

遺物とその出土状態 遺物出土量はやや多い方に属する。第80図1~5は土師器壺で、回転系切りである。土師器壺の口縁部はほとんどくびれず、胴部に最大径をもつものと、若干のくびれがあり頸部の短いものが出土している。第81図9は木葉痕をもつものである。第82図16は砥石で石質は凝灰岩である。

SI112 竪穴住居跡

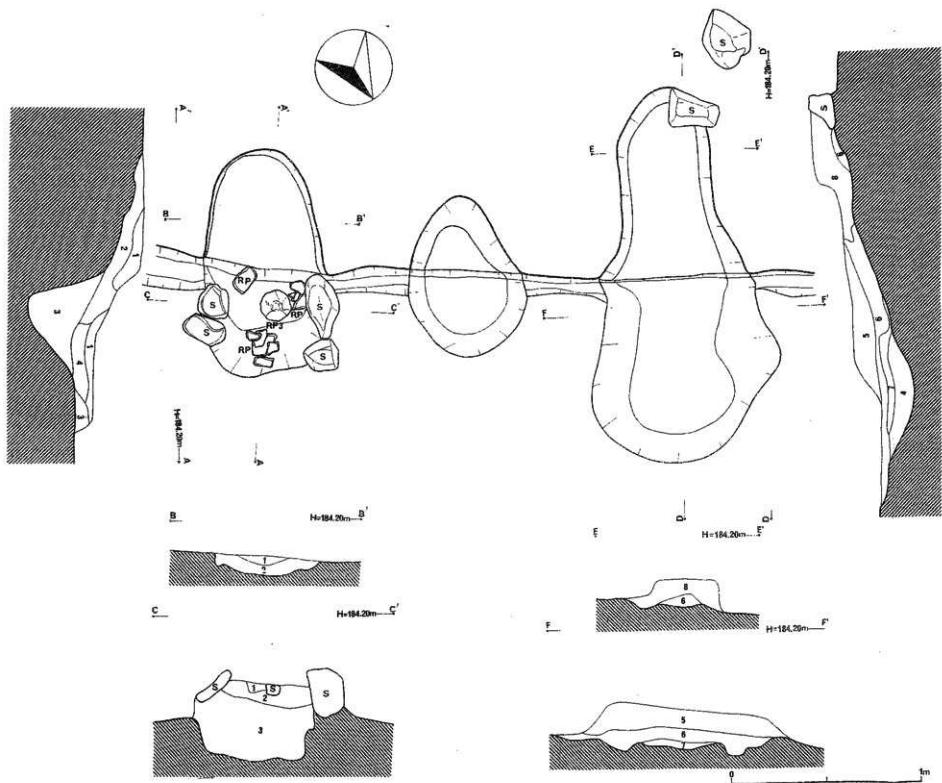
第16表 挿図番号		第83~87図		図版番号	図版37 38・70・71	
遺構名	SI112	検出地区		27-E, 27-F, 28-E, 28-F		
法 量	壁長	537cm		608cm		594cm
	壁高	66.0~73.7cm		(8.1~12.1)cm		20.5~69.0cm
	壁溝幅	12.0~28.0cm		(5.0~16.0)cm		7.0~20.0cm
	壁溝深	13.1~17.5cm		(7.2~10.0)cm		19.7~22.8cm
形態	方形状	面積	43.9m ²	主軸方向	N38°E	
かまど	位置	南壁西側(廃絶)→南壁東寄り		構築素材	芯部石組	



第83図 SI112竪穴住居跡

住居跡堆土

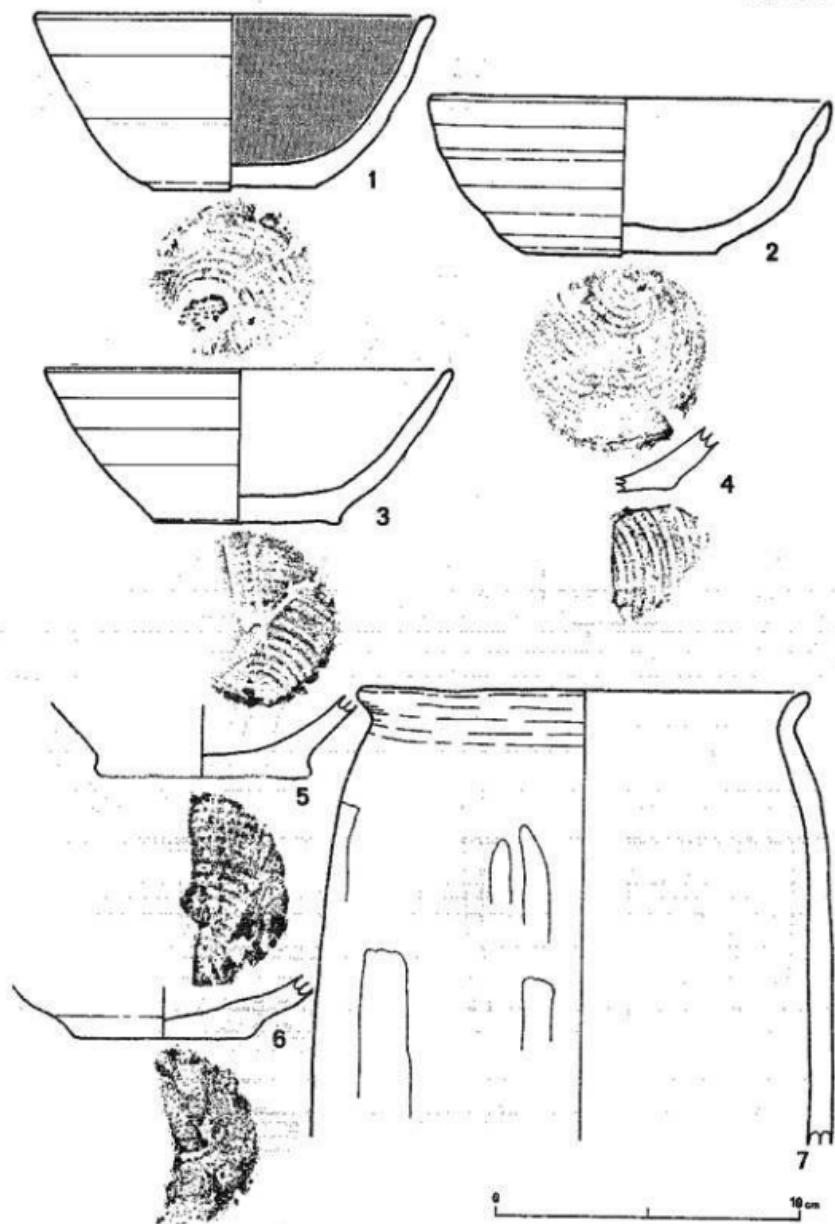
1. 黒褐色土 10YR 5/4 細粒なし。しまりなし。にふく質
(10YR 5/4) 鉄分高め
粘土(10YR 5/4) 鉄分高め
 2. 黒土色 10Y R 5/4 細粒なし。しまりなし。
 3. 黄褐色土 10Y R 5/4 細粒なし。しまりなし。明黄色
(10Y R 5/4) 鉄分高め
 4. 淡褐色土 10Y R 5/4 粗粒やや細め。しまりなし。
 5. 黑褐色土 10Y R 5/4 細粒なし。しまりなし。にふく質
(10Y R 5/4) 鉄分高め
粘土(10Y R 5/4) ブロード粘土
 6. 暗褐色土 10Y R 5/4 粗粒ややあり。しまり中程



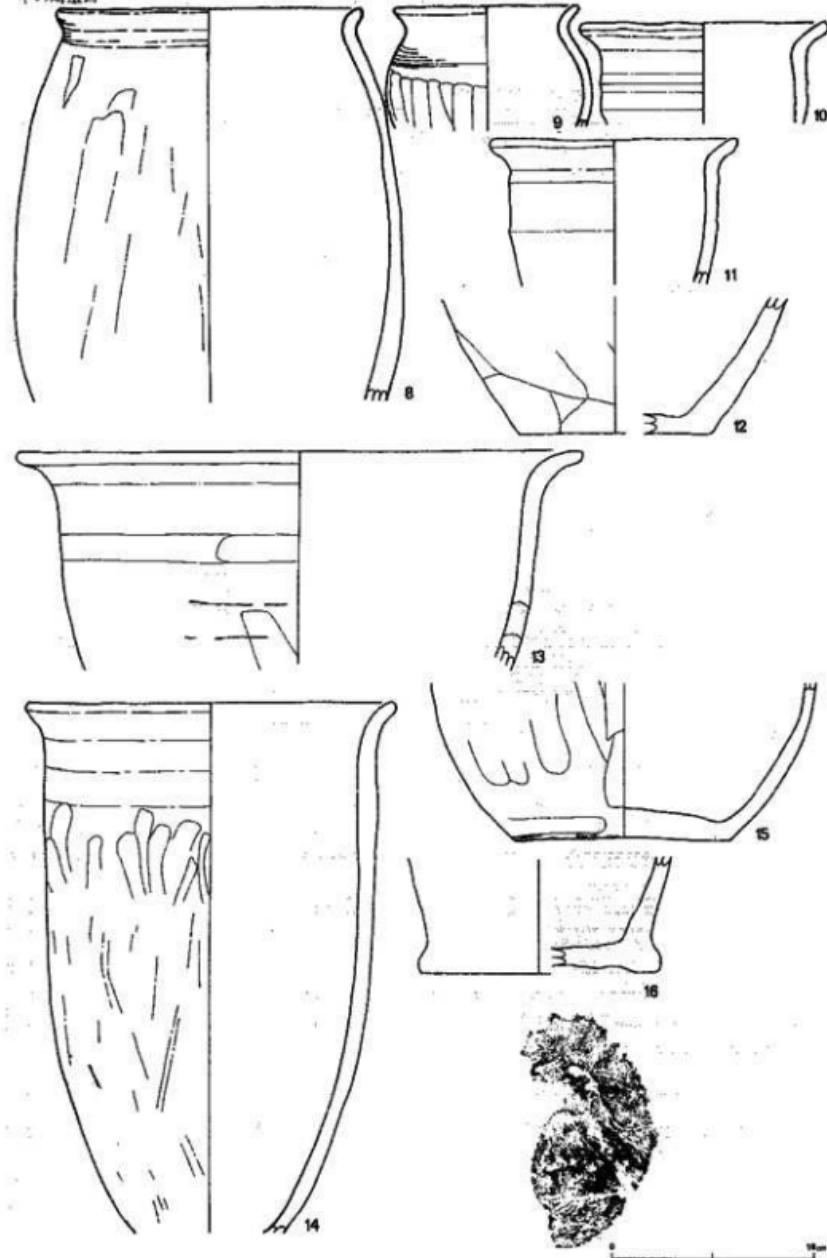
第84図 S1112堅穴住居跡カマド

カマド埋土

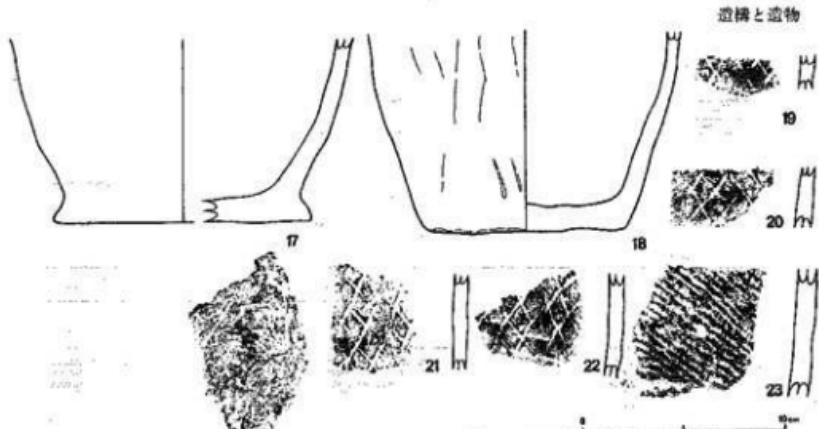
- 緑褐色土 10Y R 8/6 粒度なし、しまりなし、半質褐色
- 10Y R 8/6 2号土そばこに混入
- 10Y R 8/6 2号土そばこに混入
- 10Y R 8/6 粒度なし、しまりなし



第85図 SII-12竪穴住居跡出土遺物(1)



第86図 S1112竪穴住居跡出土遺物(2)



第87図 SI112竪穴住居跡出土遺物(3)

プラン確認 地山上面にて検出されたが、北西部は削平が著しい。

壁面の状態 壁はしまりがよく、ほぼ垂直な立ちあがりをする。

床面 平坦で堅固である。北西部にSK119土壙があり、これを切っている。

壁溝 ほぼ全周する。

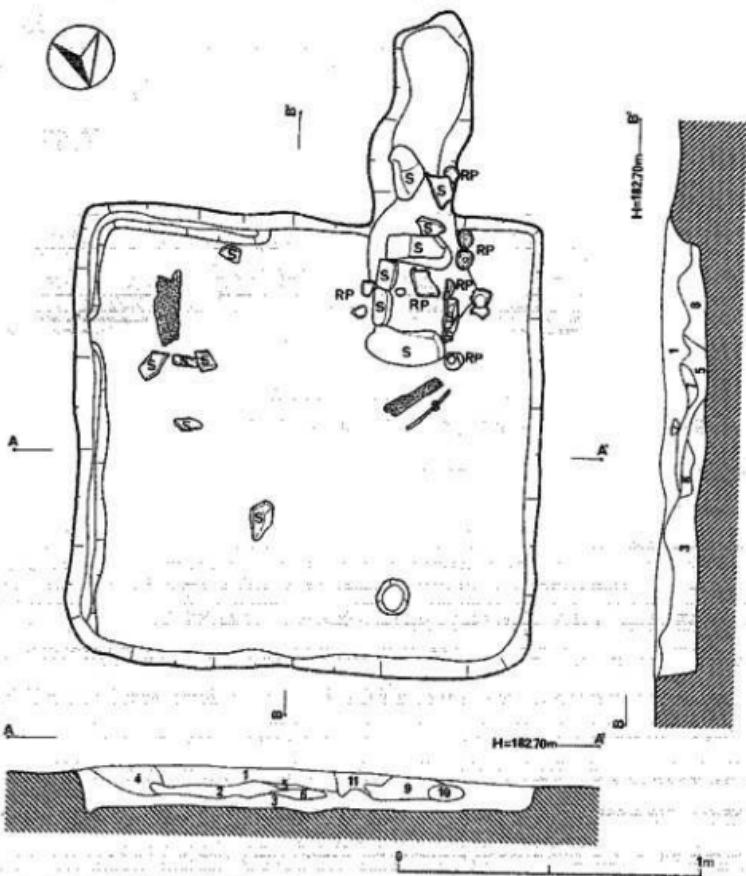
柱穴、ピット 住居跡四隅と南壁中間部に1個計5個の柱穴を確認する。他に東壁壁溝内に2個、北壁壁溝内に1個と住居跡内に2個の計5個のピットを確認する。

かまど SI112竪穴住居跡において新旧2個のかまどが確認されている。南壁西側のかまどはなんらかの理由で廃絶され、南壁東側に扁平な石を芯材として新たに構築されたと思われる。新しいかまどの燃焼部中央に支脚として用いられたと思われる土器が確認された。

遺物とその出土状態 遺物の出土量は多く、II区では最大、全体でも2番目の出土量である。第85図1~6は土師器環で回転糸切りである。第86図13は端で外反の度合いが大きいものである。土師器表はほとんどクロロ使用がみられる。砂底の土器も2点出土している。

S I 113 竪穴住居跡

第17表		検査番号	第88~91図	図版番号	図版39・40・71・72
遺構名		SI113	検出地区	37-I, 37-J, 38-I, 38-J	
法 量	東側壁		西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	285cm	280cm	300cm	295cm
	壁高	15.2~26.3cm	14.5~15.5cm	11.6~18.4cm	21.3~29.3cm
壁溝幅		12.0~22.0cm	—	(16.0~19.0)cm	—
形態		方形容	面積	1.0m ²	主軸方向 N40°E
かまど	位置	西壁北寄り	構築素材	芯部石組	



第88図 S1113竪穴住居跡

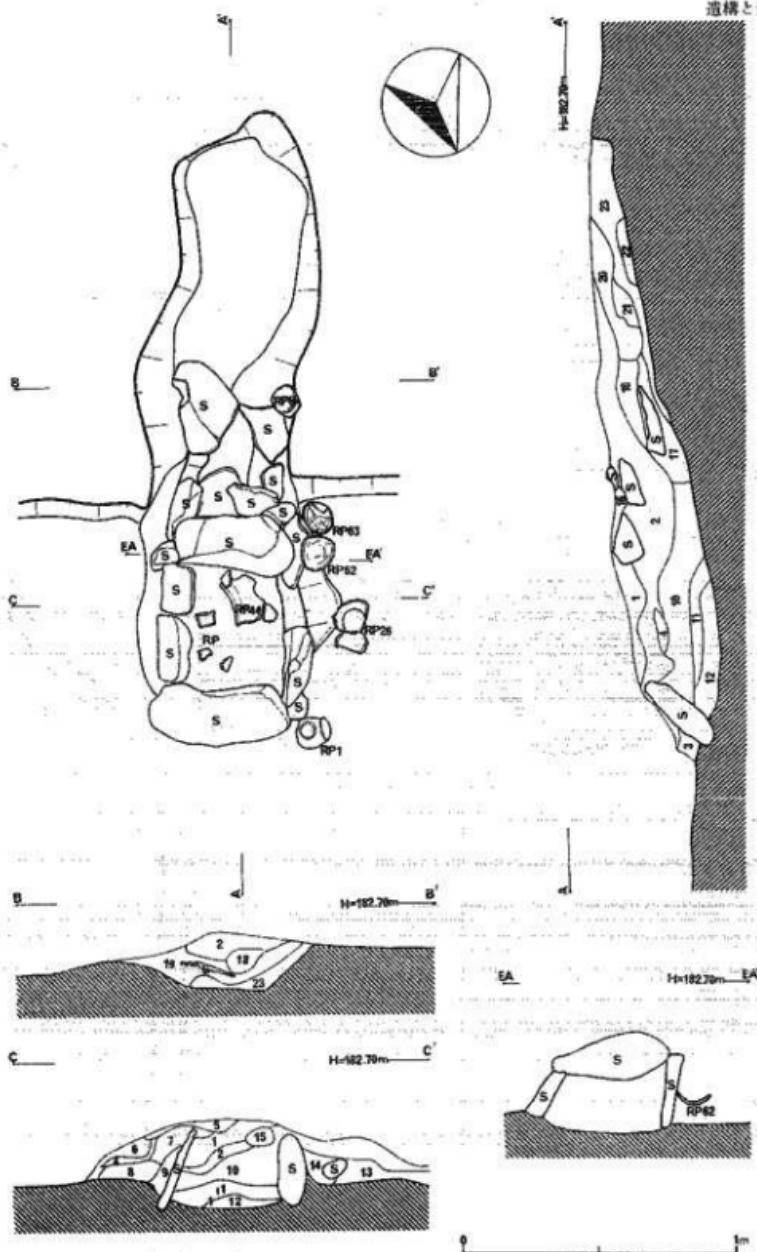
住居跡埋土

1. 黄褐色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまりよし
2. 増粘色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまりよし 黄褐色土ブロック 5%混入
3. 増粘色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまり中 黄褐色岩石混入
4. 黄褐色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまりよし 砂(に)黄褐色色カコッタ) 10%混入
5. 黑褐色土 10Y R 5/6 粘性あり しまり中
6. 黑褐色土 10Y R 5/6 粘性あり しまりなし 混石混入
7. にじく質變色土 10Y R 5/6 粘性なし しまり中 レトラス質
8. 増粘色土 10Y R 5/6 粘性あり しまり中 黄褐色土ブロックを多く混入
9. 増粘色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまり中 黄化物、レトラス巣混入
10. 増粘色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまり中 黄褐色土ブロック 5%混入
11. 黒色土 10Y R 5/6 粘性あり しまりなし わねらか

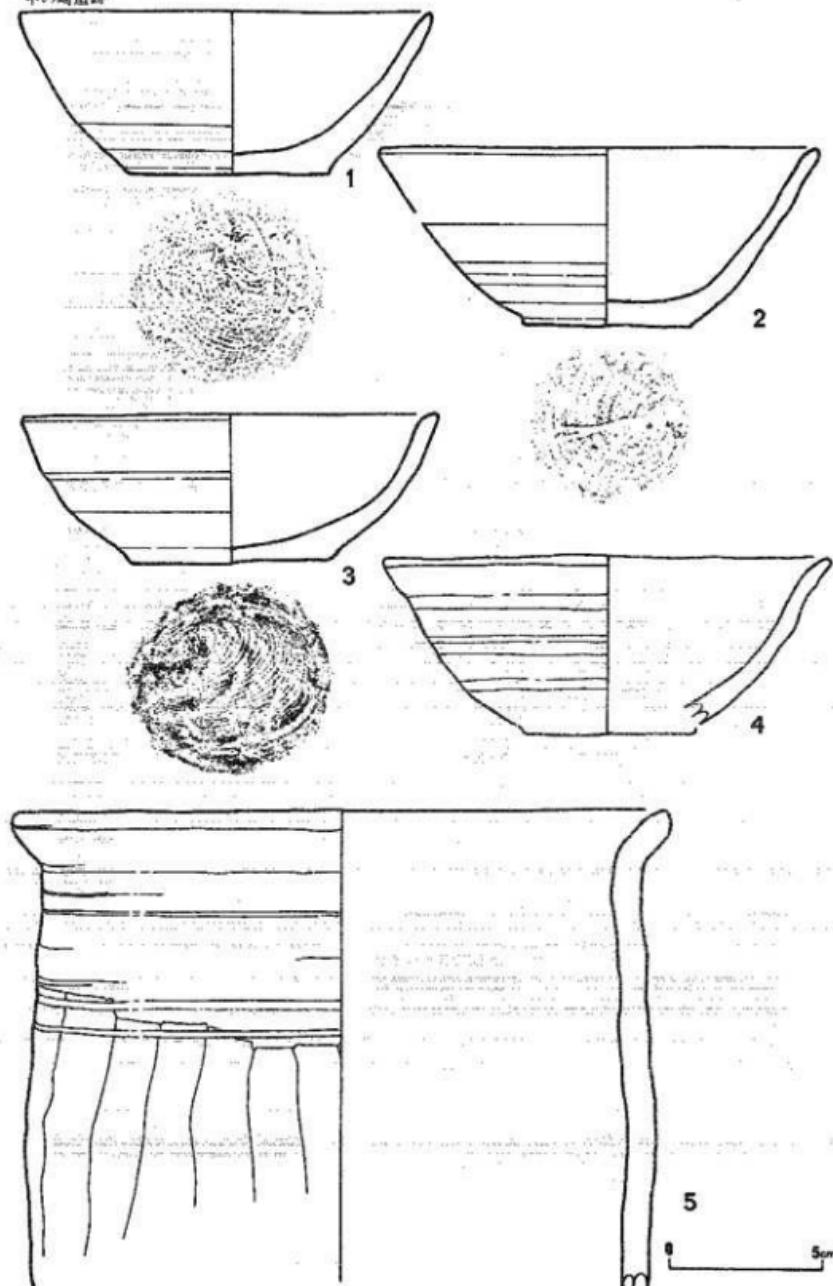
かまど埋土

1. 黄褐色土 10Y R 5/6 粘性なし しまりなし 混石若干あり
2. 黑褐色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまりなし 混石若干あり

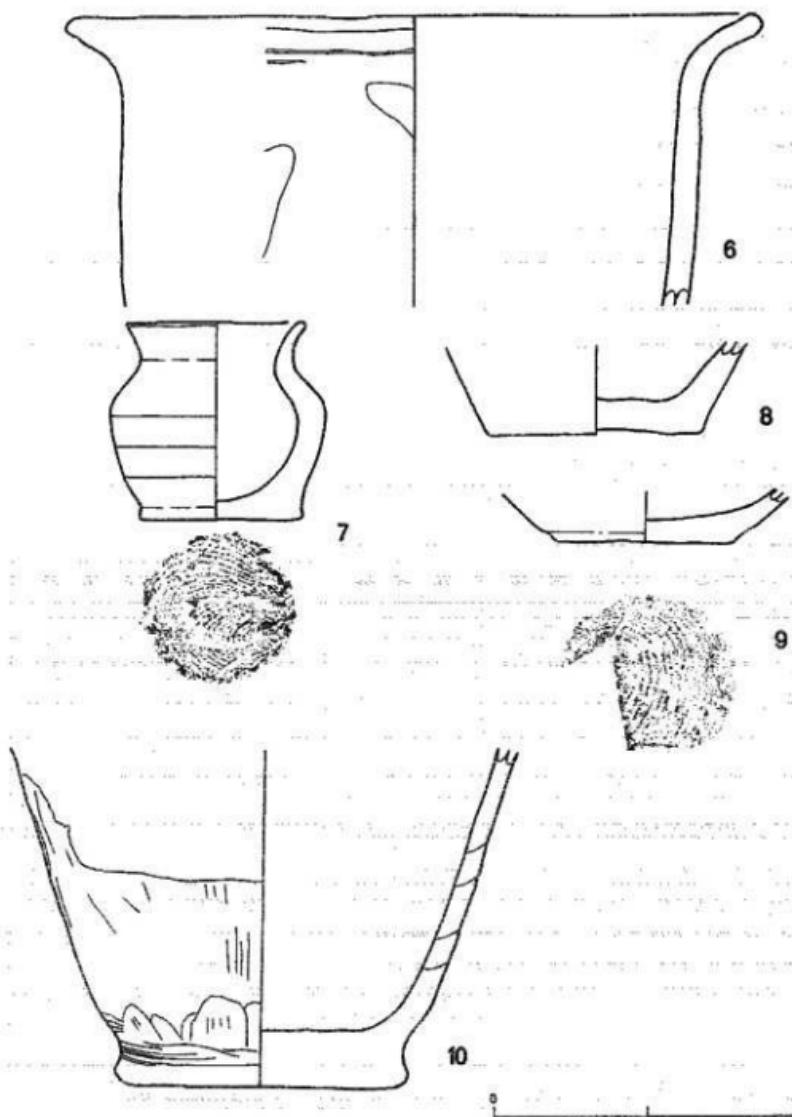
3. 黑色土 7.5 Y R 5/6 粘性あり しまりなし 粘土である
4. 黑色土 10Y R 5/6 粘性あり しまり中
5. 黑色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまり中 混石若干
6. 黑褐色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまりよし かたい
7. 黑褐色土 7.5 Y R 5/6 粘性ややあり しまりよし 地下水平進入
8. 黑褐色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまりややよし 混石若干
9. 黑色土 7.5 Y R 5/6 粘性あり しまりよし 粘部である熱変化したもの
10. 黑褐色土 10Y R 5/6 粘性あり しまりなし 黄化物岩石含む 混石若干含む
11. 黑色土 5 Y R 5/6 粘性あり しまりなし 粘土が熱変化したもの
12. 明る黒褐色土 5 Y R 5/6 粘性ややあり しまりよし 粘土が熱変化したもの ざらざら
13. 増粘色土 10Y R 5/6 粘性ややあり しまりなし
14. 黑色土 10Y R 5/6 粘性なし しまりよし 粘土層
15. 明る黒褐色土 10Y R 5/6 粘性あり しまりよし
16. 増粘色土 10Y R 5/6 粘性あり しまりよし 粘土
17. 増粘色土 7.5 Y R 5/6 粘性あり しまりよし 粘土が熱変化したもの
18. 増粘色土 10Y R 5/6 粘性ややあり 脱土層入 粘土質である
19. 黑色土 10Y R 5/6 粘性あり しまりよし 粘土質



第89図 SI113壁穴住居跡カマド



第90図 SI113竪穴住居跡出土遺物(1)



第91図 S1113竪穴住居跡出土遺物(2)

プラン確認 地山上面にて確認されたが、上面（特に西側）は若干削平されている。

壁面の状態 壁はしまりがよく、ほぼ垂直に立ちあがるが、南壁は不明確なところもあり、やや傾斜している。

床面 平坦で堅固である。床面の一部から炭化材を検出した。

壁溝 東壁と南壁の一部に確認される。

柱穴、ピット 柱穴は検出されず、住居跡北側東寄りに1個のピットが確認される。

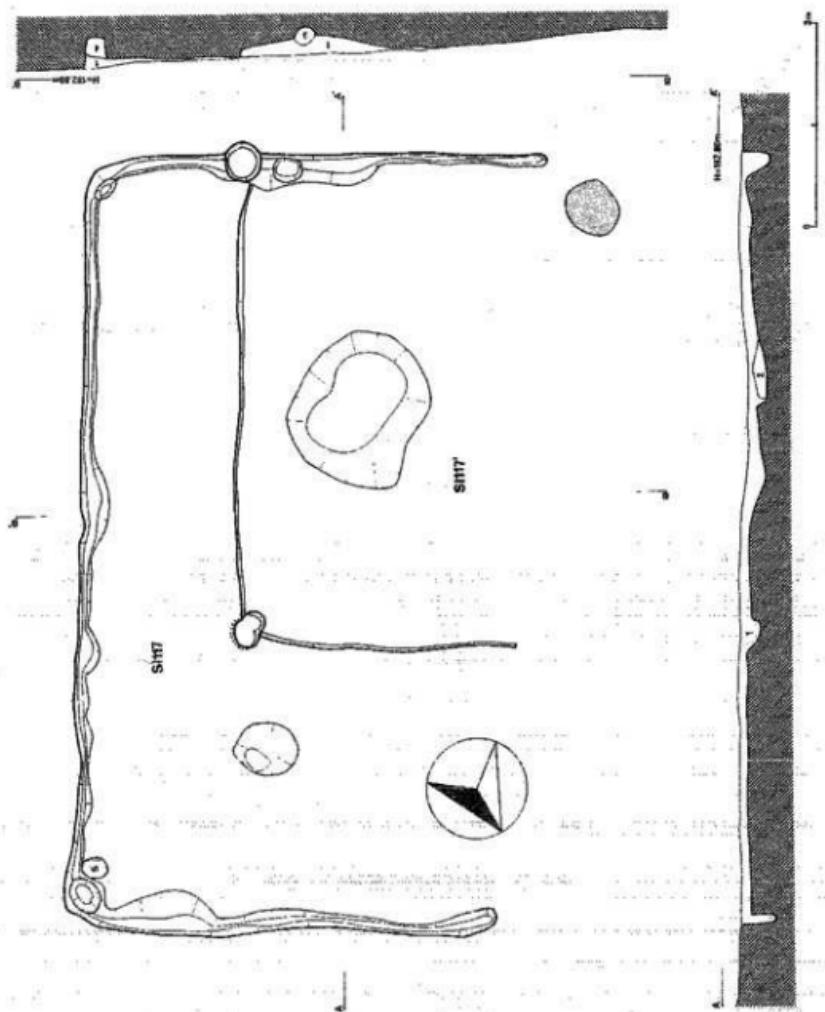
かまど 扁平な石を芯材として構築されたものであり、ほぼ遺存時の原形に近い形を残している。煙道部の比較的長いかまどである。

遺物とその出土状態 遺物出土量は少ない。土師器壺は回転糸切りである。窓口縁部は頭部が短く、若干くびれがあり、一部にロクロ使用のものもみられる。

S I 117・117'竪穴住居跡

第18表		挿図番号	第92・93図	図版番号	図版41・72
遺構名		検出地区		32-J, 33-J, 34-J	
法 量	壁長	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁高	730cm	—	(440)cm	(423)cm
	壁溝幅	20.8~35.7cm	—	(10.3~27.9)cm	(31.1~33.4)cm
	壁溝深	5.0~29.0cm	—	(7.0~36.0)cm	(8.0~43.0)cm
形態		方形容	面積	32.6m ²	主軸方向 N32°E
かまど	位置	不明		構築素材	

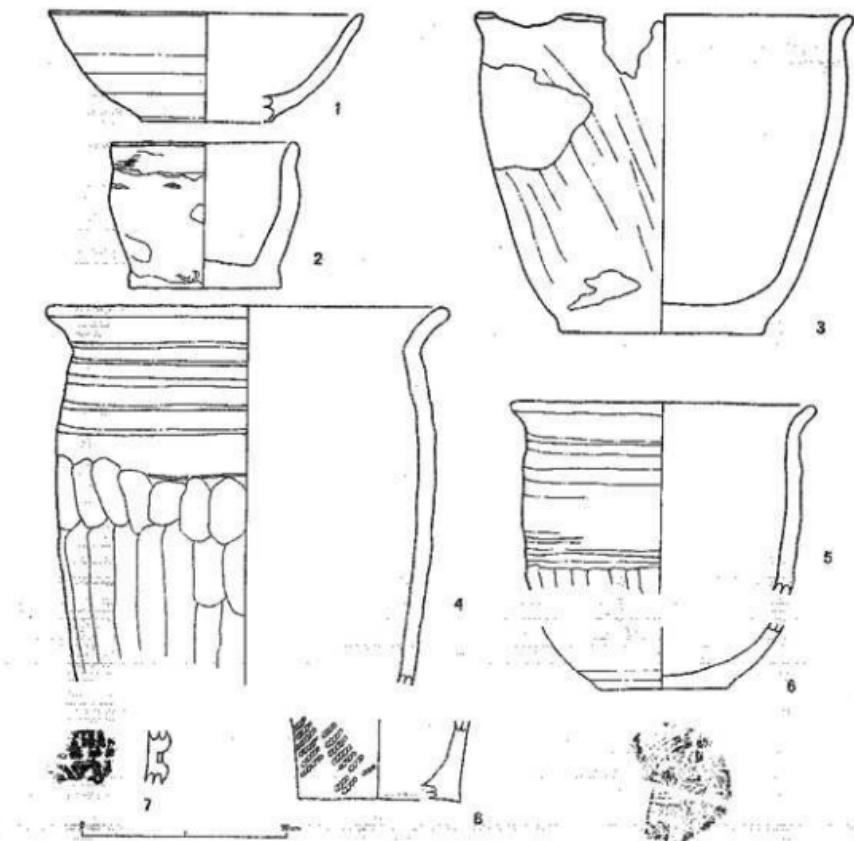
第19表		挿図番号	第92・93図	図版番号	図版41・72
遺構名		検出地区		32-J, 33-J	
法 量	壁長	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁高	497cm	—	(300)cm	(271)cm
	壁溝幅	6.6~12.7cm	—	(10.3~27.9)cm	(8.4~8.7)cm
	壁溝深	—	—	(3.6~7.0)cm	—
形態		方形容	面積	(14.1)m ²	主軸方向 N31°E
かまど	位置	不明		構築素材	



第92図 SI 117, 117' 穫穴住居跡

SI 117, 117' 穫穴住居跡埋土

1. 黒褐色土 10Y R 2/4 粘性あり。しまり中。黄褐色中粒子混入。
2. 黑褐色土 10Y R 2/4 粘性なし。しまりなし。黄褐色粒子混入。
3. 黒色土 10Y R 1/4 粘性あり。しまり中。
4. 暗褐色土 10Y R 3/4 粘性ややあり。しまり中。黄褐色大中小粒子混入。



第93図 SI 117 聖穴住居跡出土遺物

プラン確認 地山上面にて確認したが、上部がかなり削平されている。SI 117の埋上を掘り下げたところ SI 117'を確認した。

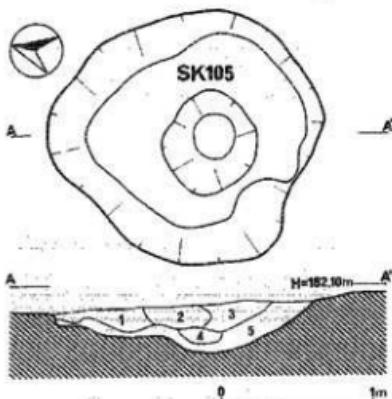
壁面の状態 上部削平が著しく壁を確認することができなかった。SI 117はSI 117'を重複しているがこれはSI 117'を拡張してSI 117としたものと思われる。

床面 床面は若干の凹凸があり、あまり堅固でない。

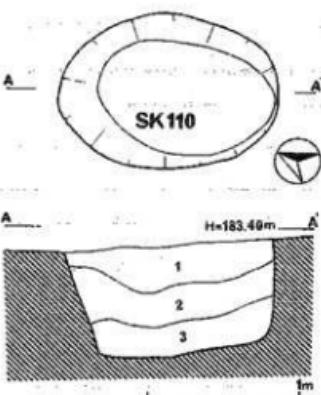
壁溝 SI 117は壁が確認された部分においては壁溝が確認されている。

柱穴、ピット 北東隅及び南東隅の2個、南壁東寄りに2個計4個の住穴が確認されている。

遺物とその出土状態 遺物の出土量は少ない方であるが、壊の出土が特に少ない。土師器表は頸部が短く、くびれのあるものが出土している。



第94図 SK105土壤



第95図 SK110土壤

b. 土壤

SK105土壤 (第94図)

46-J, 46-K地区より地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壇口部176×170cm、壇底部142×150cm、深さ31cm、面積2.2m²である。床面は中央部ほど深い鍋底状を呈する。SI103竪穴性居跡を切っており、これより新しい。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

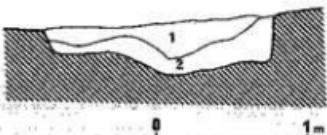
1. 黒褐色土 10YR 5% 粘性中。しまり強。10YR 5%がブロック状5%混入。
褐灰色土 10YR 5% 粘性弱。しまり強。粗砂および細砂状でボロボロしている。
双方1:1の割合で不規則なまだら状に混合しあっている。
2. 暗褐色土 10YR 5% 粘性強。しまり強。黄褐色10YR 5%がまだらに10%混入。部分的に1層の10YR 5%混入。
3. 黒褐色土 2.5YR 5% 粘性強。しまり強。1層の10YR 5%が全体的に5%混入。浮石が若干混入。
4. 黒色土 10YR 5% 粘性強。しまり中。1層の10YR 5%がまだらに10%混入。全層で最も軟らかくもろい。
5. 灰黃褐色土 10YR 5% にほい黄褐色土10YR 5%が部分的にブロック状に1%混入。

SK110土壤 (第95図 図版42)

35-D, 36-D地区より地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壇口部

144 × 116 cm, 壁底部 105 × 72 cm, 深さ 74 cm, 面積 1.16 m²である。床面はほぼ平坦で、壁も急激に立ちあがる。主軸方位は N 11°W である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R ½ 炭化物粒若干含む。
2. 黒褐色土 10Y R ½ 浮石 50%混入。
3. 黒褐色土 10Y R ½ 部分的に褐色土 (7.5 Y R ½)が混入。軽石少々含む。

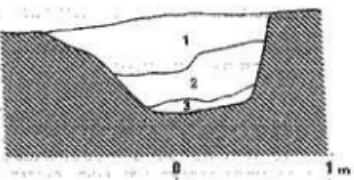
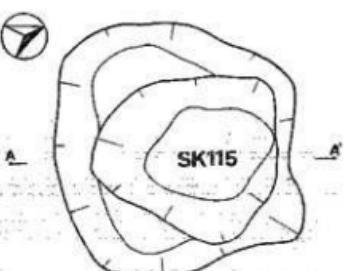


第96図 SK114土壤

SK114土壤 (第96図 図版42)

35-K, 36-K地区より地山上面にて検出された。平面形は不整橿円形を呈する。壁口部 160 × 110 cm, 壁底部 150 × 60 cm, 深さ 34 cm, 面積 1.4 m²である。床面は若干の凹凸があり、北東部にピットを持つ。主軸方位は N 84°E である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R ½ 黄褐色土 3%混入。
2. 黄褐色土 10Y R ½ 砂礫 10%混入。

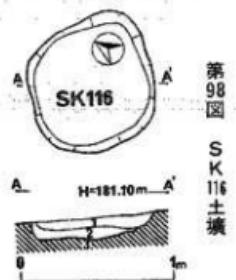


第97図 SK115土壤

SK115土壤 (第97図 図版42)

35-K地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壁口部 194 × 178 cm, 壁底部 140 × 140 cm, 深さ 66 cm, 面積 2.24 m²である。床面はほぼ平坦である。主軸方位は N 30°W である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

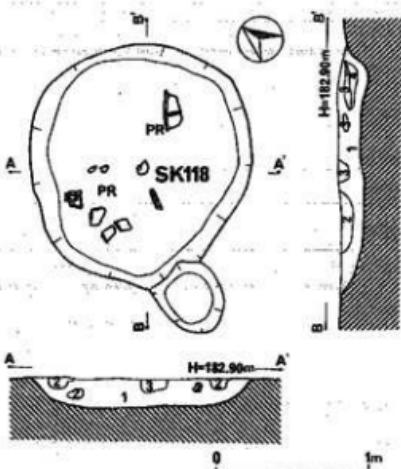
1. 黒褐色土 10Y R ½ 黄褐色土若干混入。
2. 黑褐色土 10Y R ½ 黄褐色極小粒若干混入。
3. 褐色土 10Y R ½ 粘性強。層左側ににほい黄橙色粘質土 (10Y R ½) 混入。



SK116土壤 (第98図 図版48)

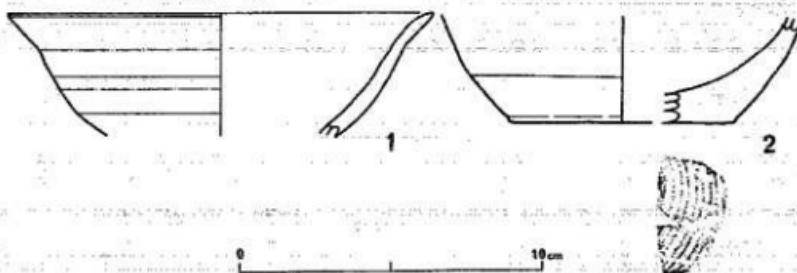
45-L地区より地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部98×88cm、壙底部86×76cm、深さ14cm、面積0.6m²である。床面はほぼ平坦な浅い小土壤である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R ½ 浮石含む。
2. 黒褐色土 10Y R ½ 地山粒混入。



SK118土壤 (第99図)

31-I, 32-I地区より地山上面にて検出された。平面形は不整橿円形を呈する。壙口部194×152cm、壙底部168×134cm、深さ20cm、面積1.96m²である。



第99図 SK118土壤

第100図 SK118土壤出土遺物

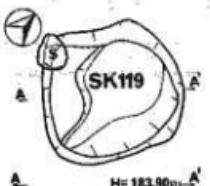
床面はほぼ平坦である。埋土は浮石がブロック状に混入し、浮石降下後に廃棄されたものと思われる。南側にはこれを切るピットを検出した。主軸方位はN17Wである。第100図に示す土師器環が出土した。底部は回転糸切りである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R ½ 粘性弱。しまり大。
2. 黒色土 10Y R ½ 粘性弱。しまり中。浮石大量に混入。
3. 褐色土 7.5 Y R ½ 粘性中。しまり中。
4. にぶい黄橙色土 10Y R ½ 浮石のブロック、炭化物や土器片が混入。

SK119 土壙 (第101図 図版43)

28-F地区より地山上面にて検出された。平面形はほぼ円形を呈する。壌口部92×90cm, 壌底部84×72cm, 深さ62cm, 面積0.72m²である。床面は凹凸があり、壁も不明確なところが多い。上部はSI112豊穴住居跡に切られている。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

- | | | | |
|----|------|---------|-------------|
| 1. | 黒褐色土 | 10Y R ½ | 粘性弱。しまり弱。 |
| 2. | 暗褐色土 | 10Y R ¾ | 粘性中。しまり中。 |
| 3. | 黒色土 | 10Y R ½ | 粘性弱。しまり弱。 |
| 4. | 褐色土 | 10Y R ¾ | 明黄褐色粒子密に混入。 |

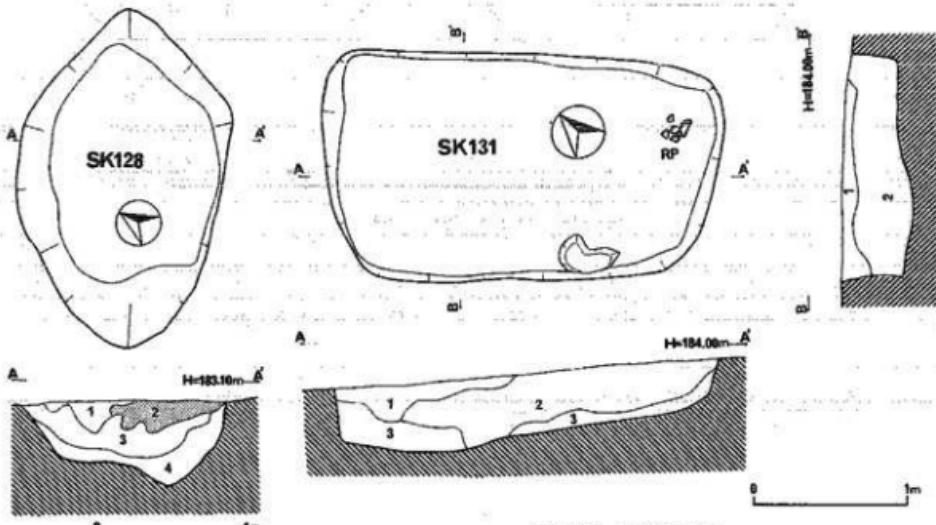


第101図 SK119土壤

SK128 土壙 (第102図)

31-H, 32-H地区より地山上面にて検出された。平面形は不整橢円形を呈する。壌口部224×134cm, 壌底部138×112cm, 深さ56cm, 面積2.2m²である。床面は凹凸があり、上面に浮石を混入する焼土を検出した。主軸方位はN22°Eである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R ½ 明黄褐色のブロックが3%混入。浮石粒子混入。



第102図 SK128土壤

2. 明赤褐色土 5 Y R 5% 浮石のまじった焼土。しまり大。粘性弱。
3. 黒色土 10 Y R 3% しまり大。粘性中。
4. 黑褐色土 10 Y R 3% しまり大。粘性中。

SK131土壤 (第103・108図 図版44)

31-E地区より地山上面にて検出された。平面形は不整圓丸長方形を呈する。壙口部 260 × 150 cm, 壙底部 240 × 140 cm, 深さ 47cm, 面積 3.64m²である。床面はほぼ平坦で、壁も垂直に近い立ちあがりをする。主軸方位は N 60°W である。第108図 1 ~ 6 に示す土器を出土した。単節 L R 回転施文後磨消したもので、縄文時代後期のものと思われる。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

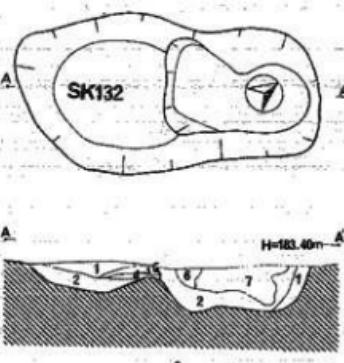
1. 黑褐色土 10 Y R 5% 粘性強。しまり中。黒色土を混入している。
2. 暗褐色土 10 Y R 3% 粘性強。しまり中。
3. 褐色土 10 Y R 3% 暗褐色土混入。

SK132土壤 (第104図 図版44)

30-G, 31-G, 31-H地区より地山上面にて検出された。平面形は不整格円形を呈する。壙口部 200 × 106 cm, 壙底部 166 × 70 cm, 深さ 30 cm, 面積 1.64 m²を測る。床面は北側の土壤が南側の土壤を切っており、2つの土壤の重複と思われる。主軸方位は N 30°E である。

断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黑褐色土 10 Y R 5% 大湯浮石混入。
2. 黑褐色土 10 Y R 3% 黄褐色土を混入している。
3. 黒色土 10 Y R 3% 浮石を混入している。
4. 暗褐色土 7.5 Y R 3% 4 をベースに焼土を混入。
5. 明褐色土 7.5 Y R 3% 焼土。
6. 黒色土 10 Y R 3% 浮石を混入。
7. 黄褐色土 10 Y R 3%



第104図 SK132土壤



第105図 SK133土壤

SK133 土壙 (第105図 図版45)

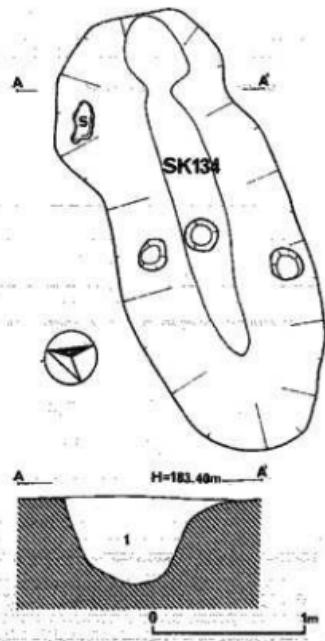
30-F地区より地山上面にて検出された。平面形は不整梢円形を呈する。壙口部96×84cm、壙底部80×74cm、深さ16cm、面積0.64m²である。床面は東側が若干落ち込んでいるが、比較的浅い土壙である。主軸方位はN81°Eである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R ½ 浮石を混入している。
2. 暗褐色土 10Y R ⅔

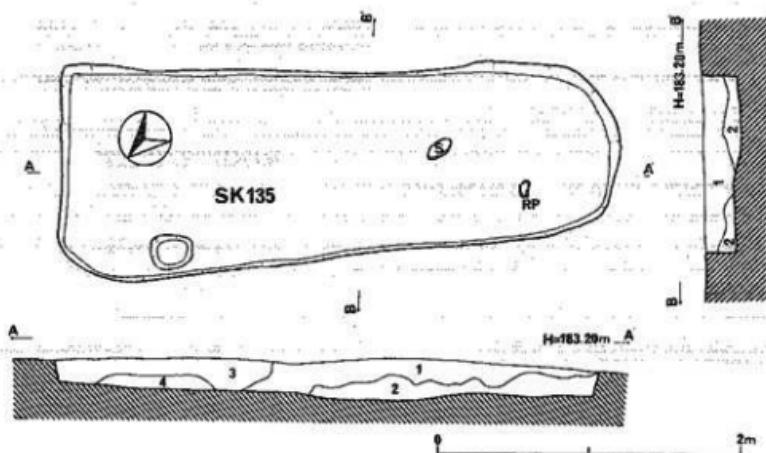
SK134 土壙 (第106図 図版45)

34-E地区より地山上面にて検出された。平面形は不整長梢円形を呈する。壙口部300×120cm、壙底部234×32cm、深さ60cm、面積3.24m²である。主軸方位はN52°Eである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

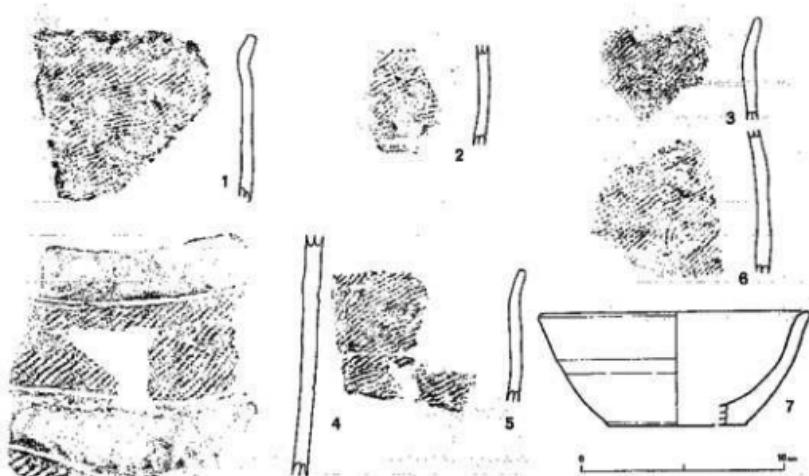
1. 黒褐色土 10Y R ½ 粘性弱。しまり弱。



第106図 SK134 土壙



第107図 SK135 土壙



第108図 SK131, 135土壤出土遺物

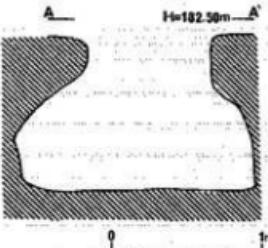
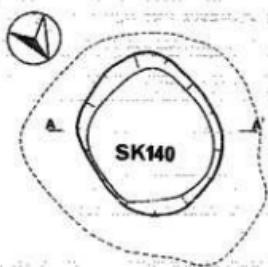
SK135 土壙（第107・108図）

32-H, 33-Hより地山上面にて検出された。平面形は隅丸長方形を呈する。壙口部 366×130 cm, 壙底部 354×122 cm, 深さ 28cm, 面積 $4.32m^2$ である。床面はほぼ平らで浅い土壙である。主軸方位は N $26^\circ E$ である。第108図7に示した土師器壙を出土した。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R $\frac{1}{2}$ 浮石を少量含む。
2. 暗褐色土 10Y R $\frac{3}{4}$
3. 黒色土 10Y R $\frac{4}{5}$ 浮石を多量に含む。
4. 黒色土 10Y R $\frac{1}{4}$ 浮石を少量含む。

SK140 土壙（第109図 図版46）

38-J地区より地山上面にて検出された。壙口部 102×86 cm, 壙底部 164×146 cm, 深さ 102 cm, 顎部 84×78 cm, 面積 $1.84m^2$ である。いわゆるフラスコ状ピットである。上面に土が充填されていなかったため、断面は計測できなかった。



第109図 SK140土壙

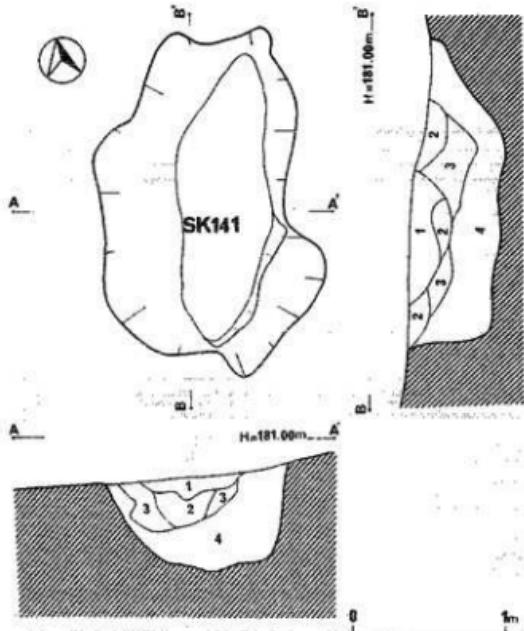
中の崎遺跡

SK141 土壙

(第110図 図版46)

34-M地区より地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部 232×122 cm、壙底部 136×60 cm、深さ62cm、面積 2.44m^2 である。床面は若干の凹凸があり、東側の壁が急激に立ちあがる。主軸方位は N 3.5°W である。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 暗褐色土 10Y R 5%
- 明黄褐色粒子混入。
2. にほい黄褐色土
10Y R 4% 浮石。
3. 黒褐色土 10Y R 5%
浮石密に混入。
4. 黒褐色土 10Y R 3%

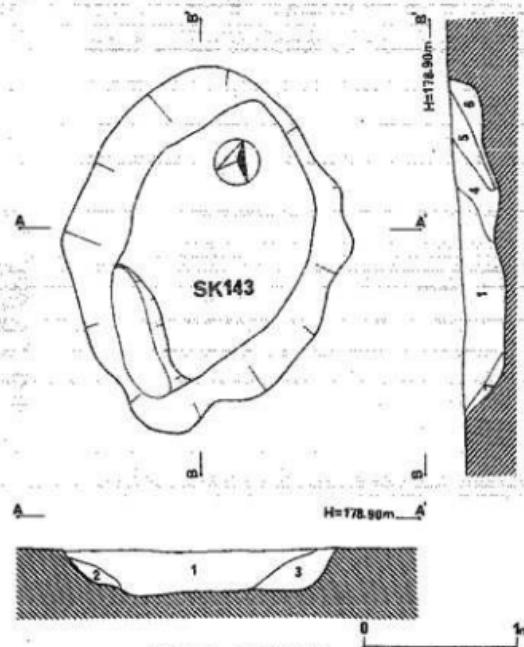


第110図 SK141土壙

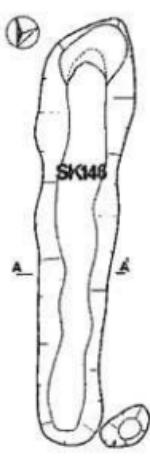
SK143 土壙

(第111図)

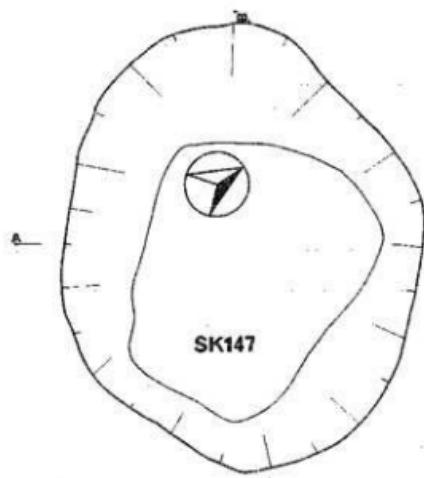
28-Q, 28-R地区より地山上面にて検出された。平面形は不整橢円形を呈す。壙底部 224×186 cm、深さ30cm、面積 3.16m^2 である。床面はほぼ平坦であるが、南西部にゆるい落ち込みがみられる。主軸方位は N 43° である。



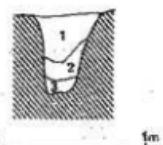
第111図 SK143土壙



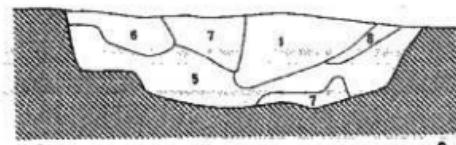
H=82.70m



H=179.00m



第112図 SK146土壤



第113図 SK147土壤

Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒褐色土 10Y R 3%
2. 褐色土 10Y R 3%
3. 暗褐色土 10Y R 3% 黒褐色土 5% 含む。
4. 黒褐色土 10Y R 3%
5. 黒褐色土 10Y R 3%
6. 黄褐色土 10Y R 3%
7. 暗褐色土 10Y R 3%

SK146土壤（第112図）

37-E, 37-F地区より地山上面にて検出された。平面形は不規長楕円形を呈する。壙口部282×54cm, 壙底部230×28cm, 深さ52cm, 面積1.36m²である。いわゆるTピットである。床

面はほぼ平坦である。主軸方位はN 48°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 黒色土 10 Y R 1/2 粘性強。しまり中。黄褐色土ブロック 5 %混入。
2. 暗褐色土 10 Y R 3/4 粘性強。しまり中。粘土ブロック 5 %混入。
3. 褐色土 10 Y R 1/2 粘性強。しまり弱。粘土層である。

S K 147 土壌 (第113図 図版47)

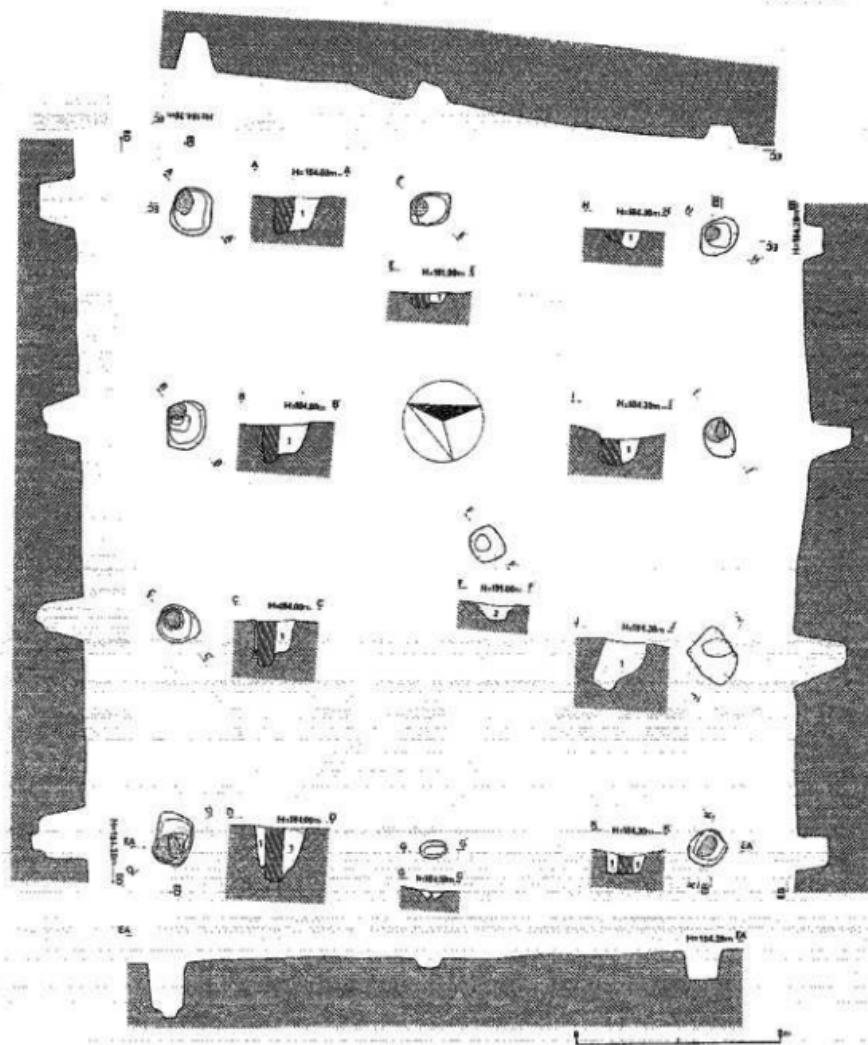
32-Q、33-Q地区より地山上面にて検出された。平面形は不整橢円形を呈する。壇口部 294 × 240 cm、壇底部 184 × 146 cm、深さ 64 cm、面積 5.27 m²である。床面は若干の凹凸があり、壁はゆるやかな立ちあがりを呈する。主軸方位はN 70°Wである。断面観察による埋土の状態は以下のとおりである。

1. 褐色土 10 Y R 1/2 粘性中。しまり中。
2. 暗褐色土 10 Y R 3/4 粘性強。しまり強。黄褐色土10%含む。
3. 黑褐色土 10 Y R 3/4 粘性中。しまり中。褐色土15%含む。
4. 黑褐色土 10 Y R 3/4 粘性中。しまり中。
5. 黑褐色土 10 Y R 3/4 粘性強。しまり中。
6. 黒色土 10 Y R 1/2 粘性強。しまり中。
7. 暗褐色土 10 Y R 3/4 粘性強。しまり強。
8. 黒色土 10 Y R 1/2 粘性強。しまり強。浮石を多量に含む。

c. 掘立柱建物跡

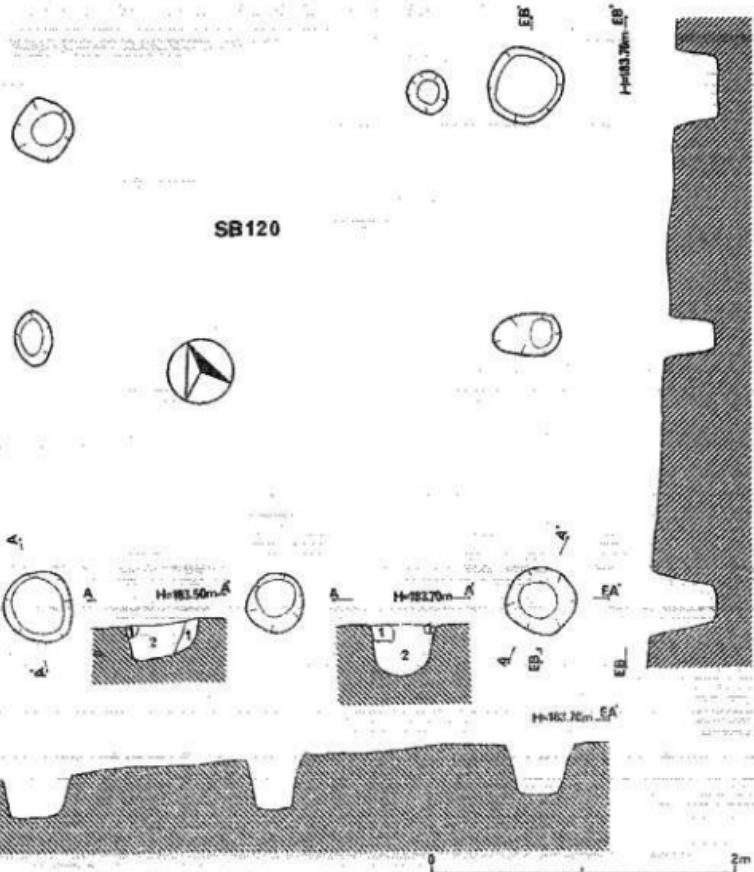
掘立柱建物跡は4棟検出されているが、いずれもII区の一番高い段丘面から検出された。この段丘面は多数のピットが検出されたところであるが、ほぼ全面が削平をうけており、建物跡と確認されたのはこの4棟にとどまった。いずれも規模は小さく2~3間のものである。このうちS B 111掘立柱建物跡としたものは、ほとんどの柱穴から柱痕跡が確認されており、しっかりしたものである。次に主軸方位をみてみると、S B 111とS B 149掘立柱建物跡の主軸方位に同様の値が出た他は違っている。切り合い等もないことから時代的変遷と掘むことはできなかった。また掘立柱建物跡に伴う遺物も出土しなかった。

計測値等は遺構実測図下に付した表を参照のこと。なお、図中の ■は柱痕跡を示す。



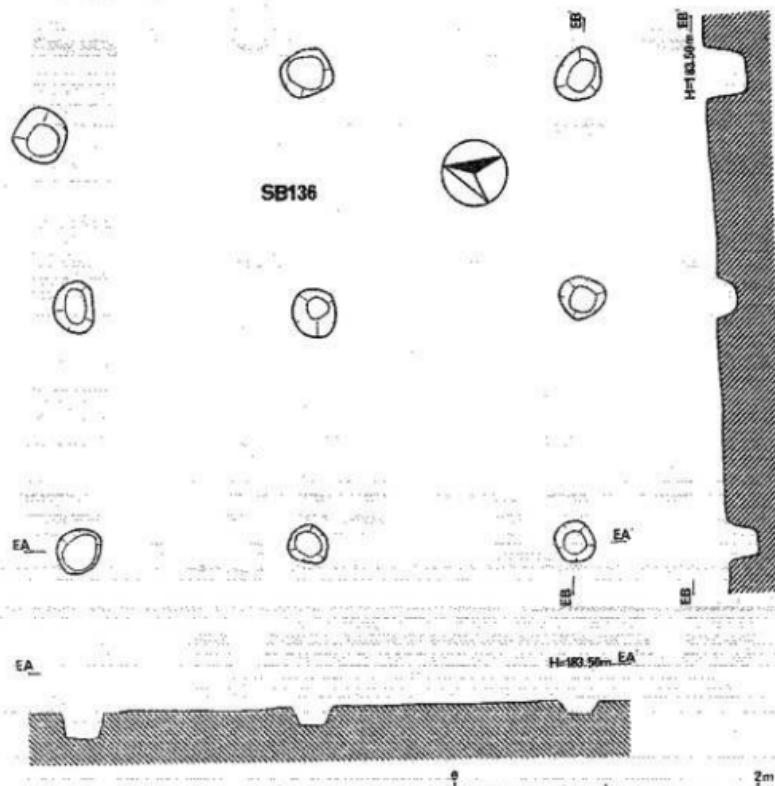
第114図 SB111掘立柱建物跡

第20表	検出地区	26-E, 26-F, 27-E, 27-F	挿図番号	114	図版番号	48上
遺構名	SB111	規 模	6.21×5.14m	計画尺	1 尺=29.9cm	
身	桁行 3間	N E→N W 206+204+226 S E→S W 194+216+196	7+7+7.5尺 6.5+7+6.5尺			
含	梁間 2間	N W→S W 260+268 N E→S E 210+290	9+9尺 7+9.5尺			
柱掘方平均値	径 36.7cm	深さ 31.6cm	柱痕の太さ 18.5cm	主軸方位	N 30°E	



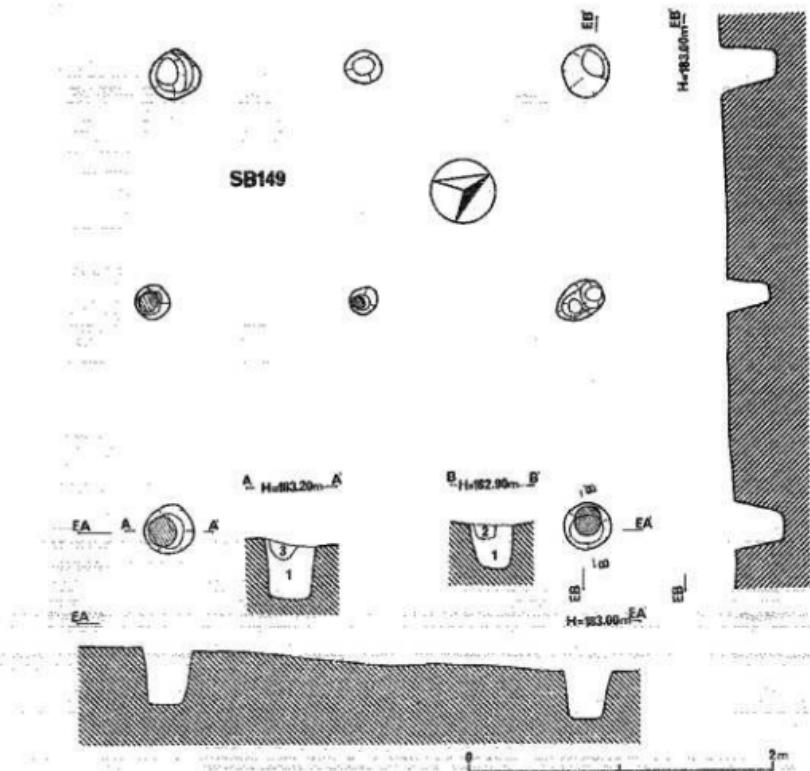
第115図 SB120掘立柱建物跡

第21表	検出地区	33-E, 33-F	挿図番号	115	図版番号
造構名	SB120	規 模	3.28m × 3.24m	計画尺	1尺 = 30.0cm
身	桁行 2間	NE → SE 166+176 NW → SW 134+180	5.5 + 6 尺		
舍	梁間 2間	NE → NW 316 SE → SW 174+158	4.5 + 6 尺 10.5 尺 6 + 5 尺		
柱掘方平均値	径 41.1cm	深さ 29.0cm		主軸方位	N 35° E



第116図 SB136掘立柱建物

第22表		検出地区	31-G, 32-G	補圖番号	116	図版番号	48F
遺構名		S B 136	規 模	3.43×2.90m			
身	桁行 2間	N E→S E	180+180	6+6尺			
		N W→S W	150+176	5+6尺			
舍	梁間 2間	N E→N W	110+160	3.5+5.5尺			
		S E→S W	160+150	5.5+5尺			
柱掘方平均値		径 30.5cm	深さ 18.4cm		主軸方位	N 4°E	



第117図 SB149掘立柱建物跡

第 23 表	換出地区	35-H, 35-I	挿図番号	117	圖版番号
遺構名	S B149	規模	3.00×2.80m	計画尺	1 尺 = 30.0cm
身	桁行 2間	NW→SW 150+150		5+5尺	
		NE→SE 150+150		5+5尺	
合	梁間 2間	N E→NW 150+130		5+4.5尺	
		S E→SW 280		9.5尺	
柱掘方平均値	径 27.0cm	深さ 33.5cm	柱痕の太さ 14.5cm	主軸方位	N 30°E

SI-011 開拓地遺跡埋土

1. 黒色土 10Y R 5/7 残性あり しまりなし 売褐色(10Y R 5/7)上 2%人組入
 2. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりせず 売褐色(10Y R 5/7)40%人組入
 3. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 地表土(10Y R 5/7)黑褐色土(10Y R 5/7)
 4. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性ややあり しまり中 売褐色土(10Y R 5/7)30~40%人組入
 地上?

5. 黄褐色土 10Y R 5/7 残性ややあり しまり中 黄褐色土(10Y R 5/7)2~3%人組入

6. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性ややあり しまり中 黑褐色土(10Y R 5/7)5%人組入

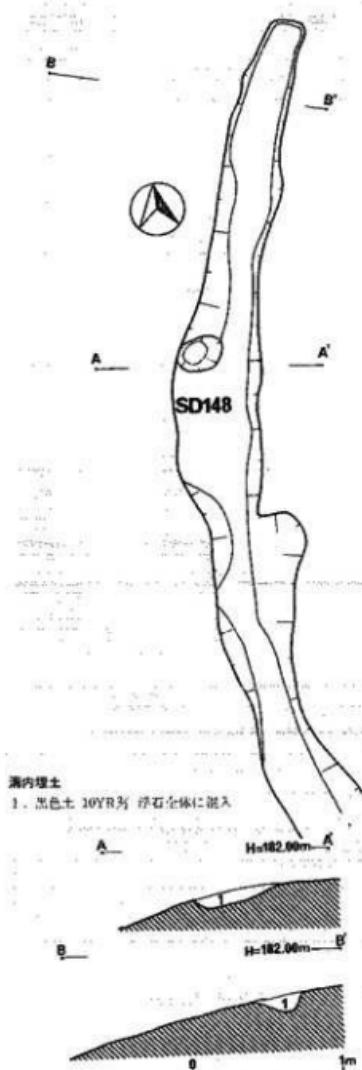
7. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 黑褐色土(10Y R 5/7)10%人組入

カマツ埋土

1. 黑色土 10Y R 5/7 残性なし しまり中
 2. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし
 3. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 地表土(10Y R 5/7)組入
 4. 灰褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまり中 地表土(10Y R 5/7)組入
 5. 黑褐色土 5Y R 5/7 残性ややあり しまり中 地上?

6. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 地上(10Y R 5/7)組入
 7. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 地下(10Y R 5/7)組入
 8. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 地上(10Y R 5/7)組入
 9. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 地上(10Y R 5/7)組入
 10. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 地上(10Y R 5/7)組入
 11. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 売褐色(10Y R 5/7)組入, 売若人組入
 12. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性ややあり しまりなし 売褐色(10Y R 5/7)組入
 13. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 売褐色(10Y R 5/7)組入
 14. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 売褐色(10Y R 5/7)組入
 15. 黑色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし
 16. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性ややあり しまり中
 17. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 地上(10Y R 5/7)組入
 18. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性あり しまりなし 売褐色(10Y R 5/7)組入
 19. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 売褐色(10Y R 5/7)組入
 20. 黑褐色土 10Y R 5/7 残性なし しまりなし 成土(10Y R 5/7)組入

d. 溝



第118図 SD 148溝

SD 148 溝 (第118図)

II区の第二段丘縁辺部にあたる29-M, 30-M地区から検出された。縁辺部のため西側の壁は削平されており、両端も不明である。検出された総延長は4.90mである。

③ III区の遺構

a. 竪穴住居跡

S I 301 竪穴住居跡

プラン確認 地山上面にて確認したが、上面は若干削平されている。

壁面の状態 壁はしまりがよく、ほぼ垂直に立ちあがる。

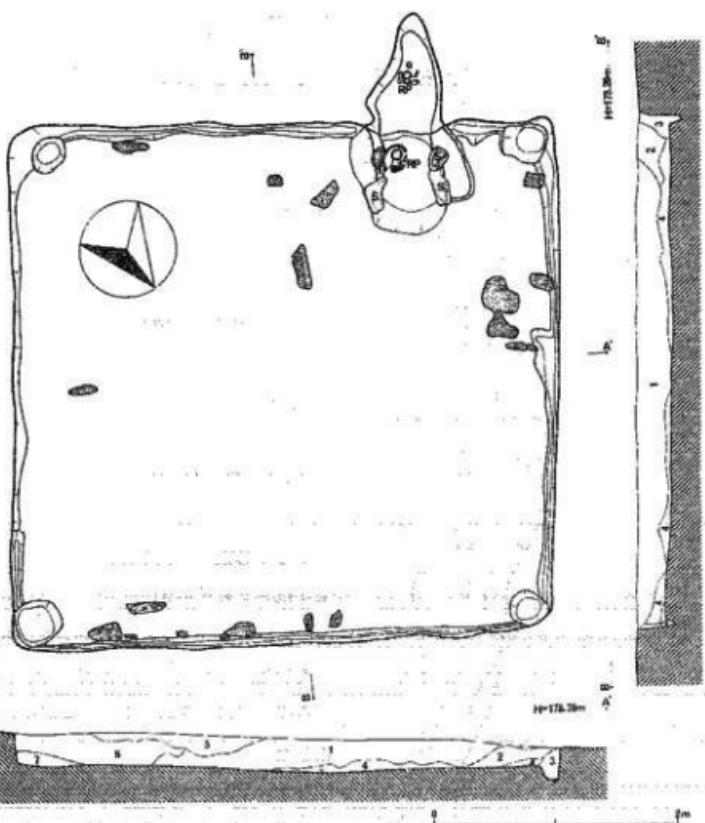
床面 平坦で堅固である。床面から炭化材を検出した。

壁溝 東壁の一部を除いてほぼ全周する。

柱穴、ピット 住居跡四隅に4個の柱穴を確認した。

かまど 扁平な石を袖部の芯材として構築されたかまどである。燃焼部から大量の土器片が検出されている。

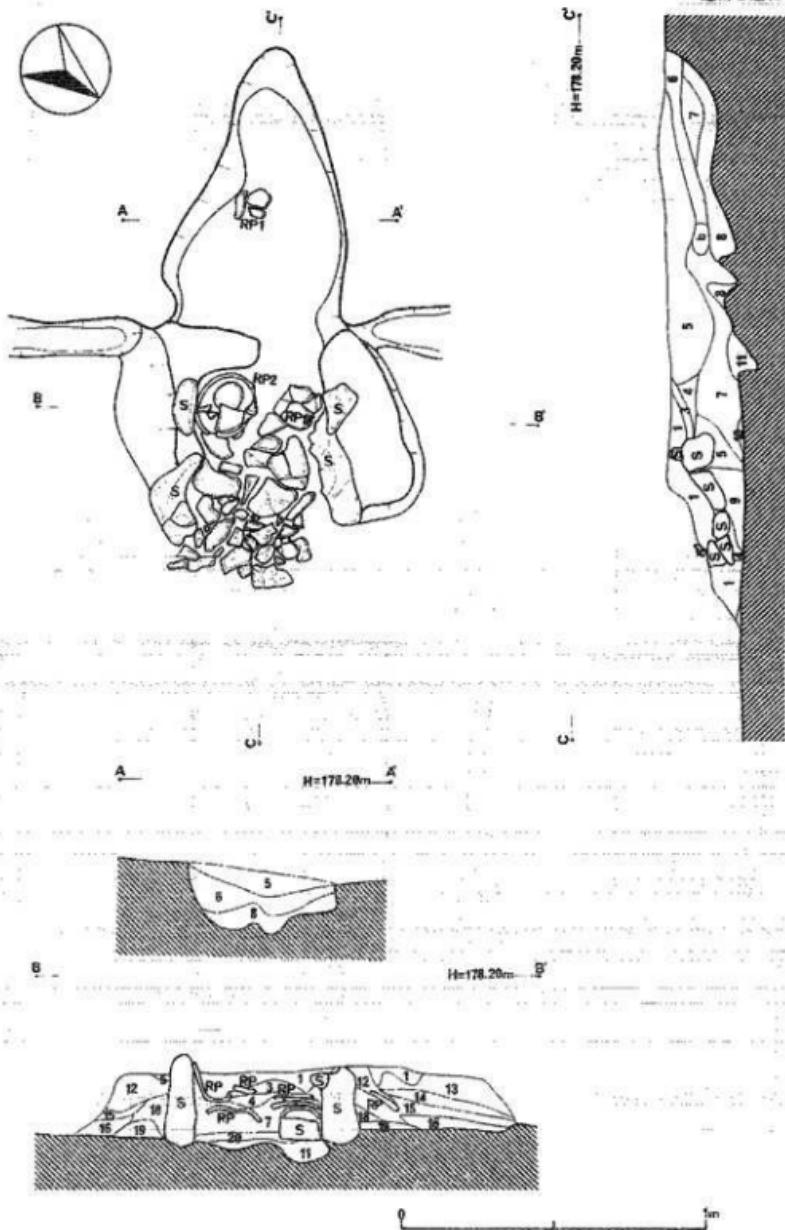
遺物とその出土状態 遺物出土量はやや多い方に属する。土師器表にはほとんどのものにロクロ使用が認められ、頸部が短く、若干くびれるものが多く出土する。



第119図 S1301堅穴住居跡

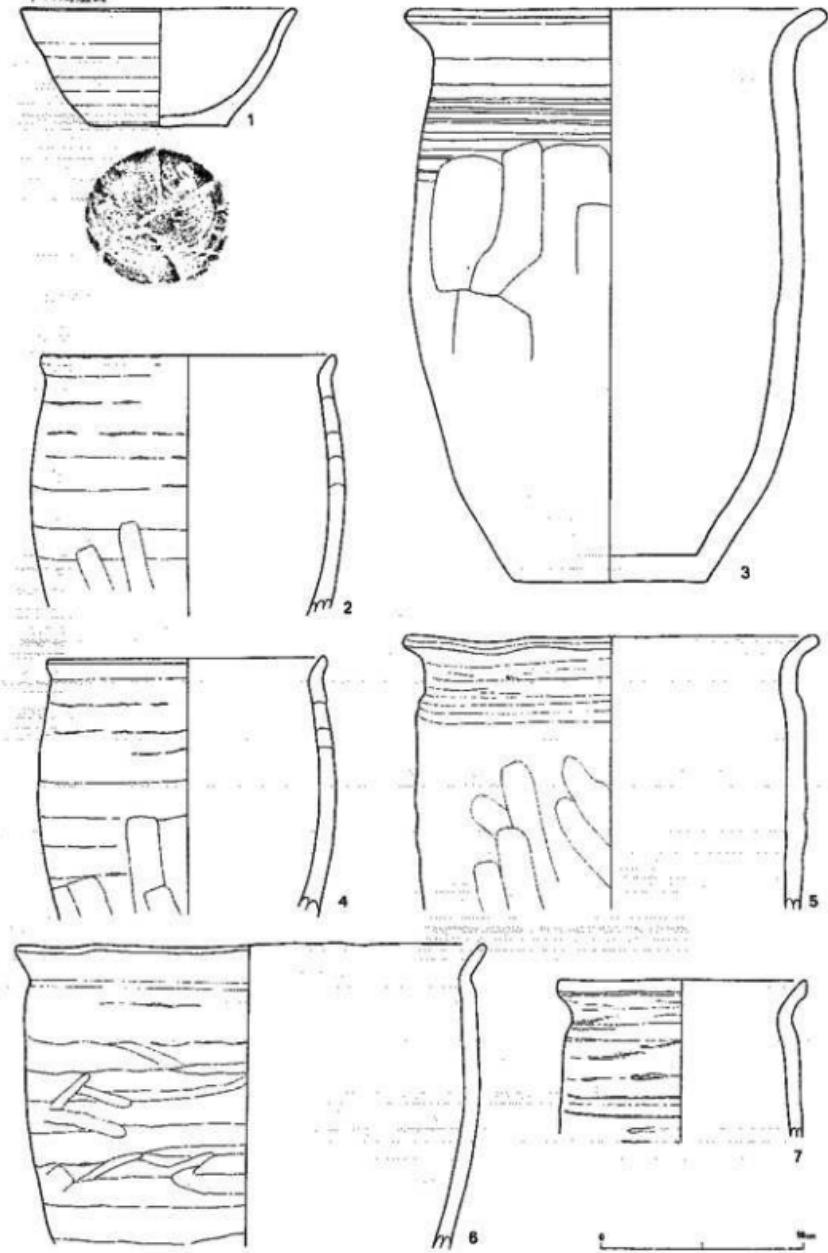
堆土はE.220参照

第24表		挿図番号	第119~122図	図版番号	図版74・75
遺構名	S1301	検出地区	55-X, 55-Y, 56-X, 56-Y		
法量	壁長	420cm	410cm	435cm	430cm
	壁高	23.0~28.5cm	28.0~38.5cm	25.5~42.5cm	25.5~33.0cm
	壁溝幅	(9.0~11.0)cm	7.0~23.0cm	8.0~13.0cm	4.0~12.0cm
	壁溝深	(1.0~5.0)cm	8.0~9.5cm	7.5~13.7cm	6.5~8.0cm
形態	方形容	面積	19.5m ²	主軸方向	N 29°E
かまど	位置	南西壁西寄り		構築素材	心部石組

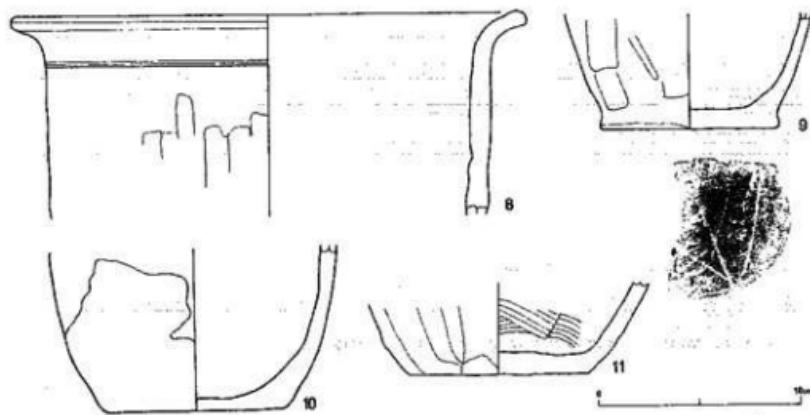


第120図 S1301堅穴住居跡カマド

中の縫遺跡



第121図 SI1301竪穴住跡出土遺物(1)



第122図 SI301堅穴住居跡出土遺物(2)

(2) 遺 物

a. 土器

遺構外からも多数の土器が出土しており、その時期も縄文時代前、中、後、晚、弥生時代、平安時代とバラエティに富んでいる。その半数以上は縄文時代後、晚期のもので、平安時代のものがそれに次ぎ、縄文時代前・中期及び弥生時代のものは極めて少ない。以下第Ⅰ～Ⅳ群まで分類し、それぞれについて述べる。

第Ⅰ群土器

縄文時代前期に属するものを本群とした。

第1類土器（第126図20） 口縁部に2条の隆帯を配し、その上に刺突を施す。それらの隆帯の上下には爪形の刺突が施される。

第Ⅱ群土器

縄文時代中期に属するものを本群とした。

第1類土器（第126図21・22） 口縁部は波状をなし、口唇部及び口頸部には隆帯を廻す。また口縁部には撚糸圧痕文が施される。

第2類土器（第123図1・2、第126図23～29） 地文として無筋Lの縄文を施したのち、太い沈線で曲線的文様を描く。

第Ⅲ群土器

縄文時代後期に属するものを本群とした。

第1類土器 (第126図30~56) いずれも破片であるが、量的には多く出土した類である。地文として単節繩文を回転施文したのち、磨消手法を用いてモチーフを描いたものである。

第2類土器 (第123図3) S字状沈線文を持つものを本類とした。

第3類土器 (第127図57~68) 入組磨消繩文を持つものを本類とした。量的には多く出土している。

第IV群土器

繩文時代晚期に属するものを本群とした。

第1類土器 (第127図69~73) 三叉文を持つものを本類とした。口縁部には突起をもつものもあり、胴部には単節繩文が横位または斜位に回転施文される。

第2類土器 (第123図4, 第127図74~75) 羊齒状文を持つものを本類とした。胴部には単節繩文が回転施文される。

第3類土器 (第127図77~79) 雲形文・X字状文が施されたものを本類とした。

第4類土器 (第124図6~8, 第127図16) 口縁部に平行沈線を施したものとしめた。穿孔のあるもの(76), 台付土器(8)もある。

第5類土器 (第124図9~11) 口縁部の沈線間が広くなり、その部分をていねいに調整したものである。

第6類土器 (第124図12) 細長いT字状文を交互に組み合せたものを本類とした。

第7類土器 (第128図81~88) 口縁部に帯状の無文帯を持つものを本類とした。

第8類土器 (第128図89~108) 変形工字文や口縁部に数条の平行沈線を持つものを本類とした。

第V群土器

繩文のみ施されるものを本群とした。

第1類土器 (第124図13~17, 第125図18~19, 第128図109~111~113, 第129図114~116) 13, 111は波状口縁を持つ。115, 116は単節R Lと無節Lが回転施文されている。

第2類土器 (第128図112, 第129図117~120) 結束を持つものを本類とした。

第VI群土器

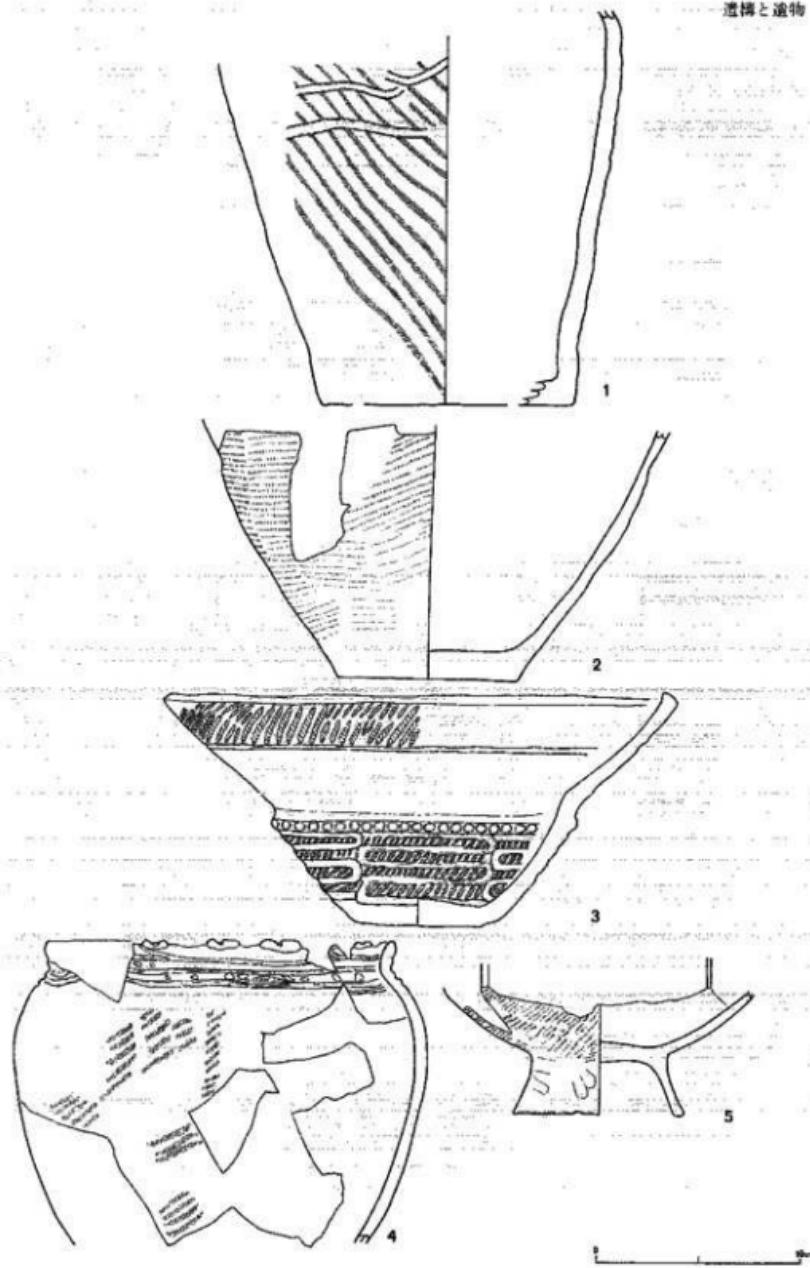
弥生時代に属すると思われるものを本群とした。

第1類土器 (第129図121~122) 3条の沈線を廻らし、その下に3条の連弧状沈線文を施す。繩文は単節R L原体を縱位回転施文する。

第VII群土器 (第129図123~131, 第130図132~137~139~140)

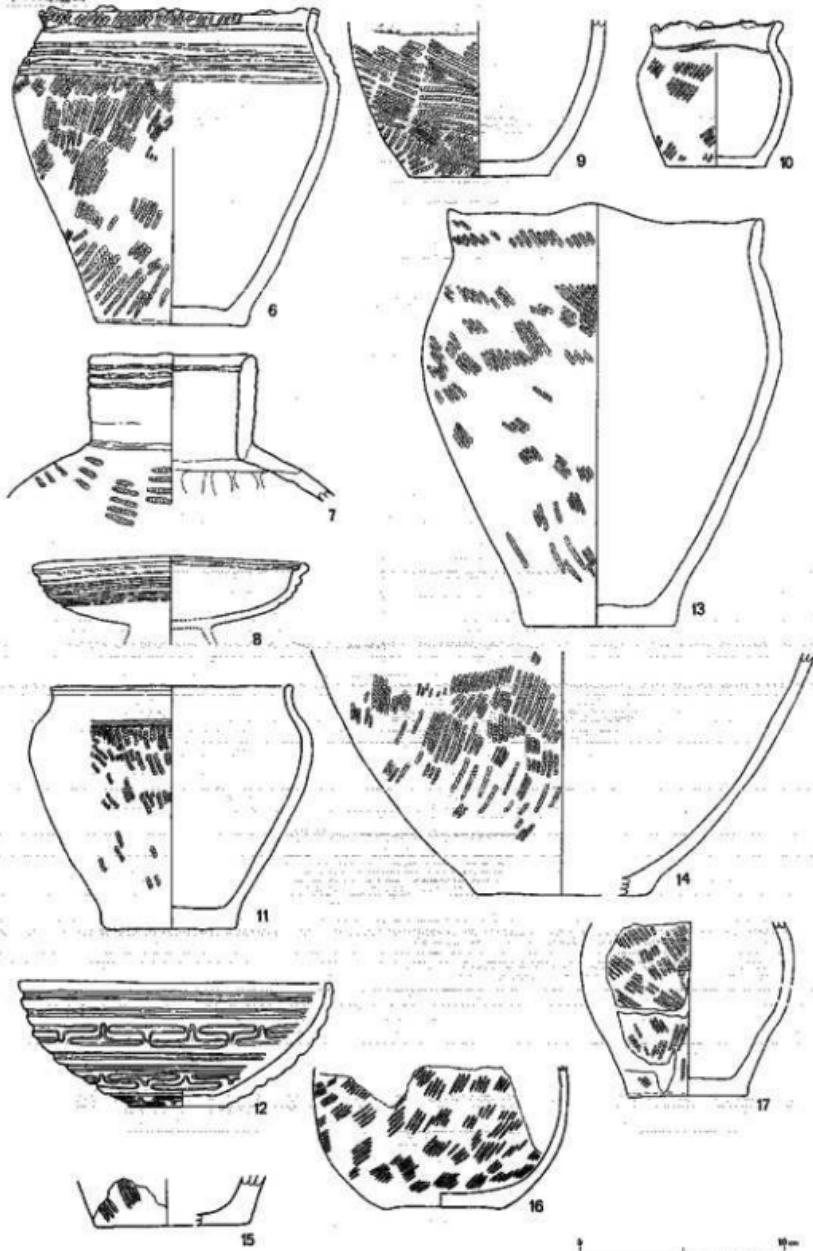
平安時代に属すると思われるものを本群とした。

124~134は土師器坏で、底部はいずれも回転糸切りで、内面黒色処理のもの(128, 131)

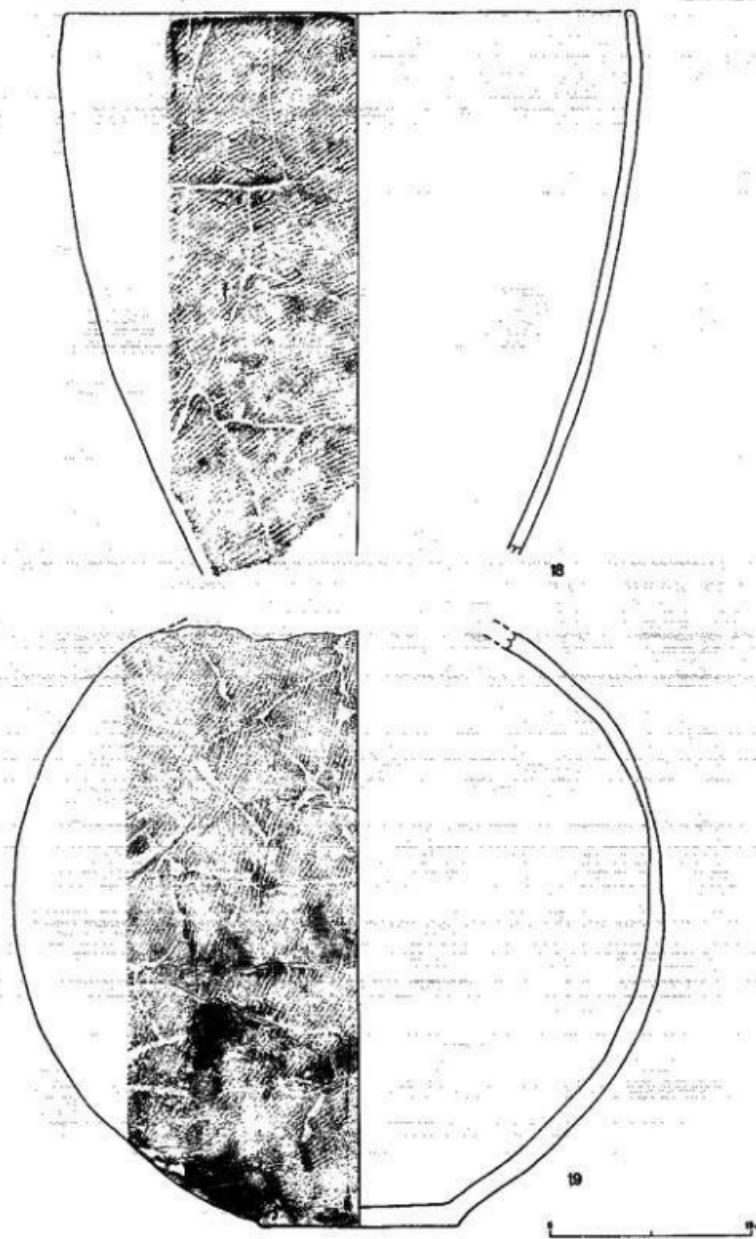


第123図 遺構外出土遺物(1)

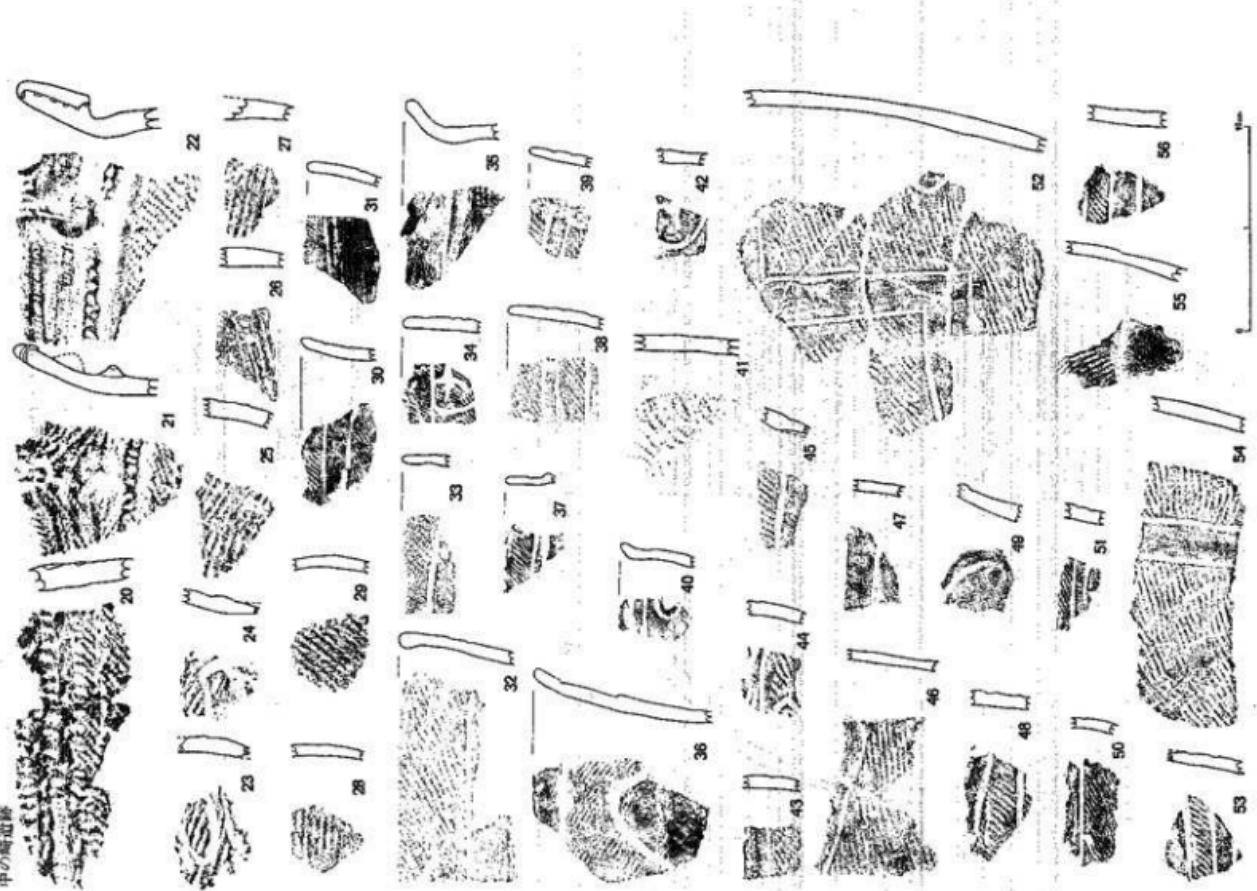
中の断遺跡



第124図 遺構外出土遺物(2)

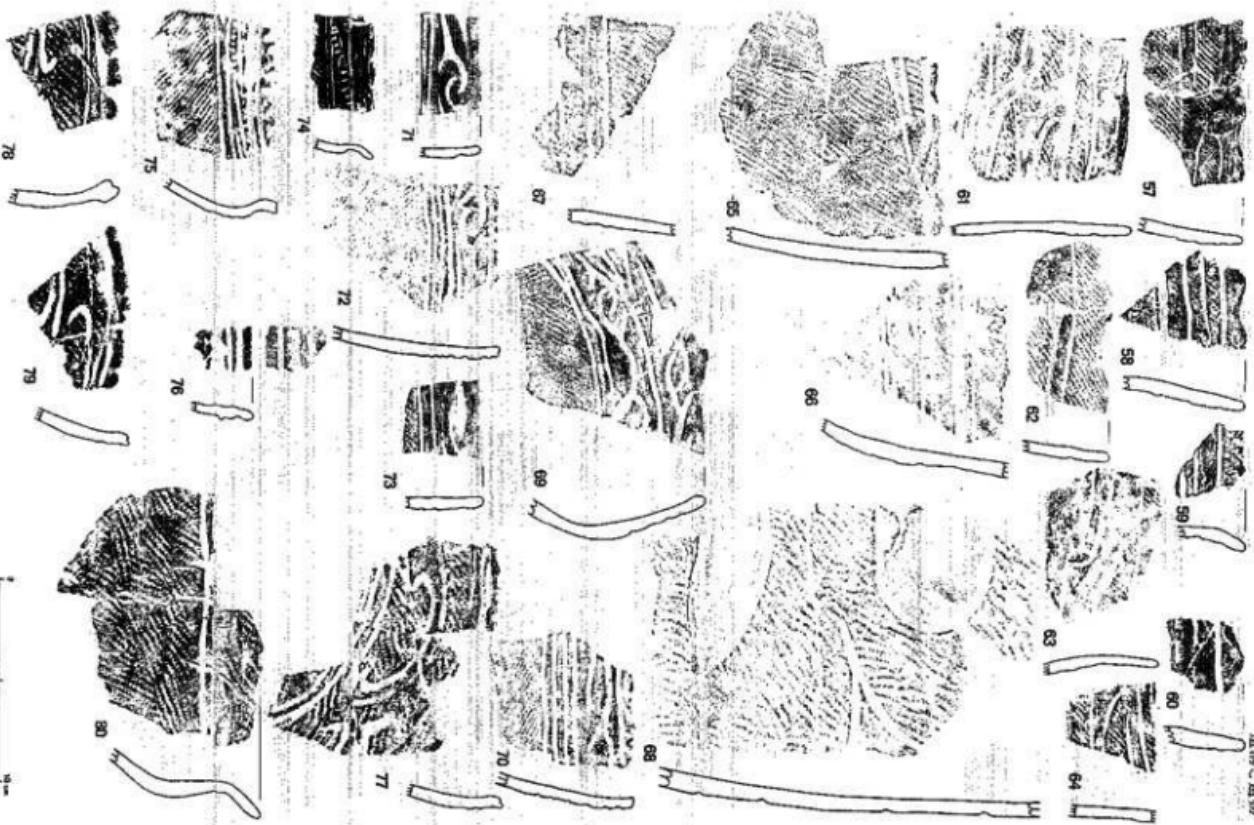


第125図 遺構外出土遺物(3)



第126図 遺跡外出土遺物(4)

遺構と遺物



第127図 遺構外出土遺物(5)